THE CENTRAL REVIEW

中央公論

July 1

7-1914

七月號

306　　7　29

第廿九年第七號
第三百六號

煩悶ある人は來れ

▲人は始終幸福とばかり一緒に歩む事は出來ぬ。不時の災難、事業の失敗、家事の煩累、學業の不成績、失戀、精神や身體の過勞等の事が兎角起つて來る。

▲但し幸にして人には通有の忘却性がある。親や子に別れた深い悲哀さへも時と共に次第に薄らいで行く。憤怒や侮辱等の劇しい感じでさへ、其劇しさを其儘に何時迄も感じては居らぬ。段段と弱められ、稀薄になり、遂には其感じは全然消えて終ふ。

▲之は人間に通有の誠に有難い忘却性である。若し人間に此通有性が無く、何時迄も何時迄も、其時の強い劇しい感じから離れられなかつたら、人は兎ても壽命を全うする事は出來ぬ。

▲此人間の忘却性の惠に浴し得ぬ人が即ち煩悶する人である。斯う言ふと稍輕輕しく聞えるかも知れぬが、煩悶ある人は先づ熟考すべきである。『斯迄自分が煩はされ悶えさせるのは、其煩悶の原因たる事柄が強いのか、其事に臨む自分が弱いのでは無からうか、精神や身體が病的なのではあるまいか？』と。

▲斯う考へると能く分る。精神的に言へば心に少しも沈着が無い。物事に少しも興味がない。實に些細な事が氣に懸る。疑ふ餘地の無い事を疑ふ。書物等の一行一節を何度繰返して讀んでも意味が朦朧して纏まつた思考力が無い。

▲今度は之を肉體の方面から見ると、兎角頭痛勝で又頭が重い。食氣が無い。活氣が無い。體を動かすのも面倒臭い、便通が惡く、逆上、眩暈、耳鳴抔を感じ、不眠に陷り惡夢に襲はれる。

▲斯く精神と肉體の方面から見て今言つた徴候があるなら全く煩悶の結果腦又は神經に故障を起したものである。捨て置けば大事に立到る。而して煩悶は永遠に救はれる期がない。

▲煩悶ある人には健腦丸を用ゐるのが第一の救濟法である。何故といへば健腦丸は腦の故障を快くするのに最も有效である上に前言つた煩悶者、即ち神經の平衡を失つた人に用ひて、神經を鎭むるの効が著しいからである。

▲斯くて健腦丸を用ひて腦の故障を治し神經の平靜を得たなら、旣に煩悶から斬脫ける根本の準備が出來たのである。其明快な頭腦と健全な神經とを以て事に方れば、好い解決を得るに庶幾い。

▲健腦丸は世に信用厚き大阪丹平商會藥房の製で、島村醫學博士は其有効を證明されてゐる。藥價は三日分廿錢、七日分四十五錢から五週間分二圓迄あつて全國到る處の信用ある藥店に販賣せり。

慶應大學講師

戸川秋骨先生譯

エマーソン論文集

（六版）上巻目次

●歴史論 ●自恃論 ●報償論 ●靈法論
●戀愛論 ●友情論 ●細慮論 ●勇壯論
●大靈論 ●圓環論 ●智力論 ●藝術論

（三版）下巻目次

●詩人論 ●經驗論 ●人格論 ●作法論 ●進物論
●自然論 ●政治論 ●名目論 ●實在論 ●改革論

●中外英字新聞評「簡潔にして光彩ある邦文を以て巧に飜譯せり寸鐵殺人の警句は殆んど毎行に盈つ…」

クロース金文字入

◎上巻 正價壹圓四拾錢 郵税拾四錢

◎下巻 正價壹圓廿錢 郵税拾貳錢

森田草平、安倍能成共譯（再版）

人及藝術家としてのトルストイ
並にドストイエフスキー

總クロース美本全一册 定價壹圓五十錢 小包内地十二錢

▼此書は文明批評家として當今世界第一人者と言はるゝメ氏が、トドの二翁を評傳したものである▲

●萬朝報評『趣味津々の裡に不世出の天才杜伯が宗教、哲學、幾多の科學、道德、藝術等に由る人生觀を覗ふを得ん。』

高橋五郎先生譯

ラロシフコー 寸鐵
又名、人生裏面觀

總クロース美本全一册 價八十五錢 郵税十錢

●時事新報評「言々珠玉、光彩陸離として更に言辭を加ふる事を容さず、譯筆亦忠實にして能く原文の風味を髣髴せしむ…」

版元 東京神田區雉子町 玄黄社 電話本局二〇九番 振替東京七九九五 ●全國書店賣捌

▲銷夏の好伴侶として
▲現代無比の名著を提供す
▲滿天下の讀書家諸君
▲以下五頁の廣告を見落し給ふな

杉村楚人冠先生著忽再版

縮刷合本

大英遊記 半球周遊

前年本書の一たび出づるや好評嘖々爲に洛陽の紙價を高からしめしが今回合本縮刷の上裝幀を新にし訂正を施し以て再び此に見ゆ先生の犀利なる觀察眼と精緻なる筆致とは讀者の眼前に趣味津々たる世界の一大縮寫圖を展開して坐ながら萬國の風物に接する感あらしむ正に是れ綠蔭銷夏の好伴侶

德富蘇峰先生の評に曰く「杉村君は英語に達者にして英文に通ず歌人は坐ながら名所を知る如く君は坐ながら歐洲の事物に通ず斯人にして筆を載せて歐洲に遊ぶ眞に是れ鬼に金棒又曰く著者は名詮自證其筆端眞に縱橫也筆を使ふ舌を使ふが如く舌も尙及ばざるの槪あり俊利哀梨を喫する如く冷刺骨を透す」と

袖珍總クロス
特製天金美裝
紙數八百頁全
壹冊携帶至便
定價壹圓參拾錢
郵稅八錢

發兌 東京日本橋區本石町三丁目 至誠堂 電話長本局三六六六番 振替東京一七四四番

▲四六版特製美裝▼
▲紙數各冊四百頁內外▼

大正

▲定價各冊金壹圓廿錢▼
▲郵稅各地金八錢▼

帝大教授
法學博士 和田垣謙三先生著

▲川村淸雄畫伯
▲齋藤松州畫伯 挿畫數葉

第五編 吐雲錄

最新刊

出てたり、出てたり、兎糞錄の續編出てたり、出てゝ愈奇なり、妙なり、北山人本書に序して曰く此書出づ有名なる兎糞錄と雖も或は月出星稀の槪なくんばあらずと天下無數の讀書子諸君よ、いて一本を手にし給へ。

內容目次一斑

昭憲皇太后御歌謹譯●吐雲●食木人種●乃木大將の和歌英譯●三種の生涯●若返りの靈藥●土耳古皇帝と萬年筆●わが嫌ひ●有之哉●エヂソン戀物語●公孫樹に題するゲーテの詩●倉廩實則知禮節●紅葉跡とシエークスピヤ●佛國に於ける高襟●オセロと手臭●ジヤガ芋●黨派心と愛國心●葬式に敬禮●婦人と鷲●井上世外侯●狐の嫁入●狗肉と皮肉●金貨銅貨物語●ロールドベーコン●脚は暖に頭は冷に●煙草の毒なるは寧ろ女房●ビグミーとピラミツト●能辯家●汽車と水牛●海防と和田垣●女優と我家の犬●松風の音●吾は我父の父なり又我子の子なり●雀のお爺さん●患者入口●タンゴーイング●英詩和譯●和歌英譯●漢詩英譯其他演說筆記等凡二百篇

第一編
和田垣博士著
兎糞錄
貳拾七版

●大正出版界を震動せる破天荒の快著●重版又重版停止する處なし

評者は腮を解き腹を抱へ又泣かされたり實に滑稽の奧に涙を藏し諧謔の底に眞理を藏す世を啓發し人を誘導し無限の活教訓を含む古今獨歩

第貳編
大町桂月先生著
人の運
拾九版

●人生の一大福音
●處世活動の指針
●開運座右の寶典

●大日本茗溪會に於て普通教育振興の爲め大正三年二月全國青年の讀み物として近來の傑作として審査選定せらる

發兌 東京日本橋區本石町三丁目
至誠堂
電話本局長三六六六番
振替東京一七四四四番

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

▲四六判特製美装▼
▲紙數各冊四百頁内外▼

名著

▲定價各冊金壹圓二十錢▼
▲郵税各内地金八錢▼

浪六先生著

■上編下編全貳冊

元祿四十七士

最新刊

第六編第七編

著者と著書と兩々相待つて成れるもの實に此の四十七士傳なり今日の文壇に浪六先生を措て他に何人ありや

内容目次一斑

勅使下向●忿爭疾視●殿中刄傷●嚴命處分●赤穗城中●尾崎村●烏帽子親●有髮僧尼●赤穗退去●山科の里●紅燈綠蔭●瑞光院●奮激猛進●鋒鋩一閃●男山●梅林庵●東下

義士列傳 大石父子●堀部父子●赤垣源藏●神崎與五郎●不破數右衛門●武林唯七●原惣右衛門●小野寺十內●片岡源五右衛門●潮田又之丞●横川勘平●寺坂吉右衛門●大高源吾●間十次郎●磯貝十郎左衛門 其他三十名

●討入●最後●遺族……

第參編 杉村楚人冠先生

へちまのかは

九版

●大日本茗渓會より本書を大正三年五月全國各學生及び青年の讀物として選定せらる

時事新報―曰く著者二十年間の波瀾ある生活を叙述せしもの氏の筆や斷じて他の模倣追隨を許さざる者ありと

第四編 浪六先生著

罵倒録

八版

●浪六先生曰くあなり大膽に露骨に無遠慮に過ぎたれど實際是が我輩近來の快文字と

二六新聞―曰く、飛ぶが如き筆をもつて縱横自在に人生の機微を摘縱したるもの……天下の珍書と

發兌 東京日本橋區本石町三丁目 至誠堂 電話本局長三六六六番 振替東京一七四四番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

▲四六判特製美装▼
▲紙數各冊四百内外▼

文庫

▲定價各冊金壹圓廿錢▼
▲郵税内地金八錢▼

文學博士 幸田露伴先生著

第八編

洗心録

最新刊

▲装幀川村清雄畫伯

一讀忽ち腋下に
清風を生ず

本書は、幸田博士が機に觸れ、興に乘じ、其の該博深遠の識見を披瀝し、温籍間曠の情懐を揮灑して、人世を談じ、文學を論じ、修養の法を說き、處世の道を敎ふ、凡そ森羅萬象、心鏡に映ずる所、之を博士獨特の雄大精緻なる筆に發し、字々皆金聲、句々皆玉振、其洗練推敲到らざるなし、其措辭精を盡し、其筆致妙を極め、意と文と優秀蔚茂、眞に是れ博士が心血の結晶する所にして、萬人必讀の名著なり、洗心錄の名虚しからず、人世の煩熱界に苦戰奮闘する者、一讀すれば腋下忽ち清風を生ぜん。

第八編
加藤咄堂先生著

人の心

近刊

發兌 東京日本橋區本石町三丁目 **至誠堂** 電話本局長三六六六番 振替東京一七四四番

信用ある店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

アカギ叢書

●日本のレクラム出づ!!●博士學士等百餘名擔當執筆●毎月數篇逐次刊行●

定價
ポケット形百頁
一頁字數約四百
金拾錢
郵稅各金貳錢
朝鮮臺灣樺太同

發兌
東京市麹町區
三番町五十番地
赤城正藏
電番二二八〇
振替一〇四三二

特色
一 世界學術の叢淵
二 紳士の標準智識

(1) 紳士の當然知り居るべき程度るた事を標準として取材說明せり

(2) 廉價簡明平易に解說して天下に讀み難きもの無らしむ

(3) 古今東西の名著の紹介は簡にして精髓を失はず

既刊分

一篇 人形の家。四篇 群衆心理(上)

七篇 ベルグソン 哲學。十一篇 文化文政 江戸の世態

二篇 プラグマチズム。五篇 痴人

六篇 ウエデキントと其著作、十篇 進化論

廿三篇 ワンダーブック。廿二篇 ストリンドベルヒ作 父

六月既刊分發表

三篇 歐洲文藝 日野月文學士編 癡都 劇ニ現レタル女性改題

八篇 歐洲文藝 オスカアウワイルド 村上靜人編 サロメ

九篇 哲學叢話 中島文學士著 オイケンの哲學

十二篇 歐洲文藝 フライタツハ作 齋藤文學士篇 喜劇新聞記者

十五篇 (發賣禁止) レヂースマン

近刊分

十三篇 壺の鬼。十四篇 復活

十七篇 女の一生。

十六篇 美術叢話 佐々木文學士著 奈良の美術

十八篇 歐洲文藝 メーテルリング作 村上靜人 モンナヴンナ

十九篇 日本史談 龍居文學士著 日本建築史要

二十篇 社會學叢 ルボン原作 葛西又次郎編 群衆心理(下)

廿一篇 美術叢話 桑山益二著 支那の美術

廿四篇 ハムレツト。廿五篇 ジョパンニ(上)

廿六篇 ジョパンニ(下)。廿七篇 神曲

廿八篇 鎌倉史話。

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新刊

新渡戸博士著 ●英文 武士道 上製美本 全壹冊 定價金壹圓 送料金八錢

新渡戸博士著 櫻井鷗村譯 ●邦文 武士道 上製美本 全壹冊 定價金壹圓 送料金八錢

櫻井鷗村著 ●リンコーン物語 上製美本 全壹冊 定價壹圓貳拾錢 送料拾貳錢

農學博士
法學博士 新渡戸稻造先生著

折にふれ

四六判上製 定價壹圓貳拾錢 内地送料八錢

新渡戸博士は現代思想界の第一人者なり其の高潔なる人格と深遠なる思想との折に觸れ時に應じて麗文勁辭に發露せるもの今や集りてこの一書となる蓋し昏惑せる現代の思想界精神界を照すべき一大炬火たらん

エリス原著 小倉清三郎譯 ●性的特徴（男女兩性の科學的研究） 上製美本 全壹冊 定價壹圓五拾錢 送料拾貳錢

櫻井大尉著 ●肉彈 上製美本 全壹冊 定價七十錢 送料八錢

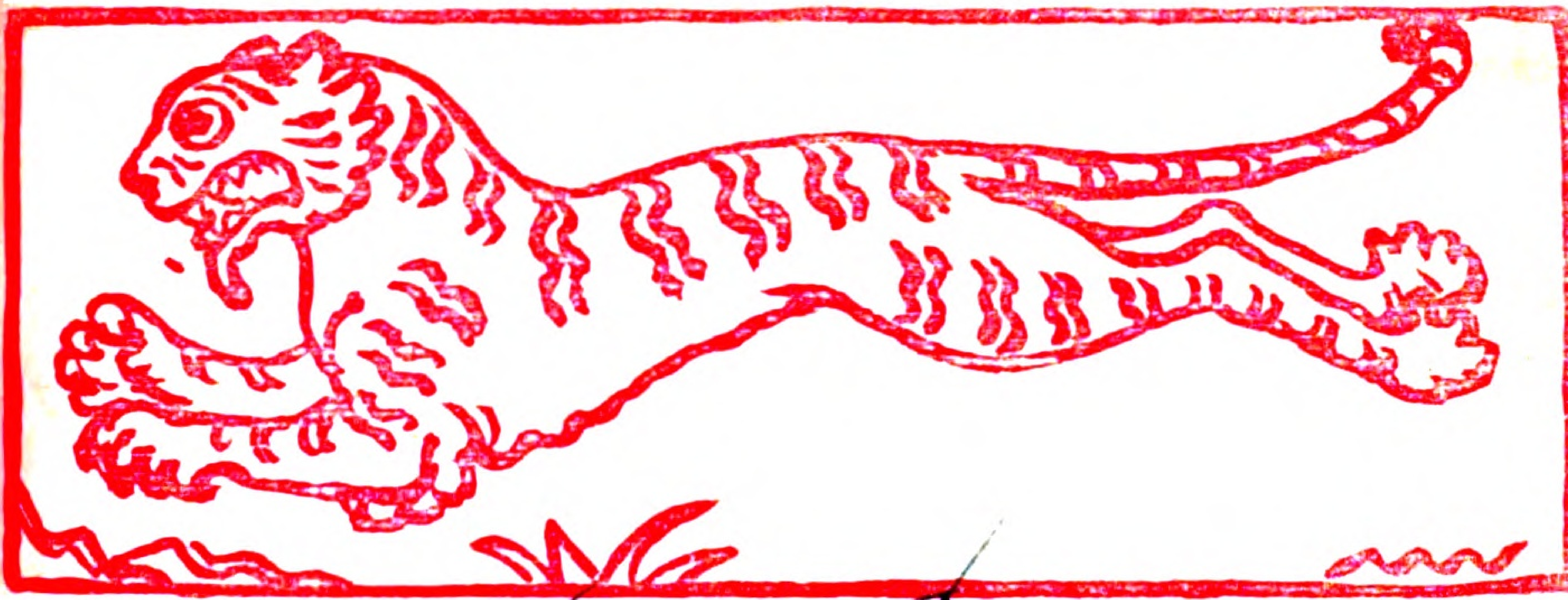
櫻井大尉著 ●銃後（名著「肉彈」の姉妹篇） 上製美本 全壹冊 定價壹圓五拾錢 送料八錢

發行所 東京市麴町二丁目 丁未（ていび）出版社 振替口座東京七八四七番 電話番町二八二〇番

出版圖書目錄 御報次第進呈

各地書林に品切の節は直接御注文を乞ふ

信用なき店舗及び卑猥なる賣品廣告の掲載は謝絶す

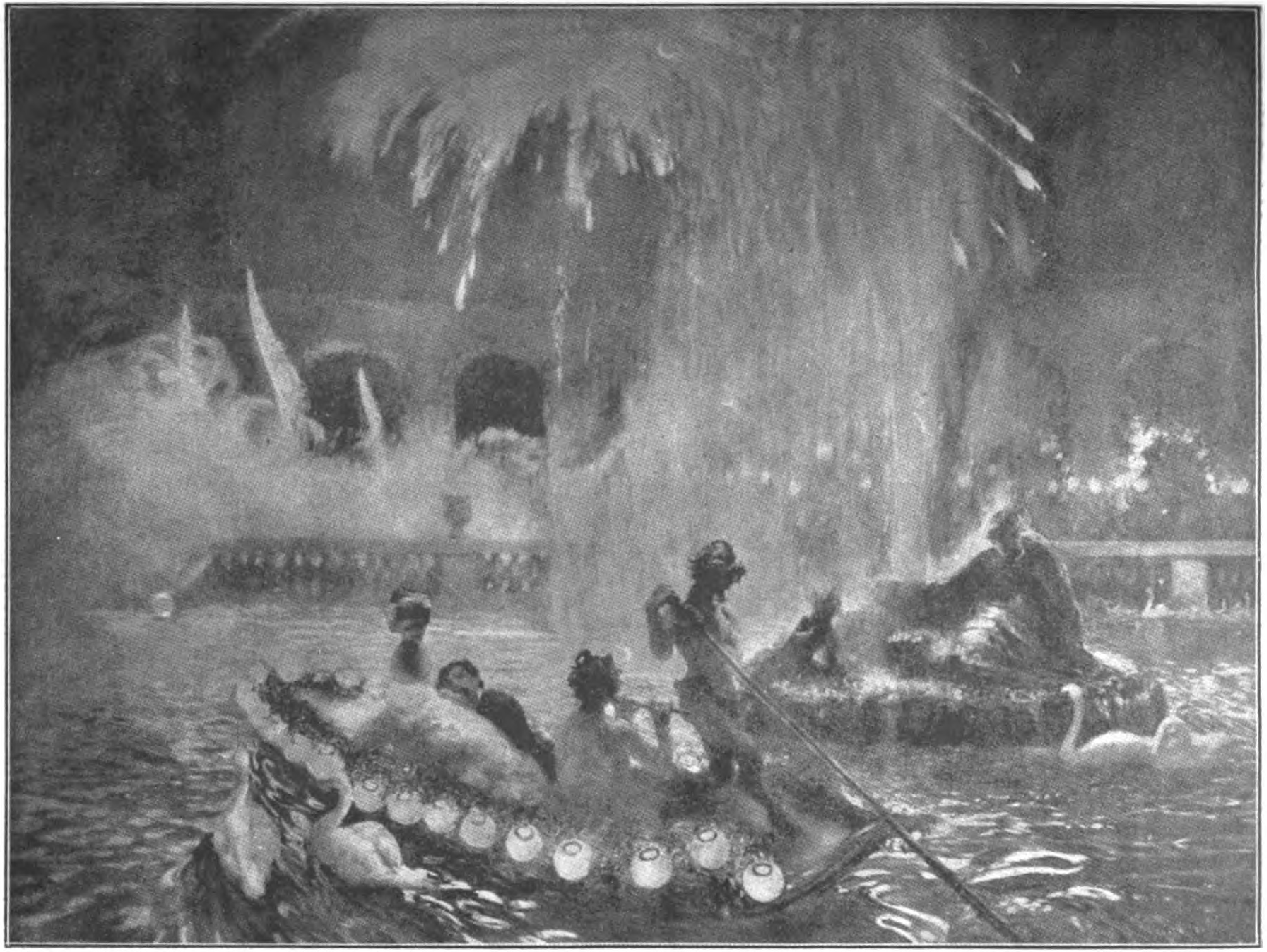


中央公論第廿九年七月號目次




營業品概目
○懐中時計　各種
○掛置時計　各種
○ダイヤモンド　並ニ各寶石
○指環手釦　並ニ各種携帯品
○貴金屬美術工藝品製作
東京市京橋區八官町
小林時計商店
電話新橋　一一〇三　一一〇四
振替口座　七八〇〇七

Gaston La Touche



A Noc Turnal Fête

中央公論



七月號
第二十九年第七號
第三百七十七號

我が對支國是を論ず

（一）

今や列國の對支外交は投資の競爭に忙殺され、就中比較的に投資の能力乏しき帝國の如きは寧ろ支那官民に閑却さるゝ觀なき能はず、近頃澁澤榮一男が老軀を提げて日支實業提契の爲めに遊說し大に好影響ありと稱するも、未だ具體的に何等效果の見るべきを示さず、大隈首相輕卒にも支那に對する日英經濟同盟を唱道して大に英人の反感を惹き支那人の嘲笑を買ゐしは笑止千萬の出來事なり、加ふるに今の時局に際し比較的に適任者と認められし山座公使と水野參事官が殆んど時を同ふして北京に客死せしは其事の悲慘なるの外、宛ら皇天わが外交不振を實物教示せるものゝ如く、且つ四十五十にして未だ其名

の聞へざる日益氏を南米より移さんとするは轉〻我外交の寂寞を感ぜざるを得ざらしむ。

斯くて我邦上下擧つて支那に於ける利權獲得に關し日に失意の歎を爲すに對し列國の成功は實に赫々たるものあり、鐵道布設權に關しては或は海州灣を以て起り中部支那を東西に横斷して甘肅の蘭州に至り、更に延長して新疆省を經て露の中央亞細亞鐵道と連絡せんとするものあり、南京の對岸浦口より起り湖北省に入り京漢線の信陽驛に接續し、進んで襄陽に及び、更に深く四川省に入らんとするものあり、南京に起り南昌を經て長沙に至り、雲南省に入りて緬甸方面より來れる英の片馬線と合せんとするものあり、安南河內より起り廣西省の龍州に出て、延びて廣東、貴州、雲南各省に入らんとするものあり、山東鐵道を濟南より延長して順德に於て京漢線に接續せんとするものあり、若夫れ鑛業權に至りては米國スタンダート會社の北支那石油鑛業を獨占したる、英國パイオニール會社の四川省の鑛業權を占守する、露白の陝西甘肅に於ける、獨の山東省に於ける、佛の雲南廣西に於ける其雄圖長計人をして羨嗟に堪へざらしむるものあり、其他佛國が浦口築港に出資せんとする、米國が淮河水理工事を引受け、又た造兵工廠に出資せんとする、曰く何、曰く何、左なきだに神經過敏なる我邦人をして一層悶煩の情なきを得ざらしむ、往歳帝國が百戰百勝の威に乘し勢圈を滿州に擴大するや、歐米諸邦は頗る羨望の色ありしが、今や資本の戰爭に於て帝國は大に列國に輸せざるを得ず、外交の無能を叱して當局を鞭撻するは大に好し、然れども貧國たる日本が此際大に利權を支那に擴張する能はざるは當に數の然らしむる所、吾人は須らく一時隱忍して重ねて發展の機會あるを待つの外あるべからず、徒らに焦心狼狽して列國の

笑を招くことなからんことを要す。

（三）

吾人は邦人が此際暫く隱忍して重ねて發展の時機到來を待つべきを云ふ、然れども是れ無爲にして徒らに大勢に雌服すべしと云ふには非ず、派手なる發展を爲す代りに地味なる方法に由り大ひに富强の基を開くべきを云ふのみ、他なし大に日支貿易の發達を謀ること即ち是なり、抑も日支兩國は一衣帶水の隣邦にして古來貿易上最親密の關係に在り、而して最近二十年間に於ける兩國貿易の增進に至りては眞に驚くに足るものあり、明治二十四度に於ける日支貿易の總額は二千八百二十七萬餘圓に過ぎざりしが、二十年を經て大正元年度に至れは無慮一億九千零五十八萬餘圓に達し、即ち七倍强の增加を示す、此間に於ける支那の外國貿易全體に就ては五億七千七百餘萬圓より十一億五千四百餘萬圓に進み、僅々二倍の增加をなせしのみ、而して從來支那貿易の主位を占むる大英本國及ひ香港殖民地に付て之を觀るに、右二十年間に於て大英本國との貿易は一億六百萬より一億四千四百萬圓に進み、香港との貿易は二億六千萬圓より三億三千九百萬圓に進み、孰れも約四割の增加を示すに過ぎず、別言すれは支那の外國貿易は千八百九十一年より千九百十一年の二十年間に於て僅かに二倍せるに過ぎず、英國香港に對しては四割を進めたるに止まるも、獨り我日本との貿易に至りては實に七倍强の增加をなせり、豈に驚くべき破格の進歩に非すや、更に我邦の外國貿易は此同時期間に二億八千三百萬圓より十一億四千五百萬圓に進

んて約四倍の進歩を示し、頗る意を强ふするに足るも、此の全體の增加率は遙かに對支貿易の增加率（七倍强）に及ばざるなり、此れ自ら日支貿易關係が如何に彈力に富めるかを示すものにして、今後發展の餘地亦た多大なるを豫想するに足れり。

蓋し今後我が對支貿易が一段の發展を爲すべき機運に向ひつゝあることは單に過去の成蹟に由り漠然これを推論すべき耳ならず、最近の新現象たる外資輸入の結果として、當さに然るべきを思はざるを得ず、即ち近時列國が競ふて獲得したる各種の利權に對しては列國は近き將來に於て數億の資本を支那に投するものと假定すべく、加ふるに北京政府の借金を以てすれは外資輸入總額優に十億萬圓以上に及ふべきは疑ふべからず、而して此外資は多くは轉々して支那官民の手に落ち其購買力を增加し且つ支那の物價を騰貴せしむべし、是れ我輸出業者の大に着眼すべき點にあらずや、今や我邦は貿易の逆調に苦しみ、巨大なる外債の始末に窮するに際し隣邦に向つて大に歐米外資の投ぜられんとするあり、是れ吾人か須らく大に歡迎して利用すべき機會に非ずや、近頃支那關税率引上けの結果、在來に比して一分四厘の增加となり、我輸出業者の由りて受くべき影響少なからず、大正元年度の對支輸出額一億九千有餘萬圓を標準とすれは關税支拂の增加額二百十七萬圓に達すと說くものあり、思ふに是れ多大の打撃たるべしと雖も此中一半は之を購買者たる支那人に轉嫁するを得べく、支那に於ける外資輸入の結果を利用せんとするに毫も憂ふるに足らず、又た關税增率の保護を受けて支那內地に工業の勃興すべきを見越して心配するが如きは最も笑ふべし、紡績業の如き支那人が其有利なるを知るに從ひ必ず續々各地に起業す

るものあるべしと雖も、我邦が多年の經驗より占め得たる優勢の地位は失はんと欲するも容易に失ふべからず、支那內地工業の競爭は偶々我工業家をして其技術の上に、其經營の上に一段の進步を爲さしむべきこと必せり、吾人は此等些細の障礙の前途に橫はるは却て我貿易發展に取りて一種の刺激たるべきを思ふ、前途發展の程度に就て素より斷定すべからすと雖も最近なる一九〇八年より一九一一年に至る三年間に於て一億千九百五十萬圓より一躍して一億九千萬圓に上り、即ち六割の增加を示したるを以て將來を推斷すれは今より十年も經過せば、竟に四、五億の多きに達せんこと、蓋し妄想と云ふべからず。

更に支那の沿岸航海に於て近年我海運業者が多大の發展をなせしは最も人意を強ふするに足れり、即ち明治三十年に於ける支那沿岸航海の統計を見るに英國は支那各港滊船出入總計二千百萬噸を以て第一位を占め、次に支那、獨逸を經て日本に至り六十六萬噸を算せり、然るに十四年後の大正元年度に於ては英國は三千七百萬噸を以て第一位を占むるも、他は皆な日本に凌駕せられ、即ち我邦は千九百萬噸を以て第二位を占むるに至れり、而して此期間に於ける各國發展の速度を比較すれば、我邦の爲めに最も意を强ふすべきものあり、即ち英國の支那沿岸航海業は八割の進步をなし、支那は一倍半、獨逸は五倍、佛國は三倍强、米國は三倍を增加したるも、獨り我日本のみは實に十九倍强の發展を爲せり、而して最近我千九百萬噸を以て英の三千七百萬噸に對すれは尙ほ及はざる遠しと雖も發展の速度に至りては〇、八と一九の相違あるか故に我海運業者にして其經營の法を誤らざるに於ては英國を凌駕して東洋第一位

を占めんことと決して多年を要せざるや知るべきなり、獨逸の如き最も鋭意經營に努むと雖も頓數に於て我三分一に及ばずして、進歩率に於ては五と十九の對照を示す、米國は江蘇省水利工事に着手し、山西直隷の石油權を掌握し、三都澳築港の風說を生ずるまでに對支發展に努むるに關はらず、其沿岸航業頓數に於ては我二十分の一にも達せずして、進歩率に於ては三と十九の對照を示すに止まる、吾人は帝國海運業の近況と併せて對支貿易の前途を眺め轉た快心の情禁ずる能はざるものなくんばあらず、想ふに列國の利權獲得たるや頗る派手やかにして、宛も四百餘州の利權を網し盡せるの觀ありて、資本國たらざる帝國は除外せられて最も不利の地に立つに似たれども、其實決して悲觀するを要せず、利權の獲得素より忽諸にすべからず、外務當局の無能素より大に叱咤せざるべからずと雖ども、若しも貿易及び海運業の發展に向ひ一層の努力を致すに於ては禍を轉じて福と爲すの道自ら共間に存せり、ナポレオン一世の覇を歐大陸に稱するや、其兵威に屈せず終始之に抗抵したるは唯だ一の英國ありし耳、帝は頗る英國を輕侮し每に之を稱して『小賣商人の居る國』なりと云へり、何ぞ知らん『小賣商人の居る國』の終に帝の偉業を根帶より覆へし帝をして孤島の鬼と化せしめし耳ならず、爾來一百年海運、貿易、殖民を以て覇を宇内に稱するに至らんとは、吾人は三たび云ふ、利權の獲得に努め外交の無能を鞭撻せざるべからず、然れども我國が資本國ならざればとて對支關係に於て毫も悲觀するを要せずと。

然りと雖も列國の利權獲得に對しては帝國は最も嚴密にして責任ある監視を怠るべからず、抑も支那保全は帝國の動すべからざる國是にして、三回改締の日英同盟は此主義を基礎とし、日米、日佛、日露の各協約若しくは聲明孰れも支那保全の爲めに保障を設けたるに非ざるはなし、革命の後六國借款團の成立するや其主たる動機は各國期せずして支那保全を希望したればなり、後に米國の借款團を脫するや必ずしも領土保全の主義を放棄せしが爲ならず、英國の經濟借款の解放を唱へたる亦必ずしも領土分割を替成したるが爲めならず、吾人は列國中現に何國たりとも分割を企圖し、若しくは領土保全の主義を放棄せんとするものあるを知らず、然れども利權の獲得は著るしく勢力圈の色彩を濃厚にしたるの傾あるは爭ふ可らずと思ふ、即ち勢圈なるものは分割にはあらず、主義に於て相距る遠しと雖も、而も一步を進めば分割となることなきを保せざるなり、蓋し支那政府の基礎此より益々堅固なるに至らんか、前途單に分割の恐なき耳ならず、勢圈の色彩も亦漸く稀薄となりて終に一大强國の極東に現出するを見るを得べく、是れ世界平和の爲め最も歡迎すべきなれども、若しも萬一にも然る能はざるに於ては果して如何なる大野心的企圖の何日何時、突如として實現するあらんも未だ知るべからず、若しも列國中孰れの國にても、斯る野心の大手腕を出すあらば、是れ則ち極東騷亂の開始と見做さゞる可からず、斯る場合に臨みては帝國と英國とは領土保全、機會均等の爲め盟つて共同動作を執らざるべからず、政治上に於ける日英同盟の價値は今も尙昨の如く毫も減ずる所あらず。

蓋し今日の國際關係を以て十年以前と比せば形勢の變化頗る著るしきものあり、日英同盟を發起する

に至れる兩國の動機は今や殆んど其存在を見ざるに至れるもの丶如し、是れ則ち近來英國に於ても日本に於ても、見識の徹底せざる一部の論者間に在りて往々同盟不要を說くものある所以なり、然れども現在の國際關係の根底に就て之を觀れば日英同盟は依然として兩國國是の基礎たり、其然らざるが如く又其必要ならざるが如く見ゆるは偶々表面的形勢の變化より來れる一時の現象により然るのみ、別語之を云へば帝國は露國と滿蒙に關し協約を重ね、英國は波斯に關し露國と勢圏を劃し、殊に英露は歐洲局面に於て佛を加へて三國協商の仲間たるを以て、日英共に亦た露を恐るの要なく、日英同盟の意義は殆んど喪失されたるに似たり、然れども試みに思へ、日露の親善なる果して日英同盟の存立するが故に非ざるなきか、英露の舊讎を忘れたる日英同盟に依り印度方面の防備犯し難きに至れるが故に非ざるなきか、而して露國は戰後の疥痍今や全く癒へ、其國庫は充溢し其兵力は十年前に比し三分一を增加し、波的海に新海軍を起して獨の背後を威嚇せんとし、黑海に絕對優勢の艦隊を游弋して近東の天地に一大壓迫を加へんとしつ丶あり、想ふに其志や或る時會を伺ふて一擧にして近東問題を決解せんとするに在らん、而かも是れ一方に日英同盟の存在して前進の途を遮ぎるが故に出動の方向を一轉せるのみ、此の露國の方向一轉は日英の最も歡迎する處たるは云ふまでもなく、乃ち露をして此方針を持續せしめんとせば是非とも日英同盟を維持せざるべからず、之を譬へば大厦高樓を築かんと欲して先づ地を堀り基礎を堅固にするが如し、基礎已に成り、大厦高樓巍然として天に聳ゆるに至り、誰れか復た基礎を無用なりとせんや、而して日英同盟を無用視するは、大厦高樓の基礎を無用なりと云ふと何ぞ擇ばんや、更に實際に

日英同盟の價値を能く評價せんと欲せば、日英同盟を單獨に觀ずして、英佛露の三國協商と聯關して之を觀れば、必ず自ら心に氷解する處あるべし、日本が英佛の資本に依頼するの必要あるは露國と擇ぶ所なく、英佛が極東の平和保持の必要上帝國の兵力に待たんとするは疑ふを要せず、即ち四國は東西相呼應して始めて克く其領土を護り其利權を擴張し、同時に或る野心ある强國の突飛な政治的經濟的活躍を控制するを得べきなり、斯の如く日英同盟は依然として現在の國際關係の一楔子たりと雖も政治以外總ての方面に於て、社會上經濟上にも同様に兩國人民の提契を要すと爲すは餘りに多くを望むもの却て同盟の目的に副はざるべし、固より政治上の同盟は自然に社會上にも經濟上にも互に接近すべきは避くべからずと雖も、必ず然かあらざるべからずと爲すは少しく無理の注文ならずや、例せば濠洲の東洋人排斥の如き如何にも不條理千萬なりと雖も、同盟の故を以て我邦が之を咎めんとするか如きは愚擧なり、又支那に於て帝國の海運業者其他貿易業者は屢〻英人の獨占範圍を犯すことあり、然れども經濟上の自由競爭に敗北したりとて惡聲を放つか如きは英人の野蠻なり、双方とも同盟の眼目を認めて岐路に互らず小異を棄て大同に一致するは是れ政治上至當の行動と云ふべし、吾人は一九二一年の同盟滿期に際しその必ず改締繼續せらるべきことを信じて疑はず。

（四）

帝國の支那に對する態度を明かにせん爲めには滿蒙問題は好個の案件なり、言ふ迄もなく帝國は關東

州を租借し、南滿鐵道と聯關し南滿一帶に特種の位地を占む、且南滿州と遼河を距て相接し之と離るべからざる地理上經濟上の關係ある東蒙古の地に對して帝國は其勢圈内にあるを聲明せり、而して此の漠然なるが如き主張は洮南鐵道敷設權の獲得に由り頗る正確鮮明と成れり。

滿蒙問題の解決に先だち帝國は之に對する根本的主張を宣明せんことを要す、即ち第一には如何なることあるも帝國は今日滿蒙に占得せし地位を撤退せんとするものに非ず、世間の噂さによれば我政界の一部に滿蒙撤退論者ありと云ふものあり、吾人は未た斯る論者に接せずと雖、萬一にも此種の論を爲すものありとせは、是れ實際政治家の間に聞くべからずして、寧ろ學者空論家の説なるべし、蓋し若しも支那をして自力を以て優に其國境を護り得べからしめは、帝國か滿蒙を返還するも亦た可ならずとせざるも、若しも帝國にして南滿を撤回せば後に入りて代るべきは決して支那の權勢に非ずして、他の外國の勢力なるべし、是れ滿蒙撤退の迂論たる所以なり、且つ帝國の南滿方面に於ける自ら一大天職あり、他なし此方面に據りて勢力を具備し、以て支那領土保全の監視役たることと是れなり、譬へは滿蒙に於ける日本は極東の平和を擁護すべき一の憲兵師團と云ふべし、萬一にも列國中不逞の志を現はすものあるか、又は萬一にも支那内治紊亂して收拾すべからざるにも至らは、列國共同の下に率先して平和の回復に努めざるべからず、是れ即ち帝國か滿蒙を撤退すべからざる一の大なる理由なり。

第二には帝國は決して滿蒙を合併せんとするものに非さることと是れなり、一部支那通の有志家中には頻りに强硬を衒ふものありて、往々滿蒙合併を説くものなきに非ず、然れども故なく他邦を合併するの

暴擧たるは勿論、支那保全の主張に鑑みれは滿蒙を合併して支那分割の先鋒たるが如きは絶對に不可能事に屬す、責任ある政治家の一人之を是認するものなきは勿論なり、斯く論し來れは帝國の對滿蒙方針たるや自ら明なり、即ち帝國は滿蒙に據り極東平和の把持に努め、同時に經濟的に滿蒙の開發を謀らんとするに外ならず、支那政府の主權を尊重し滿州人民の權利を擁護し、文明の代表者として永く信を中外に博せんと欲するのみ、玆に於て滿蒙に關する帝國の要求なるもの生じ來る、即ち居住、土地所有、鑛山發掘の自由是れなり、別語之を云ば、帝國内地と略ぼ同一の自由の許に滿蒙の開發を謀らんとするものにして、且つ此等の自由は列國民にも均霑せしめんと欲するものなり、目下の北京政府の狀態より察すれは此種の讓與を得ること決して容易ならずと思ふ、然れとも滿洲に於ける帝國の特種の位地と經濟的關係の尋常一樣ならざるに顧みば支那當局も竟に要求の無理ならざるを知らん、滿蒙問題の解決は蓋し一代の外交家を以て任ずる加藤外相に向つて國民の齊しく要望する所ならずんはあらず。

滿蒙問題の解決に聯關して分離す可らざるは露國との親善なり、之を帝國の脚地より論ずれは滿蒙の平和的開發を謀らんとするには是非とも露國との十分なる理解を要す、所謂露國の復讐戰に備ふるの必要なき迄に相互の信用を厚からしめざるべかず、之を露國の脚地より見んに、所謂復讎戰なるものは果たして戰ふの價値あるべき乎、國境孰れの方面にも大洋に面したる不凍港を有せざる露國が一旦大連を獲得したるは無理ならぬ事ながら、元來南滿は歴史的に露國と深き因緣あるに非す、例せはアルサース、ロレーンの佛國に於ける如き關係なく、單に數年間之を占有し二億内外の資金を投下せりと云ふ耳、若

し容易に恢復し得べきの望あらば復讐戰を爲すも可ならん、然れども事頗る容易ならざるは明白にして、寧ろ他の方面に國力を傾注するを以て得策とせずや、但し若しも露國にして其西境に於ける利害を抛擲し、即ち日露戰爭中に强ゐられて締結せし獨逸との現行通商條約を更に繼續するの一大不利益を忍び、巴爾幹を墺伊に與へ小亞細亞を獨逸に與ふるを覺悟し、國力を擧げて日本と再戰するの決心あらば、イザ知らず、左もなきに於て再戰の極めて愚擧たることは夙に露國識者の認むる所に非ざるなきか、斯の如き危險を犯してまで復讐戰を爲さずとも、別に國家發展の途は自ら他の方面に開け來らん、即ち近東に西北支那に、露國の經營に待つもの多く、寧ろ南滿に飛離れたる政治の中心を作らんより集團的に國家の基礎を堅固にするの必要あるべし、而も今や日本は露の復讐戰を恐れ露國は日本の北滿に對する侵略に備へんとして互に軍備に汲々たるものあり、露國がシベリヤ線を複線となし北滿守備軍を增加し、日本が二個師團新設を企圖するが如き、若しも兩國間に眞誠の協商成立するの曉には大に其必要の程度を異にするものあるべきこと想像するに足れり、但し近來に至り日露兩政府間に頗る良好の感情を生し、漸く互に信頼するが如きの徴候あるは吾人の大に愉快とする處ならずとせず、即ち去ぬる五月下旬露外相サゾノフ氏が議會の演說中『日本政府は日露協商の條文に忠實にして、露國の鐵道線內に於ける行政權を尊重し其臣民を露國保護の下に置けり、兩强は他の一般的政策に關して同じく共同の精神に支配されつゝあり』と云へるもの以て此間の消息を傳ふるものに非ずや、吾人は我當局が能く露國の誠意を諒とし協商を盡して極東に於ける一切の案件を解決し、露國をして或る非常の場合に臨み、東方に對する

後顧の憂なく全力を擧げて近東問題の解決に任ずべき自由の境遇に立たしめんことを希望す。

（五）

支那の領土を保全し、機會均等を保障し、且つ此主義を貫徹する必要上滿蒙に於ける帝國の特殊の關係を維持するは是れ我が對支國是の要件にして、何人が外交の衝に當るも此方針に背くべからず、然れど時々刻々に生起する各種の案件に就ては當局の間にも亦た民間有志の間にも自ら意見の相違あるを免れず、例せば最近三年間、革命勃發以來の事態に就て見るに南方革命派に同情するものと實力ある袁氏を助けんとするものとありて、政府部内にも民間にも甚だしく意見の杆格あり、或る一部支那通の如きは時に宛も日本人たるを忘れて支那人以上の愛國者となれるの奇觀なかりしに非ず、爲めに種々の喜劇も悲劇も演ぜられしは讀者の耳目に尙ほ新たなる所ならん、我國內の爭論の如きは多く意とするに足らず喜劇可なり悲劇可なりと雖も、爲めに支那官民をして我國情を誤解せしめ、我に對する信用を傷け、動もすれば輕侮心を發せしむるに至りては眞に痛歎に堪へず、斯の如くなる所以のものは必竟日支兩國の接近して彼我往復の便利なるに加へて同文同種なる特別の關係に基き、支那人を以て外國人視せず寧ろ同胞視するに由れり、事情頗る恕すべきありと雖も、而かも國際の圓滿を破りて時に國家の大計を誤まるの恐れあるに至りては深く戒めざるを得ず、之を他の英國人、獨逸人、又は露佛米人等が各國一致協同して支那經營を計るに對照せば邦人の行動は之を一大亂脈と評せざるを得ず、如何に我邦が資本に

欠乏せりとは云へ、若しも官民よく協同一致して對支經綸を立つるに於ては利權の獲得に於ても必ずや多少の見るべきものなくんばあらず、其之なきは罪を邦人の亂雜なる行動に歸せざるを得ず、吾人は政府を鞭撻する必要を思ふと同時に民間の支那有志に向ても亦大に反省を促さずんばあらず。

宮内省廓淸

我帝國は武士道を誇りとし、勤王を以て萬國に冠たりとなす、武士道の權化は軍人にして勤王心の最も盛なるは君側に近き宮内官吏たるべしとは世人の普ねく期待する所なりしが、最近頻りに不祥事件續發し、海軍省と宮内省の廓淸を叫ぶの止むを得ざるに至れるは我々帝國臣民として眞に慚愧に堪へざる處なり、宮内省大官の瀆職事件なるものは事已に時效に罹り、公けに法廷の問題とならず、從つて海軍事件の如く天下の公評に上らざりしと雖も、或る一種の運動を納れて實價十萬圓内外の某地域を二十六萬圓に御買上げとなり、其事已に帝室費を濫用するの非違なるが上に、更に此非違を敢てしたる報償として六萬圓を收賄せりと云ふに至りては實に沙汰の限と云ふべし、收賄者の主たるものは或は大臣の職を辭し或は大臣待遇を辭せしを以て、穩便に結末を見たるが如きも、上の好む所下之より甚だしきものあり、一二下級官吏の免職を見たるも背德官吏は決して此等一二に止まらざるは何人も疑はざる處にして、吾人は波多野宮相の英斷よく廓淸の實行を完全にするに至らんことを期待せんと欲す。

同時に吾人は世人に向ひ一の注意したきことあり、他なし宮内省官吏中背德者少なからずと雖も是れ省内の事務を取扱ふ部内に多く、宮廷に在りて　兩陛下の左右に奉仕するもの〻中には曾て背德の評を受けし人ありしを聞かず、嚴正犯すべからざる　先帝、又は聰明欺くべからざる　今帝に近つき奉るものにして背德の行爲あるべからざるは看易きの道理にして、吾人は所謂宮内省の腐敗の或る一部に止まり未だ深く宮廷内に入るに至らざりしを不幸中の幸福となさゞるを得ず、大凡宮中の腐敗は歐洲若しくは支那などに於ては古來隨分有り勝ちの事にして驚くに足らずと雖も、我邦に於ては　先帝の御在世中宮中府中の區別を立てさせられ、昭憲皇太后聰明貞淑にましく〳〵て克く御内廷の肅淸を期せさせられ、未曾て一回も醜聲の外に漏るが如きことなかりしは、即ち其事實の存せざりしを反證するものなり、我歷代の御宇の中に在りても蓋し前古その比を見ざる程の美事なりと云ふも過言に非ず、故に今後とても

兩陛下の御膝下に於て必ず肅淸の保たるべきを期持するを得べく、吾人は世人が宮内官吏の瀆職を惡むと同時に内廷の肅淸を疑ふ如きことなからんことを呉々も警告せざるを得ず、即ち海軍に關して、本省勤務の一部の將校に瀆職行爲ありたれども、艦隊勤務の將校は淸廉潔白にして毫も其廉直を疑ふの餘地なしと云ふが如く、宮内省の俗事に關係する官吏中往々背德漢を出せるも、内廷に奉仕するもの〻中には曾て背德者なしと云ふを肥臆せんことを要す、近頃新たに侍職幹事に任命せられたる德川達孝伯の如き頗る撰の宜しきを得たるものと云ふべく、亦た以て現宮相が鋭意廓淸を圖らんとする誠意を多しとすべし。

吾人は波多野男の廓淸なるものが果して人物の淘汰に止まらんとするや、又は宮内官吏の執務の方針にも及ばんとするやを知らず、然れども吾人をして一言の注意を加へしむれば、廓淸の事は大に執務の方針にも及ぶの必要あらんと思ふ、從來宮内官吏は如何の動機に因れるかを知らずと雖も、人民の帝室に對する尊敬を濫用して隨分亂暴の處分をなしたるの例多かりしが如し、例せば私有林又は共有林を猥りに帝室林野に編入したるに對する苦情は吾人が各地に聞く處なるが、其事情を具して下戻しを請願するも容易に聞入れられず、或は苦々しき裁判沙汰ともなりて人民の怨を買ふに至り、更に又た一種の秘密運動により妥協に終ることあり、其妥協に終るものゝ如き多く其裏面には醜怪事の之に伴ふものあるに似たり、人民の訴ふる處果して不條理ならば法廷に爭ふも不可なしと雖も、我邦人にして宮内省を相手取り訴ふるは多くは能々止み難き事情あるに非されはなさず、故に人民の告訴には必ず多少の理由は存す可ければ、官吏たるもの須らく宮内省の爲めに謀りて剛愎なる勿らんことを要す、現存せる人民との係爭事件の如き廣大なる　君德に鑑みて速に決濟すべし、財產の爭は親子も情を壞ることあり、宮内省と人民との爭の如きは或は　君德に累を及ぼすの恐あることを記臆せざるべからず。

更に廓淸を完全にせんには人を採るに情實に由るの風を一掃せざるべからず、由來宮内省は最も情實に富むと想像せられたり、大凡そ維新前後勤王家として多少の運動にても爲したるものは、他省の官吏たるに堪へず、又は自立して生計を立つること能はざれば、即ち序を求めて宮内省に潜み込むを例とせしが如し、甚だしきは其當人に限らず其子孫に至るまで一種の恩遇に浴することあるに似たり、又宮内

省の高官又は元老等の緣故に由り無能者の採用せらるゝもの少なからず、他省の如く世人の非難に係らざりし丈けに宮內省は一層此種の弊に富めるが如し、一方に多くの無能者あり一方に少數の腕利きあり、腐敗行爲の頻煩なる亦た驚くに足らず。

終りに吾人は宮內省の廓淸に聯關して道德思想の改良に付き一言せんと欲す、由來我邦にては忠孝を以て道德の大本と爲し、他の德目は寧ろ忠孝の附屬となせり、例せば虛言す可らず、廉直なるべし、男女の道を正ふすべし、他人に憐憫なるべし、業務に勤勉なるべし、其他人間の性格を圓滿に陶冶するに必要とする德目多し、然るに此等は總て從にして、忠孝獨り主たるが如き思想狀態なりしを以て、親の爲めに身を醜業に委するものゝ如き文明の今日尙ほ未だ其數を減ぜず、而して忠君の權化たるべき宮內省高官にして相率ゐて瀆職罪を犯すを見るに至り、吾人は轉た忠孝を獨り德行の基と爲すの危險に想倒せざるを得ず、紳士とも云ふべきものにして、虛言を吐き恬として恥づることを知らざる未だ我邦の如きはあらず、吾人は宮內大臣か收賄したればとて其勤王を僞りとは云はず、勤王なればとて必ずしも廉直ならざればなり、親に孝心深き人なればとて政治上其他の心術公明なりとは限らず、素より父母は家庭の柱にして、君は國の柱なり、故に忠孝を重んずるは當然なれども、他の諸德目亦た一として缺くべからず、個人主義の傾向盛んならんとす今の世に於ては個人的德目の重んずべきを敎へざれば意外の手落ちと爲らずとも限らず、否その弊害は已に世に公けになりて天下を驚動せり、吾人は敎育の任にある人々の能く意を此邊の問題に注ぎ竟に德育根本の廓淸を見るに至らんことを希望す。

賞罰或問

(附、公式令改正問題)

野間五造

宮内省の廓清と言ひ、海軍の刷新と言ひ、又た何々部内の掃蕩と云ひ、某々件の疑獄と云ひ、大官紳縉の或は貶黜せられ或は縲絏の身と成る者朝夕踵を接する有様て、實に現今の我社會は各方面に亘りて大掃除大清潔法の眞最中と云ふ趣がある、文學上の言葉て言へば、道路眼を聳て、閑室倘ほ襟を正うするとても言ふ可き風て、一方から視れば誠に結構な次第の様に想はれるが、又た飜て考ふれば懲罰の峻嚴、制裁の酷烈と云ふだけては未だ以て善政也とは謂はれ無い次第て、秋官剔抉奸曲跡を絶ち、刑吏斷訟邪惡聲を寂むと云ふ事は邦家の慶事たるを失はぬが、イヨ〳〵大正の御世をして堯舜の聖世たらしめんとするには、夫れ丈けては未だ充分とは云へぬのである、一方に罰を斷行すれば他方では賞を厲行せねばならぬ、賞罰併行が爲政の大本てある、功有つて賞無きは罪有りて賞無きと同様てある、倘ほ進んて言へば不公平なる懲罰は懲罰の功や空しく、偏頗なる授賞は賞與無きに若かずてある、必賞必罰帝臣不蔽、と言ふのが取りも直さず治國平天下の

王道て有つて、縦令一方に於て有罪不敢赦と云ふ厳正な掟があつても他方に於て濫施妄賞の不始末がある場合は決して治世としても謳歌する譯には行かぬのてある、桀紂は暴刑に由て斃れ、羅馬は濫封の爲めに亡びて居る、經世家たらん者は須らく爰に留意一番せねばならぬ次第と想ふのてある。

(一) 榮典濫授

賞罰の大權は帝坐の第一義てあつて、皇室なる者は榮譽の淵源てあるのみならず、叙任、特恵の權をも收められて居る譯合てある、(The sovereign is the fountain of honour, of office and of privilige !) 我帝國憲法も之等に就ては明らかに規定して居ハ、同法第十五條『天皇ハ爵位、勳章及其他ノ榮典ヲ授與ス』と明記して皇室に榮典授與の大權のある事を顯すと同時に又た憲法の章規に依り輔弼の任ある者が奏請並に奉宣の義務を負はねばならぬことをも併せて規定してある譯てある、我内閣總理大臣は其直屬の賞勳局と共に擢擧推薦の責任あると同時に奉宣副署に對して重大なる義務を帶びて居る者と言はねばならぬのてある、故に若し當局有司にして推挽の序を誤り、偏頗の奏請を爲したる場合に於ては、其結果、全く聖明を掩ひ奉り、忠良の臣民をして徒らに怨嗟の下に泣かしむるに到る恐れがあるから、榮典授與と謂ふ事は鄭重に鄭重を重ね決して輕忽に取扱ふてはならぬ仕儀てある。

由來我當局有司、殊に宮廷を圍繞する官僚系の儕輩は、今日に於て吾々が到底想像し得ざる程の頑迷固陋の志想を抱き居りて、其甚だしき者に到つては、官人有職の士に非ざれば臣に非ずと明言する者さへ有る程て實に驚き入りたる始末てある、現に賞勳局などては僅かの例外を除いて此局内に於て取扱ふ單位(即ち身分)は憲法第拾條の所謂文武官と云ふ者に限りたるが如く思惟し居りて、普通の人民は殆ど人間として視て居らぬのてある。褒章や綠綬、藍綬を授與する者は呼ぶに幾類を以てし、恰も展覧會や競進會て馬匹に優等章を授與すると一般の心地て取扱ふて居ると云ふ事て

ある、又た宮內省の宗秩寮などては四位以上昇殿格の者で無ければ人を人として認めず、給使門衛迄が相當の紳士に向て呼び捨てにすると云ふ始末である。今日に於てはか丶る賞勳局や、宗秩寮なる者が國家唯一の榮典奏請機關であると想へば、誠に情け無い感じがする。

今試に現在の賞勳局なる者が、果してドンナ人達に依つて組織されて居るかと言ふ事を調べて見るに、其總裁は正親町某とかと云ふ公卿サンであつて、其下に候ふ議定官は皇族を除いて他に山縣、大山、樺山など言ふ老軍人連と、文官側ては松方正義、田中光顯、福岡孝悌、細川潤二郎、河瀬眞孝、杉孫七郎、蜂須賀茂昭など云ふ御連中て、大概古稀以上の年配て中には宮中鳩杖を許されたる九拾歳前後の人も隨分有る樣子、何れも何れも前世紀の豪傑て、現世に於ては社界と沒交渉の人達てある、か丶る議定官八名の贊成を以てして國家に於て貴重なる榮典、即ち勳章、褒章、記念章從軍紀章、賞杯、賞狀等が奏請し得らる丶と云ふに到りては、誠に心細い次第ては無いか、榮典授與が殆ど一部の者(官僚系)に限られて居ると云ふ不都合も、右等議定官の名前丈けを見れば、決して無理ては無い事が判るのてある。

然しながら、法規上賞勳局が奏請する勳章褒章等に就ては時の內閣總理大臣の連署を要する事と成つて居るので、兎も角責任官の眼を通す事は確かてあるから、多少我慢も出來るとするが、敍位、陞爵、授爵、に到りては、毫も責任官(內閣大臣)に關係無く、政事上無責の地位に在る宮內大臣の一存て自由自在に奏請し奏宜する事が出來ると云ふに到りては、實に呆然たらざるを得んては無いか。

明治四十一年勅令第六號ニ依テ公布セラレタル公式令

「第十六條」、爵記ニハ親署ノ後チ御璽ヲ鈐シ宮內大臣年月日ヲ記入シテ之ニ副書ス

「第十九條」及「第二十條」、勳章及記章等は國璽ヲ鈐シ內閣總理大臣及賞勳局總裁共ニ署名ス

右様の規定なるが故に、今日迄は榮典授與の方法が二途に別れて居て統一されて居なかつたのが判る。即勳章記章等は内閣大臣や賞勳局の奏請奏宣に依り、叙位、授爵等は唯宮内大臣の手心一つて遣つて居つた事が判かつた次第である、此の不統一は明らかに憲法違反である。「アンコンスチチユウショナル」の行爲て有る。

更らに宮内省官制を見るに第五條「大臣ハ救恤、褒賞、贈賜ノ事ヲ司ル」、第七條「大臣ハ叙位、叙勳、授爵ノ事ヲ司ル」と規定し、省の内外を通じて宮内大臣は此大權輔佐の特種權能を有して居つたのである、嗚呼我忠良なる臣民よ、卿等は、既往約貳拾數年間に於て彼の公平無私、淸廉潔白、古今稀れなる有德の雲上人田中光顯、渡邊千秋と云ふ二大忠良の掌中に於て榮爵推薦の權を握ぎられて居つたのである、誠に有難い始末柄ては無いか、今更と成つて榮典濫授の弊など、騷ぐのは頗る野暮な樣に想はれる、世傳ふる所によれば桂の公、小村の侯、渡邊の伯、其他某々の榮爵は時の内閣に一言の相談無く、全く無沙汰にて宮内大臣が奏請權を利用したる者なりと非難の噂がある、吾輩は事の眞僞を知らざれども、官制上に於て當然成し得べき行爲にして別段不思議は無いと信ずる次第である、過去は兎も角もとして現在に於ては一日も早く此公式令を改正し、勳章、記章は勿論の事、叙位、叙爵、の請奏權を總て責任官(内閣大臣)の掌裡に收めしむると同時に、猶ほ序てを以て賞勳局議定官の交迭を決行し官邊に於ける濫階者流の跋扈を制御せざる可らずと想ふ次第である。

國に盡し、君に竭すのは、必ずしも官人に限る譯では無い、民間の人士でも種々の方法、各樣の手段を以て忠君愛國の誠を致す事が出來る譯合て、現に實行して居るのてある、然るに、榮典授與の側から見る時は明らかに官人に厚く民人に薄い樣に成つて居るのてある、吾人をして極端に言はしむれば、常に一定の報酬(給料等)を國家より受けて居る官人には、別段の榮典を授ける必要は無い、却て國家より何等の報酬をも受

けて居らぬ民間の人が篤志を以て邦家の爲めに盡した場合にこそ、榮典授與が適應したる措置の樣にも想はれるのである。

現に民間に於て終生政事の爲めに奔走して居る、犬養、大石、尾崎、など云ふ一流株の連中や、又は民間實業家の森村、園田、豊川、朝吹、大倉、益田等の諸氏に於て一人として授爵の御沙汰を辱ふしたる者は無いてある、勳章も恐らく四等以上の者は無かろふと思はれるのである、然るに之に反して、官僚側に於てはやうやく日清戰爭前後に於て帝大を卒業して官人生活にはいりたる者てさへ、甘く長州系に喰ひ入つたる働き者の側ては、勳一等をせしめて居る者は珍らしからず、中には授爵せられて居る者すらある次第て、其榮達や驚く可き者があるのてある。

右樣政界實業界一流株の人達を比較せずとも、民間實業家中自己の業務を以てして、非常に國家經濟を援助して居る人士に對して國家の榮典部は果して如何なる優遇法を講じて居るかを調べて見るに、是れ又た官人側に比較してお話に成らぬ酷待である、現に過日我輸出貿易の主腦品紡績業界の巨頭たる日比谷平左衞門に對して從來の功勞を表彰する積りて正六位か從六位かを與へた事があつた、元來正六位とか從六位とか云ふ者は文官ならば一郡衙の胥吏てさへ持つて居る位階て、軍人側ては下級尉官か或は下士官に相當して居る程の者てある、此榮典が被授人を喜ばしむるに足る可きかドーか、更らに亦た第三者に向て一種の奬勵を意味するてあらかドーか吾人は甚だ疑ひ無き能はずてある、又た他の實例に於て、過般死去したる我慈善界の偉人にして、歐米人の所謂、極東孤兒の慈父たりし、石井十次に向て、之も確か正六位か從六位かを贈つた事があると記憶する、之等の榮典授與が他の官人側の者に比して權衡を得て居るかドーか、殘念ながら否なと言はなければならぬのてある、其他我貿易業者にして我邦の富強に直接間接に貢獻したる者にして之等榮典に浴して居らぬ者は多々あるてあろふと思はれるのてある、茶業の大谷、生糸の片倉、眞珠業の御木本、

織物界の飯田等が果して如何なる榮譽を表彰されて居るであろふか。

我同胞丈けては無い、從來我邦の爲に竭してくれた外國人に對して、果して適當なる恩謝的榮典が與へてあるであろうかドーであろふ、我輩の寡聞なる僅かに外務省の「デニソン」氏に對し勲一等、年金、及親任待遇がして有ると聽てゐる計りである、他の外人にして非常に我邦家に利益を興へてくれた人達に對して、年金や、遺族扶助や、勲章などが、滿足する程與へて居るかドーであろふ、恐らく思ふ樣に行屆いては居るまいと想はれるのである、法律界の恩人「バーソナード」及「ロエスレル」兩氏は如何、醫學界の「ヘボン」、「ベルツ」兩氏、美術界の「フエノロサ」氏、石油界の「ライマン」氏 陶磁器界い「ワグナル」氏、陸軍の「メッケル」氏、海軍の「ベルタン」氏、宗教界の「ブルベッキ」、「ニコライ」、「ハリス」諸氏は何如、殊に我邦の美風良俗を歐米に紹介し、日露戰爭に際し世界の同情を我に收むる事を得て爲に巨額の國債を募集し得た一大偉勳者たる、「ラフカデヲ、ハーン」(小泉八雲氏)に對しは我政府は果して如何なる優遇法を講じ居るや、吾輩か今之等の人士に向て滿足すべき榮典を希望する所以の者は、此人彼人に属する詮議には非ずして、實に世界的道義に對して云云するのである、今日甲外人を優遇して置くは、明日乙丙丁の外客をして我に盡さしむる所以である。昔は死馬の骨を五百金で購ふたる者すらある、況や曾て我に向て同胞も及ばぬ程竭されたる諸氏に於てをやてある。

(二) 無意義なる官公吏の別

官公吏の別は全く專制の遺物である。米佛の如きは建國以來殆ど此區別無く、英國も女王政の末期に於て撤廢せられ、獨逸も數年前全く此區別を廢止したりと聞けり、我邦に於ての官公吏の別は不思議なる顯象を呈して居る。其は何んてあるかと言ふに、制裁、所謂等責任の上に於ては官公吏の間に於て何等の區別無きに係らず、恩賞、扶助、敘任、敘位、の上に於てのみ

大なる差別が存在して居る。是れも必竟官僚系藩閥者流が自分の畑へ水を引こふと想ふ、得手勝手から與つた現象に外ならぬのである。

刑法第七條に於ては官公吏を併せて公務員なる名稱の下に置て同一責任の者として居る、同法第百五拾五條僞造文書罪、並に、第百九拾三條瀆職罪の如きも、其制裁所罰の上に於て兩者同様に取扱ふ事と規定せり又た明治三十五年内務省令第三號並に明治四十四年の第十六號に於て公布せられたる、公吏服務紀律は明治二十年勅令第三十九號の官吏服務紀律と何等異なる所無く、同一の制裁、同一の所罰事項として規定し居る。

公吏服務紀律、第五條猥リニ他人ト利益供給ノ約束ヲ結ヒ又ハ贈與ヲ受クルヲ禁ス、(官吏服務紀律第八條同斷)

第六條公吏ハ業務ニ關シ他人ヨリ饗宴ヲ受クルヲ禁ス(官吏服務紀律第九條同斷)

第七條公吏ハ許可ナクシテ營業ヲ爲シ若シクハ家族ヲシテ營業ヲ爲サシメ又ハ報酬ヲ受ク可キ他人ノ事務ヲ行フコトヲ得ス(官吏服務紀律第七條並ニ第十一條同斷)

右の如く制裁所罰の上に於て官公吏殆ど同一様の取扱ひを受け居るに係らず、夫の恩典、賞與、扶助等の上に於ては全く相ひ異なり、官吏に厚くして公吏に薄し、先づ第一恩給令に附て見るに、同法第一條に「本法は文官判任官以上の者に適用する」と云ふ旨を記載し明らかに公吏を除外せり、又た明治四十四年法律第四號の官吏遺族扶助法に依つて見るも全く恩給令の場合と同様公吏を除外し居れり、たゞ市役所の吏員や村役場の吏員等に限り、大正元年十二月に到り始めて内務省令第九號を以て退隱料給與の法を立てゝ居るけれども、是れとて何にも恩給金の如く、被給者に向て權利を與へたのでは無く、たゞ僅に斯人に對し市會或は村會の決議を以て監督官廳の許可を受くる事と成つて居るので、誠に以てたより無い譯である、而して之等二三種の公吏を除いたる他の所謂公務員なる者、即

ち衆議院議員、縣會議員、市會議員、郡會議員、村會議員などは、何十年忠實に勤務したとても何等恩典に浴する事は出來ぬのである。全く國家の威嚴部や榮典部からは、仇だ敵の樣な取り扱ひを受けて居るのである、言ひ換ゆれば、公務員なる者は全然、叙位、叙勳は勿論の事と、恩給、扶助、年金、褒賞等の榮典には觸れしめぬ樣に成つて居る次第である、現に貳拾年近く衆議院議員を勤めて退職したる人にして今日僅かに有給の村長に有り附て衣食して居る者もあるし、又た、永年郷閭の爲め奔走し身を勞し財を蕩したる地方自治の功勞者たる縣會議員退職者にして貧窮院に老を養ふて居る者すらある有樣である、其れに引き換へ俗吏出身の者は縱令判任の末班に列する者さへ相當の年月を勤務すれば、國家は本人の衣食を保證するのみならず遺族に迄恩澤を及ぼす樣に成つて居る、況や勅任奏任など高級の官人に於ては、其身に非常な過失さへ出來かさ無い限り、終身衣食を保證せらるゝのみならず相當の年月さへ經過すれば何等見る可き勳功無しと雖も、叙位、叙勳は勿論、旌綬、陞爵等の恩寵に浴し其の榮を子孫に配つ事が出來る樣に成つて居るのである、官吏は公吏に比して頗る幸福な譯であると謂て宜しい、斯く言へばとて吾輩は穴勝ち官吏の優遇を遞減せよと言ふのでは無い、如何にも官吏を優遇するが宜しい、然し其れと同時に公吏をも優遇するの道を講じて貰ひ度ひと言ふのである、官吏に厚く公吏に薄き待遇法を作つたのは全く、其昔流行した政黨國賊論に其淵源を發して居る事と想はれる。

立憲政治の發達して居る歐米諸國では、黨派の爲めに盡瘁したる者は國家に對して竭したると同樣に認められて居るのである、現に米國の如き、軍人が臨戰境地に立て敵國と有無交渉する事柄と、普通人が國内に於て共和黨や合衆黨の爲めに盡力するのと、愛國的行爲としては全く同樣に認めて居る次第である、又た英國に於ても夫れと同樣黨派の爲めに忠勤をぬきんてたる者は、國家の爲めに竭した者と同樣に認められて居る、現に昨年の事であつたが、富家にして新聞持主な

る「パームスヲース」氏が自由黨の野幕資金(キャンペーンファンド)に向て巨額の黨資を寄附したると言ふので、現政府が夫れて敍爵をした所、貴族院に於て「セルボルン」伯から一種の抗議が申出された、然し政黨の資金を供給したるが爲めに敍爵された例は自由黨側よりも反て保守黨の方の側に多いとの反證が擧げられた爲め遂に泣き寢入りと成つた事がある、我邦に於ても今後立憲政治が發達するに從て自然と右の主義が行はれる樣に成るてあらふと想ふ、今日の政友會や同志會に盡瘁するのを以て直に國家の爲めに盡す愛國者てあると斷定を下すのも餘り極端てあるが、サレバとて又た全く無視してしまうのもヒドい話してある、產を破り身を亡して迄自由主義民權主義の爲めに竭した明治初年間の有志家なる者は、維新前朝廷の爲め四方に奔走した各藩の志士と其志想に於て何にも異なつた所は無い、共に立派な忠君愛國者てある、之等の人達は官吏或は官人が其省其局の爲めに盡したと云ふ勳功と何んの擇ぶ所は無いのみならず、寧ろ優れて居るかも知れぬ譯てある、然るに其官吏は優遇せられ其有志家は酷待せらるゝと云ふのは頗る片手落の所置と云はねばならぬ。

(三) 偏頗の敍任。不正の選拔

現在に於て樞密顧問官に選拔せられ、又貴族院議員に勅選せられんとする者は、必ず先づ官僚出身と云ふ手形を所持して居らねば成らぬ樣に成つて居る、如何に國家の爲めに竭した者でも、如何に達識なる賢者ても、官人系より出る者で無ければ選拔の榮を得る事が出來ぬ樣に成つて居る、此窮屈にして偏頗なる敍任法が大正新政の今日に於て時代精神に合致して居るてあろふかドーてあらふ、誰が見ても餘り感心の出來る仕方では無い。

樞密院なる者は申迄も無く、「時ノ施政ニ干與セサル範圍ニ於テ至高ノ諮詢ニ奉答スル職責ヲ有スル國家最高ノ顧問府デアル」。勿論其組織者は國家に功勞有る有識者に限らるゝ事てはあるが、然し必ずしも藩閥的官人系から選拔せなければならぬと言ふ道理は無い、廣

く天下の人才から叙任して差支へ無い譯である、然るに現在の樞密顧問官なる者總員參拾人は悉く官僚系の人て在つて其の內約貳拾人は全く山縣を首領とする長州系の人を以て組織されて居る次第柄である、實に官僚系殊に長人藩閥の跋扈を見るに恰好な例證である、かゝる不完全なる機關を以て至高の諮詢に奉答し奉ると云ふは實に洵に惶れ多い次第では無いか。

　吾輩は今茲に實例に就て取調べて見よふ、現在の顧問官て、金子堅太郎、香川敬三、松平正直、九鬼隆一などの人達が民間政事家の、大石正巳、原敬、犬養毅尾崎行雄、などに比較して、幾干多量の功勞と識見とを有するであろうか、亦た、民間實業家に於て、澁澤榮一や、森村市左衛門や、園田幸吉等が、顧問官たる北垣國道や、周布公平や、故船越衛等に比較して幾干の遜色があるてあろふか、天下自ら定評あるべしてある、本人が斷然謝絕すれば致し方ないが、若し本人に於て承諾をする場合に於ては廣く人才を網羅するのが今日の時代に處して急務ではあるまいか。

　現今我邦に於て國家問題として頗る緊要なる者は、支那問題である、對支關係に於て若し一步を誤るとせんか、再び取り還しの付かざる損害を受け、此我帝國を危地に陷れる場合無しとも限らぬ次第である、然るに今此至高顧問府に於て果して誰人が最近の極東事情に通じて居るであらうか、見亘す參拾頭顱の裡に恐らく一人として最近の支那事情に精通して居る者は無かろふ、現今屢々起り來る對支案件に對して、謹而奉答の責を全ふする顧問官は誰人てあろふか、想ふて爰に到れば恐懼の外無き次第である、吾輩は此際に於て布衣の臣根津一を推薦したい心地がするのである、尙ほ進んては武臣靑木宣純をも薦め度い考へてある、之等甚だ僭越な言葉の樣てはあるが、先の日無官の學究杉浦重剛を東宮御敎育掛に推進したる當局者の措置を見て、國民が非常の喝采を以て翼賛したると同樣の意趣を以て是に冒瀆の言を敢而するのである。

　我邦の樞密院は英吉利の「プリビー、カウンシル」を模造したは勿論てあるが、英國の「プリビー、カウン

シルレは創設當時即ち「アンネ」女王時代こそ、或は爲政者の過失を矯正し、或は植民地の案件に附て最終の判決を與へるなど、王に對して充分の「アドバイス」をも與へて居つた者であるが、今日に於ては殆ど其働を停止し、皇帝踐祚の際とか、或は國家危急の時に非ざれば、餘り用向の無い者と成つたが、我邦の樞密院は中々左樣な閑職に非ず、稍もすれば其職權を乘り越へて施政に容喙でも成し兼ねまじき勢で、我國家機關の上に於て重要の地歩を占め居るか故に、吾輩は斯樞密院を引いて藩閥横暴の例證を示した譯である。

次は貴族院の勅選問題である、是れも樞密院と同樣に、少數の例外を除いて他に悉く官僚系の者に非ざれば選抜せぬ事に成つて居る、過去に於て此不文法は頗る嚴格に行はれて居つたのであつて、如何に國家に功勞あり、識見凡を抜て居つても、民間の士人はダメてあつて必ず官僚系で無ければ選抜せられぬ事に成つて居るのである、縣知事や次官局長の古手なら大概の低能兒迄は選抜の榮を得る事に成つて居る次第であるが民間の者では、嘗て、鎌田榮吉を學校長より抜き、德富猪一郎を新聞記者より選んだる外他に餘り例を見なかつたのである、近頃政友會内閣の時に際して、漸く江原素六、杉田定一、磯部四郎位を拔擢したに過ぎぬ實際民間には貴族院議員に選抜される丈けの人才や功勞者が無いのであろふか、決してそふて無かろふ、畢竟するに藩閥者流が横暴の結果、官人にのみ重きを置たからて有ろふ　縣令サンの古手や、明治參拾年前後にやうやく任官したる小僧ッ兒を以て組織されて居る貴族院勅選部の諸人と、吾輩が左に擧ぐる人士と果して何れが立派て有ろふか、靜かに世人の定評を伺いたい者である。

曰く三宅雄次郎、曰く豐川良平、曰く朝吹英二、曰く岡村輝彦、曰く門野幾之進、曰く早川千吉郎、曰く江木衷、曰く馬越恭平、曰く中橋德五郎、曰く益田孝曰く小山健三、曰く高田早苗、曰く中野武營、曰く天野爲之、曰く庄田平五郎、曰く關直彦、曰く箕浦勝人曰く島田三郎、曰く鶴原定吉、曰く岡崎邦輔、曰く大

谷嘉兵衛の諸氏である。

本人に於て立法部に入るを好まざれば休む、然らさる以上は、今後勅選補缺の場合に於て、眞先に之等民間の人士を推薦して貰ひ度い者である、人心の一新を期せんとする大隈内閣は必ず吾輩の希望に添ふ事であらふと思ふのである、榮典の濫授、敍任の不公平と云ふ事は國家の大不祥事であるのみならず、政道の潰亂は夫れから起つて來るのである、大正の御世をして必賞必罰帝臣不敵、の善政たらしめんと希ふ者は、必ず此榮典敍任の取扱に就て愼重の考慮を費さねば成らぬ事と信ずる。

右述べたのは唯だ貴族院内に於ける、勅選議員丈けの事柄であるが、其他同院に於ける各種議員は果して如何なる儕輩であるかと云ふに、一々批評すれば、數限りも無い事であるが、吾輩をして一言に之を評さしむれば、大凡左の四種に依て組識されて居ると謂ふ事が出來るであらふと想ふ、（第一種）、（皇族及攝家を除いて）藤原時代から禁裡の掃除番や雜色を勤めた者の子孫と、（第二種）祖先が關ヶ原の合戰に於て東軍に味方したと云ふより外何等の誇を有せざる者と、（第三種）餘り金持て無い文官の土百姓と、（第四種）前項揭げたる偏頗の選拔に依つて集められたる潘閥の官人等が即ち夫れである。

貴族院令の改正、一代貴族の創設、世襲財産法の改正、等貴族院に關する政治上社會上の問題は、今や吾輩の腦裡に山積して居る次第で、爰に大に論議して見たいと想ふけれど何分紙數に限りあつて此上の長談義は許されぬ次第であるから、何れ他日好機會を待つて大々的筆陣を張る事を玆に豫め讀者諸君に誓つて置かふ。（終）

時代の要求と大隈内閣の使命

島田三郎

政治家には政治家の任務があり、内閣には内閣の使命がある。能く其當然の任務と使命とを成遂げたる者は成功し、その然らざる者は敗退する。其成功の範圍の廣狹と、其政權を把持する時間の長短とは敢て問ふ所ではない。故に政治家が其同志と共に内閣を組織し若くは政黨を總理するに當つては、首として時代の趨嚮と其任務の何者たるかを自覺する事こそが第一の要件と謂はなければならぬ。現大隈内閣は果して如何なる時代に如何なる使命を帶びて起つたてあらうか。

今や政黨は其政治的公性質を失ひ、墮落腐敗相繼ぎ國民其歸適に惑ふの時に當つて、一代の聲望と見識とを以て時代の刷新改革の任務を荷つて起つた所のものが大隈首相てある。憲政普通の規則に顧るに、多數を擁する政黨が援助する所の山本内閣が、少數にして而も統一無き個々の三團體の爲めに摧破せらるゝの運命に際會したるが如きは不思議なる現象と謂はなければならぬ。而も事の此に至りたる所以のものは、國民が山本内閣及び多數政黨と其意嚮を異にし、議會そのものが國民の意志を代表せざるが故てあつた。大隈内閣は議會の多數に反對するが如き不可思議なる基礎の上に立つて、三個鼎立の少數黨の間に比較的多數を有する同志會をその最も親しき政治上の援助者となしてをる。中正會は一人一黨の信仰を有する人々が今尚略々其半數を占めて其抱合未だ堅からざる團體である。而して國民黨は一方大隈内閣の援助を聲明すると同時に他方に於ては政國合同の理想を公言するが如き、極めて矛盾の宣明を爲して居る。且加藤外相は立憲同志會の首領てあるが、大隈首相は其履歴と聲望とに於て當

代第一の政治家たることは言を俟たざるも、直接には政黨內の人ではない。斯くの如き組織の上に立ち、斯くの如き少數の而も一致を缺ける味方を擁して、夫の議會に於ける過半數を有する政友會を向ふに廻して、奈何なる方針に依て鞏固なる基礎に立ち能く其任務を果さんとするか。是れ實に世人の一大問題とする所のものである。

非政友三派の合同を企畫して經營慘憺其目的に向つて努力したる有志の心盡しは洵に同情すべきものがあるが、其計畫は失敗に歸し、其目的は遂に達せられず日を經るに從つて却つて其の希望の光は薄らぎつゝある。此非政友三派合同が果して絕望であるとすれば、如何にして夫の厖然たる多數黨と對立して、現內閣の基礎を鞏固にすることを得るであらうか。目前の製艦費支出の臨時議會は、既に手附を入れて仕事の半途にある費用を支出するのであるから多く爭ふの餘地を見ない。眞に大勢を決すべき時期は此年末に開かるべき通常議會の應酬である。內閣の組織に關して、多大の希望を囑したる國民の期待が滿たされたるや否やの問題は既に過去に屬して今之を論ずるの要を見ない。唯今に於て現內閣が採るべき方針の第一要件は、現代議會に於ける頭數の多寡を顧慮することなく、國民全體の希望に副ふべき大膽なる施政を斷行するにある。國民は最早や藩閥の餘勢と墮落して徒黨となり了つた政黨の結合との弊政には厭き果てたるの觀がある。時代の趨勢と其眞相とを解せざる近眼者流の眼には國民は尙依然たる舊國民の如く見ゆるでもあらうが、世界思想變化の奔流は滔々として帝國の岸を打て急潮を我國內に漲らし、爲めに我國民の思想は急激なる變化と影響とを被つてゐる。積年の情弊に倦み疲れたる國民は今や新鮮なる空氣の呼吸に依つて潑剌たる新生命を獲得せんことを望んでゐる。社會の表面を漂ふ紋波は極めて平靜なるかの如きも、一度び內に入れば欝勃たる暗流急潮の混々として漲れるを見るであらう。蓋多年藩閥と官僚とが施したる平凡なる政治が、時代の趨勢に伴ふ政治的敎育を拒み、國民の政治的能力が完全な

る發達を遂ぐる能はざりしに因るのである。加ふるに官僚政治が言論文章の威力を無視した結果は、憲政の基礎となるべき投票の作用を不健全にし、不正の手段を無遠慮に行ひ選擧其物の正道を攪亂し、其反影は議會に映じて今日の如き政界の腐敗を釀成するの因をなしてゐる。今日大隈内閣が採るべき根本の革正方針は實に此點に存する。今の時に方つて政府は須らく國民と直接親密なる關係を着け、秘密の門戸を撤去して心腹を吐露し、誠意を以て其政策を公表し、而して閣員自ら其説明の勞を取り、其政策の可否を國民全體に問ふべきである。之を具體的に言へば、内閣員諸氏が其在野當時天下に聲明したる處の政策の内最も急なるものを擧げて之を實行するの項目を立て、其意義を説明して其可否を普く天下に問ふの活動を望まんと欲するものである。久く野に在つて政治を批評するの立場に居つた人々が、其聲明せし所のものを一時に決行することとは事情の難き所なるべきが故に其最も急なるもの、國民の利害に最も痛切なるもの、時機漸く熟して實行の運びに至らんとするもの、斯くの如きものを取つて議會に提出し、假令其全部を實行し得ずとするも、其三四乃至五六の實行を見るの運びに至るならば、是れ時代の空氣を一新すべき大功と謂はなければならぬ。而して其當面の問題とは、果して如何なるものであらうか。

第一に來る所のものは、所謂財政整理の問題である。其一部は已に現内閣が其政綱として之を公にし、閣員の演説に依て説明せられた所のものである。例せば非募債政策の如き、通貨を減縮して輸出入の均衡を得せしめんとするが如き、金貨制度の基礎を鞏固にするが如き、國論の久しく要求して、上下の等しく切望したる所にして其方針亦健全なる世論が是認する所のものである。然るに國民渇望の焦點となり、前内閣倒壞の一原因となつた所謂税制の改正税種の廢減は、之を事實問題としては尚極めて茫漠にして分明を缺くの憾みがある。差向き望ましきは營業税並に通行税廢止の如き、地租輕減の如き、現内閣の朋友が前議會に於て極

力主張した所のものを實行する事で信約履行の點から言つても其必要を感ずるのである。

實驗に依るに税制の改正に關係して二樣の方針がある。先づ財政を調査した計數の上から、何程の餘金が有るから何種の税目を除き幾何の税額を減じようといふのは其一である。是れと趣きを異にし、國政の大勢から打算して、財政の數字上如何なる困難ありとも時代の必要として人心を收め民力を養はねばならぬといふ形勢の上より推斷して減税若くは廢税すべき方針を定め、此目的の爲めに政務の整理を斷行して國民の希望に應ずるは其二である。前者は事務的整理にして後者は政務的革新である。明治九年の秋、地租改正に伴ふて起つた三重縣の騷擾事件は天下農民の憤怨苦情の一端を此地方の爆發に示した者であつて、當時可燃質が全國農民の間に充滿して居た。失職の士族が各方に蟠踞して亂を思ふて機を窺て居た。其尤畏るべき危機が鹿兒島に萠して居た。一方に爆發すれば天下の一大事を惹起するに至るやも知る可らざるものがあつた。そこで先づ民心の安撫を必要也として遂に明治十年一月地租輕減を斷行して漸く民心を安じた事がある。三重縣の暴動ありてより其間僅に三ヶ月。當時の歲入は約八千萬圓で有たが其歲入の一割八百萬圓を減税したのである。形式に拘泥し規則に拘束して改正を躊躇するが如き官僚臭味の政治家には夢想だも及ばぬ大英斷であつた。此減税は帳簿を案して然る後徐ろに實行した輕減にあらずして、大勢より打算して人心を安撫せんが爲めに決行したる勇斷であつた。さればこそ其後一ヶ月を經ずしてかの西南の亂が起つたけれど、全國の人民は此減税を德として其政治の下に居るを欲したるが故に亂は西南の一局部に止つて容易く平定の功を奏したのである。若し此時局を察せず、調査に調査を重ね、徒らに日子を費してゐる間に、不平は天下に充ち滿ち、農民各地に亂を思ふの狀を呈したならば、西南の亂は擴大して新政厚德の反旗が中央に翻つたかも知れない。日露戰後の餘弊を受けて國民休養を望む事極めて切なる今日、現在の議員を超越し、現存の政黨を

超越して、政府と國民とを緊切せしむるの要訣は、善政を行ひ民心を收攬するの英斷を要する。加之前內閣に對して惡戰せし現政府の政治上の味方は其信約を守るの上からも切に此勇斷を望むのである。

次に政黨間には從來之に重きを置かぬやうであるが、眞の革制は固結し沈滯せる現政界に一大變革を加へることに依つて得られる。予の觀る所を以てすれば茲に二つの方法がある。一は敎育の解放であつて、他は政圈以外に立てる國民に、政權を頒與するの策である。政治の能力を普及すると共に選擧權を擴張することを必要とする。從來の敎育は新時代の制度に副はぬ敎育であつた。畏くも明治天皇は民と共に國家を經營せんと深遠宏大なる叡慮を以て憲政を布き給ひ、之に副ふの諸制度を立てさせ給ふたに拘らず、局に當るの臣僚は此等の憲法制度を運用するの能力を養ふべき敎育を國民に授くることを怠つた。政府に服從せよ、法律を恪守せよとの敎育はあるが、與へられたる參政の權を如何に取扱ふべきかの敎育を施すことを忘れた。政界に馳驅する人も深く言論の功力を認めず、不健全なる手段に依つて選擧を爭ふの弊を長じた結果は、神聖なるべき投票は無意義となり從つて政治上の運用は全く其精神を沒却するに至つたのである。普通敎育に於て政治的敎育を施さゞる結果として、政治的無能力者をして大切なる政治的權力を玩弄せしむるに終つたことは之を人民の過失と言はんよりは寧ろ政府の怠務と謂はなければならぬ。單に怠務に止まらず、舊來の權力に戀々たる藩閥者流の心事は、國民が政治を理會するを歡ばず、敎育と政治との連絡を斷絕せんことをさへ欲したやうに見える。曰く、敎育家は政治に與ること勿れ、學生は政治を談ずること勿れ、良民は全力を生計に注ぐべく、政治の活動を事とする勿れと。素より其專務の職を棄てて政治に狂奔するは贊すべきでないが、國民當然の任務を爲すには政治の智能を缺いてはならぬ。此意味に於て國民敎育に政治的敎育を施すことを怠つてはならぬ。蓋し現在の敎育は形式に流れて其精神を缺いて居る。人として將た民として必要な

ふ道を宣し給へる教育勅語を授くるに當つても單に之を暗誦せしむるに止まつて理會の道を講じてゐない。若し政治教育を普通教育に授くるには餘りに高過ぎるといふならば畏くも大御心を籠め給える教育勅語は高遠にして兒童に理會せられぬといふに至るてあらう。然るに教育勅語を兒童に服膺せしむるを以て第一要義として居る國民教育に於て、投票を正當に運用すべき政治教育を高過ぎるが故に之を授けないと言ふが如きは矛盾てある。予は此見地から、現政界を革新する根本要義は國民の政治的能力を普通教育に於て養成するに存りとする者てある。

高等教育に關して代々の文相を惱ますのは大學組織の問題てある。時代の進歩は二三の官立大學を以て年々増加する學生の收容に當つることが出來ない。此必要が私立大學の要求として現れる。此問題の爲めには幾多の紛紜を釀して而も未だ解決の運びに至らない。素より多くの年代を經て多くの資金を投じて成れる官立大學が諸事整頓して基礎堅固なるは今更言を俟たぬ所てある。然しながら羅馬は一日に建てられたのてはない。一朝にして公私立大學の完全を望むが如きは無理てある。而も年々激增する學生、社會に相當に用を爲すべき資質の青年を試驗の關門に於て拒斥せざるを得ざる如き今日の狀態に於ては公私立大學の國家に對する貢獻は決して鮮少なるものてはない。特には政府直接の仕事としての官立學校には他の官衙の如く其間自ら一種の氣風を養成して、社會各階級の用を爲すべき人物を作るに適しない傾がある。是れ諸事整頓し資金豐裕にして基礎堅固なる官立學校の長所と並び存する所の短所てある。此意味に於て國民多數の要求から言つても又氣風の上から言つても公私立大學の發展を望まなければならぬ。帝國大學と並行して公私立大學の成立を許すべきや否やは學政上の問題となつて居るが、需要の有る所供給有りて近時私立大學の萌芽が各地に現れたに見ても其必要を證して居る。勿論現在の有樣にては、整頓の域に達したといふことは出來ないが、政府が從來の方針を更め、好意を以て之に臨み、

之を養ひ之を長ぜしめたならば今日の官立大學に對抗して敢て劣らざる公私立大學の出現を期して待つことが出來ると信ずる。綜合制にあらざる單科大學の成立を許さぬといふが如きは餘りに歷史に拘泥し、過去の慣習に囚はれたる見解である。單科大學を擯くる一の理由として綜合大學が各科專門の智識を共通して教授も生徒も倶に利益を受くること大なりとは屢〻聞く所の理論であるが其實際に至りては疑問である。假令理論に於て有益であるとするも、單科大學の成立すら資金の點に於いて困難なる今日之が實行は至難である。是れ難きを他に責むる出來ない相談である。現に綜合制を主張する官立の實際はどうであるか。九州大學、東北大學の如き果して綜合の名に副ふてゐるか。此等の例は年代新しければ勢ひ然らざるを得ざるとを實地に官學派綜合派自ら證明してゐるではないか。綜合大學制の束縛から脫すべき理由を實地に說明してゐるではないか。大勢を通觀するに國力の發展に伴つて富者の階級も高まり、富者の人數も殖へ其嗜好も漸く高上して學問奬勵の欲望となつて現はるゝ所私立大學に資金を投ずる人も出るであらう。一時に完全なる希望を達する能はずとするも、假すに歲月を以てし之を培養し成長せしめて將來完全の域に達することを計るのが必要である。慿くの如くにして專管的慣習を打破し國民的同情を高等教育に與へたならば各學校は其抱負に大を加へ、相互ひに勵み戒めて我國の學界は擴大せられて高等の教育は益〻發達隆盛の運に向ふであらう。人或は學士博士號を各私立大學に委ねては其信用如何を憂ふる人あるも、要は實力の問題であつて、何の學校の學士又は博士と言へば其學校の信用を表し、其學校の信用は其卒業生の評價となり、社會の批判評價かあるから輕々しく學士號博士號を與へて其權威を失墜せしむるやうな事は無からうと思ふ。又何の學科は何の大學の卒業生が最も優秀であり、何の大學の卒業生は何學を能くするといふが如きは社會の鑑識と評價に委ねて差支ない。全國通用の貨幣に刻印して政府が保證を與へて之を一律の下に置くが如き要は無いのである。要す

るに政府は此點に留意し、誘導的奬勵的に或る綱目の標準を立て、之に適合する者は單科にても大學たるを許し、公私立大學をして官立大學と共に其增加と完全とを期せしめることを圖らなければならぬ。是れ一に學界の專管的拘束を打破し、現代の要求に適せしむる進步的政策と信ずる。

尙內閣が採るべき方策の一は選擧權の擴張である。此主張は從來種々なる故障の爲めに振はなかつた。即以前は政府之を歡ばず、今は現在の議員も之を喜ばぬやうである。想ふに選擧者の增加に連れて面倒の增すことを虞れるからであらう。併しながら現在投票を得るの方法が追從と輕薄、世辭と諂諛とにより、甚きは投票賣買の行はるゝ如き不健全極まる弊害を生じたのは言論文章の利器を閑却して暗中狡智を弄するが爲めてある、然るに選擧權を擴張して選擧者が增加すれば區々たる訪問や限り有る金錢の力に依つて到底其目的を達することは出來ない。勢ひ言論文章の利器を必要とし、公開政談の風は起りて腐敗は立所に一掃せられるであらう。公明の地に道理燿き暗黑の地に腐敗生ずるとすれば公明の地に公爭の利器を活用して選擧の事是れより正しきを得るであらう。國民愚なりとして侮ること勿れ、近く東京に現れたる選擧が十五六年餘市政を私して牢乎拔くべからざる地盤と信じて居つた或一派を一蹴し去ることを得たのは、是れ偏へに言論文章の利器を以て市民の判斷力に訴へたる結果である。此度の選擧に觀ても時代の進步は黃金の力をして殆ど其用を爲さしめなかつた。商工は覺醒し、青年は活動して舊習に囚はれたる腐敗漢は敗退し舊式を守る政客は驅逐せられたてはないか。但だ財力を基礎とする一級二級の選擧人には比較的言論文章の力が及ばなかつた憾みがあるか、是れは其數に於て尠く、其人が階級者流てあるからてあつた。而して此等の人が輕く見たる三級選擧人に對して三級候補者が言論の力によつて刷新の味方となるを得たのに觀ても、之を全國に及ぼし議會革新の實を擧ぐるには或程度の選擧權擴張を必要條件となすべきことを證して餘りありと思ふ。

最後に今一つの問題は、假令一時に其目的を達せずとするも、理想として希望として改革したき一事、即陸海軍の大臣を必ず軍人中より選ばなければならぬといふ障壁を撤去する事である。聞く所に依れば政務次官をすら陸海軍に置かぬといふ說があるさうであるが其論據は軍機秘密の漏洩を恐るゝに因るといふことである。是れ全く謂れなき議論と言はなければならぬ。事秘密を要するは唯軍事のみに限るものではない。高等政務には何れも秘密が有る。裁判にも外交にも或る程度と或る時機とに於て秘密がある。其他如何なる所にも或時期の間は公表すべからざる事が澤山有る。官吏が其秘密を嚴守すべきは其當然の義務である。武官には其秘密を嚴守するの德操は有るが、文官は之を有たぬといふならば一國の政務は成立たない。又事實に於て如恁き區別を文武兩官の間に認め得るであらうか。文官中にも有德の人も有れば不德の人もある。武官亦同樣である。軍器の製作を外國の商人と計畫して之を金錢問題に變化せしめた實例を眼前に置いて、而も尙ほ武人は悉く特別の有德者のみであると誇り得るか。予は之を以て一般武官の德操が文官より低いといふのではない。唯武官は其秘密を守り文官は之を守り得ざるが如き區別を立つる迷妄を醒さんと欲するのである。又軍事は專門であるから、普通の政務官は理會し得ないといふならば、そも亦單に軍事にのみ止まらないと言はねばならぬ。一切の事業には分掌がある。專門的知識は單に軍事のみではない。遞信省所管の鐵道に於ても電信に於ても皆然りである。參謀本部の軍事的機務と陸軍大臣の與る軍事的政務とは全く其性質を異にして居る。之を民間の工業會社に例ふるに、科學的專門の知識は其會社の理事長の必ず知る處ではない。然しながら科學者ならぬ敏捷なる事務家は能く理事長たり得るではないか。斯くの如く事務と科學との分業があつて始めて會社の繁榮發達を期する事が出來るのである。既に國民に參政權を與へ、憲政の實現せらるゝ今日の時代に於て、政務と軍務とを混同して軍人にあらざれば軍政を掌るべからずと言ひ、殆ど一切

の陸海軍政務を秘密の中に置かんとするが如きは、國民の後援を得る所以の方法ではない。近時軍政の施設に就て屢々國民の反感を買ふ所以のものは畢究此の如く時代に後れたる思想が累を爲す爲めてある。予が斯く言へばとて一國の軍機を公開せよと主張するのではない。其機密に關する物を除いては及ぶだけ之を國民全體に知らしめ、其必要のある所を深く認めしめるのが軍政をして國民的たらしめる要事であると思ふが故てある。予は此點から推論して、軍人間に行はるゝ迷執を打破し、軍政は必軍人に委ぬべしとの迷執を排除し此範籬を打破することを希望するてある。

以上は予が今思ふがまゝを述べたのてあるが之を要するに現內閣は其命數の長短を度外に置き、大膽に國民と接近して時代の趨勢に伴ふの政綱を掲げ、假令一時に之を實行する能はずとするも着々其行ひ得べきものを擧げて之を國民の判斷に訴へ、閣員自ら國民の間に其主義主張を高唱して其贊否を決せしむるの活動を爲したならば、民心を爽快にして一新紀元を劃するを得るてあらうと思ふ。若し其大切の政綱容れられざれば勇退するの大決心を以て進退を決するの好例を後に貽すならば、極めて意義ある內閣と稱せられるてあらう。時代の趨勢と內閣の使命とは、要するに官民の懸隔を打破して一新紀元を開くにあることを痛切に感ずるのてある。(八月六日談話校閲濟)

原總裁を戴ける政友會と政界の前途

匿名氏

（一）

久しく黨首を缺きし政友會も遂に西園寺侯の推擧に由り從來事實上總裁たりし原敬氏を名實ともに總裁と仰ぐに至れり、西園寺侯は昨年の政變後總裁を辭し、

黨員の懇請により再考中と云ふに在りしも事實上黨務を見ず、當初は百般の黨務はその決を松田原兩氏の合議に仰ぎ、後には原氏の獨裁に歸し今日に至りしが、第二臨時議會の召集令發せられ、第二次地方官交迭あり、政府の挑戰的態度愈々露骨なると同時、政友會亦た切に結束の必要を感ずるもの丶如く、擧黨一致の熱誠を込めて西園寺侯の再起を懇請したるも遂に侯の聽く處とならず、却て侯は原氏を後繼者となすべきを勸誘せしを以て幹事の議亦た之に決定し終に六月十八日の政友會總會に於て全會一致を以て原氏を新總裁に仰ぐことゝなれり、抑も政友會の總裁は一黨の首領と云ふの一事に付ては他の政黨の總理たると何の擇ぶ處なきが故に、既に事實上全權を握れる原氏にして總裁の名稱を受く、必ずしも多く榮とするに足らざるに似たれども、初に伊藤公あり次に西園寺侯あり此重望ある公侯に代り一平民を以て絕對多數黨の總裁たらんとするものなれば、原敬氏の大名譽たる耳ならず其責任の重大素より論を待たず、蓋し原氏の總裁就任は西園寺侯の推選に由れりとは云へ、一人の異議者なく全黨擧げて歡迎したるは以て黨內に於ける氏の重望を察するに足れり。

原敬氏が政友會の三代將軍として果して成功すべきや否やに付ては世間一種の疑問となすものなきに非ず某新聞の如きは原氏の總裁たるを以て政友會衰滅の捷徑なりとさへ論じたり、斯くまでに極論せざるものも從來原氏が政黨の基礎を築くに熱中して稍もすれば黨本位に過ぎたりと說き又は國家の大計長策に意を用ゆるの乏しきを難じ、以て戒しむる所あり、是等は固と一理なき注文に非ざるも、大體に於て世間一般に政友會が好總裁を得たるを歡迎せんとするものに似たり、若し完全を求めば原氏の短所多々ならんも、原氏が政黨の首領として幾多の必要なる資質を備ふるは否むべからず、即ち機敏にして常識に富み、事に臨み裁斷流るゝが如く、膽氣雄略一世に卓然たるは何人も之を認む、殊に其一平民として席を下院に有し、且平生衆に接して倦まざるの風あるは大に大正の新氣運に適する

ものあるが如し、若し夫れ長計大策を以て天下を指導するが如き氏の學識智能を以てすれば決して望み難きに非ず、今や天下の人心は虚名を喜ばずして實力を尊び、且つ政界の趨勢は朝野兩黨の一大決戰に臨めり、又從來閥族と政黨の間動もすれば妥協苟合の姑息策を餘儀なくせしめたる一種の事情は既に全然一掃せられ公然議場の勝敗を待つて雌雄を決するの時に入れり、此時に當り原氏が絶對多數黨を率ゐて起つ、其の大隈伯及び黨與と對峙して毫も遜色なきは蓋し世人も必ず之を承認せん、吾人は政友會員擧げて新總裁を歡迎し陣容頗る整然たるの觀あるを當然なりとし、毫も怪しとせざるなり。

（二）

聞く處に由れば大隈伯は過日三重縣下の富豪にして早稻田出身の某に、議院解散の遠からざるを告げ、其候補者として出馬せんことを奬誘し且つ臨時總選擧の場合には早稻田出身者中より五十の議席を占むるに至るべしと語れりと云ふ、吾人は何時もながら伯の壯氣に感心するものなり、伯は當春の海軍收賄に關する混雜の際に飛出して政權を掌握したるもの、世間一種の同情を帶べるに相違なきも素より是れ多くは新聞紙の同情に屬す、衆議院に於ては團結頗る薄弱なる少數三派の支持を受けんとするの外頼む處なく、絶對過半數は依然として絶對反對の地に立てり、假令全然英國流の憲法論を以てせずとするも絶對多數の反對黨を前にして議院政治を行はんこと不可能なる耳ならず亦た實に不條理の極なり、大隈伯一派は曾て政友會の妥協政策を攻撃したるもの、假令政友會に於て讓歩的態度に出でんとするも伯として毫も妥協的態度に出づるの餘地あるべからず、況んや政友會は闘志横溢せる原敬氏を總裁とするに至れるをや、現内閣は須らく斷々乎として解散を決行し民意の在る處を明かにするを要す、幸に政府の黨與絶對多數を得るに於ては玆に始めて安んじて其經綸を實行するを得べきなり、猥りに人氣取り小策に沒頭して一時の小康を貪るが如きは吾人大隈伯一派の爲めに之を取らず。

曾て同志會內に於て解散論盛んなるが如きを觀て吾人は稍意を强ふする處ありしが、近來其急先鋒として知られし領袖大石氏も其態度稍軟弱となり、政友會の態度如何に由りては解散を辭せずと云ふ、是れ即ち解散すると否とは一に政友會の都合次第に因り決せんとするものにして、政友會にして解散を希望すれば解散すべく、若し解散を欲せざらんには解散せずと云ふに外ならずして、吾人は深く政府及び政府黨の自信なきが如きを遺憾とせざるを得ず。

憶ふに政府及び黨與が初に解散を唱へて後に頗る躊躇するに至れるには二個の理由あるもの丶如し、第一の理由は解散の威嚇が偶々反對黨の結束を促がし却て政府の黨與に一の恐慌を來したるに在るが如し、反對黨は始めより逆境を覺悟し現內閣に何の求むる處なく且つ解散は當然來るべきものと覺悟せるが故に大隈伯大石氏等の壯語を聞くも存外に感應なく、却て現內閣に求むる處多く、假令多少の運動費を與へらる丶とするも再選覺束なき議員多き政府黨一味に一大恐怖心を起さしめしは笑止千萬なり、第二の理由は廢稅問題の處分未定なることに在り、先般來全國實業家招待會の餘波として、全國商工業者は頻りに會合を催ほし廢稅の決議を爲せり、其鋒鋩當るべからざるものあり、同志會の非幹部派、中正會、國民黨擧げて在朝者の言質履行を迫りつ丶あり、當局名を調査に借りて言明を猶豫するも、廢稅の實行は到底若槻藏相の承諾すべからざる所ならん、但し廢稅を實行せざれば現政府が唯一の賴みとする輿論を滿足する能はざるも、若し之を實行すれば財政の基礎を薄弱にし軍備擴張の如きも到底實行す可らず、即ち現內閣は廢稅問題の爲めに惡魔と深き海との中間に立ち進退谷まれり、而かも政府が廢稅の實行を誓約するに非ざれば其黨與は到底解散を承諾すべからず、何となれば言質不履行の非難は總選擧に臨み彼等の到底堪へ得る處に非ざればなり。

今日に臨み政府の爲めに謀る、窮地を脫するの策唯だ廢稅の斷行に在り、營業稅、通行稅を廢し地租五分を減ずるの方針を立て以て在野當時の言質を償ひ、同

時に議會を解散すべき耳、公平に時局を觀察すれば何人と雖も恐らく此以外の策あるべからず、然れども萬一にも廢稅行ふ能はず議會解散する能はず、優柔不斷にして本議會に臨まんか、其豫算案は第一に其黨與の反對を受け、場合に依れば却て反對派の同情を惹くと云ふ如きの奇觀を呈し、天下の物笑の裡に大隈內閣の崩壞を見ることあらんも未だ知るべからず、政友會は新組織を得て、意氣大に張り、今や結束して政府の態度如何を待てり、大隈伯及び其黨與が平生の抱負を提げて天下に臨むべきは正に此時に在り、趦趄逡巡兩端を持して決する能はざるは自滅の捷路たるを記せんことを要す。

(三)

政友會が一代の鬪將たる原敬氏を總裁に仰ぎ二百有餘の結束を堅ふして政戰場に臨めるは恐く政府及び黨與の稍々意外とせし處なるべし、之に反し政友會が彼れが如く秩序整然たる總會を終りしと同時に開かれし同志會の總會に於ける紛擾は果して何たる爲體ぞ、同志會の總理加藤男は『現內閣は同志會のみの內閣に非ず』と言明して隱然廢稅の言質を反古にせんとするが如き態度を示して黨員を憤激せしめ、若槻藏相は『減稅と稱すればとて全廢を意味せざるに非ず』と苦しき文義の講釋をなして其眞意を隱蔽し以て黨員の疑惑を深からしめ、全體に同志會の臨時總會の結果は毫も黨の信用を加へず、寧ろ世間同情者の失望を招けりと云ふも酷評ならず、之を思へば現內閣の根據も實に心細き限りにして、外に中正會ありと雖も廢稅を要求する點に於ては寧ろ同志會非幹部派に過ぎたり、加ふるに半友半敵とも云ふべき即ち情に於て大隈首相の友たり理智に於ては現內閣の批評者たらんとするの國民黨の如き、敵とも味方とも分らぬものなり、八代海相の言へる如く之と相提攜して戰場に立たんとするは實に政府の一大危險ならずとせず。

蓋し國民黨の去就は今後の政界に多大の影響あるべきは言を待たず、恐らく其去就は容易に決定せず當分滿を持し發たざるべきも、其萬一にも現內閣に對し敵

對行動に出づるあらば由々敷大事ならざるを得じ、此に對しては一方政友會の新總裁が其就任演說中に『如何なる人と雖も又如何なる政黨政派と雖も吾々と志を同ふし共に國家の事を圖り得るものならば之と手を携ふることを辭せず』と殊更に言明せしは大に注目を要す、畢竟するは現內閣の基礎を定むるの必要上より見れば是非とも營業稅、通行稅の全廢、及び地租五厘減を決行せざるべからず、若しも此問題に關し躊躇決する處なきに於ては假令議會を解散するも政友會に對し到底勝算あるべからず、吾人は政友會の氣勢頓に擧れるを認め、現內閣の前途頗る憂ふべきものあるを思はざるを得ず。(六月二十日稿)

影薄き國民

茅原華山

(一)生活意志の薄弱

私は屢々日本人には生活が無いと言つた、或人は言ふかも知れぬ、生活が無いとは何だ、日本人だつて飯を食つて、着物を着て、家に住つて居るではないか、勞働もすれば商賣も營んで居るではないかと。如何にも其れに違ひはない、然し私の言ふ生活とは、單に飲んで食つて五十年間娑婆に其の影を止めて居るの意味てはない、生に對する徹底的自覺と熱切なる愛着と激烈なる鬪爭とより成立つ生活を意味するのである、生活即人生、人生即生活の徹底見に立ちて、眞劍に命懸けに生活する生活を意味するのである、斯の如き意味に於ての生活が日本人にはないといふのである。

一部の人はイプセンが何うのトルストイが何うのド

ストエフスキーが何うのニイチエが何うのワイルドが何うのダヌンチオが何うのホイットマンが何うのマリネッチが何うのといふ、そして此等の個有名詞を、平素御題目のやうにして唱へて居る人達は、自分達も彼等に比すべき生活を實際やつてゞも居るやうに考へて居るらしい、然しそれはダイヤモンドの觀念に刺戟されて、硝子玉をダイヤモンドと錯覺する類ひの滑稽てある、彼等の生活には靈の苦悶がある、肉の懊惱がある、高上の神性がある、猛烈なる野獸性がある、彼等の足は確りと地に着き、彼等の頭は高く天を覗いて居る、彼等の足踏みは重々しく、一歩々々地上に明かな跟跡を刻み付けて居る、我等の中果して誰れが彼等のやうな深刻な、力强い、重みのある生活を生活して居るか。

日本人は血の氣の無い、乾燥びた、去精された、人間味の乏しい、然かも小賢しい、陰險な、怯懦な、貧乏君子の御揃ひだ、皆御悟りを開いて居る、明らめがついて居る、徹底せる打算もない、激烈な鬪爭もない、彼れ我を斃さゞれば、我彼れを斃さん底の猛烈な權力意志もない、大愚人も大狂人も大聖人も大盜賊もない、何う見ても影が薄い、ふら／＼して居る、生活意志が薄弱だ。斯く斷定するに私は躊躇しない者である。

(二)自我觀念の缺乏

日本人には自我の觀念がない、此れは日本には我利々々亡者が居ないといふ意味ではない、己惚れ者が居ないといふ意味てはない、ニイチエの思想やイブセンの藝術が流行してないといふ意味でもない、自己の尊嚴と價値とを知らないといふ意味だ、自主自立の觀念がないといふ意味だ、自治自律の考が乏しいといふ意味だ。

日本人は應化的、他律的てあつて、自分で自分の始末が付かない、何時でも他人の鼻息を覗ひ、顏色を見て行動する、自分を出來得る丈け卑下し、自分の考は屑く捨てゝ他の意志に從ひ、他の意見を容れる事が、善事であると心得て居る、いや大抵は自分の意志とか

自分の意見とかいふものは無いのだ、自分は何うして可いのか自ら此れを決する丈けの力を缺いて居るのだ凡て此れ依他、他律の奴隷的生活を長い間續けて來た結果なのだ。

日本人には自己が無いから、從つて自己の意見がない、自己の意見に依つて行動する事がない、此れを政黨に見るも、政友會も帝國主義、國民黨も帝國主義、同志會も帝國主義、中正會も帝國主義といふ有樣だ、試みに、我國務大臣に施政の方針を問ふて見る、彼等の答へ得る所は、勅語の御旨意に基き、誠意誠心事に當らんの一語のみてある、國務大臣にして猶然り、其の他は言ふを待たない、引越しをやるにも、先づ方角の善し惡しを見て貰はなければならない、一寸旅行をするにも日が何うの恁うのと詮義立てをする、高等教育を受けた立派な紳士淑女が、怪しげなる賣卜者の膝下に走つて、將來運命の吉凶禍福を占つて貰ふ、何といふ自信力の無いケチな考へだ、此んな國民には、何時迄立つても自治政などの行はれやう筈はあるまい。

世に自我の確立してない程、憐れな、下らないものはない、カントは人格の價値は、その自律的(オートマチック)な所にあると言つた、自由行動者(フリーエージェント)たる所にあると言つた、ニイチエは、最も正直に其の存在を語るは、事物の尺度たりまた價値たる、此の創造し意欲し且つ評價するところの自我てあると言つた、自主自由の存在たる自我を猿忘れて、たゞ〳〵麵麭と鞭とによりて芝居を演ずるの如くに振舞ふ者に、抑も何の價値があるか、自我なき日本國民の行動は、猿芝居と多く選ぶところがないのだ。

(三)自己表現なき生活

自己なき日本國民には、亦自己表現がない、自己を表現し、自己を主張することを以て罪惡だと心得て居る、「物言へは唇寒し秋の風」とか、「出る杙は打たる」とかいふ一類のモットーが、大層有難い事として日本人の骨の髓迄滲み込んで居る、講堂に於ける日本の學生を見ても、如何に深く自己隱蔽の惡風に中毒して居る

かゝ分る、彼等は講師の問ひに對して容易に手を擧げない、答ふべきことを知つて居ても妙に遠慮して手を擧げない、或は萬一間違つて他の笑ひを買つてはといふやうな卑劣な考から成可く口を噤んで居る、講堂や敎室は專門の研究所ではないか、研究者が研究所にあつて、遠慮して默り込んで居るなどは、西洋などに到底見られない現象だ、自分の合點行かないノートの文句を鵜呑みにして、試驗用紙の上に吐き出すなどは、よく我國民性の自己隱蔽の特色を發揮して居るではないか。

敎室にある學生でさへさうだ、普通人の自己隱蔽は當然の話である、交際場裡に於ても日本人位ゐ固くなつて、濟し込んで、自己を護つて居る國民はあるまい、如何なる場合に於ても、日本人位ゐ打解け得ない國民はない、人と話しをするにも、成るべく當らず觸らざるを以て唯一のプリンシプルとして居る、意見の交換もなければ、議論を戰はすこともない、日本人の交際に酒と藝妓の必要なる所以はこゝにある、此等のものを借りて、自己を護り合つて居る相互のテレ隱しをやるのだ、私は上海に於ける日本人が、支那人の間にも諸外人の間にも、一向持てない事に就いて、日本人の交際嫌ひが其の一因を成して居るといふ事を曾つて聞いた、然かし此れは啻り上海のみに於ける事實ではない、世界至る所に於て、日本人は此れが爲めに失敗を招いて居るのである、然らばなぜ日本人は交際嫌ひか、酒や女に醉拂つて性無しにならなければ、自己表現が出來ないからである、當り前で居ては何にも話が出來ないからである、テレ隱しに窮するからである、一時間でも二時間でも默り込んで居る外ないからである。

日本の子供は、所謂內辨慶外味噌で、人の前に出ると直ぐ羞かむ、親の脊に噛り付いて、親の肩越しに臆病な然かも陰險な眼で、他人の顏色を盜み見る、西洋の子供は全く此れとは反對だ、初めての人にても直ぐ飛び付いて來る、そして遠慮會釋なく、如何にも無邪氣に卒直に話しかける、持つてるものを直ぐ出して來て

見せる、少しも羞んだり惡るびれたりしない、子供が育つて大人に成つても、矢張り此れ丈けの差が東西にはあるのだ。

日本の政治家はよく不言實行といふ事を口にする、いや獨り政治家許りではなく、一般の人が大變尊い事でゝもあるやうに此の事を口にする、不言實行も物によつては善い事もあるかも知れぬ、然かし天下の政治迄でも不言實行でやられて堪るものか、不言實行といふのは孰れ待合の四疊半を閉め切つて、二三人で暗合默決した事を、素知らぬ顔で國民に强行する事であらう、然し、此れで國家の政治が爲せるなら、憲法も要らんし、代議士も要らんし、議事堂も要らんことだ、政治上に於て不言實行の非なるは言ふ迄もないが、凡そ何事でも不言實行といふことは、極めて卑怯な、無責任な事である、實行が出來なくとも、實行が出來損つても、毫も責任を負ふまいとする不誠實な責任廻避の態度である、我々は苟も實行すべく決心した事は、此れを天下に公言して憚らない丈けの勇氣がなければならない、公言實行でなければならない、公言して然も實行出來なかつた時は、相當の辯明をなし、或は屑く自己の至らざる事を天下に謝し、一定の責任を帶びる丈けの勇氣と誠實がなければならない。

自己表現を卑しとし、自己隱蔽を事とする日本國民は、當然の結果として、卑屈、陰險、邪推、嫉妬、怨恨、猜疑等の實に卑しむべき惡德を多分に具へて居る、日本人程直言するを嫌ひ、直言さるゝを厭ふ國民はない、日本人程他人の言を正面に解し、正直に信ずる事の出來ない國民はない、「話裏聞け」「人を見たら泥棒と思へ」此れが萬人通有の合言葉だ、何といふ情けない淺間敷い事だらう、我々の間では、「君は偉い」といふ言葉は君は「詰らん」といふ意味だ、「彼の人は正直だ」といふ言葉は、「彼の人は馬鹿だ」といふ意味だ、「己れは人が惡い」といふ言葉は、「己れは利巧者だ、遣り手だ」といふ意味だ、此の忙しい時勢に此んな反語の連續を以て、互ひの意志を發表しなければならんとは、隨分御苦勞千萬な話ではないか、皆此れ陰險に

して邪推深い我が國民性の表徵である、卑屈なる自己隱蔽主義の流毒である。

(四) 反射的生活

哲人プロータゴラスは「人間は萬物の尺度なり」と言つた、此の言葉は彼れの哲學より考へて見ると、「自己は萬物の尺度なり」といふ意味であつた、此の思想か最近に於けるプラグマチズムやヒユーマニズムやパーソナル、アイデアリズムや、凡そ近代に於ける一切の自我本位思想の根原である、自己が萬事の尺度であるといふ事は、自己が萬物評價の標準であり、一切價値の創造者であるといふ事だ、從つて自己の明確なるものには、批評が無ければならない、創造が無ければならない。

然るに日本人には批評も無ければ創造もない、唯ある所は、反射運動と模倣とのみ。

反射運動とは一定の刺激に對して、無批評的に無反省的に、盲目反應を呈する事だ、與へられたる暗示に感應して、何等の自覺無き機械的反應を呈する事だ、一朝事あれば直ちに擧國一致の行動に出づるは、日本人の悲しむべき特徵である、論じ盡し考へ拔いた上での擧國一致ならよい、併し我國民は始めより考へもせず論じもしないのだ、何事に就いても、始めから反對論が無いのだ、偶々反對の論をなすものあれば、忽ち亂臣、逆賊の汚名を被らせて、社會の外に葬り去つて了ふ、然らば彼等は深き根據ありて此擧に出づるかといふに、固より何の考もない、或種の暗示に感應して、パッと燃え立つ一時の感情に、目盲ひ、耳聾して、思慮ある者の言葉が通らない丈けの事だ、彼等が一度び熱狂するや、批評や反對論は惡魔の言葉よりも猶忌はしきものに感ぜられるのだ、彼等には反對論を靜かに聞き取つて、正當の言論に依つて此れに對する丈けの餘裕さへ無いのだ。

内村鑑三氏は日露開戰當時非戰論を唱へた爲めに、非常な迫害に會つて、殆んど社會から葬られてあつた、谷本富氏は乃木將軍の自殉を、餘り冷靜な態度で批評

した爲めに、遂に職を失つた、山川健次郎氏は鳳輦脱線事件に、責任を帶びて自殺した淸水某の行爲を批評して、世間の怒りを買つた、此の種の事は枚擧に暇無い程、我等の耳に響いて居る、然かし此れが果して言論の自由を重んずる文明國民の態度であるか、誤まれる言論は正當の言論の間に立ちて、自づから滅びる、未だ反對論者の言を良くも聞かぬ先きに、私情を挿んで、對者を亂臣呼はりをし、逆賊呼はりをするが如きは、愼むべき蠻行である。此くては多少の打算ある者、遂に僞善者となり、曲學阿世の徒と變ずるは、寧ろ當然の結果ではないか。

日本人には眞の意味に於ける批評がない、新渡戸稻造氏は一時は非常に偉い人にされた、青年の理想の對象であつたかのやうに言ひ囃された、然るに數年ならずして忽ち曲學阿世の僞學者とさへ罵らるゝに至つた今日餘り氏の名を言ふ者が無くなつたやうに思はれる私は氏が怎んな人あるかを知らない、然かし氏が若し以前の世評のやうに偉い人であつたなら、さう頓かに僞學者に成つて了ふ筈はあるまい、若し又氏が果して曲學阿世の僞學者であるならば、以前からさう偉い人では無かつたのだらう、恐らくは氏と雖も曾つて噂された程偉い人でも無からうし、今日考へらるゝ程下らん僞學者でも無からう、犬養氏に就いても同樣の感がある、何も氏が憲政の神樣と仰がるゝ程偉い人でも無からうし、さればと言つて今日一部の人が言ふ程下らない愚物でもあるまい、伊藤公でも、星亨でも、小村侯でも、桂公でも生きてるうちは隨分非難の的と成つたが、死んだら俄に英雄に成つたやうだ、然し此れは甚だ不合理な話で、要するに日本人の批評が、實に美い加減な、當てにならないものである事を證明して居るものではないか。

思想界に就いて見るも矢張りさうだ、自然主義の呼聲は、一時は日本の津々浦々に迄及んだ程の觀があつた、其の壽命が僅かに二三年、其の重なる傳道者さへ、今では全く御宗旨換へをやつて、自然主義の事などは丸で忘れ切つて居るやうな趣きがあるではないか、其

後印象主義だの享樂主義だの唯美主義だの象徴主義だの新浪漫主義だのといふ呼聲が次ぎ次ぎに響いて來て、何の事やらよくも解らぬ中に、慌たゞしくも我等の耳邊を通り過ぎた、ゼームス、オイツケン、ベルグソン、ニイチエなどいふ聲も大分近く迄聞えて來たな思つとて居る中に、もう何づれへか遠ざかり行くやうな模樣である、然らば日本人は、其等の大思想を、此くも速かに消化して、更に新らしい食物を求める程爾かく健全なる胃の腑を具へて居るのであらうか、其れとも餘りに胃の腑が薄弱なので、切角の珍味も消化出來ずに吐き出して了ふので、何んぞ變つた食物をと、手當り次第に齒を立てゝ廻つて居るのであらうか、言ふ迄もなく後者である。

此んな有樣であるから、勿論凡ての事に獨創といふことが無い、悉く摸倣、悉く借用である、藝術も借用品、哲學も借用品、科學も借川品、婦人問題も借用品、勞働問題も借用品、社會主義も借用品、サンヂカリズムも借用品と言ふ有樣だ、何處に日本人の創造したものがあるか、武士道？ それが何んだ、浮世畫？ それが何んだ、江戸趣味？ それが何んだ、Kimono（着物）？ それが何んだ、凡て現代生活と調和せざる骨董品ではないか。

日本人は眞似が上手だと誇つて居る、然し如何に巧みに眞似することが出來ても、眞似する者と創造する者との間には、價値に於て千萬里の隔りがある、眞似しか出來ない國民は、他發暗示に感應して反射運動をやる器械人の集合に過ぎぬ。

(五) 奴隷的精神

義務の道徳、他律の道徳、服從の道徳、獻身犧牲の道徳、自己否定の道徳、即ち儒教、特に宋代の儒教、取分け程朱の儒教に依つて、徳川三百年の久しきに亘り、拘束せられ抑壓せられて來た日本人は、遂に全く去精されて終つた、自己を抑へて他に從ふといふことを以て、人生の最大善事と心得るに至つた、玆に最も代表的なる奴隷的道徳と奴隷的精神とが出來上つた、

奴隷的精神の權化、奴隷的道德の模範は即ち武士道である、武士道々々々と大層らしく言ふが、所謂武士道なるものは主として、主に對する絕對服從心と、他人本位の名譽心と、女性的な涙とから出來上つて居るのである。

主に對する絕對服從心とは何か、主人から祿を頂戴して居る代りに、主人の爲めには何時でも命を捧げるといふ事だ、通俗に言へば、飯を與へて自分を飼つて置いて吳れるから、自分の命は飼主のものだといふのである、西洋の話によくある忠犬などは、武士道の一大精神を最もよく體したものである、武士が飼主以外のものには、如何に吠えても喰い付いても構はぬ點また忠犬道德と同斷である、武士道の所謂忠は忠犬の忠と同じく、直接の飼主に對する忠である、一卒は一士の馬前に死し、一士は一將の馬前に死し、一將は一侯の馬前に死し、一侯は一將軍の馬前に死ぬのが武士道の忠である、此れが奴隷根性でなくして何んだ。

次ぎに他人本位の名譽心とは何か、飼主、同輩、併びに一切世間の惡評を恥づる女性的精神だ、恥ぢを知ると云ふ事は武士道の骨髓を成して居る　君に對して面目無い、世間に對して面向けが出來ぬといふ、要するに人の思はくを中心にした思想である、他人の見る目を標準にして自己の一切を決しやうとする受動的態度だ、士は己れを知る者の爲めに死すといふが、即ち自分を偉いと褒めて吳れる者の爲めには自分を捨てゝ顧みないのだ、此れが奴隷根性で無くして何んだ。

然らば女性的な涙とは何か、武士は情けといふ奴だ、凡そ日本の武士位ゐ女性的な、感傷的な、泣蟲なものはなかつた、月を見ても、花を見ても、雁がねにも、鐘の音にも、他愛も無く涙を流したものは武士であつた、彼等は弱きを助け、强きを挫くを以て本領として居た、弱者に對する涙、それが彼等に取りて大變美しい事であつたのだ、併し弱者と見れば涙を垂れて愛憐の心を起すは、此れ女性的意志薄弱の結果で、矢張り弱者の特徵だ、此の感傷的な泣蟲の態度、是れが奴隷根性でなくして何んだ。

斯の如き奴隷道德の精神は至る所に瀰漫して、凡そ長者先輩の言ふ所には、全々無批評的に屈從するを以て唯一の美德と感ずるに至つた、世間の無理會にして無責任なる毀譽褒貶を、絶對の道德的批判として、盲目的に阿附迎合するを以て、善良にして眞面目なる者の取るべき至上の態度と信ずるに至つた、斯くて日本人は上長の言に盲從し、他人の態度に應化するを知つて、自己の權利を主張し、自己によりて他を類化せんとする。人生の男々しき戰士的態度を失ふに至つた。

凡そ日本人程自己の權利を放棄する事を屁とも思はぬ國民はない、故なくして權利を放棄することの、眞に罪惡たることを自覺して居ない、我々は一定の權利を使用する爲めには、一定の責任を帶ぶる覺悟が無ければならない、一定の責任を果たす爲めには、一定の權利を所有しなければならぬ、元來權利と責任とは離れたものでない、故に權利を主張せざる國民は、同時に責任を感ぜざる國民である、選擧の場合に棄權者の多い事は、又直ちに我國民の無責任を表白するものである、此んな國民であるから「公園の草木を折り取るべからず」とか「石段に上りて小便せらるべし」などといふ小供にても對するやうな世話を燒かれて、然かもそれを侮辱して居るとさへ感ずる事がないのだ。

理由なき一錢の金の爲めに飽くまで爭ふものは米國人だ、不當なる命令の爲めには職を賭して戰ふを辭せざるものは英國人だ、曾て年若き米國の一銀行家、日曜の日に其の支配人より或る仕事を命ぜらる、彼曰く、日曜に仕事を休む事は私の主義である、支配人即ち憤然として曰く、君我が命を阻むか、さらば免職あるのみ、彼れ容を正して曰く、主義は洵に免職よりも重し、斯くて彼れは飄然として去つた、如何に勇ましき自己主張の態度よ、而して與へらるれば乞食の如くにして受け、奪はるゝも犬の如くにして默々たるものは、實に我が國民ではないが、役場に税金を納めに行き、土下座して御役人樣と叩頭するものあるは、恐らく我國を除きては、孰れの國にも類例を見出し得ない事であらう。

日本人は與へられなければ死ぬ迄も我慢する程殊勝にして忍耐强き國民である、彼れは如何に要求するも與へよとさへ言はぬ、況して進んで强奪する事をや、あゝ何等の奴隷的態度。

(六) 明らめ主義

奴隷的精神を助長した他の一つは、佛敎に基く明らめ主義であつた、佛敎は意志肯定の敎ではなく、意志斷滅の敎である、欲求實現の敎ではなく、欲求殺絕の敎である、消極の敎である、否定の敎である、空の敎である、佛敎の目的は悟りにある、そして悟りとは自己を空じ去ることである、凡ての願望を明らめ去つて了ふことである、此の明らめ主義が日本人の頭には深く浸み込んで居るのだ。

日本人には明らめ主義が深く浸み込んで居るから、大膽に自己の要求を打ち出して、ブランドの如く直前邁往するものがない、英國の婦人參政權運動者のやうに、二十數年の久しきに亙りて、要求貫徹の爲めに、頑として所有る迫害に抗し戰ふが如き不退轉の勇者がない、愛蘭土自治問題の如く、數十年の久しきに亙る激烈なる主義の抗爭もない。

日本人は足るを知る國民である、知足の人は常に富むてふ佛陀の遺訓が、徹底的に行き渡つて居る、汝米を食ふは贅澤なりと言はれゝば麥を食ひ、汝麥を食ふは贅澤なりと言はれゝば芋飯、大根飯を食ふ。斯くても納税を怠らざるものは我國民である、芋飯、大根飯を食ふも猶やりきれざるに及びては、愛する妻を賣り、愛する娘を賣りて迄納税の義務を果たすものは我國民である、自己の血を絞り、肉を殺ぎて迄も義理を缺かざるものは我國民である、芋でも大根でも草の根でも、兎に角喉を通し得れば、有難いことだと天道樣に感謝するを忘れぬ程謙虛なるものは我國民である。

足るを知る我國民は、食つてさへ行ければそれで上出來だと心得て居る、望み禽獸の範圍を出てないのである、多くを望んでも何うせ叶はぬ相談だからと始めから明らめを付けて居る、食ふ事以上を考へるのは贅

澤だと考へて居る、人間は食ふ以上に相當の娛樂と相當のコンフォートを要求する當然の權利あることなどは、夢にも思つて居ない、日本に勞働問題の起らぬなどは、固より怪しむを要しない。

センチメンタルな、感傷的な氣分は我國民の特色てある、一口に言へば泣事癖に富んだ國民である、愚痴をいふ國民である、畢竟此れは意志薄弱の結果に過ぎぬ、事に望んて僅かに躓けば直ぐに嘆聲を洩す、天を仰いて止んぬる哉、我事休すと咏嘆する、天何ぞ無情なると八當りをする、終に仕方がないと明らめをつける、一層の勇氣を奮ひ起す元氣がない、更に新なる手段方法を講ずる丈けの餘裕がない、彈力性がない、直ぐヘコタレて頓か道心に成つて了ふ。

此の故に日本人は凡ての點に不徹底だ、打算にも不徹底、政治にも不徹底、思想にも不徹底、藝術にも不徹底、否、不徹底、不得要領、鼠色を以て我國民は寧ろ尊いことだと思つて居る、何とも見分けの付かん所が偉いのだと思つて居る、不鮮明、不得要領は偉人の特徴てゞもあるかのやうに考へて居る、己れは一寸分らない人間だらうと言つて得意がつて居る、實に無意味な話てはないか、畢竟此れ自分の意志薄弱と無主義とを表明して居るものてはないか。

(七) 結論

凡ての點から見て日本人には自我がない、主張がない、苦悶がない、苦鬪がない、生の影が稀薄である、然るに日露戰勝の虛榮に勝ち誇つて、自ら一等國民に成り濟して居るなどは、思はざるの甚だしきものてある、何處に一等國民と誇稱すべき資格があるか、劍の戰ひには勝つても、思想上に經濟的に、國民が日に日に瘦せ衰へつゝあらば、事實に於て生の戰ひの敗北者てはないか、我々はもつと謙遜な心を以て、十分着實に考へて見なければならぬ、眞に心のどん底から覺醒して來なければならぬ。

然し、實の所私は國民の現狀に殆んど絕望して居るものである、寧ろ國民がもつと／＼窮地に沒落して、

痛慘なる人間苦を味ふことを祈るものである、然らざれば何づれよりか國民の頭上に、一大鐵鎚の落下するを寧ろ樂しみ待つものである、そして斯かる日の一日も早く到來せんことを切望して止まない、何となれば、其時こそ我が國民は眞乎の自覺を喚び醒して、そこから眞に新しき命が湧出して來るだらうと信ずるからである。

（中付一の一）

(中付一の二)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

主治効能

神經衰弱諸症―腦神經衰弱―不眠症―消化器衰弱―胃擴張―胃下垂―常習便秘―消化不良―營養不良―生殖器衰弱及無氣力―遺精―夢精―早漏―遺尿―慢性腎臓炎―糖尿病―一般内臓の衰弱―諸神經痛―坐骨神經痛―神經性頭痛―顔面神經痛―腕部神經痛―リユーマチス―腰痛―脚氣―婦人諸病―ヒステリー、貧血、月經不順、子宮病、憂鬱、脊髓、中氣、産後及病後一般の衰弱……（説明書無代進呈）

電氣帶發明者

サンデン博士之像





登録商標

奇効可驚

主治効能

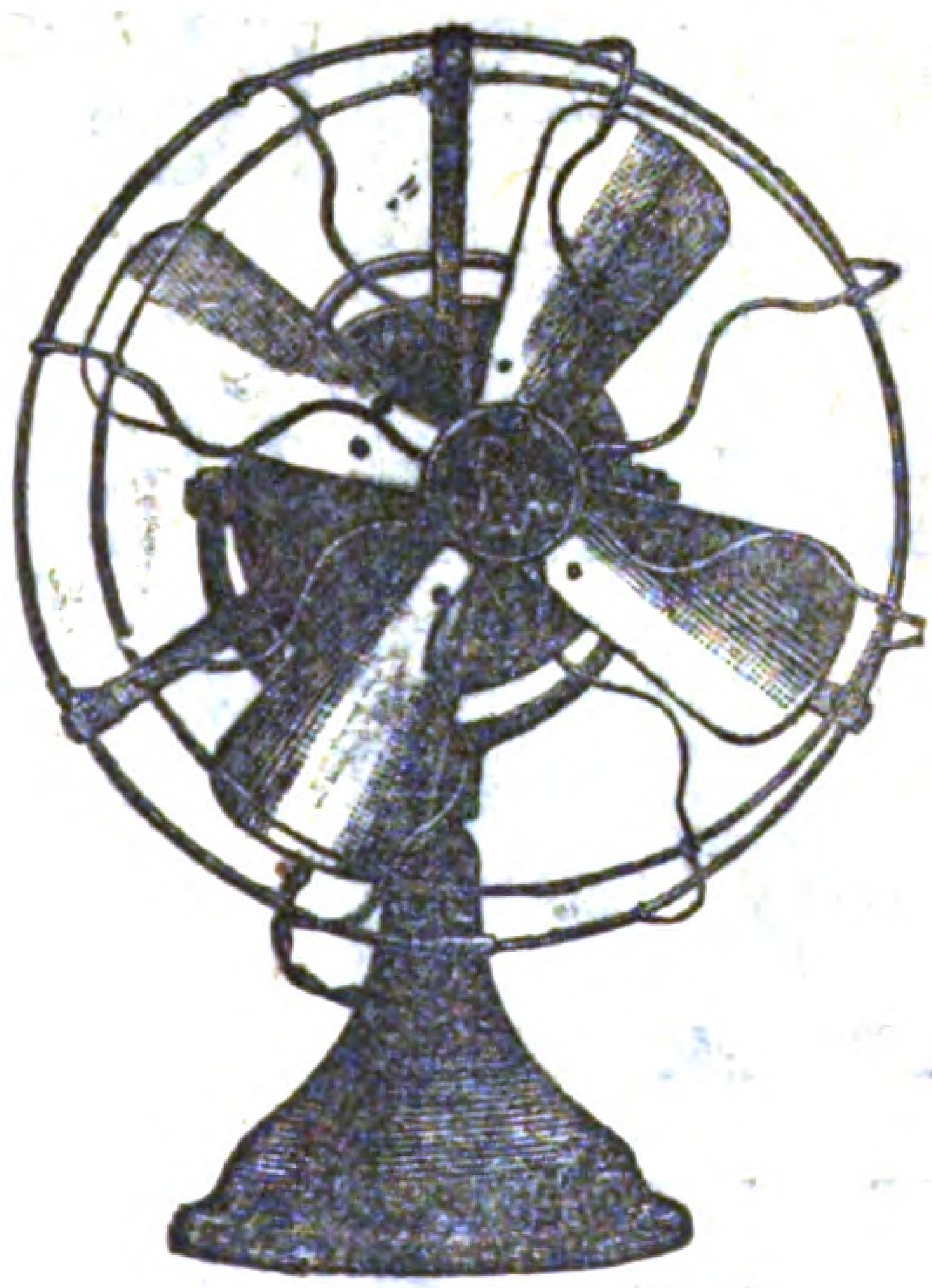
眼、耳、鼻、咽喉、船暈頭痛ニ奇効を奏す（説明書無代進呈）

アクチナ

サンデン電氣帶

B.K.印電氣扇

新案第二九一九三號
特許第三一二五七號



▲B.K.電氣扇は一臺ニテ二臺ノ用ヲ便ズル一大特色アリ

●臺數ヲ限リ月賦販賣貸付仕候

但シ貸付ハ六ケ月中ニ限ル

（目録表進呈）

C.E.印其他舶來品在荷豊富

營業品目

●電話●電鈴●表示機●避雷針●醫療用感電機●電池類●電球類各種●電線類●電燈花笠各種其他電氣に關する一切の諸器具卸小賣並に設計

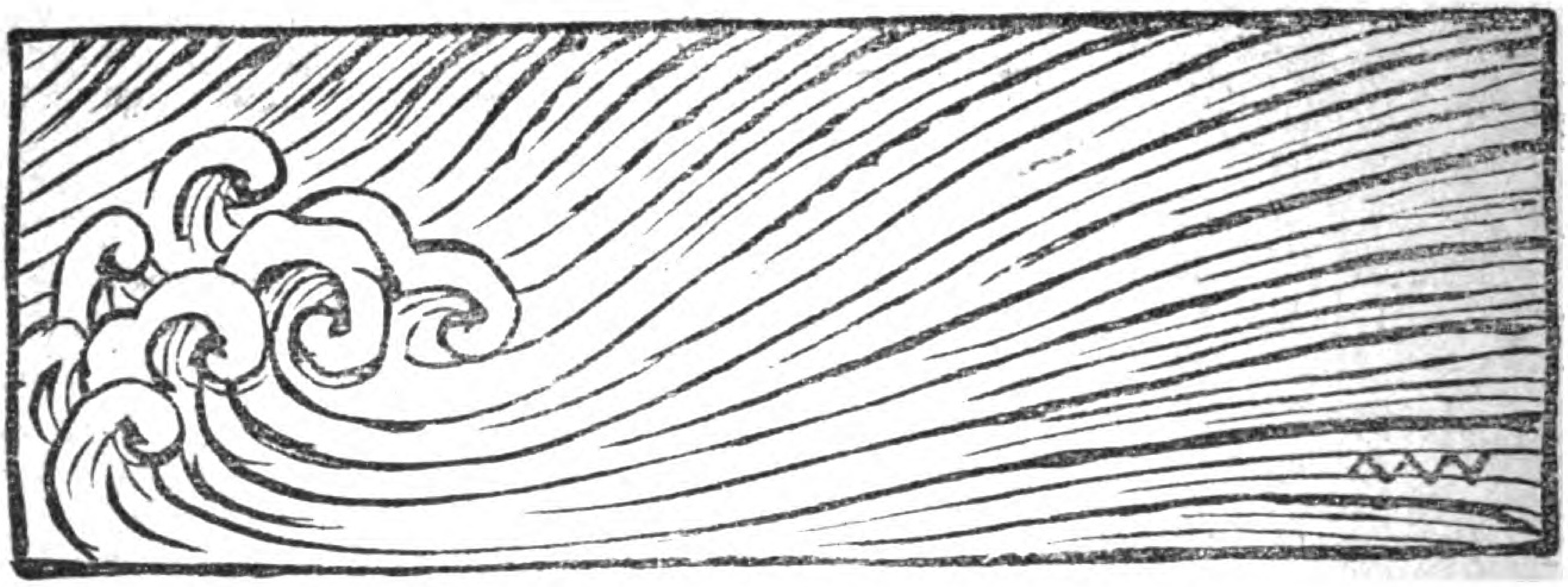
●本店（東京市京橋區尾張町二丁目（銀座通東側）電話新橋二四二二番……振替東京一八四七三番）

●支店（大阪市東區心齋橋筋博労町南入西側 電話二二〇五番……振替口座大阪七三四四番 横濱市吉田町一ノ二九……電話一九三一番）

サンデン電氣商會

（中付一の四）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



同棲十三年間

―亡き妻の骨を抱いて(終篇)―

天民 松崎市郎

「亡き妻の骨を抱いて」一篇が、中央公論十萬の讀者に愛讀されて、善かれ惡しかれ、種々の反響を見ることを得たるは、予の衷心より欣幸とする處なり。思へば、苦しかりし「五丁目五番地」の夕より、悲しき「死を待つのみ」の晨を過ぎて、淋しき「三人の忘遺兒」に至るまでは、主として事件の經過を描きしが、其の外篇に及びては、予が一面の「孤獨の悲哀を」記して、少しく内省する處あり。今や「同棲十三年間」の思ひ出に、亡妻が世に在りし日の面影を寫して、こゝに追恨哀思の筆を擱かんとす。名も無き私人の私事私情を記述したる、愚なる一勞作物なるにも拘らず、多大の同情を有つて愛讀されたるは、予の深く感謝するところ。附記して、中央公論社同人に敬意を表し、併せて讀者各位の健康を祈る。

一、亡き妻の面影よ

角田浩々歌客足下、同じ東京に住て居ながら、常に御無沙汰のみ致して、何とも申譯がありません。妻の死後、一度ゆる〳〵參上して、久し振に御老母様に御目にかゝり、奥様にも種々御禮を申したいのですが、遊ぶ時間はあ

つても推參するのは何となく大儀なので、心ならずも今日まで失禮に打過ぎて居ました。これ今日に始つた事に非ず、例の小生の癖と、惡しからず御許容の程を願ひます。

皇太后陛下の御病中、沼津の臨川閣で一度と、德富洪水翁の葬儀の際に一度と、今年になつて僅に二度より御目にかゝりませんが、相變らず御元氣で、何よりの事に存じます。小生は昨年十一月、妻に死別れて以來、命日を迎へること既に七度に及びましたが、今日に至るも未だ本葬を營まず、たゞ三人の子供と一所に何と云つて宜いか判らない樣な、變調な月日を送つて居ます。退院後の哲郞、達郞は勿論、幼い俊郞も極めて壯健で、少しも母無し子の樣な悲慘な樣子がなく、毎日飛行機を飛ばしたり、蓄音機を聽いたり、時には活動寫眞を見に行つたりなどして、元氣に愉快に暮して居ますから、何うか御安心下さいませ。

小生も此の三、四、五の三ヶ月間は、「女房に死別れた男が、何うせ一度は通らねばならぬ道だ」と、自分勝手に極めた理屈の蔭に隱れて、隨分と酒の香にも溺れましたし、女の匂にも近づいて居ましたが、此の月からは漸と平生の心持に復つて、しみ〲と子供等に對する事が出來る樣になりました。妻に死別れたと云ふ一事が、若し小生の一生涯に、取返しの付かぬ不幸だとすれば、其の不幸を感ずる種々の悲しい心持は、酒や女に依つて慰められるものでは有りません。小生はたゞ其の不幸を不幸として甘受し、不幸そのものの眞の味を、極めて敬虔な態度で味はねばならぬ月日の下に居るのです。そんな道理を忘れる樣な馬鹿でも無いのですが、社の歸途に友人と一所に飯でも食つて、少し醉心地になりますと、何時も感傷的の氣分になつて堪らなく淋しさを覺えたものですから、恁な事だとは知つて居ながら、隨分いろ〲と詰らぬ眞似をして來ました。弱い恁な小生の資性、自分ながら愛想が盡きて了ひます。

妻が壯健で居た時、折々犬も食はぬ夫婦喧嘩をした夜半などは、アヽ女房など娶るものでは無いと、ツク

〳〵さう思ふことがありました。殊に生計の不如意勝な下級新聞記者には、女房などは絶對に不必要である、一家の生活に追はれる樣では、到底、新聞記者としての其の日〳〵の活動を、十二分に遣つて行く事は出來ない、などゝ思ふたことも度々でありました。時には人知れず、「女房が死んだら、俺は何うなる」と云ふ樣な事を考へて、妻が死んだ後の身境を、放たれた自由の天地かの樣に夢想した事もありましたが、さて實際に逢つて見ると、なか〳〵左樣ではありません。妻を亡つて以來こゝに七ヶ月、變な事を申す樣ですが、その良人たる小生をして、後顧の憂なからしめた內助の功と云ふものを、初めてしみ〳〵と是認することが出來ました。世間多くの强がりや、知つたか振りをする連中は、そんな事は妻が死なくても、チャンと判つて居る事柄ぢやないかと云ふかも知れませんが、小生は唯一人の愛する妻の死に依つて、小生の全體を知ることが出來ましたのみならず、妻のエラかつた事が判りました。くどい樣ですけれど、妻は何うして死んだのでせうか、世に在りし日の事どもを種々に思ひ起すにつけても、小生は妻を三十三歳の厄年で死なした事が殘念で殘念で堪りません。

　早く葬儀を濟まして、後來の事も種々と考へたいのですが、今日まで延引しましたから、霜寒い十一月、その一周忌に本葬を營むことに極めました。葬儀を執行するまでは、小生も喪に籠り居の心を持して、亡き人の面影を色濃く思ひ浮かべる事が出來ませう。僅に自ら慰めんがために、「亡き妻の骨を抱いて」の一篇を、中央公論に揭げましたのも、弱い小生にとつては、眞に止むを得ない事なのです。昔、宮崎三昧道人は、「我が亡き妻」の一短篇を、東京朝日新聞紙上に揭げた爲に、皮肉屋の大將齋藤綠雨より、「あれは一種の求婚廣告だ」と罵倒されたさうですが、眞んとの妻の味を知らなんだ正直正太夫の言葉としては、皮肉では無かつたのかも知れません。小生も長々と亡妻の思ひ出を書きました爲めに、好意と同情を得た反面には、冷嘲と熱罵とを購ふたかも知れませんが、そんな事は此の場合

に、何の問題にもなりますまい。

今度は失禮ですが、足下に宛て、此の終篇を公にして亡き妻の面影を偲びたいと思ひます。

二、結婚當時の追憶

浩々歌客足下、今夜ふと古い繪端書帳を出して、過ぎ去つた歳月を探ねて居ましたら、珍しい二枚の繪端書が出ました。二枚とも春陽堂の「新小説」に附いて居た三色版で、二枚とも差出人は同一人ですが、一枚には「尾上新兵衞」とあり、一枚には「クルシヤ」と片假名て記してあります。

海軍の士官が洋裝美人の手を握つて、接吻して居る方には、ペタ／＼と大きな字で、

祝す、賀す、慶す、佳過、伉儷、新歡、琴瑟、鴛鴦、嘉耦、偕老、靜好、和鳴、實に何れの字かうれしからざる‥‥チエストー!!!

六月吉日　大阪毎日社　尾上新兵衞

と記してあり、菫か何かの花の方には、小生らしい半身の男が、鼻くそをほじくつて居る繪を畫いて、其の傍に大きく、

おぼん片手に横顔かくし
ほんに恥かし差向ひ‥‥カネ

と書いてあります。二枚とも「攝津大阪三十四年六月一日り便」のスタンプを、今でも鮮明に讀むことが出來ます。

あゝ明治三十四年六月一日の夕、此の端書の宛名人たる「大阪南區新戎橋北詰東へ入る路次内、向井方にて松崎天民樣」が、結婚翌日の極り惡い思をしながら勤め先の大阪新報社から歸つて、其の向井方の二階四疊の室に入つた時、花嫁御寮たる新妻が心持顔を紅めて、默つて小生に差出したのは、此の二枚の繪端書でありました。

少々月並てすが、春風秋雨こゝに十四年、これから少しは樂な目をして貰ふと思ふた時、何の樂もしなかつた妻は、傳染病と云ふ恐しい病の苦勞を得て、苦勞から苦勞の間に死てしまひました。死んだ妻の心殘り

の事てせうが、死なれた小生も殘念て堪りません。今夜斯うして、久留島武彦氏から來た古い繪端書を眺めて居ますと、思念は十年、十五年の昔に飛んて、涙が止め度もなく滲み出ます。

思へば、明治三十四年五月三十一日の夜、三々九度も型ばかりの貧しい祝言をした時、妻は二十一歳て小生は二十四歳てした。久留島氏の繪端書にある南區新戎橋北詰東へ入る路次内の家は、媒介者たる向井藻浦君の宅て、見合も祝言も其處てすれば、結婚後の五六ヶ月間も、向井君の二階て過しました。時に小生は大阪新報の三面探訪記者て、月給正に十四圓、その前年八月十日、足下の盡力に依つて始めて新聞屋さんに爲つてより、足掛二年て恰度滿九ヶ月と二十日目てした。月給十圓の見習記者が、その年の十月には十二圓になり、年末には十四圓になり、更に結婚當時には、月三圓の別手當を頂戴して、月收十七圓也は確にありました。野合とか馴染とかの間柄てはなく、昨日までは相知らぬ路傍の人てあつた者が、媒介に依つて夫婦の縁を結んだにしては、此の新郎新婦の新生涯の門出は、餘りと云へば餘りの貧乏てありました。

當時の事は大概御承知と思ひますが、花嫁が着て來た晴の衣裝は、その友達の井上おじうさんの借物てしたし、花聟たる小生の着た鼠縞銘仙の單衣に同じ羽織も文淵堂主人金尾思西君からの借着てした。花嫁のお荷物は、古い鏡臺一個に小さな柳合李が一個ぎりて、花聟たる小生の財産は壞れかゝつた支那鞄が一個あつたのみてした。長い竹の臺の附いた五分心の置洋燈と、小さな戸棚一個は、足下を始め薄田泣菫、結城桂陵、菊池三巴、金尾思西五氏からの到來物て、別に差向ひの夫婦膳と飯櫃とは、媒介人たる向井君夫妻と其の親戚たる向井、井上の兩家から到來しました。萬事萬端は媒介人たる二階の貸主向井君夫婦に見て貰ふ事にして、これて兎に角若い新夫婦は、新生涯の第一歩に入つたのてした。

「不束な者だすけど、何うぞ、幾久しくお見捨ない樣に……」

綺麗な長襦袢を着て、前に床に入つて居た妻が起上つて、兩手を突いて斯う云つた時、小生は何んなに周章へて間誤付いたでせう。

「…………………」

小生が新妻の顔を見たのは、實に其の時が最初であつたのです。三週間前に向井君の座敷で、見合と云ふものをした時には、一間半ほどの距離しかなかつたけれど、近眼の上に極りが惡くて、たゞ可愛らしい聲を聞いたのみでした。其の夜初めて見た妻は、思つたよりは面長でしたが、また思つたよりも美人であつたのが、小生は何よりも喜しくて、何んなに得意に、滿足に思つたか知れません。

それほど心易い間柄でも無かつた久留島氏から、祝の繪端書を頂戴して、二人とも極り惡る氣に顔を紅めながらも、心の中で嬉しがつた樣子を、斯うして思ひ起して見るのも、今の小生にとつては、淋しい果敢い涙のこもつた慰藉の一つなのです。

三、貧しき生ひ立ち

浩々歌客足下、新郎も新婦も媒介人たる向井藻浦君の言葉を信じて、碌々身元調査もせず結婚したのですが、緣と云ふものは眞に不思議です。妻の兩親も生國も岡山縣ならば、小生の兩親も生國も岡山縣とあつて二人の間には結婚せぬ前から、既に鄕國を同じうするの淺からぬ因緣がありました。

殊にこれは小生が昨年の夏八月、十五年振に歸省した際に發見した新事實ですが、妻の母の生家たる備中の眞宗寺と、小生の母の生家たる備中の酒屋とは、遠い昔から往來し合つた間柄であつたのです。それに妻の母方の伯父なる僧侶には、小生の親族から嫁入つた女があつた事を發見して、小生は一方ならず驚きました。妻と小生とは向井君の媒介に依つて、初めて夫婦たる契を結びましたけれど、二人の間にさうした關係はなくとも、妻の母方と小生とは、既に二十年の昔から開緣先に當つて居たのでした。小生は二人が夫婦と

しての遭逢の、眞に偶然でなかつたのを知つて、且つ驚き且つ喜んだ樣な次第でした。

それにしても結婚當時の若夫婦は、漸く其の日〳〵の糊口を凌ぐと云ふだけの事で、新婚の樂しさなど云ふ樣な事は、二人とも味はうことが出來ずに過しました。妻の實家も昔は相當の資産家でしたが、傾く非運に岡山を見捨て、幼い妻がその姉や弟妹と共に、父母に連れられて大阪へ出て來た頃には、世の常の娘達の樣に紅白粉の月日を送る譯には行かなんださうです。八九歳から二十一歳の夏まで、妻は盛りの娘時代を不如意の間に暮して、小學校を卒業すると直ぐ、裁縫のお稽古にのみ專念して、傍ら母の手助けをしながら、華やかな娘時代を送つて居たのです。新婚の當夜を飾る晴着さへなくて、友達のを借着して來た位ですもの其の貧しさの程度も思ひ遣られました。着のみ着のまゝとは、眞に結婚當時の小生等二人のために造られた言葉としか思へない程に、二人は氣持宜い程の貧乏人でした。

小生も村では相當の舊い資産ある家に、長男の坊樣に生れながら、もの心付いた八九歳の頃には、最う一家の大黒柱が傾き初めて居ました。九歳の冬、三里離れた勝山城下の私塾に預けられたのが、幼にして父母の許を離れた最初でした。其の後は神戸、大阪と流浪した父母に從つて、子供心にも旅路の悲しさを身に泌めて成長しました。遂に十一歳の夏には、大阪の中川と云ふ楡問屋へ丁稚奉公に遣られて、バケツに一杯の水が携げられなんだ爲めに、番頭さんに頭を撲られました。それから後、久しく故郷へ歸つて、村の林屋と云ふ荒物屋へ奉公し、そこから小學校へ通ふて居ましたが、尋常科四年と高等科一年を終へただけが、小生の學校教育を受ける最後でありました。父と母とが別々になつて、大阪、京都、前橋と生計の道を求め歩いて居る間に、小生は又大阪へ出て、藥屋駒林と池田とに丁稚奉公をしましたが、お乳母日傘で育つた坊ちやんに、蹴踏み奉公は並大抵の苦痛ではありませんでした。何處へ遣られても長く續かず、遂に岡山の西大寺町の

藤田藥館に丁稚奉公して、こゝで一二年を過ごしました。時に憲法發布の明治二十三年、小生も十三歳になつて、少しは將來の身の上に就いて、思ひ煩ふ樣になつて居ました。

その頃藤田藥館の主人の友人とかで、岡山日報記者奥山霜猿君が、能く遊びに來て居ました。新聞や小説を讀み初めて、子供心にも興味を覺えて居た小生は、此の奥山霜猿君に向つて、「私は小説家か新聞記者になりたいのですが、先生何んな本を讀んだら好いでせう」と尋ねますと、奥山君は「さうだね、先づこんなものでも讀んだら好いだらう」とて、初めて「小説文語錦綉」と云ふ本の名を教えて貰つた事を、今でも明瞭と覺えて居ます。其の翌十四の春藤田藥館も解雇されて、久し振に故郷へ歸りますと、病身で蒼い顏をして居た母は、小生のために一個の擔い笊を買つて、「遊んで居ては不可いから、何か行商をするが宜い。一日に三錢でも五錢でも、働いて儲けねばいけません」と云つて、厭がる小生を諭しつ叱りつして、近在三四里四方の農家を廻る行商人にさせました。

鹽鯖に鹽鰯、めざし、洋燈のホヤ、燐寸、つけ木、燈心などをかついで、近在の百姓達に賣つて歩き、時には鷄卵と交替して、これを町へ賣つたりして、田舍の小行商人になつて、小生は十四歳を送りました。さうして得る處の利益は、一日に三錢乃至十錢位であつても、母は笑顏をして、小生を勵まして居ました。

妻の前半生とは、何の關係も無い想な思ひ出ですけれど、暫く「少年の慘苦」を語らして下さい。

四、内助者たる功績

浩々歌客足下、擔い棒の笊の重量で、左右の肩に堅い凝血が出來た十五歳の秋、母は貧苦の中に死亡しました。父と妹と小生と三人、一家は何とかして暮して行けましたが、小生は母の死後直に行商人を廢めて、新に小説雜誌類の貸本屋になつて村々を歩きました。

ちぬの浦浪六の「三日月」を暗誦したり、黑岩涙香の「鐵假面」を愛讀したりしたのは、恰度その頃の事てし

た。小說家にならう、新聞記者にならうとの志望に燃えて、幾度か出奔を企てて、幾度か失敗したのも、恰度その十五六歲の頃でした。それから結婚まで十年の間に、小生は村役場の小使となり、會社員の食客となり、寫眞屋の受付となつて、十九歲の暮には東京へ出て、また一方ならぬ苦勞をしました。勞働組合期成會の書記から、東京每日新聞の配達夫、九段坂頭の人力車夫を經て、國民新聞の小使となつたのは、忘れもしない師走の寒い朝でした。

小生が國民新聞に小使として居た間は、僅に四ヶ月に過ぎませんが、其の四ヶ月は實に生涯忘れることの出來ない四ヶ月でした。足下の知遇を受ける樣になつたのも、結城桂稜君や國木田北斗君と相知るに至つたのも、實に其の小使たる間の月日でした。小生は其の後東京を去つて、暫く京都の親戚に身を寄せて居ましたが、間もなく村井兄弟商會大阪分工場の一勞役者となつて、捲莨「ラック」の荷車を曳いたり、關西刷子工場の勞働者になつて、輸出刷子の荷造りをしたりして居る間にも、小說家か然らずんば新聞記者に爲らうとの志望は、一日も忘れずに過して居ました。その短い二年間の勞働生活は、小生に酒と女との美味を敎えましたけれど、小生は一日も讀書と作文とを忘れず、暇あれば各種の演說會などにも行つて居ました。國民新聞で相知るの因緣を語つて、初めて足下を曾根崎の淸寓に訪れたのも、勞働者としての汗の臭氣が、まだ濃かつた春の一夜であつたと記憶します。

二十三歲の夏八月十日、足下の紹介狀を持つて、大阪新報に坂根、菊池、結城の三氏を訪ねた時に、小生の生涯は初めて一大轉機を見ました。刷子工場で月給八圓を得て居た勞働者が、大阪新報記者として採用せられ、經濟部の相場聞き步き係より發足するに、月給十圓を支給されたことは、小生の新聞記者生活に於ける忘るべからざる記錄であります。經濟部から直に社會部の方へ轉じて、今日あるの素因を造る樣になつたのは、主として結城、菊池二君の指導に依りますが、兎に角小生は幸運でした。月給もトン〳〵拍子に昇つ

て、翌年五月には十七圓となり、六圓の單衣羽織一枚を新調して、半年月賦で支拂ふの貧乏はして居ても、下宿で飯を食ふことだけは出來ました。山陽新報の雜報記者になつて、月給十五圓を貰いたいとは、村役場の小使時代の志望でしたが、岡山よりも都會の大阪で新聞記者と爲つて、十五圓に二圓を超過するの給料となつた時、小生は何んなに喜び勇んだでせう。これと云ふも皆足下のお蔭であると思ふた時、小生は感極つて落涙しました。貧苦と闘ふは覺悟の上、この上は奮勵努力して、日本の新聞界に社會記者として重きを爲し、以て此の恩顧に酬ゆる處あらんとは、當年に於ける小生の强い〳〵感激でした。

それから一年を經ずして、大阪新報に入社した新知己向井藻浦君に依つて、亡妻さく子と結婚したのが、生涯の第二轉機でした。當時、足下は「未だ細君は早いでせう」と云はれ、薄田泣菫君は「まア娶つて見るさ不可かつたら別れるまでの事よ」と云はれ、結城桂稜君は「へい、君が細君をかい、へい、何を祝はうかね」などと云はれましたが、今日になつて見れば、あの時、矢張り娶つたのが宜かつたのでした。結婚後二三ヶ月を經た晦日の夜、妻は「何時も〳〵こんな風では困ります、貴郎が早く月給三十圓も取る樣になると宜いのですに……」と云ひましたが、小生が毎月妻への渡し高は、其の後二十圓となり、三十圓となり、四十圓となり五十圓となり、六十圓となり、七十圓となつたのも、實は苦勞を共にする糟糠の妻を得て居たからだと思ひます。小生は此の點に於いて、復とあるまじき善き妻を媒介してくれた向井藻浦君に對して、滿腔の感謝を捧げねばなりません。

同棲すること足掛十三年、五年半を大阪で過し、六年半を東京で暮した歲月の間に、妻が世に遺した不朽の事業は、哲郎、達郎、俊郎と云ふ三人の男子を生んだ事ですが、小生の內助者として、糟糠の妻として、後顧の憂なからしめた隱れた功績に至つては、決して一朝一夕の事ではありません。小生は何よりも先づ、其の長い間の苦勞に對して、何の報ゆる處も無かつた

腑甲斐無さを殘念に思ひます。

亡き妻の十三年、何から語つて宜いやら、思ひ出の糸、兎もすれば亂れるので困ります。

五、朝夕の世帯窶れ

浩々歌客足下、小生も人間の一人である以上、時に自負し慢心して、自らの力を信ずること多きに過ぎる樣な事もありますが、そんな時に限つて不平の念がムラ〱と起つて、心の平衡を失つて了ひます。近頃は努めて心を空しうし、謙遜な態度で、自分の周圍や人事世事の一切を眺める樣に心掛けて居ますが、何うも此の自負自信と云ふ奴が、兎もすれば脫線して、慢氣となり不平となるので困ります。

小生の過ぎ來し方や、亡き妻に對するのもそれで、自負心と自信力とが邪路に入ると、何も彼も獨自一個の手腕と實力とに生彩を見ようとして、他を顧みない樣になるので困ります。小生が新聞記者として今日あるを得るのは、何も他人の力に依賴してゞはなく、小生が今日斯うして生活して行けるのも、死んだ妻などの關り知つた事では無いと云ふ樣な氣持が起きて、自分ながら不思議に堪えない事が度々あります。何も彼も自分の力に依つて爲されたと信じ、且つ爲し得られると信じ得る者は、勇者であり强者であり勝者でせうが、人は始終さうした强い勇ましい氣持でのみ暮して行けるものではありますまい。小生も自分の過ぎ來し方を顧みる時、其處に自ら流した汗の香の爽快さを感得して、一切を擧げて自分一個の功果に歸し樣とするの慾望を思はないでもありませんが、人は何時までも勝ち誇つた氣持でのみ居ることは出來ません。

俺は俺の力で今日在るを得た、と言ひ得る人でも、密に省みては恥ぢざるを得ないでせう。小生の如きは今日までに經て來た道程に就て、自個の力を信ずると共に、其の一面には、極めて弱い怯々した感激の情が相應の分量だけは湧いて居ます。自力とか他力とか云ふ程の明かな意味ではなく、たゞ自個の周圍一切に對して、深い感激の眼を開くことがあるのは、大抵の人

が經驗する事かと思ひます。小生は新聞記者としての現在の立脚地に、決して滿足して居る者てはありませんが、無學なる工場の一勞役者に身を起して、兎に角日本有數の大新聞に記者たるを得た過去の年月に對して、自分自身の努力の汗を認めると共に、其の他面に於ては、內助者たりし妻の功績を、感謝せずには居られません。若うして妻を娶つた者の兎もすれば落つる陷し穴にも入らず、一路直往、今日まで辿つて來ることが出來ましたのは、運命の神の加護もあつたてせうし、小生自身の努力にも依つたてせうが、また內助者たる妻の苦勞に得たことは、何の位あつたか知れません。小生は何よりも先づ此の一事を、亡き妻に向つて感謝せねばならぬ任務があるのてす。

お互に貧苦の間に人となつて、貧乏の味を身に沁みて居たことが、十三年の歲月に何の位役に立つたか知れないのてす。それても小生は御承知の通りの投げ遣りな男て、一家の經濟を切盛するなどの思慮も手腕も皆無てすが、妻は人一倍に世帶を持つ事が上手てした。死ぬる前年までは、毎月五十圓づゝ與へたに過ぎませんが、それても常に三人の子を奇麗にして、時には三越や白木屋へ連れて行き、不斷着などは月々の金の中から購つて、其の上三圓、五圓の貯金までして居ました。固より半季〱の賞與金は、その半額を妻に與へることに定め、稀には原稿料の一部や、本屋へ賣つた稿料の一部などを渡して居ましたが、それにしても一家族五人を支へるに、五十圓の金は決して豐てはありません。それを別に不平な顏もせず、女に特性な一切の慾望を捨て、何も彼も控へ目勝に、內輪〱にと遣つて行つたのには、小生も全く感服して居ました。

家に妻あり子あるを忘れて、時に浮かれ心の幾日かを過す樣なことがあつても、未だ曾て債を負はず、未だ曾て質屋の門に出入しなかつたのは、妻の生計その宜しきを得た爲めかと思ひます。若い華やかなるべき娘時代を、不如意の間に過した女は、嫁して後の朝な夕な、時には娘の心に復つて、いろ〱うき身をやつすが常てあるのに、妻にはさうした月日もなくして、

たゞ母として主婦としての、多事多忙な十三年の月日が續きました。花やかな娘姿に微笑みもせず、世帶に瘦せて窶れて死ぬるのが、その運命てあり、前世からの約束事てあつたかも知れません。

不如意な生計を上手に切廻して行つた妻の非凡さを思ふに付けても、十三年の間依然として、不如意勝な生計を營ました小生の腑甲斐なさを、恥かしいと思ひます。せめて月々百圓は與へて、人間らしい生活を營んで貰ひたかつたに、それも今となつては、云ふて返らぬ愚痴言だとて笑はれませう。

妻は世帶持が上手てしたが、それだけ世帶の苦勞も窶れも人並以上に多かつた樣てす。

六、大阪時代の苦勞

潜々歌客足下、貧しい新夫婦が、媒介人たる向井君の二階に居たのは、暑い夏の三ヶ月餘て、九月の中頃には妻の實家に同居して、小生は其處から大阪新報に通勤して居ました。妻の實家と申しても、路次内の狹い長屋建てしたが、妻の母と弟妹と小生と五人暮し、漸く糊口を凌ぐと云ふだけの事てしたが、それでも小生の心は前途の希望に燃えて、物質の窮乏などは、少しも苦勞てはありませんてした。

翌三十五年の十月には、妻の母が病死しますし、十一月中旬には長男哲郎が生れますし、十一月下旬には大阪新報を退社しますし、小生の身邊は多事多忙を極めました。當時、足下と薄田泣菫、平尾不孤の三家に依つて、金尾文淵堂より發行した文藝雜誌「小天地」あつたが爲めに、漸く小生の記者生活は事無きを得ましたが、一家の生計は窮乏と困苦とを極めました。新聞社から受ける十九圓の給料と、「小天地」より受ける每月四五圓の手當と、それも妻に渡すのは僅に八圓乃至十圓位てしたから、生活の不如意が並大抵てなかつた事だけは、推量されませう。無爲無職の年の暮、それても三四圓の支拂殘りが出來たので、それを妻に與へましたら、妻は直ぐ道頓堀の吳服屋に行つて、小生のために瓦斯織の綿入着地を一反購つて來て、正月着の

問に合ふ樣に自分で仕立て着せてくれました。

結婚前には幾月間か、足下の許に寄食しましたし、また足下の紹介に依つて、渡邊霞亭翁の許へ寄食した緣因がありましたので、小生は足下と霞亭翁との盡力に依つて、三十六年一月中旬、大阪朝日新聞社へ入社することが出來ました。月給は僅に十八圓でしたけれど、大阪新報とは比較物にならぬ大新聞である上に、恰も小生が入社する二三ヶ月前まで、昔の岡山日報記者たりし奥山霜猿君が居られたと聞いた時、小生は何んなに驚き何んなに喜んだことでせう。新聞記者を志望した藤田藥店の丁稚時代に、「小說文語錦繡」の名を敎えられた奥山霜猿と、机を同じうすることこそ出來ざれ、君の去つた後の社會部へ、外交記者として入るを得た小生の得意は、何んなであつたでせう。國民新聞の小使たりし時、「おい小使、辨當を云つて來い」など、命じて居た小林蘢洲氏を、同じ大阪朝日の府市課に見受けた時にも、小生は勝ち誇つた者の樣な愉快を感じました。大阪新報に於ける二年半の歲月は、謂ば新聞記者としての小手調べ、社會部記者としての手腕を晴て試みるべき初舞臺は、大阪朝日新聞に入社した三十六年、二十六歲が眞の序幕でした。

三十九年十一月中旬、招かれて國民新聞に入社するまで、其の四年間の大阪朝日時代は、多種多樣の意味ある歲月でした。給料は二十圓となり、二十五圓となり、二十八圓となり、結婚當時に妻が望んだ通りに、やがて三十圓となりましたけれど、一家の生計は依然として、不如意の窮乏を極めました。長い間、美作の山中に獨棲して、鄕人の同情に依つて老を養つて居た父を迎へて、初めて一家を江戶堀に持つた時にも、たゞ一家四人が食ふと云ふだけの生計に過ぎませんでした。それでも、幾年振かに父と子同棲するの喜しさに父も小生も顏を見合せて、何んなに嬉し淚をこぼしたことでせう。父は隨分暢氣な性でしたけれど、幼い時から丁稚奉公に遣つて苦勞をさせ、碌々學校敎育を授けなんだにも拘らず、男の子一人の小生が家を持つて可愛い孫まで生んで居る樣子を見ては、人知れず滿足

に思つたことでせう。小生も亦、常に氣がゝりてあつた老親を迎へて、貧しけれども同棲し得る様になつた當時の遇境を、非常な善事てもしたかの様に喜びました。貧しい生計向の事に當つて居る妻にしては、人一人の口が殖えると云ふことは、何よりも苦しい大事件てあつたにも拘らず、妻は厭な顔一つ見せず、老ひたる父のために、放縦な小生を助けて、能く貧乏世帯を切廻してくれました。舅と良人との間に立つて、乏しい世帯を張つて行かねばならぬ様な例は、廣い世間に澤山ありませうが、それがなか／＼並大抵の苦勞てはありますまい。

殊に其の頃から、小生は藝妓や娼妓の顔を知る様になり、貸座敷で飲む酒の味が解る様になりましたので、月給は昇つても、世帯の方ては苦勞のみ掛けました。「月給が三十圓になつても、妾の貰ふお金は同じてすもの、着物を一枚新調することも出來ません」と、能く妻はこぼして居ました。出ては大阪朝日新聞の社會部に属する探訪記者として、相應に活動して居ましたけれど、生活の方ては依然として、妻に苦勞をかける月日のみが續きました。

大阪時代の妻の苦勞、それは單り生計向の事ばかりては無く、小生のせいも大分ありました。

七、時々の夫婦喧嘩

浩々歌客足下、貧乏ゆゑには萬引をしたり、首を縊つたりする人がありますが、小生等夫婦も大阪時代には、貧乏ゆゑの夫婦喧嘩をしますし、貧乏ゆゑに離縁話を持ち上げて、泣いたり怒つたり叫いたり、今から思ふと可笑い様な、種々の悲喜劇を演じました。

大阪朝日新聞に入社して、江戸堀南通の家に移つてからも、一家の生計は決して容易てはありませんてした。「小天地」は既に廢刊して、餘分に見積つて居た收入は一厘も無く、僅に宮武外骨翁の「滑稽新聞」に、社會觀察見たいな愚文を寄書して、少しばかりの稿料を得て居ましたが、それもホンの三四ヶ月間のことて社から受ける給料のみては、何うにも此うにも遣り切

れませんでした。この間に處して、妻が如何に貧苦と闘ひ、世帶に苦勞しましたかは、今更、事新しく申し上げるまでも無いことかと思ひます。

　三十圓足らずの月收の內、妻には毎月二十圓內外を渡し、殘額は小生の貰代にしたり、洋服の月掛拂や靴足袋の代にして、それで二十九歲の十一月まで過しましたが、隔日の湯錢に困る樣なことも、長い間には度々ありました。父と妻と長男と、妻の妹と、それに岡山から來た友人田中稻月が同居して居まして、折々は此の田中と夜を更かして、芝居裏や堀江邊を飮み歩いて居ましたので、一家の生計には一錢の餘裕もありませんでした。小生が外に泊つて歸つた晩などは、必ず其の日〳〵の小遣錢にも困つて居ることを訴へましたが或る日の如きは妻が大切にして居たタッた一枚のお召の袷衣を、紙屑屋に賣つて湯錢にもしたし、八百屋の買物代にもしたと云つて、妻は涙を流して怨じました。幼い時から貧苦の間に育つて、人並以上に貧乏の味を知つて居た妻も、放縱な小生のためには、貧乏以上の苦勞を嘗めて居たのでした。

「貧乏暮しを厭ふと云ふ譯ではありませんが、苦勞をするのなら夫婦一所に苦勞をするのが、當然の事ではありませんか。お父さんは家を外にして、自分勝手の眞似ばかりして居るのに、妾はお祖父さんや哲ちやんと氣ばかりもんで居なくてはならない、こんな詰らぬことがありますか」と、時には怨み憤ることがありました。其の都度小生は、身の腑甲斐なさを嘆じながら、口では好い加減の事を云つて、機嫌を取つたり誤間化したりして、打過ぎて居ましたが、言葉の行違ひから聲高に罵り飛ばして、互に敗けず劣らず、喧嘩をしたことも、長い月日の間には度々ありました。そんな時に限つて、何時も妻の口から別れ話が出て、果は幼い哲郎を置去りにして、「今夜これから直ぐに歸ります」と、氣强い言葉で脅し付けられる樣なこともありました。小生はさうした場合に、必ず涙を流して不心得を詫び、「最少しの辛抱だ〳〵」と云つて過しましたが、遂に妻は死ぬるまで辛抱しても、何一つこれぞと云ふ

愉快な目もせずに、恐しい病氣のために死てしまつたのです。當時の事を思ひ浮かべますと、小生は此の心も身も苛責まれる樣て、起つても居ても堪らない樣な切ない苦しい心地が致します。

單り妻に苦勞をさせたばかりてなく、八年振りに同棲した老父にも、一方ならぬ心配をかけました。父は上阪後一年を經ると、突然聲の出ない病氣に罹つて、涎ばかり流す樣になりましたが、小生は相變らず無頓著て、柔しい言葉一つかけやうともせず、妻と爭論ばかりして居ました。妻が泣いて小生に飛び付けば、小生も怒つて妻を撲り付けなどして、ドタンバタンの夫婦喧嘩が三十分も續きますと、仲裁者は何時も涙ぐんだ無言の父でした。或る夜の如きは十一時過ぎに、幼い哲郎を抱いて實家へ歸つた限り、二三日戻らぬ樣なこともありましたが、惡緣の夫婦仲にも子は鎹、妻は小生に愛相を盡かして居ても、たゞ子供が可愛いばかりに、同棲して居たのでした。「お父さん、ほんとにしつかりせにやいけませんよ」て、何時も笑つて事濟にはなつて居ましたものゝ、其の「お父さん」は遂に今日になつても、しつかりしないので困ります。

あゝ小生ほど不孝な子、小生ほど不貞な良人が、何處にありませう。生小が新聞記者としての公的生涯は、好運と先輩の引立と小生の努力とに依つて、段々向上することを得ましたけれど、其の今日あるを得た内助の功に至つては、全然、妻の犧牲的苦勞に負ふ處があつたと信じます。妻も亦小生の記者生涯が、一路向上したのを見ては、心密に微笑んだかも知れませんが、それが小生にとつて、何の心慰みになりませう。

思へば、死んだ妻も殘念でせうが、生き殘つた小生も、殘念てく堪りません。

八、貧乏以上の心配

浩々歌客足下、大阪に於ける最後の三十九年、小生の青年期を彩る二十九歳の春から秋へかけて、また一方ならぬ苦勞を妻にさせました。貧乏世帶の苦勞だけて、痩せもすれば窶れもして居ましたものを、放縱な

小生のために、妻の苦勞は又一つ增したのでした。

三十九年の春三月二十五日、貧しい中に二男逵郎が生れました前後から、小生の心は妻以外の或る女に捉へられて、家を外にする夜半が、段々繁くなつて居ました。當時の事件や感想は、甚だ卑怯でしたけれど、或る友人が小生に宛た手紙風に擬して、「女八人」の中の「最後の牛肉鍋」の中に、詳しく書きましたが、其の女に關係した爲めに、小生は父や妻に一方ならぬ苦勞をかけました。妻あり子あり父あるを忘れて、併し女に戀する樣な、暢氣な生計でも無かつた癖に、當時の小生は餘程何うかして居たに違ひありません。

投げ遣りで無頓着で、暢氣で放縱な小生には、實際愛相を盡かして居たかも知れませんが、小生は決して妻を嫌つたり厭がつたりして、冷酷に遇つた積りでは無いのでした。其の女と關係して、家を外にする樣な夜が續きましても、妻は妻とし戀人は戀人とするだけの區別が、小生の心にはチヤンと附いて居たのでした。併し女と何んなに熱烈な戀をしても、妻あり子ある男の心は、義理や世間體が先に立つて、女の方へは容易に、一所懸命になり得るものではありません。妻や子の手桎足梏、それを斷つてまで倒傾しやうとしても、其處には理智の分別が附き纏つて、相手の女を眺めたり、自分の姿を反省(かへりみ)たりして、決して迷ひ込むものではありません。要するに妻あり子ある男の戀は、戀そのものゝ氣分を味はうとする遊戲的で、小說でも讀む氣で、自分の戀愛狀態を眺めるに過ぎますまい。

二男逵郎が生れて多事な上に、父の病氣は段々惡くなつて、夏の初には床へ就く樣になりましたが、小生は相變らず「小說の戀」ばかり眺めて暮しました。其の女は多少の文學思想があつて、能く話が合ふのみならず、小生の新聞記者としての地位や手腕を、相應に理解して居たのが、小生は何よりも喜しかつたのでした。世帶の苦勞に追はれ通して、其の日〳〵の新聞も碌に讀まない妻の口から、小生の職業上に對する同情や慰藉の言葉は、絕えて聞くことが出來ませんでしたが、其の女は能く小生の書いた物を讀て、折々批評がまし

いことを云つたのが、小生は何よりも喜しかつたのでした。其の女は外に二三人の旦那があつて、其の支給に依つて生活して居た程の、謂ば娼婦に等しい境涯に居ましたけれど、小生は自分一人の女の樣に心得て、朝な夕なの逢引を樂んで居ました。病氣の父、産後の妻、幼い子、貧しい家、多忙な仕事、忘れられるものならば、それ等の一切を忘れてしまつて、たゞ「戀の刹那」に生きたいと云ふ樣な、物狂はしい氣持になつて、今日も昨日も一昨日も、數ふれば早や一週間も、家に歸らぬと云ふ樣な初夏の夕が續きました。

其の年も暑い七月になつて、雨に暮れた二十五日の夜半、冷たい形骸になつた父の傍に坐した時にも、小生はたゞ其の女の上をのみ思ひ耽りました。連日連夜の看護に疲れて、深い熟睡に落ちて居る妻の氣配を窺ひながら、「骨肉離愁の際に於ても、予は御身の上を忘るゝこと能はず」と云ふ文體で、二十字詰二十行の原稿紙に、六七枚の長文の手紙を書いて、ソッと其の女の許に送つたりしました。初七日の香典返しが濟んで、三四十圓の金が殘つた時にも、妻へは「京都の親族へ行つて來る」と云ひ置いて、其の足で直ぐ女の家へ行つて、五六日の間を過したりしました。父と子久し振に同棲したのも、僅に足掛四年の短い月日で、其の晩年を不幸に終へた父の生涯は、思ふても涙の種であつたものを、小生は死んだ父のために泣かうとはせずに、長い間、女の家にのみ入り浸つて居ました。

其の年の十一月十三日に、小生は大阪朝日新聞社を辭して、多年望んで居た東上の素志を達することになりましたが、其の女との關係は、大阪を出發する十五日の夕、「最後の牛肉鍋」で別れるまで續きました。別れてしまへば路傍の人にも等しい、短い淡い戀であつたにせよ、小生が其の女に關係した一事は、妻にとつて貧乏以上の心配であつたと思ひます。東京へ來てからも、妻は能く其の女の名を云つて、「お父さんは色男ね」と笑つて居ましたか、全く放縱な小生は、貧乏世帶ばかりでなく、大分妻に苦勞をかけました。

苦勞をしたのみて、何の快樂も知らずに、死んだ女

房も不幸でせうが、苦勞をさせたのみで、何の面白い目もせずに、斯うして生き殘つて居る小生も、決して幸福とは申されますまい。

九、我が半生の恩人

浩々歌客足下、三十九年は小生自身にとつて、忘れ難き一年であり、思ひ出深き一年であり、多事多忙を極めた一年でありました。妻にとつても亦、いろ〳〵の意味に於て、思ひ出の一年であり、忘れ難き一年であり、記憶すべき一年であつたと思ひます。

出來事としては、二男達郎を得て、老たる父を失ひ一家擧つて東京に移住したに過ぎませんが、長い間住み馴れた大阪、第二の故郷に等しい大阪を去ると云ふことは、妻にとつて深い感慨の種でした。西を見ても東を見ても、知らぬ人ばかりの廣い東京で、この上にも尙、世帶の苦勞をせねばならぬのかと思うた時、妻の胸には何よりも心細さが先立ちました。住み馴れた大阪、賑かな大阪、親しい大阪、親兄弟のある大阪を去つて、知らぬ他國へ旅立ねばならぬのかと思うた時妻の心には何よりも賴り無さが先立ちました。

妻は東京へ行くと云ふことを、少しも喜ぶ樣子はなく、たゞ仕方のない成行だと諦めて居ましたが、小生は飛び立つ思ひで、何の執着もなく、何の心殘りもなく、大阪を見捨て了ひました。幼い時から丁稚奉公をした土地、不如意な父に抱かれて、父子たゞ二人淋しく暮した所、何百貫とある捲莚の荷車を曳いて、涙と汗とを流した町、初めて新聞記者に爲り得た都會。妻を娶り子を生んで、父を葬つた第二の故郷だと思へば遂に斷ち難い愛着の念も起りましたが、小生の心はたゞ前途の希望にのみ燃えて居ました。東京！東京！東京へ行きさへすれば、新聞記者としての自分の將來に必ずや大に見るべきものがあらうと信じて、「大阪」から受けた一切の親切と、溫情とに背きました。况んや大阪朝日を去るの輕き哀しみと、「其の女」に別れるの淡き悲みとに、何の煩ひされる所がありませうぞ。

月給三十圓の大阪朝日新聞記者が、東京の國民新聞

に招聘されて、月給四十圓の社會記者に爲つたと云ふことは、別に珍奇な事實でなかつたにしても、小生にとつては實に深い感慨の種でありました。十年前の冬から春へかけて、僅に四ヶ月の短い間ではあつたが、「國民新聞社」と染抜いた印袢纒を着て、三度〱上安の辨當を食ひながら、月給六圓の小使を勤めて居た小生が、十年後には社會部の一記者として、遙に招聘されて任に赴くと云ふことは、何と云ふ運命の廻り合せてせうか。この奇なる遭逢の因緣を說いて、大に喜んで貰ふ筈の父は、既に幽明界を異にして居ましたけれど妻には能く判る樣に說き聞かせて、一家が東京へ行くことの、決して不幸でない理由を納得させました。「破れ草履を穿いて村を出た人が、今度は靴を穿いて歸る樣なものですね」と云つて、遂には妻も東京行を喜ぶ樣になつて、何かと出發の用意を致しました。「月給が十圓も昇つたから、生計向も少しは容易にならう」とは、小生も豫期して居たことですが、長い間世帶に苦勞した妻にとつても、月給が十圓昇つたと云ふ一事は餘程の氣休めになつたかと思ひます。

新しい元氣と勇氣とを抱いて、小生は十一月十六日に上京し、妻子は十二月の暮に上京しまして、赤坂一ツ木町の圓通寺坂上に、東京生活の新世帶を持ちました。十年振りに見た東京の人事と世間とは、悉く驚異の材料でしたが、初めて東京を見た妻の眼には、何事も大阪との比較が先に立つて、事每に東京を貶す樣な傾向が見えました。それでも三月經ち半年過ぎる間には、水道の水にも馴れて來て、世間體の無い東京の生活の方が、結句、暢氣で宜いなど丶云ふ樣になりました。東京に來てからも、其の當座は相變らず不如意勝て、切詰めた上にも切詰めた生計をして居ましたが、それでも「大阪に居た時よりは、少しは宜い」と云ふ樣になりました。土地が變り勤め先が變れば、氣も心も新になつて、小生は何か知ら前途に光明を認めながら、探訪をしたり、續物を書いたり、編輯をしたりして、國民新聞記者たる月日を送りました。

思へば夢の樣な大阪の五年半、月給十七圓の二階住

居から、三十圓の借家住居になるまで、貧乏ゆゑなればこそ苦勞もかけたれ、貧乏ゆゑなればこそ喧嘩もしたれ、何うやら此うやらして暮して行けたのは、全く妻のお蔭でありました。放縱に無頓着に頓興に暢氣に構へて、仕事をすることが出來たのも、家を外にして遊び歩くことが出來たのも、貧乏世帶を持つてこの上手な、糟糠の妻のお蔭でありました。この貞淑にして溫順な妻が居なかつたならば、小生は今頃何處を何う放浪して居ますやら、思ふに新聞記者としても、現在の地位すら得ることが出來ずに、不遇不平の間に、碌々として居るかも知れません。

妻は小生にとつて、實に半生の恩人であります。

十、一生の苦勞の種

浩々歌客足下、上京後は國民新聞社に二ヶ年間勤めて、小生の新聞記者生活は、大阪時代よりも發展しましたが、一家の生計は決して豐ではありませんでした。四十圓の月給が五十圓になり、五十五圓になり、六十圓になつても、たゞ糊口を凌ぐに足ると云ふだけのことで、一日として妻に氣樂な目をさせず、暢氣な思をさせたことは無いのでした。

四十二年の一月には、國民新聞社を辭退して、大阪朝日からの因緣ある東京朝日に入社し、其の年の夏には一ッ木から、青山南町五丁目に移居しました。大阪時代よりは收入も多くなり、記者としての小生の位地も段々向上して、大阪時代の樣に世帶の苦勞をさせずとも、何うやら此うやら暮せる樣になりました。四十三年一月には三男俊郎が生れて、三人の子は何れも壯健に、「此の上はお父さんさへ、もつと〳〵出世すれば宜いのです」と云つて居ましたが、世帶の苦勞は忘れる樣になつても、今度は放縱な小生のために、種々と人知れぬ苦勞をする樣になりました。

小生は前にも申しました通り、決して妻が嫌でもなく厭てもなく、長い間貧乏のために苦勞をさせた事に就ては、心から感謝して居たのですが、何う云ふ譯か二人の氣分は別々になつて、シックリとした夫婦の情

愛を味はふことが出來ませんでした。慕ひあつた戀仲の夫婦でも、五年と經ち十年と過ぎて、二三人の子供を生んだりしますと、段々に夫婦の結合と云ふものが、單純な情愛の上にのみ成立つのを許され無くなるのは廣い世間に有觸れた大方の例かと思ひます。況して友人の媒人口一つを信じて、初めて契を結んだ夫婦仲にあつては、何事も運命だと諦めては居るもの丶、時には恐しい冒險にも似た夫婦としての過去や現在を、冷たい眼で眺める樣な例は、決して珍しからぬ事かと思ひます。妻も小生も、二人が夫婦としての宿命の前には、柔順な服從者でありながら、時々強い自意識に復つて、運命に反抗する樣な態度を執つたのも、決して二人の愚とのみは申されますまい。

妻は滅多に不平を云つたことはありませんが、それでも時々は小生に向つて、長い間の不滿と不足とを並べ立てました。「お父さんは氣心の好い人ですけれど、何時も浮き〳〵して落着かず、少しもしんみりとした所がないので困ります。三人の男の子の父でありながら、能くもさう暢氣に構へて遣つて行けるものですね少しは考へなくては不可せんよ、確りしなくては不可せんよ」と云つては、能く小生に小言を云ひました。「俺が斯うして暢氣に構へて、家の事は一切お前に任せて、仕事をしたり遊んだりするのは、お前が萬事を宜く遣つてくれるからぢやないか。お前と云ふ立派な奥樣がしつかりして、後顧の憂が無い樣に遣つてくれるから、俺は暢氣に構へて、仕事も出來るし、遊ぶことも出來るのだ。斯う見へてもなか〳〵しつかりして居るから、そんなに心配しなくても宜いよ」と云ふのが何時もの小生の癖でした。今から考へると、妻は常にしんみりした夫婦の情味を味はうとして居たのに、小生の方はそれ程には思はず、自分から逃げる樣な態度を執つて居たのかも知れません。貧乏世帶に窶れるよりも、妻にとつては斯うした情愛の隔りの方が、何んなに激しい苦勞であつたでせう。

女嫁して子を生めば、今まで良人にさゝげて居た愛情の半は、肉を分けた子供の方に引かれて、良人へは

兎角御不沙汰勝になるものだ、と聞いて居ましたが、小生の妻が恰度さうした「お母さん」でした。不如意勝な世帶も、子供のために慰められて、明けても暮れても子供の世話ばかり、貧乏世帶を持つて、三人の子を生んで、三人の子を育てるのが、自分の職分かの様に心得て、妻は同棲十三年の月日を過したのでした。良人に依つて得られない情愛を、三人の子供に依つて受けると云ふことが、妻の唯一の安慰であつたとすれば小生は妻に對して物質上と精神上と、常に二重の苦勞をかけて居たのです。妻の心の奥に潜んだ强い情味に我から進んで觸れようとはせずに、反つて子供が出來てからの寂寞を、妻のせいでもあるかの様に心得て、家を外なる放縱な生活に溺れて居たのは、餘りと云へば餘りの愚であつたと思ひます。

東京に來てから今日まで、大阪の「其の女」に戀した様な、馬鹿〳〵しい小説は繰返しませんが、然し隨分いろ〳〵と浮いた眞似をして、相變らず苦勞をかけました。妻あり子あるを忘るゝの若やさに還つて、戀を戀する氣分になつて徘徊した様な事も、長い月日の間には、一再ならずありました。

小生の様な良人を有つたのが、妻のためには一生涯の苦勞の種であつたのです。

十一、得難き糟糠の妻

浩々歌客足下、東京に來てから足掛八年、昨年十一月十一日妻が死去するまでの生活は、小生の愚著「淪落の女」と「人生探訪」と「女八人」とに、悉く盡してあると思ひます。何の價値もなく、何の貢獻する處も無い愚な勞作ですけれど、これ等の雜著を世に公にすることが出來たのも、主として亡き妻の苦勞のお蔭だと心から感謝して居ます。

小生は此れ等の愚著の外に、「新聞記者修行」を初め「東京の女」や「甲州見聞記」などを世に出しましたが、何れと云つて取立て云ふ程の價値は無いものにせよ、其の勞作の蔭には、必ず糟糠の妻が居たことを、忘れてはならぬと思ひます。これ等の愚な雜著には、永久

性の生命と云ふものが無く、讀書界に何の影響も與へなかつたにしても、小生にとつては、決して無意味の勞働では無いのでした。これ等の雑書は、小生が恩遇を蒙つた人々、父母や亡妹を初め、足下や薄田泣菫兄や、渡邊霞亭翁や結城桂稜兄へ、何れもデヂケートをし、更に七月早々發兌すべき「社會觀察萬年筆」は、澁川玄耳翁に献ずる豫定になつて居ます。

たとへ愚かな書にもせよ、これを恩顧ある人々へデヂケートすると云ふことは、美しいことであり愉快なことであると信じます。この上は徳富蘇峯先生に献ぐべき書籍を書くことゝ、亡妻の靈に供ふべき書籍を出版することゝの二つが、差當つての小生の仕事です。思へば無學にして粗懶、放縦にして頓興な小生が、一勞働者に身を起して、新聞界の人となり、赤門や早稲田を出た人々の間に介在しながら、能く自己の存在を刻み付けることが出來たのは、全く運命の寵遇に因ります。たとへ小生に不斷の努力があつたにしても、先輩の好意と妻の内助が無くては、何うして今日あることを得ませうぞ。其の公にも私にも、小生の一言一動の蔭には、必ず妻の苦勞が附きまとうたことを思ふにつけても、苦勞をさせたのみで死なしたのが殘念で堪りません。生き殘つた小生の行末に、今日以上の幸福な月日は來なくても、死ぬるには餘りに早い妻であつたと思ひます。

妻は小學校を卒へたのみで、所謂現代の女學校教育を受けた女ではありませんが、小學校は碌に卒業しない様な小生の妻としては、何の不足も無い女でした。面長の小柄で、子供を生んでからは痩せましたが、十三年の間一度も病氣をしたことがなく、心も身も壯健（すこやか）に暮して居ました。「お父さんは女の事ばかり書くから厭です」と笑つて、小生の書いたものは、一度も讀だことはありませんが、それでも新聞や雑誌に小生の名が出ると、「惡い氣持はしません」と云つて居ました。東京に來てからは、報知新聞の夕刊に出て居る「徳川榮華物語」のみを愛讀し、當代の新しい小説などは、「心が滅入る様で厭です」と云つて、少しも讀まうとは

しませんでした。娘の頃には三味線を習ひ、東京に移つてからは、山田流の琴を稽古して居ましたが、「三人も子供があるのに、コロリンシャンでもありますまい」と云つて一年ばかりで癈めて了ひました。芝居を見に行かうと云つても、「芝居は娘時分に飽くほど見ましたから、お金を費ふだけ餘計なことです」と云つて、一度も見ようとはしませんでした。時には料理屋へ行つて、皆と一所に飯を食はうと云つても、「そんなお金を遣ふよりは、宅で美味い物を食べる方が美味いでせう」と云ふ有様でした。

常に世帶の苦勞のみして、下女を雇へと云つても、「他人は氣心が知れないから厭です」とて、三度〳〵の御飯の世話から、子供の入浴、洗濯、裁縫に至るまで皆自分の手一つで遣つて居ました。小生は宅に歸ると食ふて寢るだけで、縦の物を横にするのも懶がる程の横着者で、何一つ妻の手助けになる様な事はせず、掃除や靴の手入れに至るまで、皆妻にさせて居ました。それでも夏の物は、冬の間に洗濯して裁縫し、冬の物は夏の間に洗つたり縫つたりして、粗末な木綿物でも何時も綺麗に、心持が好いほど萬事に行屆いて居ました。小生は月收が幾程あらうとも、妻には月々極めた額だけを渡し、洋服、靴、帽子、ネクタイ、カラーなどは、小生の經濟にして、妻の會計とは別にして居ました。妻は何時も小生の姿を見ては、「宅の生活は平民ですけれど、お父さんだけは華族の様ですね」と云つて、小生一人が自分勝手に振れ舞ふのを、快からず思ふやうな様子もありました。

有餘る程の金を與へても居ないのに、儉約な妻は三圓五圓と貯蓄をして、折々小遣錢が無くて困つて居る小生へ、融通をしてくれました。半季〳〵の賞與金は其の半額を與へて、衣服か帶を購へと云つても、自分の欲しい物は何一つ買はずに、まさかの時の用意にとて銀行に預けたりして居ました。

十二、不幸不運の生涯

浩々歌客足下、大阪に居た頃は、丸髷や銀杏返しを

結つて居ましたが、東京に來てから後の六年半は一度も髪結さんに頼んだことがなく、自分で束髪ばかり結つて居ました。大阪の脂粉の香に近い南區に住て、紅白粉の仇な姿を見て人と爲つたのに、妻は紅が嫌ひ白粉が嫌ひて、十三年の間にたゞの一度も、白粉を付けたことは有りませんてした。

「俺が浮氣をするのは、お前が世帯染みてしまつて、少しも紅白粉を附けないからだ。何時も綺麗に身だしなみをして、薄化粧てもして居て御覧、お父様は毎日早く歸つて、お前の傍を離れぬ様にするから！」と、小生が戯談に云ふと、妻は何時も「白粉をコテコテ塗り立てまても、早く歸つて貰はうとは思ひません」と云つて居ました。子供や家の事に追はれて、化粧などする暇は少しも無かつたのてすが、小生は白粉を着けなかつたり、ベタ／＼と化粧するのを厭がつて居た妻の見識に、心窃かに感服して居たのてした。何處までも自分を空しうして、子供のため家のために、勤儉力行した十三年の月日は、實に貞婦節婦の生涯てした。

新聞記者としての小生の立脚地を了解しなくても、小生の書く物を愛好する讀者てなくても、手紙の代筆が碌々出來なかつたにしても、糟糠の妻たるに於て、何の闕る所がありませうぞ。「お父さんには女學校出のハイカラて、戀とか運命とか人生とか云つて、御飯の焦げ付くのも御存じ無い様な、新しい女が似合ひますよ」と、能く笑ひながら云つて居ましたが、妻は全くハイカラが嫌てした。東京に來てから後、廂髪にのみ結つて居ましたのは、衛生と經濟上の打算からてして妻の心ては一日も丸髪を結はぬ日は無いのてした。母を助けて貧苦の間に人と爲り、これと云つて教育らしい教育は、授けられたことが無いにも拘らず、妻は貧しい生活の中から、女の辿るべき唯一筋の道を知つたのてした。娘の心に刻み付けられた不如意の影は、年經て人妻に爲つての後も、心の奥に根強く萌して「妻」として「母」としての短い生涯を、極めて眞面目に彩つて居たのてした。

不幸短命にして世を去つた妻は、小生をして今日あ

るを得させ様がために、其の全生涯を美しい犠牲に終へた、と云つても宜からうと思ひます。壯健な三人の子を生て、女としての任務を果して死んだ妻は、それても僅に慰める所がありませうが、先立られた小生にとつては、何事も心殘りであり、思ひ出の種であり、悔恨の涙であります。連れ添ふこと十三年の短からぬ間、芝居と云ふ芝居へも行かねば、一度も溫泉へ行つたことなどは無く、夏になつても避暑旅行をせねば、「あゝ今日は嬉しかつた」と云ふ日などは、一日も送らしたとことがありません。それも思ふにまかせぬ貧乏なら兎に角、東京に來てからは、小生さへ飲まず浮かれずに、しつかりして居さへすれば、一家揃つて一週間や二週間を、避暑地で送る位のことは、何でも無かつたものを。常に家を外にして遊逸三昧に耽り、それがため厭はしい病氣に罹つて、一度ならず二度までも入院するなど、省れば良人として、何の顏色がありませうぞ。千言萬語を繰返して、妻が世に在りし日の面影を語つても、悔恨懊惱の念を叙べても、今となつては最う何事も空であり愚痴であります。それが何の安慰になり、それが何の罪亡しになり、それが何の回向になり、それが何の供養になりませうぞ。

親切な堀君母子の世話になつて、三人の子供は極めて壯健に暮して居ますが、心からか、母の無い子は何かに付けて不憫で、涙催す樣な事も、長い月日の間にはあります。小生も近頃は、妻が世に居た時とは違つて、成るべく優しい態度で、子供等に接して居ますが、父としての峻嚴な自覺も、心淋しい朝な夕なには、兎もすれば亂れ勝で、自分ながら腑甲斐無いのに呆れて居ます。

今日は六月十一日、七度目の命日を迎へていろ〳〵と返らぬ愚痴ごとを並べました。今の小生にとつてはこんな事でも書いて居るのが、何よりの心慰みになるのです。その内に一度ゆる〳〵參堂して、情趣ゆたかなる高話を承りたいと思つて居ます。敬具。

——大正二、六、一五夜——

復活せる長系官僚

鷺城學人

一

○首相大隈伯は或る招待會の席上に於て、現内閣を幸運なりといふは前内閣の不運なりしに比較してのことて、共に時代の要求より來たものだといひ、又た矛盾は孰れの時代孰れの處にもあるが、是等各種の矛盾を調和するのは我輩の任務であると言うた。伯は人を魅(チャーム)する調子で喋るから、大抵のものは之れに欺かれるが、其の言ふ處は概ね其場限りの出鱈目で、凡そ矛盾といへば伯の如く矛盾した人はない。矛盾の人が矛盾を調和するといふのは尚更可笑しい。

○伯も伯の與黨も頻りに時代の要求を云々するけれども、余は二つとも空言虚辭であつて徹底した意味がないと思ふ。蓋し時代が或物を要求し、而して其要求する或物は無論善き方面の事柄であるとすれば、それは國民自覺の結果でなければならぬ。余は大隈内閣を以て惡政を布く劣種の政府とも思はぬが、さりとて一部の人々の謳歌する程に結構な内閣とも思はぬ。

○大隈内閣は時代の新勢力を代表せずして、舊勢力の陰影に蔽はれて居る。外形は政黨内閣であつても、其實質は超然内閣である。内閣の背後には怪しいブラック・ヴエールが潜んで居りはせぬか。

○最初國民は是れ以上のものを望んだけれども、案外な内閣が出來たとすれば、伯は時代の要求を口にする權利なく、濫りに之れを言ふは僭越である。若し此内閣が時代の要求を滿したものとすれば、國民自覺の結果でない證據である。

○國民が眞に自覺して居れば、政治の得失を判斷し、人の滅否を識別する力が出來るから、野心家に煽てら

れたり、新聞に誤られたりしない。而も實際は如何であるかといへば、政府も政黨も政略とか黨略とか唯だ一時の勝敗を爭ふ手段にのみに驅られて、肝腎の政務とは殆ど風馬牛相關せざる有様である。權謀術策(マキアヴエリズム)を以て互ひに利せんとする以上、いつも紫は朱を奪ひて正邪混淆するを免れぬ。今日の惡風潮は政治家も惡いが、國民の輕佻浮薄も餘程與つて居りはせぬか。

○大隈首相は事毎に長州元老の指圖を受け、又た遠慮しつゝあることは最早疑ひなき事實で、今まで之れを否定したものも大分分つて來たやうであるが、今後益々明白になるに相違ない。

○最初伯が内閣を引受けるに就て、山縣・井上から或る條件を出したといふが、其條件は伯自ら政黨を造らざること、大藏大臣は純政黨員を以てせざること、政黨關係者を後繼者に推薦せざることの三個條ださうである。事實か事實でないか斷定するを難んずるが、伯の行動より推せば、萬更根も葉もない事と思はれぬ。

○同志會の策士が伯を黨首に戴くといふ名の下に三派合同を目論んだ時伯は自ら其意なきを聲明した。そこで合同派は大恐慌を起して、伯に迫つた結果、自分は在朝者として政黨を造らぬが、据膳をして來れば機會を見て入るかも知れぬといふ意味に修正した。斯かるは伯の本心でなく、迚も三派合同の成らざるを見て取つたからである。第一の條件も是れで思ひ當るではないか。

○武富を遞信に廻して若槻を大藏大臣にしたのも第二の條件に該當して居る。第三の條件は長州系の何人かを推薦せよとの意味と察せられるが、長州系といへば寺内か平田の外にない。が、まさか肺病患者の平田でもあるまいから、寺内を出す伏線とも默契とも直覺される。

○政務官を置く爲めに文官任用令を改正するに就ても、何となく長州の臭ひがする。政務官と事務官を區別するといふ名義の下に、各省次官を舊制度に引戻すのであるから、山縣も不滿足であらう筈なく、又た嚴部に政務次官を置かぬに就ても、豫め山縣と大隈との間に一種の妥協があるらしい。

○專任内相問題でも大隈にしては容易に解決し難い事情がある。然るに同志會は頻りに焦慮り、尾崎の如きは内務に廻りたい處から、司法を餌に人の好い關直彥を煽てゝ入閣運動をさせるやうな小刀細工を遊らしたが、是れは親の心子知らずといふものである。

○世間では尾崎が大浦の内務を不可として抗議を申込んだ結果大隈の鉄操となつたかに傳へたが、是れは尾崎を買被つた話で、無論そんな譯でない。其間の事情を素ッ葉拔けば、初め井上は婿の都築馨六を持込んで

来たが、山縣の方では今更都筑の肺病患者でもあるまいと大浦を薦めたすると内田山は持前の肝癪玉を破裂さして、大浦の如き政黨臭味のあるものを内務に入れるのは不可ないと反對したので、大隈も双方の間に板挾みになつた結果らしい。

○それでも夫子自身は好い氣なもので、今でも元老の方から降参した如く思うて居る。是れは己惚れといふよりも多少耄碌氣味に近く、氣の毒なる次第であるが、長州系の官僚を復活させた責を免れぬ。

二

○長州系の官僚が復活したといへば、大臣では一木は言ふまでもなく、大浦・若槻も夫れてある。蓋し大浦といひ若槻といひ、政治上の本籍は同志會にあるが如く、又た幸倶樂部にあるが如く、双方とも貴族院に議席を有する以上、幸倶樂部を本籍と見るが至當である。

○幸倶樂部は如何なる團體かといへば、是れ茶話會と無所屬の混成團體で、之れに一部の多額議員が加つて居る。茶話會を以て純山縣系とせば、無所屬は准山縣系とし、共に官府萬能主義を奉ずる點は一つてある。此團體の性質と大浦・若槻等の履歴系統とを併せ見れば、たとひ同志會員なるにせよ、心からの政黨主義者てないことが分る。

○殊に大浦の率ゐて居る舊中央黨なるものは、官權を謳歌し、政黨の發達を阻害したる大成會（初期議會の純御用黨）國民協會、帝國黨の後身で、熊本國權黨を除くの外、一定の地盤のない政界の浮浪人である。舊國民系は大浦黨を政黨化したものと思うて居ても、大浦の目には國民系を官僚化したものと見えるかも知れぬ。

○次官級は内務の下岡忠治、大藏の濱口雄幸、農商務の上山滿之進、司法の鈴木喜三郎等を長系の復活者とすべく、其中純山口は上山一人である。が下岡は女房を長人某より迎へ、如何にすれば長州人と認めらるゝかに腐心して居る一人であるから、是れも長に歸化したものとして差支へなく、又た本人も斯く看る方が滿足であらう。

○五人の中で一頭地を抽けるは下岡と濱口で他の三人は大して優劣がない。下岡は二十八年前大藏次官勝田主計・奉天總領事落合謙太郎・警視總監伊澤多喜男等と

同時に大學を出て、政治科三十人中の四番目であるから、試驗の點數を以て人間の評價を定める官僚主義よりいへば、無論出世帶に入つて居る。

○初め地方の參事官、書記官を勤め、それも京都とか兵庫とか好方面に廻つたが、一木が第一桂内閣の法制局長官に爲つた時、法制局參事官となり、間もなく秋田縣知事に進み、夫れから農務局長・農商務次官・樞密院書記官長を歷て今日に及んだ。

○彼は初めより大浦系に屬し、其關係から山縣にも桂にも知られた。知事に爲つたのも大浦の推薦に出て、農務局長も農商務次官も大浦の農相たりし時に於てした。山公が特に彼を樞府の翰長に取立てた處を看ると、信用程度の餘程深いことが分る。

○彼は身長五尺に滿たないチンピラで、風采の揚らざること夥しく、一寸見れば大學驅出しの青二才に見えるが、是れでも相當年を拾ひ、却々ヒネた處がある。秋田の知事になつた時、縣民は嘸かし堂々たる男だらうと窃に其風采を想望したが、實際を見て案に相違し、馬鹿にした風があつたが、縣會に臨んでもテキパキ答辯し、仕事も著々遣つて退けるので、其侮るべからざるを知つたさうである。

○見掛けはケチでも智惠は相當に廻つて、裏面でいろ〳〵仕事をする。前年南北正閏問題で世間を騷がした時、彼は元と藤澤南岳の門下生であつた關係から有ゆる手段を以て代議士の藤澤元造を軟化するに務め、トウトウ若い者の一生を誤らせて仕舞うた。

○山本内閣が文官任用令改正案を樞密院に附議した時も、彼は顧問官の間を奔走して妨害運動を試み政友系から睨まれた。小柄だけに立廻りはマメであるらしい。

○内務次官になつたのは山縣と大浦の談合の末で、大浦は彼を通して内務を掻廻し、彼も大隈を眼中に置かずして專ら大浦の指圖を受け、一面には山縣の目附役を仰せ付かつた譯である。是より先き加藤高明は斯かる事と知らず、一木をして目白へ有松英義を貰ひにやると、公は首を傾け、内務次官はチャンと定まつて居る筈たがと言つたさうであるが、流石の加藤も大浦の

早手廻しに驚いたさうだ。

○濱口も下岡と同期で成績は三番目である。彼は田尻稻次郎の感化を受けたと同時に、同郷の先輩仁尾惟茂にも引立てられ、仁尾が專賣局長官を罷める時、久しく其下に使はれて居た彼を後任に推薦した。一昨年第三次桂內閣の遞信次官になるまで專賣局を預り、殊に當時の次官若槻と肝膽相照らしたらしい。

○後藤が滿鐵を乘取つた時、人材網羅策と稱して官僚の若手を理事に擧げたが、大藏省から濱口を取らうとして、二度も三度も自宅を訪うて懇請に及んだけれども、彼は考へる處あつて應じなんだ。後藤も彼に囑望し、彼も餘程後藤の知遇に感激したと見え、其人物を賞めて居たが、一昨年後藤の下に次官になつたのは其關係からであるまいか。

○同志會に入つたのは桂なり後藤なりに對する義理立もあるが、一は若槻の勸誘に因り、衷心より黨人生活を志願した譯でない。隨て何處までも官僚氣質を失はない。黨では格別重要の位置を占めぬが政務調査の方では缺くべからざる人となり、土佐人だけに辯も相當に立ち、恐らく大藏省の役人中一等の辯者であらう。

○頭髮をモヂャ／＼生し、ドス黝い顏に大きな眼玉を光らせ、春夏秋冬を通じて變色した古フロックを著け、見るから蠻氣野臭を帶びて居るが。是れは田尻に感化された結果で、大藏省には北雷主義の實行者が多いが濱口は特に目に立つ。

○若槻の下に次官になつたのは、從來の關係上さもあるべき事で、私の情誼を離れて單に仕事の上よりいふも大藏省の事情に通じたものを擧ぐるは無理もない。が、首腦が總て屬僚上りであるから、大藏省は全く屬僚政治である。

三

○上山は同じく二十八年生であるが、法律學科の出身で學校の成績は中の部であつた。大浦が山口縣知事在職中、其下に參事たりし時に初めて關係が附き、更に農商務大臣になるに及んで山林局長に擧げられた。

○大浦は自分の出身が出身だけに、巡査上りが性に合ふと見え、務めて其方の人間を重用し、然らざれば法制局の學士を採ぶ。現に下岡も上山も法制局から貰ひ受けた。是れといふも自分が無學であるから、大法律

家の如く買被るからであるまいか。

○上山は一昨年頃或西國筋の刺史に轉じたが、山本内閣になつて原の爲めに馘られ、今度大浦に拾はれて復活した譯である。是れは大浦が長州に對する義理立てもあらうが、多年贔負にした舊配下でもあり、農商務の事務にも多少明いし旁々女房役として使ふのに手頃であるからであらう。

○大浦の有難がる程手腕もなく、又た本人の自慢する程に法律の造詣もない。彼の形貌が實際の年よりも老けて見るから寂しい如く、其人物も甘味に乏しい。が、役人としては清廉な方で、今までいろ〳〵醜聞の傳つた山林局の長官として一度も妙な取沙汰を聞かなんだ。其代りに平凡の骨頂である。

○今の次官中、大學の先輩は遞信の中谷弘吉に次いで二十四年の鈴木である。同級十二人中の第一位で、又た他に是れといつて頭角を顯はしたものもないから出世頭である。元と地方の判事を勤め、前田孝階に代つて東京地方裁判所長になつたが、一昨年本省に入つて法務局長に進んだ。

○司法省に平沼閥といふやうなものが有るか無いか知らぬが現檢事總長平沼騏一郎は民刑局長時代から部内を掻廻し、次官として益々事を用ゐ、司法省の施設も司法官の任免易置も概ね彼に依て決し、大臣も專ら彼の爲す所に一任した。

○彼は己れを偉くする爲めに、自分の先輩や鬱陶しい人間をムザ〳〵馘つて、自分の乾兒を本省及び地方の裁判所に配置し、着々羽翼を張るに務めた。斯くの如くして己れを中心とする一種の勢力を築いたとすれば平沼閥があるといはれても致方ない。

○彼は長系のチヤキ〳〵で、今まで長州の勢力を擁護するに骨を折つた。海軍のコンミッション問題をあれまでに埒を明けたのは確に彼の力で、檢事總長としての職責上爲さねばならぬが、一面には斯くして益々己れの名聲と勢力を併せ得る爲めに利用し、更に邪推すれば薩派に打撃を與ふるの長州に喜ばるゝ所以なりとの術策に出づともいへる。

○鈴木も平沼閥に入れる一人で、法務局長になつたのも今度次官になつたのも共に、平沼の推薦に出で、其長系なるは言ふまでもない。いくら尾崎が太平樂の議論を吐いても、平沼の勢力の存じて居る限り、部内を自由にするは難く平沼は鈴木を目代にして意の如く振舞ふて居る。

○警視總監伊澤多喜男警保局長安河内麻吉も大隈内閣の爲めにウダツの上つた方で、共に大浦直系である。伊澤は貴族院議員伊澤修二の子で、二十八年の卒業であるが、成績は尻から二番目である。突出しは警視廳で、大浦が警視總監の時、第一か第二部長であつた。日露戰爭後、愛媛縣知事安藤謙介は政友會の策士と謀議し、有名なる九百萬圓の大土木案を提げて黨務擴張を計らんとし、縣下の大問題になつた。

○恰も西園寺内閣時代であつたから、非政友派も安藤

を如何ともすることが出來なんだが、四十二年内閣更迭するに及び、大浦は伊澤を鑑拔して愛媛探題とした。彼は土木事業を縮めて安藤案を打壞し、一方政友派の幹部をフン縛つて政友會に復讎した。それから和歌山縣を經て新潟縣に轉じ、此ても大浦の差金で政友會に不利なる行動をしたから、第二西園寺となるに及びて忽ち原の爲めに首をチョン斬られた。

○それ以來官界の浪人となつて埋れて居たが、今度元の古巣に采配を振る身になつた。彼は親分の如く總て警察本位て、和歌山から新潟に轉ずる時も、役に立つ警部を連れて行つた。

○人間は龜井ほど陰險てなく、安樂ほど善人てなく、川上ほど無學無鐵砲てない。が、頭が單純てあるから、事が起れば人民を敵とするが如き振舞をせぬとも限らぬ。

○安河内は今度警保局長になつて、初めて人に知られた位てあるが、三十年の大學出て四十人中第六位に居るから成績の惡い方てない。第二桂内閣の時、農相大浦は山林局書記官たりし安河内を事務官にして製鐵所に入れた。斯かるは製鐵所の改革といふよりも自分の勢力を扶植する爲め、豫め内部を探らせる魂膽に外ならぬ。

○斯くて安河内は内々製鐵所の内情及び人間の系統を調べ、大浦は此探偵報告に依て人を淘汰し、首尾好く細作(スパイ)の役目を果した功に依り、彼を製鐵所次長に進め、更に今度警保局長に取立てたのてある。

○下岡の外に此二人が警察政治の局に當つて居るのを看ても、内務の實權は大浦の掌中にあることが分るてないか。

四

○翰長職に就いたものは内閣に江木翼あり、樞密院に有松英義あり。前者は二度の勤めてあるが後者は新顏、一は山口にして一は岡山。

○江木は貴族院議員江木千之の養婿て、安河内と同時代の卒業てある。久しく法制局參事官てあつたが、拓殖局の置かれた時第二部長に任ぜられ、次て第三桂内

閣の書記官長になり、故桂公の寵兒の一人であつたから、落城後直ちに同志會に入つた。

○法制の頭も事務の才も相當に具り、文章も一通り書け、若いだけに元氣もあるから、同志會に於てもいろ〳〵黨務を扱つたり遊説に出たりして、官僚系中の働手として認められた。

○桂公が死んでから意氣沮喪した處に、後藤・仲小路相亞で脱黨したので益々悄氣込み、殊に生活上の必要より黨外の人になつた。彼が書記官長になれば、同格の長島隆二も法制局長官か何かになるべく想像され、本人も爾く期待したに相違ないが、江木のみ復活したので味氣なく思うて居るだらう。

○下岡の後に樞密院翰長になつた有松は、小手の利く調法な人間と認められ、殊に官僚思想の最も甚だしい方であるから、山縣系の氣受けが好い。

○彼は岡山縣甚善寺の産、若い時國の小學敎員であつたが、上京して獨逸協會學校に入つた。卒業後區裁判所の小役人から官海に泳ぎ出し、清浦に知られて司法省參事官となり、暫く法制局に居たこともある。それより内務省の局に轉じ、警保局書記官・三重縣知事・靜岡縣知事・警保局長を經て一昨年宮内省に潛り込んだ。

○警保局長になつたのは最初は第一桂内閣の末期で、次は第二桂内閣の時であつた。地方官として特に言ふべきこともなかつたが、警保局長としては之れを前にして、日比谷騷動、之れを後にしては幸德事件などに關して却々働き、此外政治關係の事についていろ〳〵裏面に活動し、手段の是非は別として、兎に角勉强家たることを認められた。

○色の黒い痘痕面のむさくるしい男で、人の前に出ればヘイ〳〵して何處がエライのかと思はれる位であるが、なか〳〵智惠才覺があつて、策を運らす。それも官僚式の策であるから、毒を含んだ小刀細工である。秘密的にして陰險なるは清浦と大浦を搗交ぜたやうな男である。

○從來官僚派の陰謀には必ず彼が參加して居る。長州派が第一西園寺内閣を毒殺するに就ても、彼はいろい

ろ弱點を探り、或は材料を捏造して毒を盛る手傳ひをした。

〇四十二三年の交、千家尊福・松岡康毅等を首領とする木曜會より、杉溪言長以下若干名の貧乏華族を誘拐して別に淸交倶樂部なるものを造らせたのは、主として大浦と有松の筋書て、首尾好く木曜會を破壞した。

〇當時秋元子爵の斡元で出來た子爵談話會は、今まで子爵選擧を自由にした尙友會に當り、一方には伯爵同志會なる團體があつて談話會と氣脈を通じ、共に政黨主義を貴族院に注入せんとした。官僚派は之れを見て安からず思ひ、有ゆる手段を運らして破壞せんと企てたが、有松も其策士として運動した主なる一人である。

〇同志會を叩き付けるには先づ大木遠吉伯を壓迫するに如かざるを思ひ伯が皇室費に關する批評を或る雜誌に公けにすると、有松は奇貨措くべしと盛んに不敬呼はりせしめ、或は老伯爵間を驅廻り、或は松浦伯を煽てゝいろ〳〵邪魔をさせた。又た談話會に對しては、最初から秋元の片腕として創立に盡力した勘解小路資承子を軟化し、其他有ゆる反間苦肉の策を運らした結果、終に二つとも解體するの餘儀なきに及んだ。

〇貴族院に於ても政友會に不利なる問題といへば、議員に對して遊說大に努め、時として晝夜兼行でやる。現に第二次西園寺內閣の時、原內相の第二十八議會に提出した選擧法改正案を、貴族院に否決したのも有松の畫策與つて力ある。

〇法律を以て檢事に新聞記事差止權を與へ、一層新聞紙の働きを窮屈にしたのも或る議員が新聞紙法改正を提案しながら、まんまと有松のペテンに引ッ掛つたからで、折角改善せんとして却て改惡するやうな結果になつた。

〇第三桂內閣の時、彼は突然何等かの要職に就くべきに拘らず、帝室林野管理局長といふ方角違ひの役に任ぜられたのは、斯くして宮中府中の聯絡を保ち、一面には桂公の爲めに新政黨の運動費を取出す魂膽であるまいか。

〇彼は宮內官としてもいろ〳〵裏藝を演じ、甚だしきは林野視察の名の下に、北海道へ出張して道會議員の應援をしたとさへ傳へられた。山本內閣を倒すに就ても宮內省の內から手を藉して居る。

〇いつまでも宮內省に燻る男でないから、早晚復活するに相違ないと思うて居たが、案の如く樞密院に出て來た。是れは無論山縣の所望に出て、長州の忠僕だけに安心して使へる。

〇最後に參謀次長明石元二郎と陸軍次官大島健一に言ひ及んで置く。此兩人を前叙の人々と同じ意味に取扱ふは適切てないかも知れぬが、長閥陸軍の復興に伴つて軍司軍政の要路に立つたのてあるから、復活者の中に數ふるの必ずしも見當違ひてあるまいと思ふ。

○明石も大島も共に參謀官育ちて、實戰の經驗は一度もない。大島は山縣直參であるが、明石は寺內直系である。尤も故川上將軍から女婿になるべき交渉を受けた位だから、初めより長州系にあらず、川上の歿後主人換へをしたのである。

○彼は單純なる軍人にあらず、策士の如く或は豪傑の如く、隨分思ひ切つた藝を行ふ。日露戰爭にこそ出なんだが、當時獨逸に在つて或は波蘭(ポーランド)の革命黨と通謀して國內を騷がせ、或は韃靼人(ダッタール)を煽てゝ鐵道を破壞せしめ、依りて大に露國を牽制した。

○伊藤公の統監時代は朝鮮の憲兵隊長として得意てなかつたが、寺內になつてから、或は献策家となり、時として献策の實行者ともなり、寺內も自分の懷刀として重用した。其代り敵も多かつたやうてある。

○對支聯合會の策士は內田良平・大竹貫一等の如く見られて居るが、黑幕から是等を操縱して居るのは明石てある。聯合會の浪人が昨年滿蒙問題て騷ぎ立てた時も、本年海軍問題て山本內閣を攻擊した時も、彼の手から少からぬ運動費が渡つたといふてはないか。

○明石には軍人の智識と一種の氣骨とがあるが、大島は少し文章が書けるのと、如才なく立廻るといふ外に特長がない、而も參謀次長・次官にまで進んだのは處世術に長ずるが爲めてある。前者が寺內の思想感情を解する如く、後者は山縣の性質を飲込んで巧みに調子を合はすから、自然氣に入る道理だ。

○海軍は山本・齋藤・伊集院・財部等の巨頭を葬つて、薩摩の色を薄くしたが、陸軍は之れと反對に長谷川の下に明石を、岡の下に大島を女房役として益々色彩を濃くした斯くても長の陸軍てないと言へるか。

(六月十三日稿)

趣味の烟草記（下）

黒頭巾

其一

◎烟草は江戸趣味の一半を象徴するものならずんばあらず。燻製の鮭は、烟の香を帯ぶるに非るも、燻の味漂ひつゝあり。江戸趣味の萬般の事物、烟草の香を帯ぶるといふに非ずと雖も、長烟管と提烟草盆との氣分の漂へるものに非るは無し。

◎錦繪に見る書趣は烟草に在り。若し江戸の浮世繪より烟草を除却せば、所謂、手持無沙汰のものとなる可し。浮世繪の人物、男となく、女となく、長烟管を持てる事が、活趣を帶びしむるなり。

◎舊劇は則ち錦繪なり。恰も鷄頭花の如くに、頭を重く飾れる、盛装の花魁と雖も、舞臺に於て、萬一、赤羅宇の長烟管を持つ事無く、或は、敷島、やよひ等の紙巻烟草を吹かしたらんには、お坐の覺めたるものならずんばあらざる可し。

◎舊劇の舞臺に於ける町人は、必らず片手に烟草盆を提げて出るをつねとす。例へば武士の佩刀を提ぐるが如く然り。而して武士も亦た烟草盆を携へて出て來る。舊劇の烟草盆は、チョン髷、月代に調和して見ゆ。必ずしも吞氣には非ず。

◎日本橋は江戸の中心たり。日本橋に近くして江戸橋あり。此の橋は、昔は、名と實と共に江戸を象徴す。今、江戸橋畔に東京郵便局あり。東部遞信局あり。應接室の掲示にいはく、御用談は簡潔に成され度、烟草も成る可く御辛抱下され度しと。江戸橋の昔の主客は先づ烟草を吸はざれば用談の口を開かず、今の日本橋の主客は、烟草を吸はずして別れんとするなり。

◎昔の人は、烟草の烟の中に語る。水無くしては魚の泳ぐ能はざるが如く、彼等は烟無くしては語る能はず。游泳は水に行はれ、談判は烟の中に行はる。是れ江戸趣味なり。江戸といひて、敢て舊日本趣味と言はざるは、江戸以前には烟草無ければなり。

◎舊劇の世話物は江戸の社會を表現す。舞臺に出る主客は、烟管の筒をポーンと音して開くは、來訪を象徴する一形式にして、主人が提烟草盆を携へ出て下に置くは、又た歡迎を象徴する一形式たり。談話は、烟管を抽き出すポーンの響と共に開かれ、烟管を納入するポーンの響と共に閉づ。談話の前後にポーン、ポーンあり。ポーン、ポーンと音すと聞けば、進捗の緩速なるやに思はるれども、其の實は、ポーン、ポーンの響くあるが爲に、談話は、烟草の烟と共に搖曳して甚だ長し。

◎烟管のポーン、ポーンの筒音は、啻に談話の前後にのみ響くに非ず。談話の長短、曲折に隨つて、幾回か隨處に響く。文章に大段落、小段落あると同じく、ポーン、ポーンにも大小、段落の響するなり。「長座敷、烟管、出たり這入つたり」の句は、烟管の出入毎にポーン、ポーンの響あることを暗示するものなり。

◎昔の客は、座敷に就くと共に、先づ、腰を探ぐりて烟管を出し。烟管を腰に挿して退出す。而して其の滯在中は烟管を手にす。江戸の町人だも「吾が家は吾が城廓」なりといへり。客の、他人の家に在る間は、則ち、他の小帝國の内に一箇小帝國を代表するものにして、今日に於て軍艦或は公使館が他の國土に駐劄するに異ならず。乃ち江戸の烟管は、這般の意味に於ては今日の公使館旗、軍艦旗に該當するものならずんばあらず。彼等は他人の城廓、領土に駐劄するの間、つねに烟を擧げて其の存在を證明しつゝあればなり。

◎江戸人が「おさき烟草」を屑しとせざる所以は、趣味より見れば、彼等の烟管は、今の軍艦旗、公使館旗に相當するを以て、他のを借用せず、自家のものを用ゐるを當然とすればなるべし。

◎錦繪に見る人物の長烟管は、つねに皿より薄烟、棚曳きつゝあること、今の火の付きたる紙卷烟草を放在するが如し。長烟管の皿より此の如き喫烟は騰らず、烟を示すは、烟草の實在を證明するの意味なり。

其　二

◎吸烟の法、亦た頗る變遷無くんばあらず。其の細目に至つては、今世の喫烟者と雖も、各人各様の姿態あり、必ずしも一代一様の式あること無し。暫らく其の大體を以て之を言ふ。乃ち維新前後、大勢上、吸烟法の相異あるのみならず、維新前、長烟管ばかりの時と雖も、その中、また一大變革の特筆す可きものあり。

◎邦語に、烟草を吸ふといひ、或は呑むといふ。外國

語にては、吸ふ、呑むと言ひ別けざるを見れば唯だ吸烟の一法のみなるも知れず。吾が國人は烟草を、實に、呑む者もあり、吸ふ者もあり。

◎禁烟の一語は、外國語を飜譯せる漢字なるべし。昔の邦語に「烟り禁め」といふ時は、其の烟は、烟草のみにあらず、頗る廣義の烟を意味す。禁烟が唯だ烟草の一事に限るとは啻に雲煙の相違のみにあらず。

◎今の禁烟の掲示に、烟草のむ事と書けるは珍らしからず。然れども、今人は、烟草をのむといふよりも吸ふといふ人多し。

◎烟草をのむといふは吸ふといふよりも確かに古語なり。古人は、水を呑む如くに烟草を呑みたるなり。今の若き人は吸ふばかりにて呑む事無き者、追々に多くなりて、やがて烟草を呑むといふ事は、一の古文學に屬し畢るに至るべし。

◎鷹録に記すところに據れば、今より百四五十年前まては、烟草を呑むばかりの人多く、吸ふばかりの人は極めて少かりき。吸烟數口、噴かずして全く呑む、少時にして、烟は悉く鼻孔より出づ。然れども往々、吸ふばかりにて呑まざる者あり。この吸烟法を『伊達烟草』、或は『花烟草』といふ、極少數の洒落者の數奇行爲に屬し、目して今の所謂ハイカラと爲せるものたり。故に、大體を以て言へば、吾が吸烟法は「呑む」より「吸ふ」に移りたるもの也。

◎文化、文政は江戸趣味の最も爛熟したる時代にして絢爛たる文藝の光彩を煥發したるの時也。而して此の時代趣味を象徴するものも亦た烟草なり。此の時に、烟草を吸ふこと大に流行し、呑む法廢れて、烟草を呑むは唯だ老人ばかりとなり、世を擧げて、伊達の花烟草の世となれり。

◎文化文政は江戸趣味の精華なり。文化文政を象徴するものは、芝居則ち錦繪なり。而して錦繪を彩るものは「伊達の花烟草」の烟ならずんばあらず。伊達の文化文政趣味は、吸烟法をも伊達ならしめたり。

◉近世の人文發達の大時期は必らず趣味ある色彩と形式を以て烟草に表現せらるゝこと、必らずしも文化文政と明治維新とのみに非ず此の如きは中世以前に無くして、近世及び將來の歴史に必需なる社會趣味ならずんばあらず。

其 三

◉昨日、入梅の第一日。朝は晴空なりしを、午後より雲湧き雨來る。今朝未明、雨勢、瀑の如く、夢に雨聲

を聽く。朝來、書樓に登り、明窓に向つて淨几を置き、滿窓の蒼翠に對して筆を執る。雨已みて、近樹、遠樹、渦卷ける緑の梢を縫ひつゝ、烟の磅礴して昇り行くを見る。恰も萬木の根が、天半の雲烟を吞みたるを、再び、地上に向つて噴き出すにも似たるなり。

◉烟草を專ら吞みたる時代の古人が、烟草の烟、吾が五臟六腑を循環し行くと考へ居たるも亦た興味あり。和漢の古醫書、烟草の醫法を說く者いへるあり、烟草、口に入れば、直ちに胃脈を循つて。行き、內より外に達す。四肢百骸、到らざる所無しと。或は曰く、烟を吞む、頃刻にして一身を週る、人をして通體俱に快からしむ、仍て之を噓出すと。

●古人或は、烟草を吞むに非ずして、「食す」となし、其の食法を說いて、吞烟法を敍述し、飢ゆるときは飽かしめ、飽く時は飢えしむ、食物の尤も奇なるもの也と謂へり既に烟草を以て、食物となせるが故に、烟草の氣、人の全身を循環するものとなせるなる乎。

◉烟草の烟が、胃に入り、肺に入り、全身の脈管を環ぐりゆくとなすの說は甚だ詩趣あり。古人、未だ神經の說無し、則ち烟、直ちに人身の內部を循行すと爲さゞるを得ず然れども烟草の烟が人の體內を遍歷することと林間の雲烟の枝幹を纏ひ繞りて磅礴するが如くなると冥想する時は、又た一段の詩趣、黃表紙の作者も未だ書き到らざりしもの無くんばあらず。

◉「尻から烟の出る程、烟草を吸ふ」の俗語あり、大喫烟家を笑ふなり。此の語、單に、趣味の語として見る。然れども此の語の傳來の甚だ古きを見れば、初めて此の語を語りし頃の古人は、事實として語りしものなるべし。

其　四

◉女と烟草との關係の殊に緊切にして興趣の深きものあるは、吾が文藝の、歐洲人の社會趣味に異なる所以の一ならずんばあらず。今の新劇に、女と烟草との干係の薄きは、烟管すたれて卷烟草の世となりたればなる可し。

◉昔・和蘭人の長崎に來りし頃。丸山の游女に逢ひ、其の朱羅宇の長烟管に驚倒せずんばあらざりき。彼等は、歐洲にては婦人の前にては男子も喫烟を遠慮するにと言へり。林道春は、吾が國の烟草は先づ閨閤男女の間に入りたれば、歐洲と全然、其の由來を異にすといへり。

●日本の文學に、女を描く者、烟草を描かずんばあら

ず。又た烟草を說く者も、併せて女を說かずんばある可らず。「魂返す反魂香」は八重垣姫にあるのみに非ず。相思草、反魂草の名は、啻に烟草の名に負ふのみに非るなり。

◉黄表紙ものに、烟草戀中立（けむりくさこひのなかだち）あり、鳥居清倍の書作なり。烟草屋の姉妹の娘を主人公とし、色男にはうづら張の烟管を用ひ、流行の烟草、番烟草（バンタバコ）及び烟管、雁首、灰吹などを假設して、戀愛を脚色したるが、其の中にて、烟草方と烟管方との鬪爭も面白ろく、烟管方は、松葉山に籠城せる烟草方を、烟草をいぶして責め立つれば、烟草方は銀流しの熱湯を浴せて眞鍮張の烟管方を熱殺する等、太平記式の軍談も混入せり。清倍は草雙紙を書きたるは至つて稀なれば、此の本の挿畫は殊に珍とすべく、此の珍とするに足るの彩筆を以て、烟草と戀との干係を書きたるは興味ある事なり。畢竟、「烟草は戀の媒」の一語、吾が近世文學の一精采を爲ずものと謂はずんばあらず。

◉江戸趣味の烟草の文學に現はるゝは、勿論、俗文學の一途に限れり。漢詩人、道學先生は、是ほどの好題材を一切、閑却して、唯だ、相思、反魂等の熟字を排列するのみにして、烟草の詩趣、畫趣を味ふ事を爲さゞりき。三百年來、烟草に關するの漢詩すべて月並ならざるは無し。漢詩人は寫實を爲さゞればなり。

◉金口時將紅袖拭、銀頭或借寶釵穿の詩は、紅袖の美人、袖を以て細煙管の吸口を拭ひ、或は簪を以て雁首の掃除を爲すを詠ずるもの。多少の嬌態、其の中に見ゆ。當時の漢詩には珍らしきものとす可く、但し、詩中の細烟管は、吸口は金口にして雁首は銀頭なるを知る。

◉金烟管は元祿の豪華の一象徵なり。此の頃は鐵烟管尤も流行りて、俠客の烟管には、大なるピストとも見ゆる程のものもあれども、學者紳士も亦た鐵烟管を用ひたり。物徂徠の五十の賀に、鐵烟管を贈呈せし人もあり。鐵烟管は元祿の標準烟管にして、近來の眞鍮或は銀烟管にも相當すべし。されど金烟管もあり。伊達の荒事師には鐵烟管の殊に巨大なるを調和せしむ可く、明眸皓齒には細身の金或は銀を可とすべし。則ち市川海老藏には鐵幹を握ませ、水木辰之助には金口を啣ます可きなり。

其五

◉粹、無粹は烟草の烟に現はるゝは、昔も今も同じ事と見ゆ。大將乃木が、つねに朝日を吸ひたるは、粹な

る人には野暮と見ゆるなるべし。

●通人といはるゝ程の人にして、烟草に浮身を窶さゞるは有らず。本田あたまに銀烟管、三枚重の黑小袖などゝいへるは昔の十八大通の事なり。今頃の通人粋士を以て任ずる者は、ハイカラ頭に、縫取りの靴下を穿きて、烟草に、パイプに意匠を凝らしつゝある也。

●粋に烟草の必らず伴ふ事は、黄表紙の四天王大通仕立に「生れ付いて意氣な事が好きて、六七歳から烟草を飲み」といへるを見るべし。但し今世は、兎も角も、少年禁烟法の世の中なれば、此の如き少年粋人は稀なるべし。

●袋物といふは粋の袋なるべし。卒然として人に逢ひて懐中物を示すといふ譯にも行かず。才人が容易に其の才華を示す所以の方法は、才を袋物に寓するを可とすべく、袋物は烟草に關するものを以て、尤も便利にして氣の利きたるものとせずんばあらず。

●烟草は社交機關の趣味あるものとなれり。江戸開府の初に烟草の普及を見たるは、天が、鎖國時代の江戸趣味に一精彩を加へて、之を寵遇せし所以ならずんばあらず。烟草無かりし王朝の公卿才媛は、櫻かざし、笛を吹き、琴を彈じ、歌など詠みて才華を鬪はしたり。江戸の才人は唯だ一の烟草あれば足れりし也。

◎酒と烟草、烟草と女、烟草と將棊。烟草は局面の變化あり、主客の異動あるに隨つて、いよ／＼其の興味を増す。唯だ一の烟草にして、無數の脚色を生み出し來る。

其　六

◎今、烟草は少年文學に、幾多の畫題を提供し來る。然れども三百年來、烟草に關する童話の傑作とす可きもの甚だ多からず。吾輩、試みに其の一二を擧ぐ。

◎碁の笑話は甚だ多し。吾が近世の笑話の題材は、坊主と、泥棒と、碁打と丁稚と、田舍侍、馬鹿婿、吝嗇漢、酒客等殊に多し。また以て社會の勢力と趣味とを見るべし。此の中に未だ煙草を加へざるは惜むべし。而して烟草は必らず碁打に伴へり。

◎碁狂が互に夢中になつて黑白を鬪はすの時、烟草盆の火入に赤炭を置くといふ話は、既に、講談の常套に屬す。或は曰ふ、碁客對戰す。竊かに甲と乙との烟管を取り、一方に雁首ばかりを集め、他方に吸口ばかりを集む。乙、吸へども／＼烟來らず、幾回となく吸口を火入に擬しつゝあり。甲は雁首を口中に挿入す。「コレハ間違つた」と稱す、蒼皇として、烟管をクルリ

と回轉せしむ。眼は依然、盤面に注ぐ。烟管回轉して再び雁首口中に來る。「オットまた間違つた」またクルリと烟管を回轉せしむ。

●譯準笑話に曰く、或る田家の裏畑に一箇の異草を生ず。珍らしき花にして紫色なり、主人、何の花たるを知らず。或は言ふ、これ烟草の花なり。主人、顏を顰めていはく、誰か此に吸殼を落したるぞや。

◎啣へ烟管の畫趣、野趣は、馬を引きて並木道を行く頰冠の馬子に存せずんばあらず。人文の開けゆくと共に、這般の畫趣、漸く、僻地に驅逐せられ、漸々、衰亡に近づきつゝあり、惜む可し。

●今の世に於て、烟管の舞臺は削減せらると雖も、紙卷烟草の領土は帝國に瀰漫す。何の國に於て、如何なる大富豪と雖も、烟草の領土に比敵す可き勢力範圍を有し得る者あらず。人物と烟草とを脚色する時は、まさに幾箇の新題材に滿てる童話を作り得可きなり。

其　七

●烟草と女の畫趣は、今に於て、女を美ならしむる所以の一要件たらずんばあらず。烟草を吸ふ女は、烟草の畫趣を解するを要すること、恰も、自己の美容に調和する衣服及び模樣を研究すると同じかるべし。畢竟、烟草を吸ふ女の烟草は、女の爲には一の畫模樣たらずんばあらず。

●ボンネットを戴ける鳩胸の女には、烟管は似合はしからず。髮を結へる女の金ノ入齒に金烟管は、西洋インキの錦繪の如く、キラ／＼するばかりにて詩趣無し女の細烟管は銀管にてあり度し。

●西洋にても、日本にても女の卷烟草は細卷なるを宜しとす。假令、大なる女なりとも、烟草の太卷なるは似合はず。細卷は優さしく愛らし。それ丈け男の細卷啣へたるは、愛らしき男の女靴穿けるが如く、厭味あり。男は如何に優さしくとも、男の靴を穿かざる可らず。

◎烟草の太卷、細卷は、かねて男性美と女性美とを象徵す。「やよひ」に藝者烟草の名あれど、寧ろ唯だ「女烟草」の名にてありたし。

●烟草の太細は、また箇人的色彩と調和す。女なりとも背景如何に依りては、細卷の慊らぬ時もあるべし。宴席に侍する美人の臆面無く敷島を吹かしつゝあるは畫趣を沒却す。而して老ゐたる品善き女の、淑やかに銀烟管を弄せるは、老梅の梢に白花を著けたらん趣あり。金色夜叉の赤樫滿枝には、埃及卷の金口烟草似合

はしかる可く思はる。「復活」に見たる松井須磨子の女牢中のカチューシャの金口烟草を吸ふ姿態を見れば、彼女は、かねて烟草の趣味を解するにや。

其　八

●蒟蒻本には烟草の氣漂へり。其の中、深酷にして辛辣なる可笑味を、最も奇妙に描き出して、人を笑倒せしむるものは、半可通と烟草となり。

●半可通あり。人柄善き息子を誘ひ、己が自稱繩張の青樓に登る。三更、彼、息子の座敷に入り來り、若き男女の前に、手前味噌の大通を振廻はす中、吸殼の膝上に落ちて、仕立おろしの上田縞の燃ゆるを知らず。美人に注意せられ、「ホイーと言ひ、揉み消したるばかり、美人の面前に、更に憖かず。長話を說き畢りて、ひとり廊下に出で去る時、ひそかに行燈の火影に、仔細に、燒痕を點檢し、試みに指を入れて見て、燒穴の意外に大なるに悲觀す。

●京傳が、蒟蒻本に、烟草の諧趣を描くの一節、人をして其の才華を感歎せしむるものあり、自から評して、源氏螢の卷の風情ありといふ。京傳のは、妓、來り、長烟管にて烟草盆を引き寄せ、烟草を吸付ける。パット火光起つ。其の火影に、客の顏を見て見ぬ振ずといふ。何等の詩情ぞや、才筆ぞや。

其　九

●最近に、總理大臣官邸の日蘭協會に、伯大隈を見る。老健無比、吾が國史に極めて稀に見る人なるべし。例に依つて席上、最も多く談ずる者は彼也。唯だ彼の烟癖あるを以てして、此の日、烟草を吹かすこと、舊の如く盛んならざるやに見ゆ。

●公伊藤と伯大隈とは最近政壇の好敵手なりき。公伊藤は葉卷を吹かし、左の兩指を以て、巧みに烟灰を彈き落しつゝ、其の談話を調節す。伯大隈は專ら紙卷を吹かすを以て談論を調節するに適せず。其の長廣舌を揮ひ來る時、烟草を吸ふの暇無く、烟草は、自から燃え盡して、灰は王蜀黍の實の如くに聳ゆ。

●吾輩も亦た稍烟癖あり、左手の食指と中指との間、烟草の色に染まる。然れども近來、攝生して頗る其の量を減ず。吾輩の未だ若きを以てして、既に多く吸はざる時は、吸烟を節するを以て伯大隈を老ゐたりといふを得ず。彼は今より少しく烟草を吸ひて、ます〳〵多く氣焰を吐くにやあらん。

●伯大隈は七十七にして首相となりて以來、日々に其の體重を增加しつゝありと聞く。蓋し禁烟、節烟は體

重増加法の尤も的確なるものならずんばあらず。吾輩の肥健を來たすも、先年、一時、禁烟の結果なり。伯大隈は、宿志を酬ひて氣力の剛健、自得するのみにあらず、烟草を節して健闘しつゝあるは、彼の體重を増加しつゝある所以ならずや。然れども彼の老齡を以て、這般の効果を體驗し得るを見れば、彼も尚ほ若き也。

昨日、吾が兒、庭樹を刈り、また自から新案し來る。今日、新晴、薫風、涼しげに新斐せる綠の梢を吹き來る。樹下、松葉牡丹の紅、爛漫なるに白き蝶一つ低く飛びめぐる。まさに稿を畢らんとして、また烟草の一本を吸ふ。

黒頭巾記

問題の人・噂の人

鐵拳禪

▼地方長官會議が濟んで、歸任の途に上らうとすると、其の背後から大聲に『暫く待て』と呼び留められたのが樺太長官の平岡定太郎君だ。臨に斑持つ平岡君は少し蹌踉き加減に振返ると、はや其の首が前に落ちた。ポンチ畫なら斯う描くべき所だが、實際は平岡君が六月四日に辭表を提出すると、其の翌日は依願免官の辭令が下りて、後任には栃木縣知事の岡田文次君が任命されたのだ。

▼平岡長官の政友會贔屓は周知の事實で、樺太の利源を其の與黨に開放した事も亦公然の秘密だ。彼の林産拂下や、漁場問題では、島外者の利益をのみ圖つて、島民の不利を顧みないやうな、本末を顛倒した殖民政策を執つて居たものだ。そして其の島外者と云ふのは、政友會の巨頭と關係がある者だから、彼れは直接間接に政友會の財源を好意的に提供して居た樣なものだ。

▲平岡長官の失敗は、單に夫れのみでない。彼れは最初炭富開發主義を執つて進んだが、伏瀧炭や泊居炭の採掘に失敗して、樺太牧民史上に一大汚點を印した。次に林産開發主義を執つたが、テレピン工場も乾溜工場も、皆目算が外れて了つた。そこで彼れは農本主義に轉改したが、夫れも結果が思はしくない。が、島民の希望を容るゝに吝なる彼れは、水産殖民主義に良方法を發見することが出來ず。漁よくば跡を濁して他に飛び

去らうとして居たが、滿鐵の總裁にもなれず、さりとて勇退もせず、首鼠兩端を抱いてゐる間に、到頭首になつたのである。

▼新任長官の岡田君は、赤門出は赤門出だが、確か選科出身の筈だ。警視廳に奉職中は、外國語が流暢に操れるので、重寶がられて居たつけ。尤も近眼ではあるが、上目づかひして人を見る癖があつて、何となく警察的な、油斷のならぬ所のある人物だ。知事としては一二縣を經ただけで、大した治績も擧げて居ないが、今回樺太長官に任ぜられたのは、非常な昇進だ。平岡君の失政に鑑みて、適切な殖民政策を確立し、前轍を踏まぬ樣に努力すべきだ。

▼内閣官制では、地方長官の進退は閣議を經る事にはなつてるが、夫れは一片の形式だけで、大抵は内相の專斷で決する。現内閣の兼攝内相は大隈伯だが、多くは大浦子の言に聽いて決するさうだ。で、岡田君を拔擢したのも大浦子の指金で、矢張警察系の人物を重用した譯さ。新任栃木縣知事の北川信從君は、善い人だが、まだ官界の視線に映しなかつた鎭星だ。並木がくれに螢火ほどの光を放つのが、最上で無いか知らん

▼是れで兔が附いたのかと思つて居ると、六月九日に又々地方長官の大更迭があつた。地方長官會議に小手調べをした結果と見えて、政友會贔屓の知事や、老朽者は殆んど遺憾なく免黜された。併しながら、此の大更迭も亦情實が纏綿して居て、大浦系の人物を擧げたるのみならず。同系に近い人物は老朽や無能でも陶汰されずに濟んだ。兼攝内相の黨閥打破も怪しいもので、回一回毎に官僚的色彩を濃厚ならしむるに過ぎぬ。

夫れに今回は警部長の輩に至るまで免黜したので、地方行政の刷新よりは總選擧若くは同志會の黨勢擴張の準備らしく思はれた。

▼休職の面々は、川島純幹(鳥取)永井金次郎(高知)堤定次郎(岩手)不破彥磨(佐賀)香川輝(福井)高橋琢也(沖繩)の六名だ。香川君や高橋君を前内閣時代に任用したのが既に誤つて居るのだから、現内閣の馘首したのは當然で、寧ろ其の陶汰の遲かりしを怪む。不破君は二股膏藥の氣味で武富遞相から睨まれたのださうだ。

▼鳥取は夙に同志會の勢力を扶植せんと試みてゐる所で、政友會の狂奔者たる川島君を据置いては都合が惡い。のみならず、彼れは善政を行ふ手腕もなさ相だから、之を馘つて大浦配下の農商務書記官三松武夫君を封じたのだ。永井君は岡七郎が原に推薦した人物ではあり、學校關係からは奧田に近いので、同志會全盛の高知には不向である。で、大阪内務部長の土岐嘉平君と取り替へた。岩手は又原前内相の地盤で、之を覆すの必要上から臺灣仕込の硬骨大津麟平君を差向けた。大津君は熊本の生れで、土匪征伐などには隨分蠻勇を揮つた、膽力の据はつてゐる性だから相應に荒療治をやるだらうとの事だ。

▼一寸更迭の妙手を試みたのは、岡山の湯淺倉平君と靜岡の笠井信一君とを、香川の鹿子木小五郎君と和歌山の川村竹治君とを、互に入れ替へた事だ。斯うして互に其の失政の跡を掘繰せるのも一種の方法だが、餘り褒めた事でない。行政刷新の競爭をやらせる積りならば、他に方法もあらうと云ふものだ。まさか川村君は政友會に近いので、早稻田出身の

鷹子木君に監視させようと云ふ、兼攝内相の苦心に出でた譯でも無からう。

▼埼玉の添田敬一郎君が山梨に轉じ、宮城縣内務部長佐藤孝三郎君が福井に、山形縣内務部長大味久五郎君の沖繩に昇進したのは、平凡の更迭だが、山梨の若林賚藏君が佐賀に轉じ、休職の昌谷彰君が埼玉に蘇生せるは、多少の注目を値する。若林君の山梨に赴くや、先づ若尾の機嫌を取り始めて富豪を籠蓋せんと試みた。根が警察向きの人物だから、片ッ端から切り捲らせれば、可なり辛辣な事もやるさうだ。其の手腕に至つては、不破君なぞとは段違ひだ。昌谷君は大浦系の人物だけに、埼玉縣の政友會員は白い眼で彼れを見るに相違ない。政爭の激烈な地方なれば依怙偏頗のない行政振を見せることが肝腎だ。

▼大隈内閣組織以來、政黨の旗幟が稍鮮明になつて來た。試に色別すると政友會は農民黨で、同志會は商工黨だ。て、同志會を味方とする大隈内閣は、社會政策を唱へながら、實際は富豪に媚びる傾向がある。營業税の全廢を企謀して、他に及ぼさないのも矢張商工業家の利益を保護するのだ。より以上の喫緊事たる通行税や、織物税の全廢を試みないのは、社會政策として決して當を得たものでない。地租輕減を敢てしないのは農民に薄い證據である。殊に今回の實業大會の出席者には、鐵道院は無賃乘車券を發行して優待したさうだ。現内閣の富豪懐柔策が、到る處に婉曲に行はれてゐる。

▼東京市政界にも、實業團が著しく勢力を得て來た。中野武營、豐川良平、加藤正義、星野錫、大橋新太郎等の巨頭が現はれて、市政刷新と高飛車に出た。中野君は商業會議所會頭、豐川君は三菱の番頭、加藤君は郵船副社長、星野君は東京印刷の經營者、大橋君は博文館主で、孰れも代議士格の連中だ。夫れが市會に現はれたので、一寸色めき立つた譯なのだが、斯樣な顔觸で市政の刷新は怪しいものだ。

▼代議士で市會議員に出たのは、星野君の外に、村松恒一郎、黒須龍太郎、清溪太郎、高橋義信、小泉策太郎等で、都合六名ある。彼等がまだ代議士の職責も十分に盡してないのに、市政刷新を標榜するは烏滸がましい次第だ。中には清君や高橋君の樣な常盤會派もあるが、他は悉く廓清派なのだから、今後は其の宣言を實にするの責任がある。議會に在つて徒らに咆哮したり、起立したりする位では、到底市政の刷新を必期されるもので無い。

▼市政の刷新は、彼等の言責を重んじ、身を謹嚴に持するに由りて、始めて其の第一歩を踏み出すことが出來る。從來市會議員は、有利な商賣で、代議士以上の收入があると稱された。然う云ふ利益本位から、代議士も爭うて市會議員になつたものだ。例せば市公金を低利で預る銀行からは感謝金が内密に提供されるとか、砂利工事の請負とか、塵芥糞尿の掃除とか、乃至は何々市營問題の起る毎に、常盤會は勿論、常盤會ならずと雖も、黄金臭に染んで居たのだ。今後も斯う云ふ利益問題が横つて居り、夫れに電燈統一とか、東京市築港とか云ふ問題が起るに相違ない其の際に實業團の諸君が、如何の態度に出づるか、ちよつと觀物だ。

▼多年江間俊一君の占めて居た市會議長の椅子は、中野君の手に歸しさうだ。江間君は常盤會派の錚々たるものであつたが、安藤兼吉君と面白くない關係があり、爲めに今回の選擧には非常盤會を標榜した。尤も同君は數年前から元兇を廢業して、心身鍛錬に熱中して居た。今回の心機一轉も、其の邊に原因するだらうとの事だ。

▼中野君は、往年代議士として下院に鳴つたものだ。織物税廢止案に就ては、熱烈火のやうな論議を鬪はして居た。が、どんな機會であつたか政友會に入會しようとして、却て原君の爲めに其の輕々しく進退すべきに非ざるを忠告された事がある。爾後原君の厚意を諒とし、一時怪氣焔に手心を加へたさうだ。一體中野君は温厚だが、又頑強な所のある人物だ。議長としての手腕は或は江間君に讓る所があるかも知れぬが、其の公正な態度と調和性とは、其の缺點を補うて餘あるだらう。

▼刷新、廓清は、大正新政の流行語で、到る處に應用されてゐる。武庫離宮事件から宮内省の廓清が行はれ、渡邊宮相の辭職、次で隱居となり波多野敬直卿が其の後任となつた。夫れ以後入江爲守子が侍從長に任ぜられ、徳川達孝伯が侍從職幹事に拔擢された。而して此の一子一伯が貴院院議員を辭したので、華胄界の政治的色彩に多少の變化を來した。所謂現狀打破、局面展開の序幕は、此處にも開かれたのだ。

▼入江子は、個人としては趣味の人だ。日本美術の鑑賞力があり、漢籍の素養もある筈だ。其の思想は必ずしも新しくはないが、何程か時勢を色讀してゐる。政治家としては研究會の智嚢で、三島子と共に畫策して上院に覇を唱へて來た。けれども、彼れは表面に立現はれず、始終裏面に於て活動して居た。裏面と云つてもダークサイドを歩んだ譯ではなく所謂椽の下の力持をやつて來たので、其處に彼れの長所があるのだ。彼れを失つた研究會は、多少の打撃ならざるを得んやだ。

▼徳川一家は、政友會に近い。上院で海軍擴張案否決の際にも、彼等は反對の側に立つた。で、近年同族議員選擧の際は、隨分官僚派から壓迫を蒙つて居たやうだ。そんな譯で、達孝伯の新任を見て、政界から徳川家の勢力を殺ぐ手段だとか、政友會の氣勢を挫かんが爲めだとか云ふ者もあるが、全然さうでない。達孝伯の補缺に、其の一味の松平賴壽伯が推されたのを見てもわかる。彼れは入江子のやうな謀士ではなく、謹厳一方の人だから、侍從職幹事などは先づ適任であらう。

▼赴任の途に上る數日前、頭山翁の許で『今度歸國する時は、大方骨になつて歸つて來まつしようや』と、山座公使が云つたが、其のお國訛の戯談が讖をなして、彼れは遺骸となつて歸つて來た。當時覇氣滿々たる彼れを新橋に送つた者は、何人も今日あるを豫期しなかつたが、未だ志を成さないで斃れたのは惜いものだ。

▼駐支公使の後任は、方々にお鉢を持つて廻つた末、遂に智利駐劄公使の日置益君に決したさうだ。最初加藤外相は、内田康哉子と石井大使とを後任に擬したが、石井大使は動し難い事情があつたので、内田子に交渉した。子は何等かの條件の下に起ちさうであつたが、前外相の肩書が邪魔になると、夫れに周圍の事情が許さないので、到頭謝絶する事にな

つた。[illegible]談人形の肘鐵は、近來の大出來だと評した者がある。

▼日置君は伊勢生れで、明治二十一年の帝大出身だ。三十三年より三年間一等書記官として北京に在勤し、日清通商追加條約の談判などを擔當した事がある支那に縁故があると云へば夫れだけで、山座君や水野幸吉君のやうに、最近の事情には通じて居ないのみならず、其の手腕も亦水野君を擬するとは思はれない。

▼壯時は圭角稜々たる所があつて、儕輩に畏敬されたが、五十二歳の今日は最う圓熟して、尠からず鈍角になつてゐる。けれども、温厚なやうで案外に剛毅で、事に當れば思ひ切つた行動を取る人物だから、『或は』と期待されぬでもない。併し、其の『或は』は永久の『或は』で終るかも知れない。小村侯や西男と云ふ望の綱が切れて、南米の邊土に蟠屈して居たのを加藤男に拔擢されたのだから、其の知遇に感じても粉骨碎身すべきだ。

▼尾崎法相は、憲政擁護運動以來、予が同志と云ふ事が無暗に好きになつた。テオドラ夫人は年來の同志には相違ないが、然うした優しい同志が京都にもう一人ゐる。夫れは尾崎君の時々惚ける、祇園の藝妓川勝花蝶と云ふ美人だ。此の美人は或動機から政治に興味を持ち、憲政擁護熱の昂騰した當時、尾崎君に書面を寄せた。夫れが縁となつて、京阪地方遊説の際、藤井前代議士の別邸で會つた。處が其の氣性が尾崎君の氣に入り、爾後清い交際を續けて居るが、彼れは常に花蝶を稱して、日本女性中の唯一の政友だと云つてるさうだ。

ラヂウムの効能と我國の鑛泉

理學士 石谷傳市郎

世人のラヂウム熱は、近來餘程高潮に達して居る様に見受ける。六七年前、自分が、鑛泉のエマナチオンを調査する為に、豫備旅行を始めた頃には、至る所て、實に歯痒い思をしたのであつたが、此一兩年の傾向を見ては、誠に隔世の感がある。ラヂウムの、此く迄喧傳せらるるに至つた原因の一つは、勿論其高價なる事て、目下我國では、時價一瓩（ミリガラム）につき參百圓、即ち一匁の價格壹百餘萬圓てふ高値を現じて居て、しか

も、物品拂底と來て居るのだから驚かざるを得ない。加之、ラヂウムは種々の病氣に特効があるといふので、藥種屋の巧妙なる廣告もあり、温泉屋の如才なき吹聽もあり、果ては、發疹窒扶斯にも、ペストにも、一々ラヂウムがお引合に出るといふ趨勢、遂に何も知らない人をして、神様か何かの様に思はしむるに至つたものらしい。

言ふ迄もなく、ラヂウムは神様では無くて、今を去る十六年前、即ち明治三十一年に、キュリーの發見した一つの金屬元素である。其年、キュリー夫人は、郎君と共同し、且つベモンを助手として、非常なる苦心の後に、多量の原鑛から僅に少量のラヂウム化合物を分析し得たのであつた。後、十數年を經た明治四十三年に、同夫人は、デビエルンと共同して、純粹ラヂウムたる、光輝ある白色の金屬を極めて僅か得たのであつたが、之を空氣中に放置すると、忽ち黑變するし、又水に逢ふと、劇しく之を分解して、其中に溶解する等の性質があつて、其保存法は容易では無かつた、所が之を、應用する際には、純粹ラヂウムでも、化合物乃至不純物でも、其作用に、少しも性質上の差異を示さないから、我々は必ずしも、純粹ラヂウムを所有するの必要はない。されば醫療其他の目的で、市場にラヂウムと稱して賣買されて居る物は、鹽化ラヂウム、臭化ラヂウム等の化合物や、或は其れに他物質を混じた不純物のみである。

併し、唯こう言つただけでは、假令キュリー夫妻が、如何程、其分析に骨を折つたにしても、一向ラヂウムに異とする點は無いのであるが、理論家から見ても、實際家から見ても、之を尊重するに足る所以のものは、ラヂウムが絶えず其自體からベクレル線と稱する放射線(光線では無い)を射出するからである、即ち、一つの、しかも作用の強い放射物質であるからである。

ラヂウムの發見より二年前、明治二十九年に、X(エッキス)線と作用の似た或放射線が、ベクレルに依つて發見された。前にベクレル線と言つたのは、此放射線のこと

て、之をアルファ線、ベタ線、及びガンマ線と稱する三線に區別することが出來る。今、理學上面白い事でも、煩はしい事は一切省略として、唯應用上から此三線の區別を辯じようなら、アルファ線は、物體を透過する能の小さい代りに、薄い物に劇しい作用を呈する放射線、又ガンマ線は透過能が大きくて、厚い物體の底にまでも作用するが、薄い物には左程の効力を示さない放射線、而して、ベタ線は上記兩線の中間性の作用ある放射線と心得て居ればよい。

ラヂウムの、普通の物質と異つた尙一つの面白い事實は、絶えず其自體から一種の氣體を發生する事である。此氣體も亦新元素の一つで、之をラヂウム・エマナチオン（名前が餘り長くて呼びにくいから、必要の無い限りは、之を單にエマナチオンと呼ぶことにしよう）と名づける。色も香も知れない、而して他の物質と殆ど化合しない程に、化學的には極めて不活潑な氣體であるが、其自體からは絶えずベクレル線を放射する、即ち一の放射物質である。

エマナチオンをラヂウムから離して、一の容器に入れて置くと、之を如何に注意して密閉しても、普通一ケ月も經過しない中に、其跡形も無くなつて仕舞ふ事が解る。ビールやラムネに溶かし込んである炭酸瓦斯は、封栓さへ間然する所なくば、何時迄でも保たれるのであるが、エマナチオンは之に如何なる嚴封を施しても駄目である、又之を炭酸瓦斯の樣に、水に溶かして瓶詰にしても何等の効果も無いのである。其性質上、化合も分解もしないエマナチオンが逃げも潜れもしないで、恰も幽靈か何かの樣に段々に薄らいで、遂に無くなつて仕舞ふとは、思へば面白くもあり、又不可思議の事では無いか。何處かの椅子に腰打掛けつ、何時瓶詰にしたとも解らない何とか水を、さも〳〵鹿爪らしい顏して飮んで居る人は、此お話に嘸不快の念を抱くであらうが、さりとて事實に抗敵ふ丈は持てまい。

有つた物が無くなる、不思議と言へば不思議だが、之を不思議がつて居るのは、實は舊思想に促はれて居

るからて、若し心機一轉して之を考へ直したならば、蓋し滿足なる說明を得られまいてもあるまい。實際、我々の物質觀や電氣觀は、如上の事實等に依つて、革命的變化を强いられたのて、さてこそ、キュリーの事業が燦然たる光輝を放つに至つたのてあるが、併し自分は、此暑い日に必要以外の理學的理論を並べて、敢て讀者の睡を促さうと試むる者てはない。たゞ最近十年間、各自の事業に追はれて、理學方面に消息を絕つた人々に對して、次の事實を述ぶる必要があると思ふ。

　鉛から黃金を作らうと企てたアルケミストの努力を、徒に其人々の夢とのみ嗤笑し去る時代は、既に過去となつた。現今は、堂々たる學者にして、之に類する實驗を繰り返して樂しんて居る人もある世の中てある。鉛が黃金になるか、こは固より斷言の限りては無いが、少くともエマナチォンの如き放射物質に在つては、物質それ自らが、自然的に、而して漸次に、根本的變化を爲すのてある。委しく言へば、之を組成せる無數の原子は、時々刻々、或は彼、或は是と順次に崩壞して、皆異物質の原子に變つて行く、而して其各原子が異物質の原子に變化すると同時に、一つの放射線の射出せらるるを見るのてある。

　之を要するにベクレル線の射出は、原子の崩壞を意味し、物質の消滅を意味し、而して又新物質の成生を意味するのてある。エマナチォンの原子の崩壞するや、一個のアルファ線を射出すると同時にラヂウムA（エー）と稱する放射物質を成生する。而して、ラヂウムA（エー）は變化してラヂウムB（ビー）を生じ、後者は又變化してラヂウムC（シー）を生ずる等、順次に階段的變化を繰り返すのてある。エマナチォンの氣體てあるにも拘らず、其れから順次に生れ來つたラヂウムA（エー）、B（ビー）、C（シー）は皆固體てあつて、エマナチォンの存する場所に附着するが故に、此三者を放射性附着物と稱する。ラヂウム療法に於ては、ラヂウムと、エナマチォン及び放射性附着物とを直接或は間接に使用するのてある。

　如上の變化は全く自然的てあつて、之を人爲的に促進若しくは遲滯せしむることは出來ない。されば、放

射物質には各自に天賦の壽命がある。尤も、壽命と言つても、我等人類の壽命の樣に、或時期に至つて火の消えた樣に急に無くなるといふ意味の壽命ではなくて、最初から漸次に一部〳〵消滅して遂に何時とはなしに其形骸を止めなくなるといふ意味の壽命である。故に放射物質の壽命の長短は、其量の半減する時間の長短に依つて判定するので、之を半減期、或は壽命とも稱へる。壽命の長短は物によつて著しい差異がある。例へば、ラヂウムの半變期は壹千七百參拾年で其減衰は殆ど感ぜられないのに、其娘體たるエマナチオンのは僅に九十二時間即ち四日未滿に過ぎない、而して又、放射性附着物に至りては、其三物質全體の作用が全滅するのは普通數時間を出てないのである。

　ラヂウム或はエマナチオンが漸次消滅の運命を有するのは、其所有者にとつて誠に心細い事柄であるが、既に其死滅あるが故に放射線あり、其放射線あるが故に作用あるを思はば、吾人は徒に座して其死滅を歎かんよりも、寧ろ須く之を利用するの途を講ずべきである。

　ラヂウムの放射線に生理作用のあることは、ラヂウムの發見後間も無くから知られて居た。尋いて明治三十三年に、ワルコッフはラヂウムの放射線に依つて、人體の表皮に焮衝を起すこと發見したのであつたが、併し著しく醫學界の注意を喚起した出來事は、其翌年ベクレルの身に起つた小災難事であつた。ベクレルは、講演の都合上、ラヂウム管を其胴衣のポケットに入れて居た爲に、體の左部に火傷樣の焮衝を生じたのである。是れが彼の有名なる「ベクレル火傷」であつて、此豫期せられざりし焮衝が、大に社會の耳目を聳てしめし以來、醫學界の熱心なる研究の下に毒は却て藥に變じて、ラヂウム療法は今日の盛况を來したのである。

　尤も、ラヂウム自身に於ても、ラヂウム療法を盛ならしむる所以の要素を具備して居る。ラヂウムの容易に得られない物體であることは、固より其一大缺點ではあるが、其作用の强烈なるに比して、體形其小なる

が故に、其取扱が極めて容易で、殊に之を患部に挿入し得るの便宜に至つては、X線療法の企て及ぶ能はざる所である。加之、ラヂウムはX線療法に於けるが如く、不快なる音響を患者に聞かしむるの要なく、然も、病者を安靜に保ちつゝ治療し得るの便宜を與ふるのである。

醫者ならぬ自分は、ラヂウムのきくと言はれて居る病名を書き幷べるすら、聊か僭越の義と心得ないでもないが、順序として、ざつと、自分の見聞した所を書く事にする。ラヂウムは種々の癌腫或は惡性腫瘍の治療に盛に應用せられて居る。而して此等の病氣が假令ラヂウムに依つて全治しないまでも、之に依つて患者の苦痛を減じ、又其生命を延ばし得るの効能は有るので、外科手術、X線療法等の無効なる病氣にすら之を適用し得るのである。

ラヂウムの强いのを使用すると、ケロイドの隆起を去り、其潮紅斑を褪色せしめ、或は鎭痛の目的を遂げることが出來る。又、瘰癧、火傷或は創傷等によつて出來た瘢痕をも或程度まで除くことが出來ると言はれて居る。

ラヂウムは又、子宮の諸病に應用せられつゝある。即ち之を子宮癌に應用すべく、或は子宮出血、慢性子宮炎、慢性尿道炎等に試むるを得るのである。

其他、急性胃加答兒、神經痛、或は僂麻質斯や淋病から來る關節神經痛等の鎭痛にも適すと言はれて居る。尚、種々の病氣に就て試みられた結果は多數にあるが、例の門外漢たる自分の、餘り深入りするのは褒むべき事ではなからう。

ラヂウムの放射線は、如何にして此る効果を呈するのであらうか。病原すらも、充分に了解せられて居ない病氣の治療に對して、自分達の考慮を費すのは無駄の樣ではあるが、少くとも素人見解では、放射線の作用は一つの破壞作用で、病的組織や細胞や、若しくは其成生物が、此放射線の爲に、其發育を害せられ、或は殺戮せらるるに基因すと見做す事が出來る。其れは兎に角、上皮癌は固より、淋巴腺腫や肉腫の樣な、其座

の深い腫瘍でも、單にラヂウムを身體の外部に用ゆるのみで、其功を奏せしめ得るのは、ラヂウム療法の美妙なる點で、此事實は、前に述べた三種の放射線を、適當に利用し得る長所から來て居るのは言ふ迄も無いが、其れ以外に、放射線の撰擇作用に基くのである。即ち放射線は其性質として、之を同じ様に中てゝ居ても、身體の健康部に未だ何等の影響を及さない前に、病的の部分は著しい作用を受けるてふ好都合の事柄があるからである。

ラヂウムは其化合物或は不純物を固體の儘で患部に外用したり、溶液或は乳劑を製して注射若しくは飲用するのである。何しろ、ラヂウムは其價の高い上に世界に於ける產額は極めて少いのであるから、何か之に代用する物の必要がある。現在我々の知つて居る放射物質は其數三十七、其中で、價格の關係や又壽命、作用等の關係からして、メソトリウムと稱する放射物質が其選に當つて居る。

次にエマナチオンに就て少し述べよう。エマナチオンが治療上有効であらうとの考は、最初鑛泉調査の方面から提出されたのであつた。明治三十六年、アレンはキングス・バス鑛泉にエマナチオンの存在することを報告すると同時に、鑛泉の効能は、此放射性の氣體に基因せずやとの說を提出した。爾來一方に於て、諸國の鑛泉に、エマナチオンの存在せることが着々驗證せらるると同時に、他方醫學社會に於ても、エマナチオンの生理作用が盛に研究さるる事になつた。エマナチオンは氣體なるが故に、之を空氣と混じて吸入する事も出來る、或は又水に溶かして飲用浴用若しくは注射する事も出來る。エマナチオンの壽命の短いのは、其除くべからざる缺點であるけれども、ラヂウムはエマナチオンに對する福袋である。ラヂウムを有する人は何時でも(餘り頻繁には駄目だが)エマナチオンの供給を仰ぐことが出來るのである。

エマナテオンは慢性僂麻質斯、慢性神經炎、心臟實質炎に効能があり、又脊髓勞の鎭痛に、或は淋巴系諸病、糖尿病、諸膜の加答兒等に應用することも出來、

或は痛風を輕減する等と言はれて居る。僂麻質斯等にエマチオンを用ゆると先づ反應症狀を呈して身體の諸部分に疼痛を來し、然る後に輕快するのであるが、入湯の際の湯あたりは之と同一の事柄であると解釋されて居る。

人體に上記の如き種々の作用を呈するラヂウム或はエマナチオンは動植物の或ものにも亦作用する、而して、黴菌の如き下等生物に對する作用に就ても隨分研究せられたものである。就中、時節柄注目に値するのは、放射線の長時間の作用に依つて、窒扶斯菌及び虎列拉菌が其發育を制止せられ、若しくは殺害せらるるとの報告である。尤も自分は、是等の報告が、如何程の程度迄信用すべきものであるかを知らないが、假令窒扶斯菌等に關する報告が正しくあつたにしても、少し許のエマナチオンを含有せる鑛泉を飮用若しくは浴用した爲に、體内の窒扶斯菌が果して死んで仕舞ふか否かは、蓋し容易に會得さるる問題であらうと思ふ。

さてエマナチオンは上述の如く、治療上有効である。して見れば、鑛泉の効能に關するアレンの說は、大に其關係者の人意を强うせしむるものがある。讀者の知れる如く、鑛泉に効能ありとは、日本及び西洋に於ける、古くからの信念であるが、彼の硫黃泉が、或皮膚病に効果ある等の例を除いては、其効能ある所以の合理的說明は未だ與へられ無かつたのである。殊に、單純泉、即ち、化學的成分を殆ど含有せざる溫泉の、神經痛や僂麻質斯に特効を示すもの等に至つては、殆ど其理由を解することが出來なかつたのである。固より溫泉地に在つては、世の煩累に遠ざかる事が出來る、心の慰安を得る事も出來る、又朝夕、適當なる溫度の湯に身を浸す事も出來、土地氣候の變化の影響を受くる事も出來る。併し是等の事情が、果して効能ある所以の總てを語るものであらうか。

實を言へば、自分は、至る所の溫泉場に告示してある彼の効能書に重きを置く者では無い。失禮なる申分ながら、自分の眼に映ずる幾多の効能書は、學者或は官吏が、衆愚に對する自己の威信を保つ爲の護符であ

る。思ふに、溫泉の効能書には、醫學者の立合を必要とする。然るに從來、醫學社會に於て、身を溫泉研究に委ねし人の少かつた理由は、彼の溫泉醫て云ふ名目に慊らざりしに職由するのであらうが、自分は將來、醫學者及び藥學者の眞面目なる研究に依つて、眞正なる意味の効能書の編成せらるるのを切望して止まないのである。

鑛泉の効能を研究する爲には、泉水其物の研究と同時に、鑛泉地の研究を怠つてはならない。而して、鑛泉の効能と泉水の成分とに何等かの關係が有るか否かを、根本的に研究する上に於ても、或は又鑛泉に効能ある所以を說明しようとする上に於ても、エマチオンの如き、吸入及び浴用に依つて人體に作用を呈する成分の檢定は、極めて重要なる事項と言はなければならぬ。

鑛泉に含有せるエマナチオンの量に就ては、西洋は勿論、我邦でも餘程調査が進んで居る。而して、此等の研究によれば、世界中、至る所の鑛泉に、エマナチオンの含有されない鑛泉は殆ど無いと言つてよい。故に何某の鑛泉にエマナチオンを含有して居るや否やは最早今日の問題ではなくて、寧ろ何の鑛泉が多量にエマナチオンを含有して居るかが我々の問題である。

鑛泉のエマナチオンを實測する事なくして、何か簡單なる間接の方法で以て、其含有量を豫知する事は出來ないかとは屢遭遇する問題である。自分達の經驗では、之に關して極めて漠然たる推量を成し得るに過ぎないので、要するに今日では遺憾ながら之に明答を與ふることが出來ない。源泉の溫度や、湧出地の表面の地質等のみでは未だ充分なる豫察材料を得たといふを得ないのである。

泉源から發生する氣體にも亦エマナチオンを含有して居る。而して其含有量は水の含有量に比べて、數倍多いのが普通であるが、何處の鑛泉地でも此氣體を捨てて顧みないのは惜しい樣な氣がする。

エマナチオンは之を特種の裝置を以て檢すると、其作用の著しい物であるにも拘らず、其量は極めて微々

たるものである。從つて普通の鑛泉分析表に見る樣に、瓦（ガラム）とか、匁とかを以て、エマナチオンの量を言ひ表はすのは、至つて煩はしいが故に、或特別なる方法て其多寡を表はすのである。

エマナチオンの量、を表はすのに幾マッヘと稱する事が屢ある。一體空氣は電氣の不導體であるが、之にエマナチオンを混ずると、多少電氣を導く性質を得る、故に其中に電氣のかかつた物體を入れると、其電氣は空氣を傳つて少しつつ漏電する、而して其漏電の遲速は、空氣に混じたエマナチオンの量に比例するのである。溫泉研究者中の功蹟者たるマッヘは空氣に或一定の強さ（參兆分の一アンペア）の漏電を生ぜしむるエマナチオンの量を一と稱し、其二倍の漏電を生ぜしむる量を二と呼ぶ等の方法で以て、エマナチオンの量を言ひ表はすことにした。後の人々が之に倣つてマッヘ單位と名づけたのであるが、此表はし方には多少の欠點がある。

又別に、エマナチオンの量を表はすのに幾キュリーと稱する呼び方がある。エマナチオンはラヂウムから生れ、而して其れ自分漸次消滅する。であるから、エマナチオンを其母體たるラヂウムと一緒に密閉して置くと、丁度、出產人員と死亡率との一定した社會の人口が、何時かは一定の人口になつて仕舞ふ樣に、エマナチオンの量が遂に一定の額になつて仕舞ふのである。此樣にして、一瓦（ガラム）のラヂウムから、蓄積されたエマナチオンの量を一キュリーと稱へる。鑛泉の一リトル（五合五勺）中に含まれて居るエマナチオンの量は普通其一兆分の一ぐらいから、一千萬分の一ぐらいまでであるから、自分は一兆分の一キュリーなるのを一と呼ぶことにして居る。一キュリーは二十七億五千萬マッヘに當る。

我國の鑛泉は概してエマナチオンに富んで居ない樣である。過る頃、世界第一だと稱して、大に世の呼物となつた甲州の鑛泉に就ては、未だ其實測者たる石津博士の直話を聽かないから、之を何とも批評する事は出來ないが、其世界一であるか否かは別問題として、

兎も角、多量のエマナチオンを含有せる鑛泉として、其發見を我國の爲に慶賀する。自分達の調査した鑛泉では、自分の單位で壹千以上の値を與ふる鑛泉は、我國では、今の所まづ上の部に編入してよいと思はれる。攝津國有馬町瑞寶寺温泉、同町丸山鑛泉、但馬國城崎温泉、攝津國武田尾鑛泉、伊豫國道後温泉、能登國和倉鑛泉、下野國鹽原大網温泉は其例である。

尤も、鑛泉一リトル中に、幾ら多くのエマナチオンを含有して居ても、其一日間の湧出量の少い鑛泉では、地中から一日間に持ち出さるるエマナチオンの總量が少い譯であるから、あまり感心出來ない。之に反して、一リトル中の含有量は少くても、湧出量の多い鑛泉は、經營の方法如何に依りては、大に取るに足りる譯である。故に例へば、三十マッヘ以上の含有量を示すに非ずんば之をエマナチオン鑛泉と稱するを得ずといふ樣な規定は、時として鑛泉の効能と沒交渉なる結果を來すのである。因に言ふ上記の規定に從ふとしても、我國に、エマナチオン鑛泉と稱すべき鑛泉の絕無となる憂はない。

上記は、鑛泉をエマナチオン吸入或は浴用の目的に使用するとしての議論であるが、之を飮用する場合には、固よりエマナチオン含有量の多少が重大なる要件となる。されば單に、あの鑛泉にはエマナチオンが有るといふだけて、直に之は有効だなどと思つたら間違う、極少量のエマナチオンなら、我々が日常呼吸して居る大氣中にも含まれて居るのである。患者にエマナチオン水を供給する爲の裝置たるエマナトールでは、其把手を一回轉する每に水と共に供給さるるエマナチオンの量は、商店では何と言ふか知らないが、自分は今、百五十マッヘとして置く。即ち病院では患者に一回每に最小限の百五十マッヘづつ飮ませるものと考へて置く。さて、茲に含有量一マッヘの鑛泉があるとすると、其水を飮用して、前記の患者と同じ効果を得よう爲には、驚く勿れ、八斗二升五合の水を一回に飮み干す必要がある、而して假に其値を一合一錢としても八圓二十五錢を要する勘定で、寧ろ病院に行つてコッ

プに一盃、エマナチオン水を飲まして貰つた方が氣がきいて居るかと思はれる。

鑛泉地の事業て自分の了解し得ない事は、ラヂウム煎餅及びラヂウム・サイダーである。氣體たるエマチオンのみで、ラヂウムを殆ど含有して居ない鑛泉の水を使用して、若しエマナチオンを含有せる煎餅やサイダーが出來得るならば、自分は其方法の傳授を乞ひて、嚴冬、ビールの熱燗を客に薦めたいと思ふ。

鑛泉地に、其土地に固有する賣品を有する事は、土地の爲にも旅客の爲にも極めて結構なる事であるけれども、若し上記の如き滑稽事を演ずるの餘裕があるならば、宜しく其資金を浴室改良に向くべきだと思ふ。ラヂウムは高價である、ラヂウムは効能絶大である、而して我鑛泉はッヂウムを含有せりと、口にも唱へ、書にも書かせながら、其浴室にはエマナチオンを放逐した殘物の溫泉を引き入れて得々たる如き行爲の、全然跡を絶つに至る事を希望する、而して自分は各當業者が眞面目にエマナチオンを理解し而して眞面目に之を利用するに至る事を切望するのである。

人物評論（五十）

東京大阪大新聞の首腦的政治記者

△予の知れる第一流の政治記者

田川大吉郎

◎東京の大新聞の政治記者は、僕は、その多くを知らない、僕は、新聞の報道よりも、新聞の評論を樂しんで讀んで居る、その評論に現る丶主筆記者の本領、面目を偲ぶと共に、主筆記者が、その主觀を構成さる丶基礎の材料、材料の出所、その資源を、こ丶か、あすこかと想察して居る、それで、其人を直接に知ると知らざるとに拘はらず、一種の興味を感じて居る。

◎故に、僕は、此篇に於ても、その方面の所感を一般的に答へたい、即ち、新らしき記者に就て云々せず、古き記者に就て云々したい。新らしき記者を重んじないのでは無い、古き記者が、その評論の實權を握つて居るからである、評論の鍵を握つて居るからである、少くともその思想の源を成して居るからである。

◎僕は、今の評論界に、覇を成して居る者は、矢張、十年前、二十年前、そのま丶の德富君であり、黒岩君であり、石河君であると思ふ、之に對して、日本の伊藤欽亮君が、元老株の一人として、近年に至

りて參加されたかと思ふ(三宅雪嶺君は新聞界以外の人として)。

◎德富君の文章に就ては、往々、今はその昔に及ばずと貶する人もあるが、僕はしか思はない、僕は、矢ッ張、その文才を偉とする者である、昔の人は、文の縱橫自在なる出來榮を許して、麻姑を倩ふて痒きを搔く如しと賛したが、僕は、德富君の文を讀むごとに、そのやうの感じを覺える、然も、その政治論は、僕の首肯し得ざる所が往々なる、如何なる點をと、指摘するには困るけれど、概して言へば、その所謂帝國主義であらう、君は、その帝國主義を主張する場合に、屢々、愛國の感情を高調さるゝが、僕は、君ほどの聰明の人で、この窠窟に據らるゝのを殘念に思ふ、御互の政治論は、こんな事にはお構ひなしに、やる所までやれると思ふ、又、やらねばならぬと思ふ、而して近來の君は頻りに舊書を出版さるゝが、今から約三十年前の君は、只新書の出版、新思想の普及にのみ努力されたのであつた、そこに、君の新舊生涯の著るしき相違を見る、それだけ思想の差違が生じて居る譯であらう。

◎黑岩君は、進歩して休まない人かと思ふ、萬朝報に於る、その時々の論文は、確かに、その鮮かなる進歩の跡を印して居る、僕は、その精緻なる論陣の張り方を喜ぶ、特に、その周密にして水をも洩らさない論步の運び方を喜ぶ、此點に於ては、恐らくは當代絶倫であらう、去り乍ら、君の思想は多く文學、倫理、社會的方面に傾いて居て、政治の方面は割合に疎である、曾て、圓城寺氏あり、その副將として、此方面の衝に當つて居たが、僕は寧ろ天山氏の手腕を偉なりと賞嘆して居た、此人の噂は、世間に、それ程傳はらなかつたけれど、黑岩氏は、必らずその眞價を識認して居られたに相違ない、僕は、新聞に現れたる財政的報道、觀測、所見では、天山氏の位地を、終始、特絶だと眺めて居た。而して內村氏、而して幸德氏、而して堺氏、而して久津見氏、萬朝報の論壇は兎角、哲學的論派に支配されて來た、政治的實際論としては、國民新聞の德富氏が、何にせよ最も之を勉めたと謂はねばならぬ、とは云へ旣に哲學的見地に即して居る、故に、その唱道する所が深くして勁く、牢乎として、奪ふべからざるものがある、これが萬朝報の地步であらう。

◎茅原華山氏の文章も、僕は驚嘆しゝ讀みつゝある一人である、何といふ絢爛華麗の文字であらう。而してその思想も文明的で、宗教的で、廣くして高い、萬朝報は善く時代と共に推移する、或意味に於ては、時代より一と足先に發展する、僕は萬朝報の從來の展開の仕方を頗る理想的だと思ふ者である。

◎時事の石河氏は、我國に於る文明批評家の老手である、その先達である、その魁先である、人は、矢張、自ら知るものか、時事新報は、穩健を以て自ら誇るに相當する所の準備あり、組織あり、主張があるやうである、僕は、曾て此新聞に、進退伺無用論を讀んだことがある。而して成程進歩的だと思つた、此文が、石河氏の筆に成つたか否やを知らず、たゞ、石河氏一派の思想、筆意と思つた、而して乃木大將の自殺に關する評論は、世に不評と傳へられたけれど、僕は、時事紙が敢然としてその主持する意見を公表した態度を欽稱した、のみならず、その論旨も僕

は同感であった、世間は動もすれば、時事紙の態度を微温なり、鼠色なり、鮮明を欠くと謂ふが、僕はしか思はない、苟も必要あれば割合に大膽なる、而して徹底したる主張を反つて時事紙に見ると思ふ者である。

僕は、時として德富氏が、如何に論ずるかを知りたいと思はない場合があるが、黒岩氏が如何に論ずるかを知りたいと思ふ場合がある、而して特に石河氏が如何に論ずるかを知りたいと待ち焦る折がある。

○日本の伊藤欽亮氏は(或は林毅陸氏)も如何にもハキ〳〵した議論をする人である、僕は明治十六七年ごろ、長崎に育つた、當時の長崎に、西海日報といふのがあつた、その主筆が伊藤欽亮氏であつた、僕はその頃から君の名聲を仰いで居る、而して近來の日本新聞の斬然たる戰ひ振を目ざましく視て居る、君は必らずしも文章の人ではあるまい、寧ろ意思の人であらう、主張の人であらう。

◎報知新聞に、須崎氏と上島氏がある、僕はその須崎氏を善くは知らない、上島氏とは共に卓を駢べて編輯を扶け合つた經驗がある老手だ。文章も自在で平明だし、その思想にも何等の癖が無く、随つてその議論思想の解折が、善く徹底する、此點に於ては君と須崎君とは、略ぼ異曲同工の人らしい、尤も此新聞は、大隈伯との關係の深いだけ、伯の内閣の聲望、信用の盛んな間は、その辯疏回護に骨は折れまいが、いよ〳〵と爲ると隨分困るであらう、或は營業が上手だから、その際はその際で巧く逃げるだらうと評する者もあるが、僕は必らずしも然とは思はない。たゞ難局に才藻を見る、僕はその際の須崎君、上島君の筆力を見たいと今から期して居る。僕は曾て朝比奈知泉君の政府のためにする堂々の議論、態度を見てゑらい見識手腕だと思ふたことがある。今後如何、誰がその壘を摩するか、その人を見たいと思ふのである。

◎東京朝日新聞は、不偏の位地を守つて居る。僕は大阪朝日の論調の、時に保守調を帶ぶるに反し、大阪毎日の論調の極めて進歩的なるを推稱して來た、その東京日々の論調如何は、比較的讀むことが少いから何とも言ひ得ない、特に主筆その人を知らないから今は省いて置く、東京朝日の松山君と石川安次郎君は相識の間である、松山君を重厚の人といへば、石川君は輕快の人であらう、然し乍ら兩君とも進歩肌の人である。東京朝日の論壇は、進歩的空氣に富んで居る、而して全紙を通じて、實際的政治の空氣が滿つて居る、政治上の理論、若くは純理的政治論は兎もあれ、實際的政治の現狀を知り、觀測を下し、言ひ換ゆれば今日の政局に焦らず、おくれず偏せず、僻せざる位地と意見を決するためには、東京朝日は太だ佳き指南車であると感じて居る。

◎讀賣新聞は、所謂政治新聞で無い、又必らずしも所謂大新聞でも無い然し乍ら、その主筆に五來素川氏のあることは忘れてならない。君は固より政黨員で無いし、又政治家でも無い、然し乍らその學んだ所は、歐洲の政治史であり、文明史であり、その思想は哲學、宗教に根ざして居り、而してその趣味は頗る饒い、故にその評論は、眼前の政黨、政局に直接の刺激なくも、その全局に互つては、自然に相應の見榮へある批評と觀察を示し、豫言的色彩を放つてあらう。又留意すべき新來の記者で

ある。

◎不滿足なる此稿を終るに當り、僕は別に三人の政治記者に就てものする、其一は國民の杉中氏、其二は朝日の中野氏、其三は時事の室伏氏である。

◎僕は室伏氏の演說を一度聽いた。而してその針線の緻密なることに敬服した。只一度その文章を讀んだ。而してその針線の緻密と同時に觀察の高明なることに感服した、年若き人であるが、今後倍程進歩さるゝであらう、中野氏とは殆んど相知らないが、その文章は幾度か讀んだ。而してその手腕にいろ〳〵敬服した。將來の進境を無論大いに豫期して居るが、或はその名を成す、あまりに早過ぎはせぬか、若くはらく過ぎはせぬかと怖れて居る、これは必らずしも君に謂ふことでは無いが、その周邊の先達及び友人に告げたいのである。杉中氏とは相識る多年、その活動力に驚嘆して居る。有體に言へば君の文章にも、思想にも、稗物の香氣が欠けて居る。君は勉强せぬ人では無い、勉强はする人だが、その香氣が乏しい。それだけ君の活動力、實行力が秀でゝ居るのである。君が今國民新聞に居るのは、流石に其處を得たるかなである。一番、政治上の實行力に富んだ性質を以て、一番實行を惟旨とする國民新聞に居るのだから、その所長とその位地と相契合して居る。

◎僕は以上の三氏の如きが、必らずしもその新聞の今後の政治部面を支配するとは謂はない。去り乍ら三氏の如き將來あり、殊にその特色ある記者の働きと發達を、その紙上に見ることを窃に樂しんで期待して居る譯である。

△黑岩周六氏

高島米峰

世人或はいふ、黑岩氏が前半生の歷史は、實に闇黑なりと。僕はその果して然るや否やを知らない。しかし、僕は人の功罪を論ずるのに、單に過去の閱歷ばかりで決定する譯にはゆくまいと思つて居る。棺を蓋うて而して後に定まるを正しいとするならば、少くともその人の現在及び將來をも、計算の內へ加へなくてはならない。否、寧ろ過去に於て多少見るべき功績があつたとしても。現在に於て爲すなきものであるならばそは甚だ多く尊重するに足らないのである。これに反して、過去に於て多少非難すべき所業があつたにしても、現在に於てこれを償うて尙餘りある程の仕事をして居るならば、以て大に優待するに足るではないか。淸和源氏の嫡流でも、今現に乞食をして居ては、たゞ徒に系圖泣かせである。縱令、先祖はどこの馬の骨だかわからなくとも、今現に國家有用の材となつて居るならば、以て大に誇るべきではないか。この意義を以て僕は世の人の如く、黑岩氏の前半生の闇黑面まで、彼此と詮義だてするの必要を感じないのである。

現在の黑岩氏は、その識見超凡なること、その文章雄健なること、その辯舌明快なること、共に一代に傑出して居る。而して、僕の特に黑岩

氏に服するのはその精力主義の人であり、熱狂する人であり、多能なる人である點に存するのである。

精力主義者としての黒岩氏は、その理論的方面を自ら精力主義と題する一書に詳說して居るが、その實際方面に關しては、傳ふべき實例が頗る多い。その一事に熱中し來るや、食を忘れ寢を忘れ、時に或は家に歸るを忘れ、夢中になつてこれに精力を傾注し、その事の徹底し洞見するまでは、橫でも動かぬといふところ、實に驚嘆を値するのである。曾て自轉車の流行するや、朝報社中の誰れ彼れ、逸早くもこれを乘り廻はすを見て、負け嫌ひの黒岩氏は、ナンの自轉車位と、忽ちこれが練習を始めたが、技術は理屈で熟練する譯にはゆかない。聰明な黒岩氏も、轉落又轉落、なか／＼以て容易に意の如くならない。一日に二百回以上も轉落して、大抵のものなら、精も根も盡き果てゝ仕舞ふべきを、黒岩氏はこゝだとばかりに奮勵して、遂に僅に一日の練習で、他人の七日分の練習を了へば、二日目からは、街上を縱橫に乘り廻はす程に、熟達したといふことである。たゞこれ一例にしか過ぎないのであるが、この絕倫の精力を傾注して事に當るのであるから、氏の手をつけたことに、不成功はないのである。不徹底はないのである。

氏が、時々、殆ど發作的に、或る事に熱狂するといふことは、頗る興味のあることで、これといふも、畢竟、氏の精力の絕倫なる賜と言つて差支ない。五目並べを始めると、萬事を放擲して五目並べに熱狂し、玉突を始めると、萬事を放擲して玉突に熱狂し、歌がるたを始めると、萬事を放擲して歌かるたに熱狂し、哲學の研究を始めると、萬事を放擲して哲學に熱狂し、婦人問題の研究を始めると、萬事を放擲して婦人問題に熱狂し、政治運動を始めると、萬事を放擲して政治運動に熱狂する。而して、此くのごとく、次第々々にその精力集注の中心が移動する。移動はするが、世人の多くのやうに、事の半ばに疲勞して、これを廢止するのとは全然その趣きを異にし、苟も一度その手を染めた以上、必ずその事に徹底しなければ止まないのである。一事に徹底すると共に、更に他事に移りて、こゝに又その全精力を傾注するのである、一事を卒業して他事を學び、又卒業して他事を學ぶ、此くの如くにして、今の黒岩氏は實に多能な人となつてしまつたのである。

探偵小說の飜譯家として、文壇の第一人であつた黒岩淚香氏は、今も尙西洋小說の飜譯に於て、遙に群を拔いて居る。五目並べに於て、先手必勝の原理を會得し、歌がるたに於て、その並べ方とその取り方とに關する、一種の新機軸を案出し、玉突きの技も、亦素人の域を脫して、專門家の壘を摩するに至り、哲學の研究に於て、やゝ獨斷の弊に陷入り、且つ多く創見を示さないといふ非難はあるものゝ、『天人論』及び『人生問題』は、今も讀書界の人氣ものである。婦人問題が世間の注意を惹くやうになると、專ら心をこれに潛めて、新著古書、手を盡くしてこれを集め、着々研究の步武を進めて、『婦人評論』に連載し、更に『予が婦人觀』を成し、『小野小町』を成す。而して、萬朝報社の社長として、聊かも『萬朝報』經營の手を緩めざるところ、到底、尋常一樣の人の企て及ぶ

べきところではない。

たゞ熱狂の人は、時に脱線することがある。曾て、冷水浴に熱中したろ時、寒中、薄氷の張りたる浴槽中に身を浸して、その痩我慢を通したろ結果、遂に心臓に故障を生じて、久しく病床に呻吟したこともあつたとやら。又、最近の黒岩氏が、政治運動に熱狂せるため、往々脱線的行動を爲して、識者をして眉を顰めしむるものあるは、大に氏のために惜しまざるを得ないところである。その一たび、山本内閣に反對を宣言するや、殆どその手段の善惡を問はざるまでに猪突し猛進し、殊に原内相を彈劾し、犬養毅氏を攻撃せる態度の如き、全く大人氣なしと思はるゝまでに執拗を極めたものである。又、内桂内閣の瓦解したる當時、元老が、内閣組織に容喙することの非を攻撃したる、筆尖の未だ乾かざるに山本内閣を倒すべく、松下軍治氏と自動車に合乗して、山縣有朋公を訪問し、何事かを要望したりといふが如きは、實に脱線的行爲の甚だしいもので、自ら自己の言論の權威に侮辱を加ふるものである。言論を以て立つ新聞記者が、自ら言論を侮辱するといふのは、即ち自ら自己の立場を破壞するのである。

軍備の伴はない外交が、常に軟弱であるやうに、實行の伴はない言論は甚だ微力である。しかし、實行が伴ふといふことは、言論家それ自身に實行の責任があるといふのではない。言論によつて實行家を指導し、彼をしてこれを實行せしむれば即ち足るのである。然るに、黒岩氏は、己れの言論を、己れ自ら實行しやうとするのである。言論家にして、實行家を兼ねむとするのである。氏の絶倫なる精力と、熾烈なる狂熱とは爲さむとだに思へば、天下何事でも成し得ずといふことがないために、常に自ら事件の渦中に投じて、狂人走れば不狂人も亦走るの態を爲すのである。苟も言論を以て立つ新聞記者たるものは、超然として、事件の圏外に居て、冷靜に觀察し、深刻に批評し、穩健に指導し、他をして實行上に遺漏なからしむるやうにしなくつてはならない。

黒岩氏が近來、松下軍治氏と親しく交るに至つたのは、如何なる事情からかは知らないが、これ亦、確に脱線的行爲の一ッと見て差支ない。松下氏は、過去に於て、面白からざる閲歷を有する人たることは、今これを問ふの必要がないが、現在に於て、松下氏の人格は、依然として疑問である、識見の見るべきなきも、亦依然として舊の如してある。此くの如きの人物と親交を結ぶは、黒岩氏に於て、減ずるところはあつても增すところはない。これを以て、世人却つて黒岩氏の心事を疑ひ、次期の總選擧には、松下氏の地盤を借りて、東京市より打つて出づる所存であるなど、取沙汰するものがあるのである。くだらないこととの上もない。

新聞にて論ずるも言論である、議會に立つて辯ずるも亦言論である、その孰れを選ぶも妨げなく、兩者を兼ぬるも亦妨げはない、しかし『萬朝報』といふ城廓に立て籠つて居ればこそ、實に一城の主である、反對者に取つて、實に一大敵國である。然るを、代議士となつて議會に入れば、三百頭顱中の一人である、必ずしも一雜兵たらずとするも、少くと

も、その所屬團體によつて、幾干か自己の思想を羈肘せられ、自己の言論の自由を拘束せられなければならない。『萬朝報』といふ大なる言論の機關を有して、言はむと欲して言へざるなく、言つて而して行はれないといふことのない、實力と權威とを有する黒岩氏が、自ら進んで、代議士たらむとするが如き志ありとすれば、僕は黒岩氏が、政治を以て、五目並べや玉突きと同一視して、一種の道樂として考へて居るのではあるまいかと思はれて、黒岩氏の政治道德に、多少の疑を挿まずには居れないのである。

黒岩氏が、相撲を愛し、花札を弄び、玉突、闘球、五目並べ、歌がるた等、兎角勝負事を喜ぶ性情より、選擧を以て、一大勝負事としてこれを喜び。まづ人のこれを爭ふものを助け、更に進んで自らこれを爭はむとするといふならば、そはその人の趣味に屬することであつて、他の容喙すべき餘地はないかも知れない。しかし、德富蘇峯氏が、貴族院議員になつたゝめに、その政論に權威の乏しくなつたといふ事實と、三宅雪嶺氏の超越的態度が、依然として、言論界の覇者たる事實とは、黒岩氏の三思すべき材料であると信ずる。(六月十四日)

△東京の重もなる記者

石川半山

世間で近來記者の權威が、大に高まつて來たと言て居る、之れは如何なる意味で有るかと聞て見ると、新聞雜誌の記者連が結束して憲政擁護を叫び出すと、忽ち桂内閣が倒れ、海軍收賄問題を叫び出すと忽ち山本内閣が倒壞し、市政革正を叫び出すと、多年市政を左右した常盤會が潰滅したからだと云ふ者が多い、我輩東都の文壇に現はれてから二十餘年大小幾多の政戰に参加し、内閣も幾度も倒せば、市政の革正戰をも随分激烈に戰ふた者から見ると、最近の三戰桂内閣打破、山本内閣打破、常盤會打破の如きは、別に大した苦戰でもなく、從て敢て大した功名とも考へないけれど、然かし世間から此の如く盛に褒め立てられて見ると、此の三戰に参加して多少の努力を費やした我輩の如きは、決して悪るい心地はしない。時勢は不思議な者で、實際は大苦戰をしても世間から餘まり其の功を認められない場合も有り、大した功績でなくても、大に褒められる場合も有る、何しろ近來は急に記者の相場が高くなつて、八方から世辭追從を振りかける時勢となつた、之が爲めに記者連の中には聊か得意になつて「吾人の鎧袖一觸する所能く粉碎せざる者莫し」と鼻息氣を荒らくして居る者も有る、果して然るや否やは固より問題で有るが兎に角近來に至て記者と云ふ者が、著るしく世間の注意を惹き、世間が其の勢力の偉大なるを認めて、從來よりも大なる敬意を拂ふ様になつたと云ふことは事實で有る。

今日の記者の三傑

現代の日本に於て記者と名の附く肩書を有する人の統計を取つたなら恐らくは幾萬人に上るで有ろふ。東京だけでも幾千人と云ふ人數で有るが其の中で傑出したる人物と云へば、ソンなには澤山に無い、先づ我輩の見る所で多數の記者の中から三傑を指摘するならば、萬朝報の黒岩涙香、國民新聞の徳富蘇峯、日本及日本人の三宅雪嶺の三君で有る、此の三君は各々異なれる特色を有して居るが、何れも傑出したる人物で、彼等は一代を指導すべき思想を有し、それを適當に表現して、讀者を吸引すべき偉大なる筆力を持て居る。而して其の偉大なる筆力を以て文壇に立つこと殆んど三十年なるが故に、各々自分の開拓したる領域を持て居る、此の勢力は隨分偉大なる者で有るから、彼等が或る問題の刺激を受けて、猛然として起て陣頭に臨めば、優に一代の風雲を捲き起し得るので有る。

徳富君と三宅君

徳富君が表面に立て政治上の活動をしたのは、日清戰爭の前後で有る伊藤内閣に對する對外硬の運動の時などは、國民新聞を提げて、各新聞雜誌と連合し、對外六派(後には八派)の一派を成して、表面に立て盛に働いた者で有る、然るに松方内閣の勅任參事官となり、終に松方侯と墻の浦に情死を遂げると云ふ運命に陷つて以來、彼れは全く表面の運動を避ける樣になつた、桂公の參謀となつて諸種の畫策をしたことは、隱くれもない事實で有るが、決して表面に立て活動しなかつた、日露戰爭に際して記者の重もなる者が、實業家の重もなる者と相謀て、國民後援會を組織した時、我輩共は島田三郎、田口卯吉、大岡育造の諸先輩と共に各地を遊說したが、徳富君は其の會へ名を列したばかりで、容易に遊說には出馬しなかつた、何とか言を左右に托して出演を避けたので、實業家側から嚴重なる談判を持ち込み、實業家の代表として添田壽一君を出演せしめるから、是非一度だけでも出演すべしと迫まつたので、唯一度新潟へ出かけたことが有る、擧國一致の戰時に於てさへも、此の如く國民の前に立つことを避けた彼れだから、平時に於ては成るべく表面に立たない樣に務めて居るかの如く見える。現に貴族院議員に任ぜられて、國政の上に發言の權利を與へられて居りながら、彼れは就任以來、未だ曾て一度も發言したことを聞かない、胸中に幾多の經綸を有し、あらゆる問題に付て十分の意見を有し、且つ一たび口を開けば、何人をも傾聽せしむべき雄辯を有しながら、彼れの如くに沈默して、他の輿論を傾聽して居るのは、實に驚くべき隱忍と謂はなくてはならぬ、隱忍、沈默が彼れの目下の方針で有るから、山本内閣打破の記者聯合會にも、市政革正の記者聯合會にも、彼れは決して自ら其の名を出さず、國民新聞社理事山川瑞三君を國民新聞の代表者として參加せしめた。彼れは固より其の筆を以て此等の運動を助けたが、然かしながら其の一身は國民の前に現はれない樣に務めて居た樣に思はれる。

三宅雪嶺君に至ては飄々たる仙骨で、隱現出沒、唯夫れ雲の如く全く自然で有る。殆んど一定の規矩に囚はれて居ないから、氣に入れば勸誘しないでもノコ〳〵と出かけて來るが、出でないとなればドンなに勸め

ても動くことではない、憲政擁護閥族打破の運動の時には、時々演説にも出席した、山本内閣打破の運動にも二三度は顔を出した、今回市政革正の運動には、自分から進んでは出でなかつたが、それでも各區の多數の候補者の中から、依頼されて或は一度位は出演したかも知れない、彼れは常に熱することなく、さりとて別に冷やかでもないが、何しろアノ仙骨の事だから、其の心事は凡人の窺ひ知ることの出來ない者で有る、然かし民間には少からぬ德望が有て、彼れが出演すれば、其の吶辯の雄辯には必ず隨喜渇仰する多數の聽衆が有るから、其の勢力は大した者だ。

黒岩君は本來小説家

涙香小史黒岩周六君は今や記者閥中の大立者となつた、天下其の一顰一笑に注意し、仰て其の鼻息を伺ふの人となつたが、彼れは本來小説家として文壇に現はれた者で有る、彼れが都新聞の一記者として、小説を其の紙上に掲載するや、都新聞の聲價は大に昂まつた、萬朝報の創刊するに當ても、彼れの小説は最も偉大なる資本で、多くの讀者を吸集する一大勢力で有つた、我輩の記憶する所に依れば日清戰爭の前から日露戰爭に至る迄、我が讀書社會を風靡したる作品は、圓朝物と弦齋物と而して此の涙香物と稱する黒岩君の小説で有つた、其の時代に於て露伴や紅葉や逍遙や篁村は、一流の小説家として認められて居たけれど、其の作品の賣行高に至ては、三遊亭圓朝の講談筆記と涙香、弦齋二家の作品に及ばなかつた、單に及ばなかつたと云ふ位の者ではない、マルデ比較にならぬほどの差が有つた、多くの文學雜誌や新聞の文藝欄が、「涙香、弦齋の小説は小説としての價値なき者なり、圓朝の講演が、多く賣れるのは讀書界の低級なるを證す」と論じて、其の賣行の多大なるを咒詛し、力を極めて之を排斥したけれど、それが少しも効果はなくて、涙香、弦齋、圓朝の著作は、發行毎に羽翼を生じて飛んで行つた、されば我輩共は黒岩君を目するに、全然小説家を以てした者だ、彼れの名は久しい間西洋の探偵小説の飜譯家として記憶された者だ。

論文も巧妙なり

森田思軒が萬朝報に入社した頃から、我輩共は萬朝報の論文に注意を傾けた、而して時事を論評したる名文が有ると、それは悉く思軒の書いた者と思ふて居た、何ぞ圖らん、其の名文の多くは黒岩君彼れ自身の執筆ならんとは。今日に於ては彼れは最早や單純なる小説家ではなくなツた。又單純なる論説記者でもない、彼れは時勢を率ゐる所の人となツた、苟くも彼れに睨まれたら、如何にしても倒壞を免れない、其の代りに又彼れに助けられたら。其の目的を達することが出來ると世間から思はれる人となツた。

熱心の加はる人

我輩は決して黒岩君の人物を悉く知つて居ると言ひ得る者ではない、我輩はそれほど親しく彼れに接近した者ではない、然かしながら我輩も

萬朝報の發刊される以前から、文壇に立て居て黒岩君の事は二十餘年の永い間、多くの人から聞き、又其の言行に付て知て居る事が多い、日露戰爭當時の國民後援會以來、時々一所に運動をした事も有て、大體に於て其の人物は分ッた積りで有る、若しも我輩の見る所を以て誤りなからしめば、彼れは何事でも一事を開始すると、段々に熱心を加へて、其の極度に達せずんば止まない男で有る、彼れは自轉車を乘ると、專門の自轉車乘りを凌駕する迄乘り廻はした、球突を始めると、名人の域に達した、今でも三四百は突き得るで有らふが、一時五六百と稱されて居た、五目並べは日本一で、其の段の免許狀は彼れから發行されるのだ、此の如く遊戲でさへも、一たび之を始めると、熱心に之を研究して、何でも其の蘊奥に達しなくては止まないと云ふのが彼れの本領で有る、萬朝報を發刊した時、多くの人は之が成功を豫期しなかッた、然かしながら彼れは一意熱心に之れが發展を企圖した、赤新聞と侮り、惡德新聞と嘲ける聲は、絶えず彼れの發展を呪詛して居たが、彼れは屈せず撓まず敵と戰ふて來た、而して終に今日の威力ある新聞を成功した、彼れは又哲學を研究して、天人論を著はした、彼れが哲學の著述をしたと云ふので大學の哲學專攻の人などは、心窃かに之を侮て、何程の事か有らんと笑ひつゝ之を繙いて見た、然るに其の研究は意外にも專門家を驚かすべき者が有ッた、少くも之を輕侮するには餘りに念の入ッた著作で有ッた、評論をすれば缺點も有るかも知れないが、少くも專門家が力を入れて評論するだけの價値ある者で有ッた、其の近來の著作なる「小野小町論」の如きも、眇たる一册子で有るが、其の研究の行き屆いて居る事は、凡庸史家の企て及ぶ所でない、彼れを知れる所の一人は、彼れを評して「黒岩は凝り性で有る」と言ッた、如何にも凝り性で有る。最初は餘りに熱心でなくても、彼れを引き入れて其の道に入らしめると、終に其の極度に達しなくては止まない性格の人で有る、山本内閣打破の運動の如きも彼れは最初から極度の熱を以て居たワケではなかッたが、戰ひが困難になりかけ、權兵衞先生容易に局面を退きさうにも見えず、政友會の擁護に依て、飽迄も非違を遂げんとした時には、彼れは萬事を忘れて内閣打破に向ッた、其の熱心は決して凡人の企て及ぶ可らざる所で有ッた、若しもアノ戰ひに天下悉く攻めあぐみ、彼れ一人の外は誰れも内閣打破を相手にしないと云ふ日が來ても、彼れは決して此の戰を中止しないだけの熱心を持て居た、市政革正會の如きも、彼れは最初は寧ろ冷淡で有ッた、山本内閣の打破の爲めに、多くの用事を抛擲したから、市政革正運動には最早や御免を蒙むり、堆積して居る用務の整理をしたいと言て居た、然かし市政革正運動は市會議員の改選に良い人を出すと云ふので、僅かに二三週間の運動だから奮發を願ひたいと勸める人が有ッた爲めに彼れは此の戰ひに參加したが、一たび參加と決するや其の熱心は日一日と加はッて來て、終に森久保作藏君を倒し、常盤會を潰滅せしむる迄にやり附けた、桂内閣打破憲政擁護運動の時には、兩三度顏を出したばかりで、敢て熱心と云ふほどでもなかッたが、山本内閣打破と常盤會打破に至ては、彼れの熱心は眞に敬服すべき者で有ッた、天下をして一たび彼

れに讀まれたら、最早や浮ぶ瀬がないと感ぜしめ、其の代りに一たび彼れの助けを得たら、必ず其の目的を達することが出來ると思はしむるに至ッたのも、決して偶然ではない、一難を經る毎に一倍する彼れの熱心は終に彼れをして天下の大義俠とならしめたので有る。

三叉、日南、矧川

無所屬の記者として、竹越三叉、福本日南、志賀矧川の三君は三傑で有る、三君は現在は無所屬で有る樣だが、其の文章は絕えず新聞雜誌の上に公刊されて、讀書界の勢力となッて居る、若しも今の文壇から此の三君を失ふたならば、我等は必ず寂寞を感ぜざるを得ないで有らふと思ふ。

有力なる記者

やまと新聞に松井柏軒君が居る、彼れは新聞の編輯者としては、卓越せる技倆を持て居る、又論文を草することの敏速にして、文章の要領を得ることは、アレだけの人は少ない、今の政治記者中有數の人物で有る報知新聞の須崎默堂君は明治二十二年卒業の法學士で有る、彼れにして官海に出て居れば、大臣にもなッて居たで有らふ、若槻藏相などよりも遙かに先輩で有る、實業界に入ッたならば、巨萬の富をも作り得たで有らふ、然かし學者肌の人で、岡山の中學校長となッて後、朝日新聞、日本新聞等に入り、終に報知新聞に轉じた人だ、柏軒も默堂も謹厚の君子人で品格の良い人だ、品格の良いと云へば萬朝報の斯波貞吉君も其の一人で有る、彼れは英國に於て學問をした人だから、其の人格が英國の紳士風で有る。

經濟財政の論に於て、オーソリチイとして目すべきは朝日新聞の松山忠二郎君と財政經濟時報の本多精一君で有る、日本の伊藤欽亮君も曾て日本銀行に居た經歴も有て、財政經濟の問題に付て傾聽すべき論文を書くが、我輩は報知新聞の谷操山君の經濟上の論文にも屢々敬服する一人で有る、武富遞相の如きも谷君の論文は能く讀むと云ふことだ。

都新聞の大谷誠夫、報知の上島長久、實業之日本の增田義一の諸君は口も八丁、手も八丁、文章も書けば演說もする、常に政治上の運動に從事して居るから、政黨の內幕に精通して、公けの運動をすることは得意で有る、無所屬の高橋秀臣君なども此等の諸君と能く一所に活動した者だ。

東京日々新聞には羽田浪之紹、對馬健之助の兩君が居る、共に古るい記者で、人格も良く筆力も雄健で有る、讀賣新聞には五來素川君が巴里から歸て居るさうだ、我輩は巴里で五來君に逢ふたことが有るが、學問も識見も筆力も優くれた人物で有る、それから時事新報の石河幹明君はトント公けの集會へは出て來ない人で有るが、福澤先生の在世中から、論文を擔當し、「ならんかなれども」調に依て一派の文體を作り、一世を指導する識見は、眞に敬服の外はない、慶應義塾に鎌田榮吉君が無くてならぬ人物で有る如く、時事新報に石河君は無くてならぬ人物で、時事

新報が福澤先生永眠の後と雖も、些毫も退歩せず、能く時勢の進運に伴ふて發展して往く者は、福澤捨次郎君の統率力にも依るで有らふが、又石河君の力が與かッて大なる事と考へる。

筆を持たぬ大記者

最後に我輩は東京に於て、筆を持たぬ大記者の存在することを指摘したい、それは誰れで有るか、日く早稻田の大隈老伯で有る、彼れは内閣總理大臣になッたが、我輩は此の内閣が果して成功するや否やを知らない、ドウか彼れを助けて成功させたいと希望する一人で有るが、其の内閣の組織に於て、既に不滿足な點が有るから、果して成功するや否やは分らない、然かしながら彼れが性格は内閣總理大臣としてよりも記者として適當なことは、我輩の指摘したいと思ふ所だ、彼れは如何なる問題に對しても、必ず雄大なる意見を持て居る、彼れの原泉は混々として盡くる所を知らない、其の間口の廣い事は日本一で有る、而して奥行きも相當に深い、彼れが早稻田の一室から吐き出す所の氣焰は、日本の幾十幾百の新聞雜誌を透して、廣く國民の間に普及するのみならず、其の大部分は世界各國の新聞雜誌を透して宇内の四隅に反響して居る、彼れは世界的偉人にして同時に世界的大記者で有る、我輩が報知新聞や每日新聞を主宰して居る時代に、時として論文の材料が乏しくなると、車を早稻田に驅て、半日を費やせば、優に一週間分の論題を得て來ることが出來た、德富蘇峯君が國民之友の最初の時代の論文は、多く大隈伯の意見を採て書いたと云ふ傳說は、今以て遺ッて居る。我輩は之を然りと信ずる者で有る、此の如き天稟の大記者を、内閣總理大臣などと云ふ窮屈な椅子へ縛ばり附け、其の豪放不羈なる性格に制限を加へ、吐き出すべき氣焰を減少せしむるは、眞に遺憾千萬なる事と考へる、記者としては明快に斷言し得る事も、内閣總理大臣としては曖昧に言はなくてはなるまい、早稻田の老偉人で居れば、自由自在で有るが、一たび内閣總理大臣となれば、其の偉大なる頭腦を煩はすに足らない些細の事迄も、彼れの前に來るに違ひない、官僚政治の餘毒として、煩苛なる俗務が彼れの周圍を取り捲いては、流石の老偉人も、大記者の本能を發揮することの薄弱になるのは止むを得ない、寬濶なる衣服を纏ふて、時弊を罵倒して居ると日本の國寶に相違ないが、彼れに窮屈なる大禮服を着せて、内閣總理大臣兼内務大臣と正札をブラ下げて、下らない俗務を執らせると云ふは、實に國寶を玩弄するの甚しい者で、我輩は之を稱して大正の一大愚擧と評するの外はない。

國士の意氣ある記者

昔は新聞記者と云へば、國士の意氣ある者が多かッた、栗本鋤雲、成島柳北、沼間守一何れも幕末の遺臣で、薩長の天下を咒詛し、新聞を武器として其の欝懐を漏らし、運よくば天下を取て代はらんとの意氣が有ッた、福澤諭吉、福地源一郎、末廣重恭、中江篤介、田口卯吉の諸先生何れも記者で有ッたが、同時に國士で有ッた、然るに近代は新聞雜誌が

段々事務的になッて來て、記者に國士の意氣を有する者が減少して來た政黨は政黨屋が事務的に經營し、新聞雜誌は新聞雜誌屋が事務的に經營し、總べて何でも事務的になッて來た、記者は俸給を受くるが爲めに一定の事務を執る者となッて來た、意氣を以て働らくと云ふが如きは、寧ろ野暮な事となッて來た、而して最近に於ては記者聯合會と云ふ如き者に、昔の國士の意氣を存したる連中が集まッて、政治運動を試むる事になッたが、さて此の記者聯合運動と云ふ事が、イツ迄續く者やら分らない、記者氣質が段々に事務的になッて來た今日に於ては、此の如く意氣を以て働らく事は、段々に衰へて往くかも知れない、見玉へ、一代の俠骨で花やかに男を賣り出した秋山定輔君の二六新報が、一蹶して復た振はず、我輩共が會て島田三郎君を頭領として立て籠もッた東京毎日新聞も、終に人手に渡て今では、有るやら無いやら分らなくなッたではないか、日本新聞も陸羯南等の意氣で進んだ面影は、今は全く存して居ない今日は何でもビズネスの世の中だ、從ゝ記者にも國士の意氣などは餘まり尊重されず、事務的にやる者でなくてはならぬ世の中になッた、之れが良いか惡るいかは別問題で有るが、兎に角それでなくては存立の六ケしい時代になッて來た、それ故に今日花やかに見える記者の聯合運動も果してドレ迄繼續し得るやは問題で有る、國士的記者の命脉が、果してドレ迄繼續し得るやは帝國の大問題で有る、此の記者運動の尊敬を受けつゝ有る好機會を以て、我輩は玆に國民の前に此の大問題を提供して置きたいと思ふ。

△大阪の政治記者

東京日々新聞記者　浩々歌客

○浩々歌客は、大阪に長く文籍を置いて、大阪朝日新聞に居り、次に大阪毎日新聞に學藝記者として從事し、現に大阪毎日新聞と東京日々新聞の記者である、それが大阪の新聞に於ける政治方面の代表記者を評判するといふやうな事は、分外に屬するかと思ふ、分外なれば、勿論避くべき筈である、がまた多少知つて居るだけに之を紹介して見たくも思ふ、人の紹介は、その人を知らざるものに誤らるゝよりは、幾分知ると信ずる人に依るが眞を得るに庶幾いと思ふからである。

○中央公論の五月號には「新聞改良論」に諸家の說があり、また「大阪の二大新聞紙」と題して、大阪朝日新聞、大阪毎日新聞を紹介してある、其の記事に據ると、大阪毎日新聞は「當時の社會部長であつた角田浩々歌客を、同社の分身たる東京日々新聞の文藝部長に追ひやつた」といふことであるが、浩々歌客はやはり大阪毎日新聞から追はれたでも無ささうで、大阪毎日新聞記者として文筆に從つて居る、斯の如く紹介や評判が紹介や評判のされ方に依りては、分外の名聲を博することがある、幸か不幸か浩々歌客は、玆にまた自分で名聲を博し、他の同業者の名聲を江湖に博するわけである。

○大阪の新聞は、自分が大阪を去つてから三年目になる今日、如何いふ

新しい新聞が出來たか詳知せぬが、自分の知る限りに於て、大朝大毎二紙の外に、東京の時事新報の分身「大阪時事新報」、「大阪新報」、「大阪日報」、「大阪日々新聞」、「大阪朝報」等である、「等」は他になほありさうに思ふからであるが、有つても無いと同様かも知れない、大阪朝日新聞は村山龍平、上野理一兩翁が交替に社長となる組織で、外から見れば、兩翁共同經營の社と認めらる、わが大阪毎日新聞は、本山彦一翁が社長、法律上「業務擔當社員」と記さるゝ合資會社である、多数の出資社員と職員とで組織されて居る共和體の新聞社である。

○「大阪時事」は、主幹高見龜、「大阪日報」は、吉弘白眼を社長として、文學士白河鯉洋が主筆の外に、齋藤弔花の如き健筆家がある、「大阪新報」は、全權公使を務めたことのある加藤恒忠が社長、高橋萬次郎が主幹の位置に居る、「大阪日々新聞」は、「大阪日報」の分身、主として上總天香が編輯支配人である、「大阪朝報」は、小田垣哲次郎が社長である。

○大阪の新聞の政治記者は、東京の新聞の政治記者とは、擔當の趣が少しく異ふ、東京の新聞は、殆ど政治兼社會新聞といふ傾向あるに比し、大阪のは、政治新聞といふよりは、經濟、通信、社會新聞といひたい、東京が政治の中心たるに反し、大阪府廳と市役所とが、政治材料の供給所である、故に毎日府廳や市役所に往く記者が政治擔任者といふべきで一般政治の材料は、東京の通信に待つて、その通信を扱ふ記者は、東京大阪の通信聯絡を擔當する電話係、通信部と之に對する編輯部とである若し東京より政治上重要の人が來た場合、之を訪問して意見を聞き紙上に紹介するものは、勿論政治記者であり、先頃のやうに新聞聯合會が開かれるとか、何か政治運動の會がある場合に參席するは、政治記者である、しかし東京のやうに政治記者として一社を代表したり、此題にある政治の首腦といふやうな記者は、やはり一部の記者では無く、主幹とか社長とかいふ人である。

○以上の說明は分り切つたやうであるが、東京と少し趣が異つた所があるやうに感ぜらるゝから、馬角ながら述べて置く。

○大阪に於ける政治問題に關係する新聞代表者は、大阪朝日で、西村天囚、鳥居素川、石橋爲之助等、大阪毎日は、渡邊巳之次郎、高石眞五郎春秋原在文(はるあきげんざいもん)其他がある、新報は加藤氏、時事は高見氏、日報は白河氏等である、先頃の新聞聯合大會には、村山、上野、本山三社長も參會し、なほ有名の人があつたやうであるが自分の記憶外に屬す。

○大朝の天囚氏は、丈の高い人である、自分が同社時代に編輯局員の丈くらべをするに、柱に標をつけたことがある、天囚氏は所謂一頭地を拔いて居た、今でも一番丈が高いであらう、六尺ゆたかの偉丈夫と謂つて差支あるまい、此身長の高い天囚居士は、鐵砲の元祖に名ある薩州種ケ島の人である、國技館の東方大關西の海は、氏と同鄕で、天囚氏は西の海の錦洋時代に彼の横綱たるべきを期待した、昨今常陸山隠退梅ケ谷も遠からず退くであらうと噂さるゝのであるから、西の海は、天囚氏の期待に背かぬことゝ信ぜらる、自分も西の海の辛抱强く壓强からんことを望む。

○種ケ島の住民は、西の海と天囚氏を出したことに依つて、鐵砲の名譽を大正時代に復活せりといふべき理由がある、天囚氏は、重野成齋門の漢學家である、氏の如き漢文家にして夙く新聞記者となり、長く新時代風潮に推移し、しかも自己を持する人は、多くはあるまい。

○二十餘年前の文學盛時に、大阪にも「浪華がた」などいふ文學雜誌が榮えた、當時天囚氏の著に「屑屋の籠」がある、今日より見れば、隔世の感があらうが、當時は有力な述作として取扱はれた、其後天囚氏は、大阪朝日から支那に赴任し、久しく上海に在つて支那事情を研究すると共に支那小說戲曲の研究に潜心したやうである、歸社後は專ら大朝の幹部に經營者となり、「日本宋學史」、「學界之偉人」等の著述に、日本の漢學史上に貢獻して居る、「屑屋の籠」は或は名詮自稱になるかも知れぬが、此二著述は斯學に取り有數のものと信ぜらる。

○氏は先年大朝主催の世界一周旅行に加はつて歐米に遊んだ、その記行もあると記憶す、其師重野成齋翁は八十歲で洋行した位であるから、氏の洋行故無きにあらず、恐らく氏も此洋行に依つて漢文學に得た思想を社會的時勢的に運用するの機に會したことゝ思ふ。

○大阪の町人敎育家として儒者として功績淺からざる中井竹山履軒の懷德堂事蹟を表彰し顯揚したのは、懷德堂表彰紀念會であるが、其提唱者は天囚氏である、寄附金を募つた結果、六千圓程醵集され、竹山履軒其他の遺著を出版し盛大な表彰記念會を擧行した、是は自分の如きも、大阪每日新聞の記者として贊同人ではあるが、此奬學の天囚氏の事業として特記すべきは何人も異存無からう、それで記念會の事業はなほ資金のあるので講演會を開くべく、會堂を建てる計畫があつたやうである、其後報告に接せぬから近狀を詳知せぬけれども、時節柄此懷德堂記念會の事業を基として、大阪に新敎化の機關を設けるは、眞に望ましい事と信ず東京で澁澤、森村諸家の發起せる自助團といふ風敎作興の團體計畫が發表されたが、此等と呼應して新運動を始めたら宜しからうと思ふ。

○天囚氏は斯様の位置にあるから、大阪朝日が公共事業に對する場合、時に風敎に關する事には、やはり氏が大朝の代表者として遇せられる、政治記者の部に入れることは如何であらうか、公共の代表記者としては大阪朝日の立物になつて居る、しかし政治の手腕はある人と認めらる。

○氏は漢詩に書道に造詣深きも學究たるには畠が廣い、大阪朝日の社說に御大喪當時の如き、書經を讀むやうな難かしいと謂はるゝ文字は、氏の筆に成ると聞くが、總じて風敎上の所論は、氏の筆が多いやうである氏の思想は、時勢に對して注意を怠らぬから、千鈞一髮、漢文學者流の習慣に囚はれぬ處が、妙味であらう。

○氏はまた薩摩出身だけに、琵琶に心得がある、琵琶歌はその得意の作少からず、所謂武士道鼓吹は氏の贊稱する所と思ふ。

○天囚氏は、純然たる政治記者の代表者とは目されぬが、同社の鳥居素川氏こそ、政治的代表者たるべき筈である、素川氏は、熊本縣人である故池邊三山氏と同鄕であるために、定めし池邊氏の推薦もあつたと想はれるが、新聞記者系統は、陸實、三宅雪嶺時代の「日本新聞」から來たと

記憶す、氏は故荒尾精の門に支那語を學び、隨つて漢文素養は根底がある、英、獨學をも學んだ、大阪朝日に入つてから三年許獨逸に留學し、其後明治四十四年英帝戴冠式に赴き、曾遊の獨逸を初め大陸巡遊、米國を經て歸つた、當時の觀察記「頰杖つきて」は、世界人國記的の趣があつて、自分も面白く讀み、素川氏は政治記者ではあるが、政治よりは文學の方が本領に近いかとも思つた。

○今日では、露國文學が普及されて居るが、眞に露國文學の廣く紹介さるゝに至つたのは、日露戰爭以後である、之に先だつ五年前位と記するが、素川氏はゴーリキーの長篇譯を大阪朝日に連載して、當時の讀者には没交渉の感を與へたらしかつたが、ゴーリキーの紹介としては、二葉亭等と同じく先驅の一と認めて可いだらう。

○素川氏はまた京都天龍寺の峨山和尚やその弟子の天田鐵眼(愚庵)に依つて禪を得たと聞いて居る、大朝の土屋大夢氏は、鎌倉の釋宗演師と相弟子として、今北洪川の卒業生であるが、素川大夢共に禪に得たものありとすれば、孰れも臨濟一喝の下に、共同一致大朝の爲に大に禪味を發揮することゝ信ぜらる。

○石橋爲之助氏は、同志社出身基督教徒であつて、軀幹肥胖の丈夫である、新聞記者から言論と體力とで代議士に當選したものは、全國に於ても少いとの評があつた、自分も在阪中初めて選擧場に行つて氏に一票を投じたが、氏の精力絶倫、少くとも代議士としての職分に忠實であると信じたからであつて、氏は再選して議會の豫算通の一人と稱せられる由勘定方の少い三百餘頭顱中には氏の如きは眞面目の意味に於て、此方面に役に立つ人であらう。

○石橋氏は演壇の人として兎に角その姓の如く手堅い。音吐の量あると多年教會で鍛えた熟練とで相應の功果を收める、但だ波瀾とか情趣といふ點には得意ではあるまい。

○自分の同社なる渡邊巳之次郎氏は、大毎社長として大朝の故高橋健三に對し有力であつた渡邊治(台水)の後嗣として現に主幹である、精力旺盛、社論の筆を絶つこと稀である、社として世間の交際には殆ど出たことは無い、專心一意新聞編輯を幹するに從ふ、曾て米國に遊んだことはあるが、世界踏過者ではない、寧ろ漫遊は好まない方らしいが、世界の事情は居ながらにして通曉する、氏の如きは稀なる一人であらう。

○氏は、號を醉夢又は綠岡といふ、醉夢は定めて「醉生夢死」などの句から採つたであらうが、酒は飲まない、所謂三蕉といふ程にもゆかぬ、氏の謹嚴に職分に誠實なる性格としては、醉生夢死などゝいふ莊周胡蝶的晋代の淸談者流、今日のデカダン黨たらんことを希望したこともあつて名けたかも知れぬ、綠岡は、氏が水戸出身であるから、水戸公園の岡に因んだでもあらうといふ人もある、自分はまだ氏と號の由來を相語つたことは無い、いや近日上京したら聞いて見やう。

○渡邊氏は政治記者とはいへぬが、以上のやうな位置で、政治運動などには更に關係せぬ、大毎の政治記者の代表と言はゞ、高石眞五郎氏である、氏は、上總鶴舞藩の家に生れ、慶應義塾出身である、大毎から英國

に留學して、七年餘倫敦に學び、彼の地の新聞にも從事し、横文字の著述もある、英國紳士の感化を受けた關東男といふべきであらうか、褒めると手前味噌になるから褒めはせぬが、氏の技倆を發揮するは、是からである。

○春秋原在文氏は、「鎌信と信玄」を書いたことがあり、親鸞上人を論評したことがあつて、俳鋒縦横、わが同人中錚々の一人である、單純な政治記者では無い、通信部を主宰し、京都支局をも受持つて四方八面に働いて居る、その肥つた丈の高くない體格相應に精力比少してある、言論文章兩ながら達者である、加賀の人で大學に居たこともある、蕪城といふ雅號がある、蕪のやうに肥つて城のやうに落ついて居るといふ意味からではないが、そんな風にも見れば見られる、從軍記者の經歷があり、大阪の政治記者としてその才を揮ふ時機があらう、京都に於ては、大毎の代表として政治方面にも關係する、序に春秋原在文といふ姓名が珍らしいので、春秋原が姓で在文が名と思ふ人もあつて時々間違ひ話がある、同人紹介としては、これも不必要でなからう。

○大阪新報の加藤恒忠氏は、文章に巧みであるが、紙上には餘り見せぬ談話には一種の皮肉を帶びた點があつて面白い、其他には自分は氏に就て語るべきことを一寸思出せぬ、一見して眼鏡のちらついて著るしいのは、氏の性格の何かの象徴でもあらうか、此程大阪の北濱銀行の問題には、氏の名も見えた、外交官として世界に雄飛せん壯志を、新聞社長に閑雲野鶴の株主的經營に收めたのは、何となく惜しいやうに思はれたこともあるやうだ。

○大阪時事の高見氏は、時事新報から赴任して同紙創立からの主幹である、やはり精力家で悠揚迫らずといふ風な人であるが、存外細心精緻の處があるといふから、やはり新聞經營者として適當なのであらう、曾て時事新報の支那特派員になつたことがある、慶應義塾出の者多き同社にあつて、氏は出身者でないさうだ。

○大阪日報の白河鯉洋氏は、豐前人で文學士、藤田劍峰、田岡嶺雲、笹川臨風諸家と十七八年前「支那文學大綱」を述作したのが、文壇に出る初めであつた、神戸新聞の主筆になり、其後支那に長く在留し、支那文學に得た經倫を行つたと見ゆる、四五年前から大阪日報の主筆として同紙に光彩を放つ、同紙の爲には好主筆を得たものと信ず。

○日報の齋藤弔花氏は、政治記者の仲間として認めらるゝこともある、その言論文章にさういふ口吻が時々見える、大阪在の三島郡古曾部の郷里に居る、東京で文學者の一人として聲名を馳せたこともあるが、大阪の土地柄だけに多方面に働いて居るやうだ。

○餘り要領も得ぬ無駄話が長くなつたから此位にして措かう、但だ參考として大阪の新聞社の政治方面の擔當者の姓名だけを附記すると、大阪朝日には、藤澤朴、小林萬吉、石原善三郎、大阪毎日には原豐太、小川市太郎、大阪時事に松本弘、藤井某、松村某、大阪新報に原某、日報に榎本某、大阪日々に竹内某等がある、此中大朝の小林萬吉氏は、市政記者として元老である、國民新聞に居た時代に、川上操六將軍に可愛がら

れたことがあつて、當時の陸軍通であつた、今は大阪の同業間に可愛がられて居る、其他に東京諸新聞の支局員又は通信員もある。

○以上の無駄話が、新聞智識の參考にならば、幸である。

△或る意味の手腕

梧桐書屋主人

▲三四ケ月前であつたと記憶する、竹越さんから端書に印刷した通知があつて、今度東京毎夕に入社して主筆になつたと云ふことであつた。實際は一二ケ月ほどで退社されたのださうだが、退社に就ては別に通知は來なかつた。

▲コヽが毎夕社長木村政次郎君の腕の凄い處だと云ふ人がある。其大の月給で兎も角も名士を釣込んで入社の廣告やら噂やらをさせてしまう、デ月末が來ると月給などは知らぬ顏の半兵衛、廣告さえさせれば最早目的は達した譯である、三叉先生は此手にかゝつたものだと云ふ。

△若しこれが幾分にても事實であるとすれば、毎夕社は工場や帳簿の公開は第二段にして、此種の内情を天下に公開せずはなるまい。

▲木村君の毎夕が鄰に來たと云ふので「お蔭で乃公の處が上品に見える」と云つたと云ふ、やまとの松下軍治君は今度の市會議員選擧で必死の運動をされたやうである。

▲萬朝の黒岩君が今度の市會議員選擧でやまとの松下君と不思議な聯絡をしたと云ふので其眞相(或は噂かも知れぬ)記事を編輯局に出した處が主幹のために沒にされて、それを憤慨して辭表を出した市政記者が某新聞社にある。

▲過般の原内相攻撃で紙上最も猛烈であつたのは言ふまでもなく萬朝であるが、サテ三名の委員——黒岩君、松下君今一人——が愈々原君の前へ出ると一番喋るべき筈の黒岩君は一向口を利かなかつたには驚いたとは現に親しき人から聽いた話である。

▲吾人は直ちに是等の噂を信ずる者ではない。理想團の團長として萬朝の總主幹として廣き意味に於ける民黨の旗頭として吾人は潔白なる直情徑行なる黒岩君を見るのみである。區々たる噂や話は君を傷つくるには餘りに微力であらう。

▲然らば吾人は何故本稿の劈頭にかゝる說を掲げたであらうか。實は二個師團問題で上原陸相が躍起となつて居た時分である、時の陸軍當局の有力者へ直談判で「沈默なら五萬圓、贊成なら三十萬圓」と持込んだ新聞社長が東京にある。こんな事では新聞の眞價、言論の權威は何の日にか發揚することが出來やう、長閥などゝ云ふ代物から内兜を見透かされるではないか。吾人は有力なる新聞記者及社長などに對する醜惡なる風評を何よりも怖れる、これ自から言論の權威を失墜するものであるからである。

▲かゝる點に於て最も信用があり人格の高いのは日々の羽田君と東朝の

松山君とである。時事の石川幹明君は勿論此の派で一段上に超然として居られる。所謂手腕があると云ふ怖るべき意味の手腕から縁遠き人は兎角記者的手腕をも缺いてをる。羽田君の如きが其例である。

▲獨り松山君に至りては然らず、人格の立派なるばかりでなく記者的手腕も充分である。東朝の社説も一ケ月中十數回は氏の筆であると云ふ。

▲が併し記者的手腕が第一か人格が第一かと云ふと吾人は人格が第一であると答へる者である。記者的手腕――記事上の手腕――の如きは部下の記者に一任して可なり、親方株は人格が第一である。

▲然らば德富君はドウであるかと云ふと、甚だ評し惡い。或意味の手腕を君が有するかと云へば否と答へる外はない。然らば潔白かと云へば亦否と答へたい。要するに長閥系が君を禍する、元社員の松本少佐にでも聽けば少くも參謀本部との關係は分らう。光瑞伯とは一種の別懇であるが、今度の事件に關聯がないだけが見上げた次第である。

▲大阪の事は餘り知らぬが、斯る點に於て超然たるものは實に大朝大毎の二大新聞である。尤も經濟部の先生達には場所柄だけに斷えず若干の噂もあるが、多くは先方からの誘惑又は先方との妥協と云ふことである只幹部に至りては孰れも大磐石である、特に大朝に至りては超然たりの態である。

▲大毎の渡邊氏に至りては斯る點に於て反撥力を有してをる、變物と云ふ噂もあるが此種の變物は何よりも結構である。殊に新聞社の首領として一、最も尊敬すべき變物である。同じ社でも高木氏は經濟眼の鋭いだけに油斷はならぬ。

▲大阪には斯る點に於て傑物がある、東京までも聞こへた傑物がある、言ふ白眼氏である。が併し大阪に如何なる新聞があるかと尋ねられると大朝、大毎、日報と答へて、さてあとの二三新聞は一寸頭に浮んで來ない。白眼氏は新聞紙を作る上にも亦立派な手腕が認められる。

▲以上、馬鹿な事を書くなと云ふ人もあらう、信じられぬ噂と卸ける人もあらう、併し悲しい事には權藤君のやうな實例の眼前にあるを奈何せんやだ。アノ九千圓も某某某社の數人に頒けたのだと誠しやかに語る人あるに至つては一驚三嘆せざるを得ぬ。

△所謂五大新聞記者

鐵　拳　禪

〔上〕

▼都下新聞記者として吾人の視界に映ずる者尠からずと雖も、其の最も著はるゝは、『國民』の德富蘇峰、『萬朝』の黑岩周六の二人者なり。之に雜誌記者たる『日本及日本人』の三宅雪嶺を加へて、當代言論界の三雄と誇張するも可なり。

▼雪嶺の人氣役者なるに反し、蘇峰周六共に非難の尠かなざる人物なり蘇峰は始め青年崇拜の標的なりしも漸次人氣を失ひて今日に至り、周六

は始めより憎まれ今日も尙惡まれつゝあり。二者共に非難せらるれども其の非難の徑路に斯の如き距離あり。

▼蘇峰を非難する者は、其の變節を詰り、周六を非難する者は其の惡德を罵るを常とす。而して其の之を非難する所以は、一は平民主義を一擲して官僚と苟合し、一は好んで他の私行を、摘發せる爲めならずんば非す。

▼彼等は個人としては非難され、憎惡さるゝに拘はらず、其の經營する所の新聞紙は、何れも能く時流に投じ、巧みに商品化せるの故を以て、發賣部數は都下二十有餘の新聞中二三を爭ふの地位にあり。其の編輯、其の經營の方法は、其の非難の主點の異なるが如く異なりと雖も、其の能く賣り込みたる點に於ては、兩者の成功を認めざる能はず。

▼蘇峰の『東京だより』が『國民』の呼物の一なるが如く、黑岩の論文も亦『萬朝』の一異彩なり。蘇峰は多趣味にして、其の論ずる所亦多方面なり其の所論必ずしも肯綮に當れりとは稱すべからざるも、當らざれば當らざるなりに面白く讀ましむるの才華あり。黑岩は所論一方に偏するも、全力を傾倒し、之を論破し盡さざれば歇まず。四頁新聞の第一面全部を擧げて、一論文の爲めに費すが如きは、彼れに非ずんば能はざるなり。

▲蘇峰の文、妙は即ち妙なるも、一種の厭味あり。其の時事評の如き、婉曲の裡に冷刺を寓み、陰竦を藏す。其の性格は遂に欺く可からざるなり、黑岩の筆に至りては、深刻にして殺氣あり、人をして一種の戰慄と恐怖とを感せしむるものなきに非ず。蘇明、黑暗の印象は、啻に其の文のみに限らざるなり。

▼其の人物を見るに、蘇峰は某氏の所謂天下の奇才なり。賢明にして怜悧なり。而も彼れは天成の才氣を以て、其の怜悧を遺憾なく總ての方面に活用す。黑岩は不可解の人物なり。或人は温厚寡言の士と觀、或人は暗黑面の怪物なりと感ず、一物に熱中するや他を顧みず、時に傍若無人權を弄することなきに非ず。而も其の約變すること、常人の窺ひ知る可からざるものあり。

▼公桂の歿後、蘇峰は政界に遠かれるの觀あるも、黑岩は昨年の政變以來、政界に出頭沒頭す。一は何物かを獲んとして獲ざるが故に退き、一は何物かを握らんとして握るべく進みつゝあり。蘇峰の『東京だより』に皮肉の筆を弄する、黑岩の政界若くは市政界に運動を試みる、何れか其の事情を語るものに非ざる。今や彼等の單に文筆の境涯に甘んずる能はずして、實際的活動をなすに至れるは、少くも新聞界の爲めに慶せざるを得ず。

〔下〕

▲新聞記者團の爲めに氣を吐くもの、黑岩の外に、『朝日』の松山哲堂、『都』の大谷誠夫、『日々』の羽田浪之紹等あり。大谷は官僚派、其の筆誤つて都新聞社燒打の誘因となれる事あり。羽田は敏腕家、巴爾幹の事情に通ずるを以て知られ、又市政界に馳驅す。然れども、此の二人者は本論の外なり。

▼蘇峰、周六の兩雄を擧ぐれば、次に僂指すべきは、前記の哲堂及『時事』の石河幹明、『報知』の須崎默堂乎。『やまと』の松井柏軒必ずしも、默堂の下に非ざるも、彼れは強ひに通ぜず、主筆記者としての貫祿を缺くの憾みあり。『太平洋通信』殁落後『やまと』に復歸せるは、死馬の骨を購はれたるの觀なからず。

▼哲堂は經濟記者、早稻田の出身なり。大隈内閣組織以來『朝日』の論調些か變調を呈したりと雖も、徒らに謳歌せず、さりとて反對するにも非ず、奥歯に物の挾まりたるが如き所に打止むるを觀る。是れ固より大隈の内閣の財政策の何程か彼れの所論に合致したるに由るならんも、亦彼れが同情を表するの結果ならずとせず。

▼由來哲堂の論、平淡にして穩健なりとの評あり。時に自然增收の如き新造語を以て財界を欺ふる事無きに非ざるも、好んで新に馳するの弊に墮せず。其の人物穩健にして重厚なるが如く、其の所論も亦奇矯の言を弄せざるを多とす。然れども、其の所論の堂々たる、其の筆勢に生彩を帶ぶるの點に至りては、惜いかな本多雪堂に一籌を輸す。

▼現下『朝日』は、編輯長佐藤眞一、大阪通信部長弓削田精一、及び松山哲堂の三頭政治の觀あり。佐藤は公平無私、弓削田は豪快にして手腕あり、哲堂は手腕の稱すべきなしと雖も、事務編輯兩部の聯絡を通ずるの適材なり。果然、所論、人物共に穩健なる彼れは、一個の調和者としても『朝日』に無かるべからざる人物たるなり。

▼石河は水戸の人、温厚なれども稜々の氣骨あり。彼れは日本一と自稱する所の『時事』を主宰するに拘はらず、其の名大に揚からずと雖も、暗香の浮動するは知る人ぞ知るなり。世或は彼れを貶するに無能を以てするも彼れは相當に識見あり、才幹あり、新聞界の一人物たるを失はず。

▼先年歐洲より歸朝するや、石河は先づ紙面の改良を企て、從來の七段を改めて八段となせり。其の論調平板にして世の耳目を聳動するもの無きも、其の海軍及び外務に關する消息の如きは、黒人筋の讀者を傾聽せしむるの價値あり。

▼然れども、海軍收賄事件暴露せる際の如き、臭いものに蓋をせんとして、却て痛からざる腹を探られ、信用を失墜せり、縱令石河の勢力大ならざるにもせよ、彼れが主宰下にある『時事』に、斯く一種近くべからざる臭味を盛れるは、彼れの人格の爲めに惜まざるを得ず。

▼一時『朝日』の如きも、故池邊三山と外相小村との握手によりて怪まれたることあり、今日は哲堂と男加藤とは餘程親密なるが如く、他人の知らざる材料も其邊より出づるに非ざるやを思はしむるものあり。又『萬朝』の黒岩は、陸軍と一種の關係あるが如く取沙汰されたる事あり。政界の機微を知らんが爲めに接觸するは咎む可きに非ざるも、臭關係を結ぶに至りては唾棄せざらんと欲するも得ず。

▼『報知』は最も能く商品化せる、日本唯一の新聞なり。其の發賣部數の如き、實かに『萬朝』の上にありと稱せらる。其の社論は猫眼主義なり。煽動的なり。其の論旨の昨と今と矛盾するも敢て問はざるに似たり。社論に重きを置かざる『報知』に、法學士須崎芳三郎あるは聊か奇ならずと

せず。

▼默堂は、帝大政治科の出身なり。曾て岡山縣中學校長たること三年、後轉じて『大阪朝日』に入り、尋で『日本』の論說記者となり。默堂の名漸く著はれたり。當時雪嶺、日南等の驥尾に附し、慷慨激越の調を以て鳴りしが、其の内容充實を缺き、書生の机上論たるを免れざりき。

▼雪嶺等の激する所ありて、『日本』總退社を決行するや、獨り彼れは其の列に加はらず、平然たる程の度胸を有せり。歐米漫遊後『報知』に入りて、今に至れるが、依然默々として筆を呵しつゝあり。文章圓熟、筆路暢達、所謂『報知』向きなるを失はず。

▲如上は所謂五大新聞記者なるも、其の思想感情は現代青年と共鳴せず漸く過去の人となりつゝあり。蘇峰の政治思想の官僚化せる、黒岩の偏情的空論に流れんとする、默堂の論議の商品化せんとする、又漸く論壇の權威を失はんとせり。吾人は彼等の今少しく現代を理解し、其の雰圍氣中に呼吸せんことを望まざるを得ず。

△新聞記者の二元老

空々寂々生

新聞が今日のやうな勢力を占めて居るのは何の爲めであるか、之は餘程研究して見なくてはならぬ問題だ。新聞は固より新聞記者によつて作られるものに相違ないが、新聞記者を評論して見た處で、新聞の勢力の由つて來る本源は分らない。恰度人體を如何に解剖して見ても生命の所在が分らぬと同じだ。

然し内閣の更迭から市會議員の選擧まで、多くは新聞の力によつて決せられるやうな今日の時勢に於ては、新聞記者の良否善惡が、直ちに社會國家のすべての問題に大影響を及ぼすべきは事實である。此意味に於て新聞記者を評論して見ることには我輩も同意する。

今の新聞記者中の大立物といへば何と云つても德富と黒岩の二人だ。此二人は殆んど三十年近くも新聞の爲めに奮闘して、今では新聞界の二元老となつた。政治界に於ける山縣井上のやうなものだ。もう死につこはない。

元來新聞記者と云ふものは、若し筆ばかりで立つものとすれば、其生命は七八年、長くて十年位に限られたものだ。然るに此二人は二十餘年殆んど三十年近くも新聞記者として立て居るのは何の爲めであるかといへば、彼等は筆一方の人でないからだ。即ち筆陣を張つて戰鬪員の一人となる外に、後方勤務も出來る――即ち兵站部の仕事が出來る。又謀を帷幄に廻らすことも出來る――即ち新聞經營の才もある。此三拍子が揃つて居る爲めに彼等の生命は長いのである。それに此二人の間には餘程面白い類似點と對照がある。二人共精力絕倫で兼ねて趣味が多方面である。尤も黒岩の趣味は玉突、角力、將棊、五目並などいふ勝負事なのに對して德富のは古書、書畫、印譜など云ふ純粹の趣味に限られて居る相違はある。

德富は非常に聰明な、精巧な人で、よく物事の表裏も分るし、又利害の打算にも明かであるが然し何處かに感情的な處がある。調子に乘る所がある。だからあの人にはどんな事をやり出すか一寸見當の附かぬ所がある。處が黑岩は感情的にあらずして勘定的だ。徹頭徹尾勘定的だ。一から十まで、十から百まで、何處までも算盤を彈いてかゝる。あの人の爲る事で算盤に合はぬ事は一つだつてあるまいと思ふ。だから德富と黑岩が若し人を殺すことがあると假定すれば德富のは故殺だが黑岩のは謀殺だ。見給へ、黑岩が赤新聞を起して、探偵小說の飜譯をしたり、蝮の周六と罵られたりしても、びくともしないで五年でも十年でもじつと辛抱して居る。そして一方で哲學者らしく構へ込んで「天人論」なんかを著はして、一方に着々青年の味方を作ることを怠らない。五年、十年、十五年、廿年、彼は一方に實力を養ひ、一方に青年に味方を得れば、世上紛々の毀譽褒貶などは左程氣にする必要ないと高を括つて居る。彼は玆まで來る間すべての逆の手を用ゐて來たが、今日は辛やく多年目指した順境に向つて來たのだ。新聞界を見渡した所で朝比奈は落碌し、池邊は死に、德富は死物た。自分と肩を並ぶるものも見當らない。山本內閣收攬を初むれば山本內閣は倒れる。常盤會攻擊を初むれば常盤會は裂烈する。彼恐らくは天下與し易しとして居るだらう。若し今後彼をしてノサベラしむればどんな事をするか分らないと我輩は思つて居る。

之について一寸面白いと思ふのは黑岩の美顔術の話である。——ソレ先頃の新聞にあつたぢやないか。何でも毎日午前に黑岩が車に乘つて出かける。奧さんが氣にして跟いて見るが打明けない。そして其行く先は麴町方面だ! で奧さんが段々氣が氣で無くなつて、車夫に訊問に及んだが、車夫はどうも之れ丈けはと云ふ。之はテッキリ外に情婦でも出來たのだらうといろ〳〵詮索の結果は、何の事た! 先生毎日美顔術に行つて居つたのだといふ事が分つたさうだ。五十幾歲——もう六十に手が屆きさうになつてからの美顔術! 之は我輩は至極面白いと思ふ。惡戰苦鬪廿餘年、六十近くなつてから世の中が漸く我が思ふやうになつて來て、成るべく若く見えねばならぬ必要に迫られたのだ。男は斯くありたいものだ。二十歲三十歲にして美顔術に浮身を窶す、色の生つ白い今の多くの青年諸君、卿等果して此事に對して如何の感かある?。

話しは少し橫道に外れたが、若し文章の上から云つても、矢張り德富黑岩の二人は新聞記者中の双璧である。一體我輩は新聞記者の文章としては亡くなつた池邊三山を第一に推す。情理倂せ盡して殆んど遺憾なきに庶幾かつた。然し黑岩の文も實に要領を得たもので、論旨明晰、理義透徹云はんとする所は一言の無駄もなく、又一言の手落ちもなく、言ひ盡す所は天下一品である、即ち新聞記者の文としては先づ理想に近いものと云つてもよい。只黑岩には熱が無く感情がないからして、文章に面白味と云ふものがない。其點になると德富の文は面白い。流麗の筆致婉曲の措辭、確かに一代の文章家である。殊に近來は漢字を縱橫に驅使するの手腕益々圓熟の極に達し——尤も偶まには餘り凝り過ぎてるのもあるが——讀んでは實に面白い。確かに文學者的新聞記者である。然しど

うも文に力がない。自分の主張を何處〳〵までも徹底させやうとする意力が乏しい。例へば黒岩の文は鋭利な刄物で刺すか、拳を握り固めて、グワンと打撲るやうな趣がある。受身になる方からいふと身體がチク〳〵痛むか、ピリ〳〵する。其極度になると人をして死に到らしむる力がある。即ち黒岩の文は刺す殺すか、握り殺す力を有つて居る。亡くなつた池邊の文は人をギユウと抑へつける力が非常に强かつた。即ち受身になる方からいへば全身に重たみを感ずる。自然〳〵に締め附けられるやうに感ずる。其極は矢張り人を絞め殺す力があつた。處が德富の文はどうも擽ぐるやうな氣味がある。尤も世の中には擽り殺すと云ふことも確かにあるが、德富の力はどうも殺す所まで往かない。之が彼の新聞記者としての缺點である。

然し何と云つても此二人者は東西を通じて新聞記者中の元老であり横綱であつて、他の人は此二人とはまだ角力が取れさうに思はれない。

以上は我輩が局外から觀て、自分の想像で以て捏ね上げた二人の評論であるから實物は全く違つて居るかも知れない。若し違つて居たつて別に我輩は何とも思はないし、又お二人に於てもお氣に障へられて下さらぬやうにお願いたす。讀者諸君に於ても其お積りでお讀みを乞ふ。

△大阪の首腦的政治記者

向陵山人

大阪の政治記者と東京の政治記者とは、同じ政治記者と云つても、其意味が餘程違ふ。何か政治的會合でもある時に、其社の政治的代表の意味で出て行くものが、東京に於ては所謂政治記者であるが、大阪に於ては多く社長とか主幹とか云ふものが出て行く。即ち朝日では村山、毎日では本山がさう云ふ會合に出て行く。其外大阪新報の加藤恒忠、時事新報の主幹高見龜なども矢張り政治的代表の意味で出て行く人である。大阪日報には主筆に白河鯉洋があるが、然し先づ大體から云ふと、大阪で評論すべきものは矢張り大朝、大毎の二新聞であると云つてよい。

朝日の政治記者と云へば先づ西村天囚、鳥居素川、石橋白羊(爲之助)土屋元作などで、毎日の政治記者は、主幹の渡邊己之次郎、通信部長の高石眞五郎などで又高木利太なども本職は經營の方であるが政治記者中に入れてもよからうと思ふ。編輯にはいろ〳〵有力な人物があり、又社内に於てはなか〳〵の勢力があつて、外から見ると内から見るのとでは多少其趣を異にするが、先づ外に對しては以上列擧した人が首腦的政治記者であると云つてよからう。

朝日の西村と、毎日の渡邊とは其對照が餘程面白い。どちらも餘程古い記者である。西村は文壇に立つこと殆んど三十年。渡邊は之には及ばない、又年齢も十年以上若いやうであるが、然し新聞記者としては可なりの古株の方である。どちらも社の内部に對して持つて居る勢力は餘程大きい。が其大きい具合が餘程違ふやうだ。西村は非常に脊が高い。形容すると身長六尺堂々たる偉丈夫だ。渡邊は脊が低くクリ〳〵肥つて血

色のよい人だ。

渡邊は水戶の人で菊池幽芳などゝ同窓の出身だと云ふ。大毎の創立者で社長であつた渡邊治といふ人の養子である。そして治と云ふ人は確か常陸山の從兄とかに當る筈だ。之に反して西村は薩摩の種ケ島の產だ。薩藩主の種ケ島家の爲めに「南島偉功傳」と云ふものを書いたことがある。漢學を重野成齋に受け、少年にして漢文をよくし、又好んで歷史を修めた。殊に維新の歷史には餘程深き興味を有し、之に關する著作などもある。又馬琴の「質屋庫」に擬して作つた「屑屋籠」などによつて早くから文名を成した人である。其頃は大分舊式の文章家であつたが、段々世と共に推し移つて今では文章も餘程進步した。近來書いたものでは廣瀨旭窓、淡窓の事を書いた「宜門之二廣」など氏の漢學者たり歷史家たるを證したもので、又中井積善の懷德堂の再興などに盡力したのも、其素養の那邊にあるかを示したものと思ふ。一體が學者文章家と云ふ方であるから新聞記者としては餘程品のよい、研究的の事を得意とするけれども、政治の論說も書かない事はない。此人の文章で近來の傑作は明治天皇及び照憲皇太后の誄詞で、或は彼の文章中の第一の立派なものかも知れない。內藤湖南の如きも、此頃の京阪の文壇に三名物あり、其一は天囚の誄詞、其二は京都大學の鈴木虎軒の漢詩‥‥などゝいつて居るさうだ。此人はさういふ風に學者文章家であり、且つ人格も立派な人であるから、朝日に於て蔚然たる勢力を有して居るのも其手腕技倆よりは寧ろ人格德望によるやうである。又村山が彼を多として優遇するのも又學問人物と云ふ點であらうと思ふ。

西村と渡邊と比べて又面白いと思ふのは、西村は學問が好き、旅行が好き、漢學者丈けに書も書き詩も作り、又書畫の趣味もある。處が渡邊は全く新らしい學問をやつた人で、其素養は重もに橫文字の方から來て居る。西村も勉勵家ではあるが、渡邊の勤勉は又非常なもので、新聞界第一の勤勉家といつてもよい、彼は灘の西宮に住まひ、朝早くから毎日〳〵社に出勤して夕方まで必らず社務を見る。一年三百六十五日欠伸一つせずに判を捺したやうに同じやうに勉强する。社說も澤山に書く。それから此人の得意は外交問題で、殊に東洋問題に深き注意を拂つて居る流石は水戶の出身丈けあつて、一通り漢學の素養もあり、號を綠岡又は醉夢と云ふ。醉夢は其一面の洒落な事をあらはしたものかも知れぬが然し、別に風流な遊びをするでもない。綠岡の方は水戶の好文亭の向ひの丘で水戶の勤王史の一つの名蹟である。

右のやうな風に西村と渡邊とは非常に違つて居る。それから又一體に京阪の間には好古趣味が非常に盛んで、朝日の村山、毎日の本山なども其趣味を持つて居る一人である。殊に朝日では上野理一も其道の大熱心家で骨董家が出入して居る。それから前の主筆內藤湖南や西村天囚土屋元作なども其仲間である。かう云ふ趣味は毎日よりも朝日が盛んである毎日は日新の智識に重きを置く。朝日も無論新らしい智識を疎んずるのではないが、一方に好古趣味が盛んである。

又朝日と毎日の二つの社について見逃すべからざることに社內の平和

と云ふ事で、朝日の方はよく二大黨對立と云ふことを傳へられるが、之は要するに朝日では古い人を決して出さぬから古い人と新らしい人との對立と見るべきである。又大阪本社の內に二大黨があるのみならず、大阪と東京との間も、本社支社の關係よりも寧ろ互に隱然一國を形成して居る趣がある。大阪に於ける二大黨と云ふは、云ふ迄もなく一は西村を頭領とし、一は鳥居素川を首領として居る。鳥居は政治記者としては勿論西村の上にあるけれども德望は西村に及ばぬらしい。何れにしても社內に二大黨のあることは朝日の爲めに惜しむべきである。之に反して每日の方はよく纏つて居る。大阪の方も纏つて居るし、又大阪に對して支社たる東京日々の方も纏つて居る。之は恐らく本支社の連絡機關が每日に備つて朝日の方に缺けて居る爲めであらう。

朝日の方は西村は德望を以て、鳥居は手腕を以て相對立して居るが、每日の方には渡邊に對立する人が一人もない。副主幹は菊池幽芳であるが此人は小說專門の人で、別に社內に勢力を扶殖しようとの考もない。渡邊に特筆すべきことは餘程公平無私な人で職務にかけては殆んど理想的に公平と云つてもよい。又社長の本山も協議的に事を纏めて行く事の上手な人だ。之は朝日の村山の稍々專制的なると相反する。若し村山の如く切れる剃刀を振り廻すやうにのみやれば、朝日の今日の盛況を見られなかつたかも知れぬが、一方に上野と云ふ要領を得ぬ人があつて此れを調和した爲めに好都合に行つたのである。

終りに望んで前に列擧した人々について一言づゝ話して見ると、朝日の石橋は風采堂々として好個の代議士である。一體大阪は記者として名を成すに都合のよい處であるが、石橋の如き全く記者を踏臺として政治家となつたのである。此人は同志社の出身で二三ヶ國語の書を讀み、中にも英語が最も得意である。

土屋元作は元、時事新報から出て、十年前每日に主筆らしくなつた事もある人だが、事情あつて朝日に轉じ、今日迄朝日の客將の位置を占めて來た。此人は外國語がよく出來、人物もよく、趣味も豐富である。政治記者は本職と云ふではなく、八宗兼學と云ふ風で何でもやる人であるが、政治方面に於ても相當の働きが出來る。

每日の高石眞五郎はまだ三十七八歲位の若い人であるが、身體が至つて壯健で運動家である、千葉縣の海岸の生れで水泳ぎが非常にうまい。なか〱の活動家で將來の發展は注目に値するであらう。

高木利太と云ふ人は一見してやさしい人に見えるが、藤田の親類に當る人で、財界にも餘程頭の賣れた人である。元、通信部長をして居つたが、今は專ら經營の方に當り、なか〱才能あり、書などもうまく書く

△黑岩、德富、石河の三氏

仙朶谿隱士

黑岩と云ふ人は、遠方から眺めた所では頗る感情的で、或意味では義俠的な所があつて、其結果、物を觀るに大體を見ずして一方に熱中して

見ることがありませんかと思ふ。だからして一方から見れば理想團の演說をやつたり、天人論と云ふ哲學書を出版したり、人生問題や婦人問題を研究したりして頗る道德家のやうである。が一方氏が萬朝報を初めた時分――即ち明治二十八九年頃には隨分と他人の惡い事を發いて、それを賣り物にしたりして悪德新聞とか蝮の周六とか云はれた事がある。さう云ふ事を見ると、先生は目的の爲めには手段を擇ばぬ人で、何か一つ目的を達する爲めにはどんな事でも遣り兼ねない人のやうである。現に此前山本内閣を倒す時などにも隨分極端な手段を取つた――例へば原内相攻擊のやり方などを見るとどうも今日でも其風がありはしないかと思ふ。元來が負けぬ氣の人であるから、一旦言び出せば是が非でも通すといふ處がある。之は個人としてならよいかも知れぬが、新聞と云ふ公けの武器を以てそれを遣り出したら、世を益することがあると同時に、隨分世を誤ることもあるだらうと思ふ。

今では東京の新聞記者を見渡した所で朝日の池邊吉太郎は死に、德富は近頃病氣や何かで餘り熱心に新聞の上に力を及ぼさないとすれば、黒岩などは一番活動して居る人かも知れぬ。それに市會議員選擧にも成功して大分乘り氣になつて居る所であるから、此れから先きどんな事をやり出すかも知れぬ。が此人の目的はいろ／＼あらうが、矢張り第一の目的は新聞商賣であらう。いろ／＼極端な事をしたり云つたりするのも、新聞の勢力を盛んにして多く賣らんが爲めであつて、個人として東京市を支配したいとか、一度大臣になつて見たいとか云ふ事はなからうと思ふ。さすれば此の先きどんな事をするかも知れぬと云つて見たもの丶、大體に於て世の人氣を去ることは出來ぬから、若し世を害するやうな事があつても大して甚しい事は出來るものぢやないと思ふ。例へば社會主義とか破壞主義とか云ふやうな事は、假りに黒岩がやらうとして目論んだとして見ても、やれるものぢやないと思ふ。現に前年あすこに幸德とか堺とか河上（淸）とか云ふ社會主義者や、内村鑑三など云ふ毛色の變つた宗敎家などがあつて、日露戰爭當時に非戰論を唱へた。其爲めに萬朝の人氣が著しく減つた。當時黒岩は果して此等の連中と反對論であつたかどうか分らぬが、其腹の底は新聞經營にあるんだから、遂に此等の連中を逐ひ出して了つた。即ち其心が新聞經營にあるからには、國民の擯斥を受け、新聞の賣れなくなるやうな事は到底爲すことが出來ないのである。であるからして害をなさうとしても左程大きな害はなさるゝものでないと信ずる。

で自分の見る所によれば、黒岩と云ふ人は大體が考の徹底せぬ人と思ふ。いろ／＼の事をやつて見る。勝負事にも凝つて見る。哲學もやつて見る。理想團も起して見る。又享樂主義者のやうに見える所もある。新聞經營によつて金も作つて見たい――と云ふやうな風で、深く徹底した所はないと思ふ。然し何にせよ、今日では新聞界の第一の働手であるから成るべく其勢力を善良な方面にのみ用ひて貰ひたいと思ふ。

それから德富猪一郎、此人は福地源一郎の最も盛んな時代に新聞記者たるの志を起して立つた者で、今日まで殆んど三十年新聞記者をして居

る。此間に於て新聞記者として令名あつた島田三郎の如きは夙に新聞記者として失敗した。之は議論餘り單調であつたのが一つの原因であるが又一種の道德に囚へられた爲めに新聞記者としての變通を缺いたのと、部下を御することが出來なかつたのとで、とう〳〵毎日新聞社を人手に渡して記者を廢めて了つた。だから新聞記者としては一度成功しても要するに失敗者である。只德富は前後三十年、善惡の批評は盛んであつたが、兎に角國民新聞を經營して今日の勢力に至つた。先づ明治年間の新聞記者として其成功德富の右に出づる者なしと斷言してもよからう。特に國民新聞は外國と一種特殊の關係を繋いで來て居ることは餘程注目に値する。成程外國電報は「朝日」なり「日々」なり「時事」なりの方が「國民」よりも多い。然し德富個人として外國の有力な記者などと親交あり、日本の内部の事情なども「國民」を通じて外國に傳はり、又外國の或る内部の事が「國民」を通して報導せらるゝ事のあるのは、之は德富の初めより意を用ひた所と思ふ。殊に文章に至ては新聞記者としては日本では獨歩であつて、誰しも之に並ぶ者が無い。又博覽強記にして其學問趣味多方面に渉り、書くことも、彼の門外漢の「東京だより」の如きも十何年間になるが未だに人を厭かしめずにやつて居る。

若し德富が新聞記者丈けの人であつたならば、其説を變じたり其態度を變じたりした事が、世間の酷烈なる攻擊の標的にはならなかつたらうと思ふ。吾人は物に凝滯せずと云ふが新聞記者の物に凝滯すべからざる事吾人以上で、寧ろ世と共に推し移らなくてはならぬのである。島田の如く物に凝滯する者は却て新聞記者たる資格なしと云つてよい。只德富け新聞記者たる外に、一方に於て政治家として、紳士として、殊に國民及び靑年の指導者として立つて來た。新聞記者としての必要上頭を屈することでも、紳士としては如何にも陋劣に見え、新聞記者として世と共に推移した事でも政治家としては如何にも操守なきかの如く見られた。それに若い時に同志社で新島先生の薰陶を受けて一種の道德的修養を積み、其光は螢の光の如く時々ポカリ〳〵と光つたり、日曜講壇などで大いに精神的の敎訓を與へたりするものだから、少しでも薄暗い事があつたり、又理想的でない事があつたりすると、其わるい方が一段目立つ事になる。詰り自己が日曜講壇などで書いた事で以て自己の行爲を裁判した形になつた。政治家として大隈、松方、伊藤、山縣、桂、寺内などに附いたり離れたりした其出處進退については世の攻擊がなか〳〵激しいのであるが、彼には彼相當の理由があるやうであるし、又後の人は大いに恕すべき點を發見するだらうと思ふ。彼は友人としては不人情でなく、寧ろ或程度まで極めて親切である。舊友は決して捨てず、親には孝行、家庭は圓滿、品行は方正で、感心すべき點はなか〳〵に多いのである。不幸にして近來健康頗る勝れぬやうなのは氣の毒である。一時桂公の失脚と共に德富の健康もわるくなり、去年の夏あたり長く山水の間に優遊して居つたが、先頃又父を失うてから再び身體をわるくしたやうであるどうか一日も早く恢復せられんことを心から祈る次第である。

東京の新聞界に多士濟々たりと雖も、大體の見解の立つ者は殆んどな

い。財政通、外交通殊に支那通など云ふものは澤山にある。然し國家全體に亘つて大體の見解があつて、之から日々の事を割り出し得るものは德富の外にないと云つてよい。德富にも無論僻見はあるが、彼は出來る丈け之を去つて、大體を見ることに努めて居るから、他の記者に比しては非常の相違があると思ふ。

　石河幹明と云ふ人は餘り世間に顏を出さぬ人である。新聞記者としては交際場裡などにも多く出ない。又文章も非常に奇拔な事を書くでもなく、寧ろ平凡に近いのであるが、其所說は何時も穩健にして、時事新報が福澤先生死なれて後十何年後の今日まで、在世當時の面影を存して居るのは全くあの人の力と思ふ。又議論も常に穩健ではあるが往々にして其見識一頭地を抽くことがある。時に世間が躍鬼となつて騷ぐ時に、時事は冷靜の態を失はず、世の嘖々者流と同ぜずして却て之を戒むるやうな事は天晴れの見識である。只あの新聞は福澤一派が大株主をして居る關係からか、相塲の記事などの上に一種の壓迫があるやうに聞くが、それにも拘らずあの新聞は日本で一番公平な新聞と思はれて居るのは石河幹明氏の力に外ならぬと思ふ。之れ又今の日本では得難い人物といはなくてはならぬ。黑岩などが個人的にあの位の力ある人でありながら、國家の大問題に對しては、大體を見ずして一方に僻して了ふのに、時事が悠々として迫らず、常に穩健着實の態度を失はず、國論を中正の道に導かんと勉むるのは實に大いなる功績であつて、私は石河氏微りせば能く斯くの如くなり得なからうと思ふ。さればあの人が交際場裡などに餘り出でずに、時事の爲めに盡して居るのは頗る意味のある事だと思ふ。

七月十五日に發行せらるべき「新脚本號」の「女優の觀たる女形」に執筆すべき女優は

松井須磨子　林千歳

秋元千代子　山川浦路

森律子　衣川孔雀

河村菊枝　村田嘉久子

の八名なるが、現在に於ける新舊女形の個々に對する忌憚なき評論など、興味頗る多かるべきを信ず。

フランク、ヴェデキント著
文學士 野上臼川君譯

原著者書簡挿入 齋藤與里畫伯裝幀
中判箱入美本 著者最近肖像及舞台面寫眞
正價壹圓貳拾錢 送費八錢

愈々出來

春の目ざめ

兒童の春機發動期に際し父兄は其性欲的知識を如何に處置す可きか。是實に**教育界近時の大問題**也。此書一度文壇に現はれて獨逸政府は全國中學校をして性欲的學科を課せしめたる程の感化を與へし問題劇也。原書發行三年目に三十六萬冊を賣り盡せる記録を以てしても此書の世界的聲價を知るに足らん。若し夫れ此の書の藝術的最高價値に到りては今更喋々を用ひず。此書を窺はざる者は**近代文學**を語る能はざると共に、子弟の爲に眞面目なる考慮を吝まざる世の**父兄及教育者は必ず一讀**の義務あり。今や**文明國**を通じて『春の目ざめ』の翻譯を所有せざる國なし。此書は譯者二年間の苦心。少く共英譯書に優る自信を有す。

新刊

ヘンリック、イブセン作
中村吉藏君譯

ブランド

中判箱入頗美製本
正價壹圓貳拾錢
送費八錢

(中付二の一)

發行所 東京牛込見付前 **東亞堂** 振替東京一七一一番 電話番町五三七番

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新刊

沙翁傑作集第六

ヴェニスの商人

坪内逍遙博士譯述

洋裝天金頗美本
寫眞版木版密畫數葉入
全壹冊
金壹圓卅五錢
郵稅金八錢

劇を口にする者にして沙翁を説かざるはなく沙翁を説く者にして**人肉抵當裁判**法廷の場を知らざるはあらず**猶太人シャイロック女裁判官ポオシャ**の名は**全世界**の人口に膾炙し小學生徒も之を知らざるを恥辱とす而も其**原作**の**完譯**は未だあらず少く**悲劇的底調**なる其輕妙**滑稽趣味**なる其幽婉**ポエトリー**を共に剩さず之を捉へて**雅馴明快**殆ど今日の**創作物**を讀むと一般**現代語譯**は本譯を以て始とす巧に**虛實**の**皮膜間**を縫ふ沙翁の靈腕は此譯によりて最も善く窺ふに足る骨は幾百年前の荒唐なるローマンスなれども作中個々の人物は**躍々**たる**肉塊**と現じて今尙鮮かに生命を有す沙翁喜劇の特質を最も善く代表せる傑作

【既刊】

1 ハムレット
2 ロミオとジュリエット
3 オセロー
4 リヤ王
5 ジュリヤス、シーザー

大好評 何れも重版
各壹圓卅五錢
郵稅各八錢

發兌 東京牛込早稻田 振替一一二三番 **早稻田大學出版部** 東京神田裏神保町 振替五〇一番 **冨山房** （賣捌）全國書肆

（中付二の二）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

銳敏なる觀察眼に成れる破天荒の快著

堀内新泉先生著

■忽再版■

人間百種 百人百癖

對手の人物如何を看破するは處世の一大秘訣也。著者十年の苦心能く一百餘人の性狀習癖を研究描寫し以て此書を成す。觀察奇警、文章輕妙、各種の人物讀者の眼前に活躍す。諧謔の中に教訓を含み、諷刺の間に機微を傳ふ。何人も一讀直ちに對手の人物如何を看破し得るに到ると共に亦以て自家修養の一大教典と爲すに足る。世態を知り人間を解せんと欲する者は速かに本書に來れ!!!

四六版四百七十頁總布上製美本
定價金壹圓拾錢（送料金八錢）

■内容概略■

■金ばかり欲しがる人■常に歎息する人■酒癖の惡い人■細君に使はれる人■上手に金を借りる人■尻の重い人■元氣の好い人■人を只で使ふ人■女の尻ばかり追つかける人■得手勝手な人■情深い人■遊んで居て金を儲けやうとする人■至つて呑んな氣な人■少しも當にならぬ人■尻の落ち付かぬ人■自分で運を開く人■早合點をする人■色々な事に手を出す人■妙な癖のある人■遠慮深い人■だらしの無い人■誠に几帳面な人（以下百種）

■全國著名の書店にて販賣す品切の時は直接弊店へ御注文被下度候

好評

大阪毎日新聞社長本山彦一氏序
雜誌（現代）主筆 横山健堂氏序
大阪毎日記者 平野秋來氏著

薩摩氣質 兵兒の國

中版三百餘頁クロース上製 箱入寫眞版數葉入美本 九拾五錢 送料八錢

■報知新聞批評、偉人南洲俊傑甲東を出せる兵兒の國〆大正の新世に入つて一山本權兵衛を出し武士道の頽廢に三嘆せしむるの時此書を讀まば感益々多く興益々饒かるべし殊に姉若たる女傑山本榮子の一項は對照頗る妙なり全卷生氣充ちて明快の筆路興趣津々として盡きざるものあり■全篇中奇傑花大人の暗中飛躍、二尺七寸の豪傑は小説以上の珍奇なる事實にして文章の絕妙なると相待つて讀者をして瞠目せしめずんば止まず

發行所 東京市本郷區本郷一丁目大通 電話下谷四三六二番・振替東京一二五五八番 日東堂

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

評論

文藝時評　中澤臨川

新哲學の精神

『創造的進化』……………金子馬治
桂井當之助譯
『物質と記憶』……………西田幾多郎
高橋里美譯
『ベルグソンの哲學』……………錦田義富譯
『ベルグソン哲學の眞髄』……………稻毛詛風
市川盧山共著
『笑の研究』……………廣瀬哲士譯
『ベルグソンと現代思想』……………野村隈畔著
『泰西思潮第一輯』……………千葉鑛造譯
『ベルグソン哲學の解說と批判第一篇』……北昤吉著

ベルグソンの名が遍ねく知れ亘つてから、また數年を出てない今日、彼の名が世界の殆んど何の端に到るまで一種の狂熱を以て迎へられ、彼の敎室には流行を追ふ紳士淑女の影を見るばかりか、殊に眞面目な各國の學生——その中には露西亞人が多いと云ふことである——を集め、エナ大學のオイッケン博士の敎室に於てさへ、より多く彼の崇拜者を發見すると云ふに至ては洵に異常な顯象と言はざるを得ない。我邦に於ても、最近一年を出でざる間に、前揭の如き多數の書物が出て、彼の紹介や批評に忙殺されてゐる有樣である。

斯樣な流行は是認さるべき充分の理由を有してゐる。殊に我邦に於ける飜譯や紹介や批評が、大體に於て眞面目で忠實であると云ふことも賀すべき顯象であるが、獨り斯道の大家と稱ばれてゐる專門の哲學者達が、一樣に口を緘して是非の議を挾まないのは、如何なる理由に因るのであらうか。たゞにベルグソンに就てばかりでなく、ニーチェに就ても、ヴントに就ても、ヘーケルに就ても、ジエームスに就ても、オイッケンに就て

も、我等はまだ彼等の理解ある獨創の研究を見たことがない。彼等の教室から世間を指導するやうな、尠くとも青年に一種の興奮を賦へるやうな議論の洩れた例を聞かない。さるにても、彼等の頭腦は認識論の論理的遊戯に疲れ果たのであらうか。哲學史の死灰の中で窒息したのであらうか。我等はジエームスと與に彼等に向て斯う叫びたくなく。『ベルグソンを繙け、汝の讀む頁毎に新しい地平線が開ける。それは宛かも朝の息の如く鳥の歌の如くである。それは塵埃だらけの頭の教授どもが前の教授の考へたことを繰返し棒讀みするに反して、實在その物を汝に教える』と。

ベルグソンの主要な著作は『意識の直接與件』を除いては、殆んど全部我國語に譯された。これ實に最近に於ける思想界の重要な收穫であつて、我等は飜譯者の勞を多しとせざるを得ない。唯だ前掲の一書が彼の最初の著作であり、彼の哲學に堅實な基礎を與へると云ふ意味に於て最も重要な物である限り、其飜譯の續いて現はれて欲しいものである。稲毛、市川兩氏の、『ベルグソン哲學の眞髓』にはル、ロア氏の解説の飜譯が大部分を占めてゐる。ル、ロア氏の解説は人も知る如く、ベルグソン研究者には唯一の好指針であるが、惜いことには市川氏の飜譯は大部分不可解なものに終つた。それから錦田氏の『ベルグソンの哲學』に收められた二篇が必讀の物たるは勿論、千葉氏の『泰西思潮』の中にある『生と意識』は意識と生命と物質との意義を闡明し、人間の位置を明かにしたもので、ベルグソンの世界觀を簡約して窺ふに便利である。北氏はベルグソン研究者として深い素養のある人と聞いたが、氏の『ベルグソン哲學の解説と批判』は要するに失敗に了つてゐる。私の考では、彼の著作のやうに肉も血もあつて渾然たる體をなし、理義一片でない物を、梗概的に凝縮しようとする企は、初めから無理ではなからうか。その紹介の方法はル、ロアの採つたやうな觀賞的態度に依るほか無いのではなからうか。それが證據には氏と同樣な企をしたキッチンの『初學者に向つてのベルグソン』が矢張失敗に了つてゐるのを見ても解かる。

私は斯樣に旺盛なベルグソン研究熱を祝するとゝもに、彼の研究者の爲めに自分の思ひ附いた二三の暗示(ヒント)を與へたいと思ふ。

哲學の復興は現代の大勢である。あれを一時的の流行と見做す者は短見者流である。それはやがて廿世紀に於ける精神的復活の一般潮流を示してゐる。理智的唯心論はカントに到て其頂點と行き詰りを示し、新に起つた唯物論も僅々四五十年を命として、脆くもその缺點を曝露した。世は目まぐるしく變つた。在來の宗敎道德も最早我等の上に絕對の權威を有たなくなつた。その間空虛と暗黑に堪えぬ我等の心は何等か新しい要求に悶えた。廣い意味の哲學的要求が我等に再興した。然るに在來の哲學者は恒久の眞理と稱する美しい名のもとに沒人格的なバベルの塔を築き上げたり、枯渇萎靡した理知の遊戲に耽つて實在の生命を忘れようとしてゐた。斯樣な思想は勿論近代人の要求を滿足さすべくもない。我等はもつと我等の生命に近い新哲學を促さゞるを得ない。

「今日の哲學界に於ける一種異樣な不安は見逃し得ない顯象である。……是等の不滿足は主として其說の餘りに抽象的、學究的(アカデミツク)であることに歸因する。生命は多岐で、また滿ち溢れて居る。で、新時代の要求する所は、たとへ論理的正確と形式上の純粹に於て多少の値引はしても、その哲學により多くの生命の氣分を欲してゐるらしい。超自然的唯心論は、そが「絕對主體」とそが目的の統一にも干らず、世界を搖(ゆす)ぶつて不可解のものとしてゐる。バークレーの唯心論は吝嗇主義を棄てて汎精心的(パンプシキツク)空想を漲らしてゐる。また、經濟論は目的觀と戯(ふ)ざけ、最も奇怪にも自然的現實主義が永く埋められた芝生(しばふ)から頭を出して、四方から再び之を引き起さうとする歡迎を受けてゐる。私自身も現存の解說には滿足能きない一人である。で、偉大な動搖の徵候を見て、宛かもより眞實な概念とより有効な方法とが近づいたかの如く想像し、もつと剪りつめられない、もつと尖らず自然的な眞の風景の開展を期待し

てゐる。』とはウィリアム、ジエームスの述懐である。而して斯樣な要求に最も協つた物は即ちベルグソンの哲學ではないか。なぜなら、彼は我等の直接實在即ち意識の忠實な闡明者であつて、潑溂たる生命の學の使徒であるから。ベルグソンが現代人の感興を牽く第一の原因は此處にある。

文字通りの眞理は得られるか、我等は「物それ自ら(ディング、アン、ジッヒ)」を捕捉しうるか、とは哲學上の永い疑問であつた。然るにカント派の學徒は之を拒んだ。科學は傲慢に眞理を裝ひながら同じく失敗を重ねた。そこで或る哲學者は失望の餘り寧ろ虛僞を奬勵した。彼等は行爲主義(プラグマチズム)に傾いた。『或る意見の誤つてゐると云ふことが、直ちにその意見に反對すべき理由とはならない。要するに、その意見が何れだけ生命を向上させ、生命を保存し、種屬を保存するかが問題である』とはニーチェの詞である。然るに若し茲に眞理は知りうる、我等には生命の直接性(インメヂエート)に到達する道が拓かれると敎ゆる人があつたとき、我等の喜はどうであらう。ベルグソンは正しくその人である。直觀に歸れ——斯う彼が敎える——生きた智的同情に依れば我等は生命の實在の中に、devenir réel の中に我等を置くことが能きる。在來の我等は餘りに理知の重荷に惱まされて來た。今一度小兒のやうな原始的直觀に歸れ。『哲學をして再び the All の中に融ける努力たらしめよ』と。要するに、久しく不可能視された眞理の道は復活した。我等の悟性の前途には洋々たる希望が開けた。これが哲學の歡迎される第二の理由である。

今日誰が變化または進化の理を拒みえよう。それを拒みうるとしたら、非科學的豫想觀念からだけである。要するに、進化は事實であつていかにその本然を研究體得し得べきかゞ問題である。既に進化の事實を認むるとしたら、我等は在來の靜的態度を棄て、動的の方法を採らねばならない。空間的存在に固着せずして、運動乃至時間その物を實有と見なければならない。數學が先づその方向に進んだ。『かの人間の精神の發見した最も有力なる研究方法』たる微分學(ディフエレンシヤル、カレキユラス)は正し

くこの要求に因つてゐる。近世數學は既成形固定的のものに代ふるに、流動發生的のものを以てし、數量の生起を追攝し、運動をば外面から把へずして內面から把へ、運動の終極した結果を採らずして其變化する傾向を追はうとする努力を來してゐる。また、最近に於て生命の科學、例へば生物學や心理學が採つた態度は更に根本的に動的であつた。そこには幾何學的に空間に横はる物よりも、一の狀態と他の狀態との間の動的關係即ち變化が重視せられた。約言すれば發生と進化がその研究の主題となつた。然るに哲學はと見ると我等の精神活動のうち獨りこの部面だけては、相變らず昔ながらの「絕對」や「恒久」が重寶がられた。スペンサーの進化論はあつても、それは科學上の進化論の雜然たる集成に止まらなんだ。そこへ現はれて、意識乃ち精神に眞の意味の進化論を適用し、併せて在來の進化論により深い意味を加附したのはベルグソンてある。彼の哲學が一層新時代に適切てある第三の理由はこれだ。

凡そ如何なる哲學者にも、彼のleit,motifまたは獨創の概念を凝縮したかに見える或る特種の詞がある。カントの『理性』乃至は『至上命令』、ショーペンハウエルの『生存意志』、ニーチェの『權力意志』、ヘーゲルの『絕對』、コントの『實證說』、ハルトマンの『無意識』、ジェームスの『根本的經驗說』、オイッケンの『新精神說』または『活動主義』などがそれてある。それは其哲學者の新世界觀の記號または旗幟て、斯樣な詞の眞髓を把むことは即ち彼を最も善く了解する所以てある。て、若し一たんその了解のてきた上は、彼の他の雜多な議論は總て忘却した後ても、その詞に附き纏つた獨特不可說な心像(イメージ)が、何時までも我等に殘つて、生々と彼の世界觀の風貌を談るてあらう。今、ベルグソンに就て斯樣な詞を求めるならば、『持續』(durée)、『直觀』、『生の衝動』(élan vital)などを擧げねばならぬ。

ベルグソンの持續乃ち流動の世界は、我等の日夕の常識または科學上の概念を主にしては、最も入り難い

世界である。それは禪の三昧境に入るやうなもので、我等の思索方法は全然一變されなければならない。されば、彼の哲學の最初の要求は昏睡者を呼び醒ます警鐘である。我等の疲れ沈んだ悟性に活を入れることである。「汝は再び目覺めねばならぬ」、斯う彼の宗徒の一人が言つた。「ベルグソンが最先きに我等に要求する所のものは、一種の內部悲劇である。幾人か斯樣な論理的革命に堪えうる者があらうか。しかし一たび斯樣な心理的變化を受け入れることの能きた者があるならば彼は決して再び從前の狀態に歸りえないことを悟るであらう。……戀すると同じやうな趣で理解する。彼は全諧音を捉へた」と。

ベルグソン自身がまた次のやうに言つてゐる。「我等は直觀とよび知的同情に向て、實在を捕捉し得られる。之が爲めには、我等の精神が先づ自己を殘害しなければならない。思索活動の習慣的方向を轉換し、其一切の範疇を不斷に逆反、否寧改造しなければならぬ。斯くして始めて流動觀念が得られるのである。」

されば直觀に到達する道は決して容易の大道ではない。我等が本然に立歸るとか、純粹知覺に入るとか言ふことは、「茫乎と水の流を眺めてゐる羊飼」のやうに、怠惰な夢に耽り、または愚かしく悟性を鈍らせることではない。「太陽の光に溶する貝類のやうな歡びの痙攣」に罹ることでもない。純粹知覺は實生活に砂金としては存在しない。たゞ或る化合物として發見される。で、直觀とは取も直さず、斯樣な化合物を分解して純金をうる努力である。人間性の不完全から、また地上に生活を送らなければならない者の必然の約束から、直觀は空手でゐて受身には獲られない。直覺は純粹悟性に一種の努力を加味した熱想である。若し所謂純粹知覺が實生活に存在したら、それは白雲のおのづから天に湧く如き、無心の出現であらう。然るに直觀は死苦と生苦とを嘗めて漸く現はれる。でベルグソンはその性質を形容して「活動的、殆んど狂暴的」と謂つてゐる。それが宗教家の轉機にも似た努力であると謂はれるのも、斯樣な意味合からである。

次に猶一つ忘れてならないことは、持續世界の異質性と云ふことである。同じく意識乃至持續と言つても、それには相滲透した深淺の幾多の層がある。リズムを異にした幾種かの樣相(フェーズ)がある。從て我等の直觀もまた之に應じて深淺抱擁の度を異にする。同じく直觀と言つても、その作用は汎くして且多樣であるとを我等は銘記せねばならぬ。それでないと、折角作つた持續や直觀の流動觀念を、復た平面的な單調なものにして打壞して了ふ。

直觀は神祕ではない。我々日々之を經驗する。無心な小兒の知覺から、大詩人の靈想に到るまで。然かし斯樣な悟性は今日まで、たゞ各個人の興趣に放任して、自在な去來に任せてあつた。其れに、我等が悟性の他面即ち理智に與へたやうな訓練を與へようと云ふのがベルグソンの哲學である。彼の說に從へば、直觀は確かに科學的に訓鍊し得られる。或は換言すれば、「實在のさまぐ\な外面的表現と永い親みを重ねて、其の信用を博した後でなければ、實在の直觀即ち知的同情に達することは覺束ない」然るに直觀は一種の强制的努力である。ベルグソンの提唱するやうな心的革命は漸成的に現實さるべきものである。かるが故に、所謂「進步哲學」は、「たゞ幾人かの思想家、幾人かの觀察者の協同的、進步的努力に由て、漸成せられ、訂正せられ、補綴されつゝ成就するのである。」

斯樣にして我等の直觀は修養に由り漸次に擴大し進步するとしたら、今日我等が稀有とする直觀の機能も、他日修錬の結果、我は我等の常習となる時期が來るであらう。かくして、或等の悟性は次第に絕對に近づき、詞通りの「全的經驗」が開け、眞の哲學の圓熟する曙が明けるのである。

海外評論

日米問題唯一の解決法

在米　高橋清輔

米人は排日を斷行すれば日本人の反感を激厲し日米戰爭も避ける事が出來なくなつて來ると云ふ事は心得てゐる、だが不思議にも排日の火焔は上る一方である。米國では人民が排日するので、政府は建艦を急いでゐる、海軍の擴張が完備し、パナマが完成して艦隊の迂廻を急ならしむるやうになつたら排日は一層露骨に、辛辣になつてくるのであらう。加州の土地問題が上つた時、ルーズベルト氏の「パナマ運河開通を待つて」と云へる頗る耳障りの言葉があつたのを見ても推知するに容易である。過去の事實より推知しても、桑港の學童問題が起つた時よりも移民禁止された時の方が日米の親善は殺かれてゐた、それが加州の土地問題の時になつて更に不安に傾いた。これを米國の大統領より云ふとルーズベルトの行政時代よりタフトの施政時代に移つて惡く、之れが更らにウヰルソン政府になつて一層憎惡になつた。だから排日は共和黨の問題でもあれば、民主黨の問題でもある。換言すれば米國全民の問題となつてゐるのである。

日米親善策としては色々の方途を試みられた、だが具體的効果は少しも見えなかつた。今日米國に講演者として來てゐるのは札幌農科大學の佐藤博士と同志社大學のグウリツク博士である。近來米國の市民は此種の講演に大くの注意を拂はぬやうに偏心した。尙新聞も此種の講演に紙面を貸さぬやうに一致したので交換教授の前途に多くの期待を置く事が出來なくなつた樣に思はれる。

排日が具體的になつて此方、青木、高平、内田の大使が米國に派遣された、内田男に代つて來たのが今の珍田大使である。此等の大使が移民問題を解決しやう

と思つてゐる間に移民問題よりも大きな土地問題が開展されて加州の法律となつてしまつた。此遷移した徑路に徹しても排日問題は外交で治まるべき性質のものでない事が判然した。少なくとも從來我政府が踏襲して來た方針では解決出來ない問題であると云ふ事が明かになつた、一時凌ぎの我外交は排日思想を殺すのでなくて反つてそれを育ててしまつた。それ故新内閣は舊路から離れて解決の任に當らねばならぬ。然るに昨日の東京電報によると新内閣は「米墨の紛擾を利用して日米問題を解決するの意なし」云々と發表されたが、此電意によると新内閣は前内閣が失敗した舊路から離れてゐないのである、米國の歡心を買はんがために心にもない事を發表したのであらう、此幼稚なる諂は子供が母に菓子をねだろ時の阿諂と同意である。同情を得やうとした諂は外交の貧弱と賤しい心底とを學ばれてしまつた。「日本は米墨の紛亂に干渉するの意はない、だが日米問題は一日も早く解決つけねばならぬ」と發表するのが隱當なる日本の立場であつたのであらう。

我政府は十年も日米外交に失敗を重ねて來たが未だに要領を得る事が出來ない。米人と寢るには自分の方に布團を引く事を忘れてはならぬ、此れが米人の通性である、日本政府は何時も布團を引かれて裸體になつてゐる。新内閣に望むのは布團の引返してある、今一つは時期を逸せざる事である。

排日は一時加州の勞働議員や百姓議員が勞働者を煽動して同情を得やうとした政策であつた、だが排日思想が米全土に擴かるに從つて、之れが米全民を煽動するの政綱となつた。ブライアン氏が一九〇八年大統領候補に立つた時の政綱に

「吾人は中央政府及州政府のもとに合衆國内の外國居住民を保護すと雖も、合衆國民と混和すべからざる亞細亞人の移民を拒絶せしめざるべからず云々」とあつた、尙民主黨年來の精神も亞細亞人の排斥であつた。そのブライアン氏が今の民主黨内閣の主腦者である。だから米國現政府は精神に於て加州の排日に一致してゐるのである、大統領ウキルソン氏が土地案に對する

日本の抗議を一年も愚弄したのを見ても其內意が何處邊にあるかと明かである。戲弄の態度は恰も猫が小鼠を弄んだやうである、抗議の運命と鼠の運命が同一である事も推測する容易である。抗議の戲弄が今後何時迄續くのであらうか、何時迄我政府は愚弄に甘んずるのであらうか、在米日本人の財産は何時迄不安に葬らるゝのであらうか、日米問題の遲延より破る同胞の精神上の不安は言語同斷である。土地問題が日本の屈辱に終らうものなら次に展開さるべき排日の順序は布哇及米國で生れた日本人の市民權剝奪と在米日本人のレンチ問題である。日本が生死の戰爭をして得た國威も排日の前には無意味である。世界に於ける日本國民の聲價も土地法の前には無値である。神父と誇る　陛下の臣民も米土に於ては動物扱をされてゐる、それを思はゞ排日は單に國辱、民辱に留まらざるのである。

墨國タンピコに於て墨國軍人が米國水兵を逮捕したとの廉にて米國政府は十一艘の戰鬪艦と四千の軍隊を出動した。宣戰の通牒もなく數千の水兵をヴェラクルスに上陸せしめた、米國政府は自國の國旗及軍服を侮辱された謝罪の要求に戰爭腰に出掛けた。米國に排日ある如く、墨國にも排米思想がある、合衆國政府は此排米問題の解決と軍艦と陸兵で墨國の海岸に急行せしめたのである、表面に現はれた米墨問題は單に一水兵に限られてゐる、だが加州の土地法は數萬の同胞に關つた問題である。前者は國旗及軍服の侮辱と誇大されたが、後者は六千萬の日本國民を侮辱した法律である。國民あつて初めて國旗や軍服の意味が明かになつてくるのを考へても日米問題は米國の戲弄に忍んでゐられぬ重大問題である。米國政府は水兵問題より起つた、「名譽威嚴」の保存に一億萬圓の戰費を計上するの衷心あるならば、日本民族を侮辱した土地法も我國民の名譽威嚴を主として解決を急いで貰はねばならぬ。我政府は類似の問題が起つた此際を利用し解決を迫らぬのは嘘である。海軍問題のために內閣を倒した我國民は日米問題のために新內閣を動かす丈け輿論を喚起して貰はねばならぬ。(四月二十六日)



藝術家の觀たる「夏の女」

長田秀雄

○

夏は女が一番綺麗に見えるときてす。殊に初夏てす。白銀の炎のやうな太陽の光が、鬱した若葉に映つて、翡翠のやうな透明な縞を交錯し、または途上の礫に輝いて、キラキラと眩しく破砕する五六月の頃てす。射るやうに街上に飛びしきる燕の姿は、見る内に消えてしまつて、鮮やかな紺の羽色がいつまても眼に殘る季節です。

女はこの季節になると燃えるやうな悩ましい眼の色をしてきます。そして、丁度その頃咲き誇る夏花のやうに、鮮紅緑紫の目覺めるばかり鮮やかな色彩と、華美な模様を喜ぶやうになります。御覽なさい。その頃の女の衣物や帯の色を——みんな一年中て一番華やかな刺激の強い色と模様とて飾られてゐます。

大抵な女の身體はこの季節になると少しやせて來ま

す。そしてその悩ましげな身體の線に、一種云ふべからざる肉感的な魅力を帶びて來るやうです。女の身體がグタリとなつて、こゝろもち朦朧した——まあ曇つたとでも云ふやうな姿態の動きの内に、倦怠と疲勞との美を發揮してくるのです。私は女の姿態の現はすすべての表情の内で、この美くしさが一番好きです。——これは日光に描き出された女の夏の美くしさです。

夜になると、女はまた全く違つた美くしさを現はします。やや綠がかつた瓦斯の光で、クッキリ照し出された若い女は、浴後の肌に匂ふ紅粉の反射によつて、冷味を含んだ悽艶な感じを起させます。晝のグッタリした悩ましい姿態は、忘れたやうに消えてしまつて、新鮮な生氣を含んだ美を放射します。白い西洋皿の上で、燈光に照らされて、凝乎としてゐるサラダやイチゴのやうに鮮やかです。

女は夏の夜になると、他の季節よりより多く笑ひます。一體女の笑聲くらゐ夏の夜の情調に適合するものはありません。高い浮々したその聲が、しつとり冷えた夜の空氣と燈光とに響いて、快よい諧調を造るのを、女は無意識に感じてゐますから、それで笑ふのでせう。

私は夏の夜の散歩を此上なく愛します。美くしい暗色の空氣の觸感を樂しみながら、燈火相交錯する街で、はでな裝をした若い女たちのさまざまな姿態の美を、心ゆくまで眺めて歩くのです。

最後に私はある滿月の夜の話を書きませう。そこは街の角になつた二階の窓でした。庭の敷石や立木には、打水の跡が涼しさうに濡れてゐました。低い塀の外には一條の途があつて、その途は川に添うて居ました。

あんまり月がいいので、燈火は點けさせなかつたのです。私は女とたつた二人で、長い事そこに坐つてゐました。その女は濃いい髮を島田にあげてゐました。川向ふの家々の灯が、黄色く烟つた月光の曇りの内

に、赤く濁つて、瞬いてゐました。
窓の方を向いて坐つた女の半面の輪廓には、蒼ざめた月光が燃えて、銀の陽炎のやうに顫えてゐたのです。
私と女とは何時までも默つてゐました。
女は手を窓の欄干にかけました。長い袖がトカゲの脣のやうに冷たく輝きました。私は音を沒した音樂に聽き入つてゐるやうな心持で、凝乎としてゐました。
その女には、それから何度となく會ひましたが、その一夜のやうな興會を覺えた事は二度とありませんでした。恐らくその女の藏し持つてゐた美の絕頂だつたのでせう。
何處へ行つたのか、今ではその女の行衛は分りません。

○　齋藤與里

日本の女、殊に東京の女は夏になつたからつて特別の印象を自分に與へない。田舍などへ行くと夏の女は裸體で歩いてゐる。中年者は白い腰卷一つで、大きな乳房をぶらさげてゐるが、十七八から二十二三位の所謂娘盛りの者になると、其のまる〳〵した乳房の上から手拭を當てゝ脊後で結んで、絲引きなどをやつてゐる。買物などにも勿論裸體で行く。野良仕事もそれでやつてゐる。斯樣に夏期は、田舍女の肉體を最も露骨に發表する時になつてゐるから、顏などは醜挺でも肉體の美を感得する場合が尠くない。
東京の女も夏裸體で歩く樣になると、さぞ夏の女の特色を發揮する事だらう。そして巴里の女の樣に、夕影頃から公園やブルバードなどに陣を張つて往來の人などを眺めてゐたら可也異彩を放つ事だらう。
元來女特有の美は肉感にある。外國の女、殊に巴里の女などは其の點を殊更に、誇張的に表示仕樣と勤めてゐる。コルセットを用ひて胸部の肉を豐富にしたり、衣服の仕立方なども、如何にして肉體の線狀を生地の儘見せるかと云ふ樣に苦心してゐる。そんな風だから彼等に取つて夏は、其の慾望を滿すには好適の時

期である。けれ共日本の女の美の標準は全然て反對だ。女ばかりてはなく男達ても、女の美は其の衣服にあると信じてゐるらしい。それて女は自分を美しく見せる爲には、無暗に値段の高い品物て飾らなければならないものと思つてゐる。其の慾望を滿す爲には、冬が一番適當してゐる。冬なら思ふ存分飾り立てる事が出來る。金に積つて三百圓位の着物はさう苦しい思ひをしなくも着て歩ける。夏が來るとさうは行かない。段々着物は剝がれて行く。彼等に取つてそれは心細い一事てなければならぬ。それて此の頃は夏の羽織や、夏のコートなどが出來て、少し苦しくもそれ等を着て稍滿足してゐる。肉感を如何に表示したものかなどは全然て考へられてゐない。けれ共夏の女は、冬の女に比べて自然肉感的に我々の目に映るのは爭はれない。着物が薄くなるにつれて、肉體を暗示する度が强くなるのは必然だからてある。

次に浴衣がけの女になると夏のカラーを明瞭に出してゐる。自分は却つて其の群れから夏の女の美しい姿を發見する場合の方が多い。けれ共其の美も外國女のそれの如く決して肉感的てない。一寸考へると浴衣がけの處に最も女の肉體は表現されてゐる樣に取れるが決してさうぢやない。全く姿の美しさてある。姿の美を發見する時は、何時も或る距離を置いて眺めた時に限られてゐる。そして凉しさうな處を歩いてゐなければならない。それは浴衣其の物が元來肉體の美を標準にして出來てゐるものてはないからてある。肉體美を標準に作られた着物は、其の地質が肉體に附着し易い物、及び無模樣な物て出來てゐる。けれ共浴衣は其の條件に反してゐる。大抵大柄な模樣て、御飯糊か何かてごわ〳〵に突張つてゐる。時としてはキュビストの繪を見る樣なのがある。極端に云へば其の裡に何がかくされてゐるのか解らない。而して遂に日本女の美は其の姿にある。夏は其の姿が冬期に於けるよりも美しく我々の目に映る。殊に洋傘をさすと全體として面白い調子を作る。

日本の女は姿を美しく拵へるのが好い。自慢する程

の美しい肉體を持つてゐないから、成る丈それは隠す様に勤めた方が好い。其の意味から日本女の服裝は實に當を得てゐる。外國女の眞似をして洋服などを、殊に夏服などを着ると、活動寫眞の案内女の様な感じを觀者に與へる。

○ 田山花袋

女は季節によつて見た感じの違ふのは言ふまでもありません。中でもうつりかはりの感じを私はことに好いとおもひます。例へば、夏から秋になるはじめに、電車などに乘りますと、女は夏の薄い浴衣――簡單な放恣なすがたから、兎に角色彩の多い袷に移つてをります。その時の感じは眼新しいものです。『色彩の感じが袷になると、餘程變つて來ますね』などと私はよく友達に申したものでした。すべて自然のうつり變りが、初夏とか初秋とか初冬とかいふ風に、何でも初めが眼新しいと共に、女の衣裳なども季節のかはり目がうつくしいものだとおもひます。ある人は夏の女の着物は、冬の女の着物より好いなどと申しました。さうかも知れません。夏物には派手なものが多う御座います。中形など日本の着物の中では殊にすぐれたものだと私は思てをります。その上に夏の着物は簡單です。ある社會主義者は、夏は平民の世界だと申しましたが、さういふ點はたしかにあるとおもひます。裏地などをつける必要がないので、贅澤のものでもわり合に安い。人工的贅澤が一方に十分に加へられないと共に、一方には冬などに見られないやうな贅澤が加へられるといふ形になつてをります。簡單なる複雜、つまり夏の女は何うしても自然に近いやうなところがあります。それはしかし衣裳ばかりではありません。すべて、すべてに於て、自然に近いとおもひます。蚊帳の中に置いて見た女なども綺麗なものです。

○ 田村俊子

私は觀た女に就いて云ふよりも、自分に就いて云つて見る。

夏の姿はなるたけ自然的に作つてゐたいと思ふ。いつたいに、着物を素て着てゐたい。浴衣は無論の事、お召でも素て着たい方だが、外出の時は仕方なしに襦袢を着る。私は汗をかゝない方だから、いつも縮緬の長襦袢を下襦袢なしに素て着てゐる。肌ざわりがさらりとして非常に氣持がいゝ。肌に直かに附くものは、夏はいちばん縮緬がいゝ。さもなければ洒し木綿にかぎる、羽二重や綸は、時によるとべたりとして氣色がわるい。メリンスも厚ぼつたくていけない。外へ出る時は、下帶も縮緬を素て一枚締めたぎりてゐる。嗜みさへよければ、用心深く何枚も下帶などするよりは、大膽だが氣持がいゝ。さらりとして腰から裾の捌きに何とも云はれない快感がある。

髮もさらりと心なしの束ね髮がいゝと云つてゐるが、これだけは私の氣持に從へない髮の毛を持つて生れてゐるので、私は夏になると、いつも髮で一と苦勞も十苦勞もする。私は髮の毛がわるいのである。其れを心の具合て巧みに結つてるので、心を取つてしまふと、法返しのつかない恰好になる。て何うにかして、輕く恰好よく、其れて髮の毛をこつくりと見えるやうに結ふ法はないかと苦心してるが思るやうにならない。夏の女ていちばん美しいのは、この髮のいゝものに限るとさへ私は思つてゐる。美しいたつぷりした髮を、さらりと束ねて、ほつれ毛も癖がなしにはらりと落ちてる樣な女の髮が、夏の女の秀逸だと思つてゐる。斯う云ふ點て、私は自身の髮について悲觀してゐる。

夏の女として申分のない私の資格は、皮膚があんまり汚なくないことゝ、汗をかゝないことてある。この二たつから、せい／＼私は夏は放膽な姿てゐやうと思ひ、又然う云ふ風をしてゐるのである。

足袋も穿きたくないが、外出の時は、砂まみれて直きに汚くなるし、品がわるいし、着物との調和て仕方なしに穿いてゐる。夕方浴衣かけて、色の眞つ白な自分の素足を見ながら散歩してゐる時の氣持は、何物にも代へられない自身の美の滿足てある。これは自惚の

お話てはない。

○

有島生馬

むづかしい問題です。夏といつても、夫れが貴方の質問なされるやうな、女の身體の形だとか、衣物の色だとかいふ方面とすれば、今六月の始頃の事でなく、同じ單衣にしても、白地の頃を意味すると思ひます。青葉が茂つて、樹木にしても大きな輪廓が表はれて來る、更衣の頃になると、女の肩とか胸とか臀とか踵とかの線が表面に描かれて來ます。殊に肥えた方の女の身體のエッキスプレションが强まつて來ます。然し本當に夏らしくなる爲には、もつと高度の暑氣が必要です。白地とかすゞやとか云ふものを着始めた、其瞬間はふだん近く見て居た女でも一寸目を聳てる程變つた印象を與へるものです。白地は皮膚の色も髮の色も唇の色もひきたてゝ見せます。而して冬よりも被服に貧富とか老弱とかの差が少くなつて、勝手に女は自分自分天成の醜美を競ふかのやうに見えます。

然し吾々にとつて此等の事實は大した問題になりません。勿論其處に動いて居る捕へられるやうな、捕へられないやうな物がないでもありませんが、要するにイリウジョンです。詮じつめた所で海濱の夕暮とか、溫泉場の夕闇とかで、女の過ぎて行つた空氣に殘る淡い感傷と云つた風のものに過ぎません。夫れを吾々のやうに長年、毎日男や女を裸體にして目前に橫へて頭を苦め、身體を動かして裸體から樣々な物をとり出そうとして、悶え失望し又興奮するやうな、他人から見れば勞働者か、科學者のやうな單純な仕事を繰返して居るものには、餘り表面的なイリウジョンと見えると申して僭越ではないだらうと考へます。吾々には目前にある裸體ですら時には餘り單純で、どうかして中に生きて居る人間なり女なりを皮をむき、血を出してなりもつと深く見る事が出來まいかと失望的に考へる事があります。

夏になつて戸外の空氣が綺麗になり、光線が樣々な直射と反射の綾を織るやうになると、畫室の中の女は

慨して醜くなります。大空を流れて居るような溌溂たるものが人間の身體までは及んで來ないのかと見えます。然し戸外に連れ出して、草の上や木蔭で眺めると夫れは玉のように美事です。花に寄つて來た昆蟲が女の皮膚へ來て、汗や油を吸ほうとする事もある位です。

マネーの「草の上の朝飯」といふ畫がありますね。森の中で若い男が二人眞裸の女が一人向きあつて話して居る、遠くにシャツ一枚の女が川の中で足を洗つて居る、朝飯の後といふ風に一隅には菓實やパン等の靜物がひつくりかへつて居る。あの畫はマネーがラファエルの「パリーの審判」といふ素畫からすつかり構圖を得て居るとブレメンの美術館長グスターブ・ポーリ(Gustave Pauli)氏が意見を公けにして居るが、夫れはどうでもいゝ、あの復興期の大家の筆になる女は夏の女ではないが、此マネーの女は確かに夏の女であり、吾々の傍にも來て朝飯を共にし汗を流すような夏の女である。

○

長田幹彦

京は木屋町の夏の夜を思ひ起こす度に、私は嘗つてそこで出逢つた數々の京女の美しさを今更ながら嘆美しない譯にはいかない。

加茂の河原に懸け渡した涼み床のうへで遊んでゐると、夜が漸次と更けまさるにつれて、大氣が玻璃のやうに透明になつて來る。殊に夕立がざあつとひと降り通り過ぎていつたあとの晩などには、四界がまるで秋の良夜を思はせるやうに隈もなく澄み渡つてくる。西へまわつた月は蒼白い濡れ色をくつきりと河原の石に浮き出させて、蓬の草叢にすだく蟲の聲々までがさながら透き見せられるやうにほの明るい。宵の口にはそれても少しづゝ息づいてゐた微風も夜とゝもにばつたり死んで、東山の山影や町々の灯がもうそろそろ靜かな夢に沈んでゆかうとするなかには河瀬に咽ぶせゝらぎの音だけが涼しげに響きあがつてくる。そして床に點した絹張りの雪灯は三つのうち二つまでは消え落ち

て、殘りの一つがほんのりと涙ぐむだやうな光を薄綠のうへへ投げてゐる。

賑やかな笑ひ聲をたてゝゐた藝妓や舞妓達ももうその頃には大方遊び疲れて、誰れからともなくいつの間にかふつりと口を噤んでしまふ。端近に坐つたものは欄干に片肱凭せかけて、小扇を頰に押當てた儘うつとり無心な眸を遠くさまよはせてゐる。灯影のそばのひとりはしどけなく橫座りに座つて、光を盜みに來る蟲をば長い袂で慵げに追つてゐる。また小簾の片陰ではしなやかな手で拍子を刻みながらひそひそとやさしい小聲で唄をうたつてゐるものもある。

さうした妓達の髮の色は晝みると違つてまるで漆のやうにつやつやしい。眼の色も黑く冷たく濕んで、瞬きをする度に睫毛までがちろちろ月の光を映してゐる。夏に疲れた肌は眼にたつかたゝぬ程の夏瘦せを見せて、汗の名殘と夜露とにしつとり潤ほひながら絖のやうにほのかに匂つてゐる。絽縮緬の輕さうな單衣もその肌を包むには惜しいほどである。なかの一人が着た長襦袢の蘆分け小舟の摸樣などはそんな夜の色のなかでも上着の光琳水の薄染めを透かして、柔らかな肉のまるみをその儘まざまざと描き出してみせる。殊に月の光と雪灯の光の溶けあつた朧ろげな薄明りのなかにほのめく彼達の襟脚は何ものにも譬へられぬ美しさである。そしてともすると媚びるやうに忍び寄つて來る髮油の匂ひも白粉の匂ひも夏なればこそまたひとしほの艶めかしさを添へるのである。……私は觸つたら消えもしかねまじいその一瞬のあえかさを嘆美しずにはゐられない。

○　津田青楓

夏の女が羅のベールをまとつたり、肩掛をかけたりしてゐる事は大嫌ひです、手袋も嫌ひです。

夏の女は一體皮膚がうつくしくて色も他の季候に比べて一番濁つてゐない時だから女が皮膚の美を誇る時は一番夏がいゝと思ひます。然し日本の女が皮膚の美しさを誇る資格があるかどうかは別問題です。

夏の女がコートなぞを着る事も嫌ひです。旅行でもする様な場合はいゝかも知れませんが帝都の眞中を歩るくのにあんな袋の様なもので着物や帯をくるんで仕舞ふ事は殘念だと思ひます、西洋の女が自分の身を飾る内で帽子に一番重きを置いてゐる様に日本の女は帯に重きをおいてゐます、着物や帯の色合の變化や丈布か明石の様な衣物の上から帯を引締めた所に線の變化も見られます、それを紙袋の様な一直線でそして冷めたい灰色で塗りつぶして仕舞はなければならない様なコートで覆はれる事はつまらない事です。

夏の女は成るたけ身につけるものを少くして只いゝ着物の上からいゝ配色の帯だけを締めたのがすきです。

日本の女には夏に成つても眞白の着物を着るものはありませんが、白は強い夏の光の中に出ると餘りにギラ／＼して反つて暑くるしい氣がします。

日本の女は何時でも鼠色の女の様な氣がします。夏に成ると白地や紺地のものが多く成りますが。それでも帯だとか帯あげだとか其他の飾にごちや／＼した色を遣ふので全體はどうしても鼠色だと云ふ感です。

夏の女に私は黒ばかし旨く配合した風をした女があればいゝ氣持だろうと思ひます。黒か紺地に鹿子絞りの摸様でもあり着物の上にいゝ黒繻子に色糸の縫摸様をした帯を締めて白地の上に黒糸で鈴蘭の花でも刺繍した襟を、色の白い、皮膚のうつくしいそして襟あしの長い女にさせたらいゝと思ひます。

京の町では夏の朝早くから唄の様な節をつけて花を賣りにくる八瀬女と云ふのがあります、紺絣の着物の上から黒と淺黄とのだら／＼染になつた幅のせまい帯をぐる／＼巻きつけてゐます、そして紺の前掛をしてゐます、それには赤や青や黄だのと云ふ色糸で手縫の摸様が付いてゐます。

そして黒い髮の上にはみづ／＼しい尾花の穂や天子牡丹の強い茜色が輝いてます。

八瀬の花賣女は偶然にも黒いトウンの風のモデルをなしてます。

○ 正宗白鳥

私には不適當な問題にて、氣の利いたお答は致しかね候。女の髮の結振りや着物の着こなしについて不斷あまり注意も致し居らず候。流行のパラソルを翳した山の手の令孃姿や中形の浴衣の意氣な後姿を見せる東京女の散歩振りを彼此申上ぐるも憚いばかりにて興も無之且小生などの野暮な觀察は却つて座を白けさすことと遠慮いたし、かゝることに趣味豊かなる諸家の面白き御感想を敬聽仕ることに致し候。

○ 小川未明

夏になると女を靈的に感ずると同時に肉的に感ずる。

私の初戀は冬を背景にしてゐるけれど、其他の目に殘るやうな女の印象は大抵夏を背景にしてゐる。

部落から部落へ、峠を越へて、他國へと漂浪する歌ひ女や、女の藥賣りは笠を被つて、草鞋を穿いてゐる。長い單調な白く乾いた田舎道で、もしこんなやうな女に遇つた時、いかに汗ばんだ、まだ若い顔に懷しみを覺えるだらう。兩側の疎らな並木は日に照らされて、葉が光つてゐる。午後の往還には他に通る人もない。是等の宿無し女の中には實に美しい女がある。

海に行き、山に行くのが此の季節である。硫黄の香の高い、星影の清らかな山間の溫泉場で、遠い町から來た少女を知り、また青い、青い、海波に沈む眞紅の入日を見送りながら、何處の産れとも、また何といふ名とも知らぬ女の姿に思ひを焦がして、やがてはかなき別離を惜しむこともある。

漫々たる大空に、浮動する雲の如く、轉た人生の流轉を思はしむるものは夏である。夏を背景にして、居處を定めぬ女を見る時、私は女を靈的に詩化して見ることが出來る。

けれど巷に、苦熱の裡に懶惰な生活を送つてゐる女は肉的に見える。殆んど裸體を思はせるやうな薄物を着た女のさま〴〵の形は、繪畫を見る時のやうに、ま

たは彫刻を見る時のやうに積極的の快感を惹き誘ふことがあつても、たま〱近づいて其の體に觸れるばかりになつた時は嫌惡と醜感のために顏を反けることがある。

殊に女の着物の汚れと臭ひは、夏に於て最も動物的の感じをさせる。疲れと筋肉のゆるみから生じた。一種青白い女の顏を見ては、頓に性慾の消滅を感じて中性に對するやうな空虛の心持となる。

要するに顏が美しい上に、肉體の完全に發達した女は極めて少ない。しかるに「夏になると女が美しく見える」といふ說は其人が病的であるがためか、獸的であるがためか、さもなくば謬見に過ぎなからう。露骨に貧弱な、もしくは肥大な體格を見せる程、醜惡なことはない。

たゞ是等の女の醜惡を僅かに美化するものは着物の色彩と東洋固有の模樣である。優しい、凉しげな草模樣や、花模樣の浴衣地が是等の不調和の體を幾分なりと美化してゐるのである。

私は特に昔の錦繪を見るたびに、筆者が靈と肉の調和をこの點に留意したことを思ふのである。其れにつけても日本固有の衣服美を考ふるのである。

○　石井柏亭

巴里に夏を過ごした時、一夕K君と伴立つてポートマイヨーに近いリユナ・パークへ行きました。ウォーター・シュートの飛沫のかゝる池の周圍を、人を載せた駱駝が通ります。踊り場の方では多勢の男女が踊つて居ます、そう云ふ人ごみのなかにすれ違つた二人の女を振り返つて、何處かで見たやうだと思つたら、K君が『君、あれだよサン・ミシエルの通りでよく見るいたづら女だ』と曰つたので、成程と分りました。まあ學生でも相手にしやうと云ふやうな、すれからしの、二人とも小さな女でしたが、特に一方の赤地に黑い緊縞のうすものを被た女は永く記憶に殘つて居ます。頸筋と腕とがずつと出て肉體は悉く感じられるのですから半裸體とも曰へませう。それは日本の女の浴衣姿より

もずつと亂暴なものだと思ひました。

○　近松秋江

何でもだが、特に市街と女とは夜でなければ十分美しう見えない。その夕暮れかゝる夏の市街に涼しい風が渡つて、一日晝間の炎熱に苦められてゐた人達が、行水の後の浴衣がけで縁日の秋草などを買ひながら、瓦斯や電燈の光綺羅びやかな夜の街に出盛る、なつかしい時分がまた回轉つて來た。清光水の如き夏の夜景色！それは關西の大きな都會――大阪や京都でも見ることの出來ない東京特色の色彩である。東京は、西の市街々々に比べて風が多い。それは春ならば櫻花を早く散らず憾みがあるけれど、夏季には、それが何樣に多量の幸福を齎すか知れない。土用最中釣しのぶの風鈴が、チリチリンと涼しさうな音を搖つて、早や來ん秋を思はしめるといふ懷かしい氣分を、殆ど不用意の間に味はゝしめるのも、東京に多い夏季の夕風の賜物である。

分けても中形の浴衣は東京の女の爲に夏季の最も喜ぶべき裝飾である。十八九から二十ばかりの女が、胸まで白粉をした襟を、一つは暑さを少しても少くしやうとして思ひさま拔き衣紋に着て、明るい燈火の下で冷いビールを運んで來るその肥つた指尖が、夏になると白く光澤を生じて、薄い生毛の見える肉付豐な手がしつとりと汗ばんでゐる。白粉と香油と若い肉體に潤ふてゐる汗の匂ひ。さういふ女には、私は腰帶といふものに、抑へ難い感興を持つ。先づその腰帶を締めるあたりの肉線が、夏季ならば、羽織を着ぬから、注意深き男性の眼前に全然露出して見える。當節はこの腰帶を締めないで、細い丸帶などをして大きなお尻を全見えにしてゐる女などがあるが、あれは餘まり遠慮が無さ過ぎる。しかし夏季は、不斷は一體に帶は輕く細い丸帶など締めてゐたいものだ。私はその帶の下の處から腰帶で單衣をたくし上げてゐるあたりにコンデンスされた、官能を操る線の集合があると思ふ。それと前言つた肩から際先の格向と着物の着こなしてある。

その腰帯には赤いのが好い、中形だから赤いメリンスて結構だ。女の全體凡ての物が白と藍と淺黄との中にその赤い一ト條が、どんなに艶めかしく引き立つか知れない。

それはしんぞの事。山の手ならば、牛込の神樂坂てもいゝ。通寺町から肴町の通りを、まだ丁度人が出盛つてゐる頃、强い人のいきれを脱け出てゝ人足のやゝ薄くなつた横丁の方に曲つて來ると、大事な身體を一人は出さない。姑さんが附添て、もう幾許か夜露に濕つた、しつとりとした黑い道を、或は手柄をして、姑さんを滿足さしてゐるかのやうに、或は疲れてゐるかのやうに緩く歩を運んて行くお腹の盛れ上つた若い妻君がある。暑い時分をも厭はず依然として丸髷に結ひ續けてゐるらしく、心持ち後にそつたやうにしてゐるので、背も高く思はれる。

例の腰帶て、その大きなお腹を後生大事に締め上げてゐる。それも夏季には特に多く認める現象の一つてあ。

市街の賑かな通りから幾曲りか横丁に曲つて來ると人通りは全く少くなつた。中形の意氣に派手なのてはないが、でも白地の譙しやかな姿態の妻君が、大して荷にならぬほどの小包みを下げて私の前を歩いてゐたが少し行くと、がら〳〵と門を明けて入つて行つた。その小包の中には大根やなすや枝豆が覗いてゐた。八百屋が御用聞きに來るのをも買つてゐるのだが、運動かた〳〵少し遠い處の大きな八百屋まで買ひに行くと、絶え間なく水を灑いだ野菜類が氣迷ひのするほど淸々して置き並べられてあつた中から、それだけ買つて來たのてあつた。

○ 池田蕉園

御たづねのことにつきましてよい御答も出來ませんゆゑおことわり申上げやうと存じて居りました處へお手紙にて恐入りました。

夏の女の姿は盛裝のときより輕いゆかたなぞのふだんのほうが、すこしそうてよいと存じます。庭の青葉

なぞに大變うつりよう御座います。そして夏は夕方なぞことにだれても一しほ姿もきりやうも美しく見えるやうに思はれます。

うすいコートはよろしう御座いますが暑いときに羽織を召したのはあまりよくないやうに存じます。どうぞよろしいやうにおねがひ申上げます。

○ 徳田秋聲

△夏の女は着物などの關係からして、その肉感的だといふ點において特徴があるのだが、夏の女が美しいものだとばかりも言へない。

△もし肉感的だといふ點で、夏の女が美しいといへるなら、冬の着ものを襲着した女にも同じく美がある。それは女が盛裝したときに殊にさう言へる。此の時の女の美しさは、肉その物から來る直接の感覺よりも、巧く着物の着こなされた姿などから來る二重の幻象からである。冬の女の偶まの盛裝は、不斷見なれた女にも、一種の幻象を喚起さしめる。夏はいかに盛裝しても、服裝そのものなどから來る場合の美は比較的少ない。

△たゞ夏の女は、外の生物と同じく、肉體が活々してゐる。さもなければ、疲れて廢頽的氣分をもつてゐる。そして孰にしても美しいとは同じである。夏の女は風や溫度の加減などから、若し少くて色が白ければ血色や皮膚が美しく見える。またヒステリーカルな寶色などにしても、懈さうな體を持あましてゐるやうな場合に、美しい嬌態をみせる。さう云ふ女の、朝蚊帳のなかなどに眠の足りなさうな、うつとりした目色をして、だらしなく坐つた姿などは、殊に艶なものである。又古い商家の涼しげな暖簾の影から、そこに何かしてゐる年増の內儀さんの横顔や、金魚鉢などの見える座敷に、子供に添乳をしながら、横はつてゐる姿などの透し見られるのも、夏に限つた美しさである。朝の涼風のそいてゐる間に水道際などで、洗濯をしてゐる赤い手絡の若い細君なども、くつきりと色の白い、毛並の好い指の骨の肉に埋つたやうな女ならば美

しい。劇場の廊下などで、一幕の熱心な見物に、やゝ汗ばんだやうな脇あきから、白い肱をみせて、まだ舞臺に酔つてゐるやうな目をしながら、出あるいてゐる少い女などは殊に目がさめるやうな美しい表情をもつてゐる。

△夏の女は、油氣のない束髪が一番輕くもあり、意氣でもあつて氣持がいゝ。それもてこ/\した廂はいけない。白いやうな光るものを、ちよいと頭髪につけてゐれば一層涼しい。

△近年女は大抵夏でも羽織をきてゐるが、帶の柄などは夏の方が工夫が多いやうでもあるし、第一羽織は、いかに地質が薄いものであつても、大抵は女の形を無恰好にみせるから、好ましくは思へない。しかし樣子を物々しくする點では、それも必要かも知れない。羅のショールのやうなものは、根帶から日本の女の服裝にはうつらない。襟の汚れない點では、經濟的かも知れないが……

△肌の美しいやうな女は、夏に於て一層美しく感ぜられるが、皮膚の汚い、毛の惡い女は、反對にその醜さが露はれる。茶の澁が、皺のよつた顔や手へ、泌出してゐるやうな、おびんづるさんのやうなお婆さんが、東京の裏店などには善くある。電車などの人込では、女の臭いのが一番厭である。

〇 上司小劍

一口にいふと、「女は夏のもの」といふやうな氣もする。着物が薄く派手になつて、肉體の美と姿の美とを併せ賞することが出來る。滿員に近い電車に腰をかけてゐる時、其の前に立つた若い女の手、腕、腋、さては頸筋あたりの肉づきの美は、夏でなければ、……夏の薄い着物でなければならぬ。しかしこれは東京の女のことで、大阪の女は冬がよいかも知れぬ。京都の女は春がよい。夏の公園なぞで見る西洋婦人の、純白な衣裳が其の白い皮膚にシックリと合つて、スラリと背の高い、鷹揚な歩み振りを見ると、何うしても我等の周圍にある女性よりは一つ高い段階の上に立つてゐる

人間のやうな氣がする。以上は女をば容姿の方からばかり觀たものになりましたが、「夏の女」といふ題が何うしてもさういふ風にしか考へられないし、私は「容姿の美」といふ點を除いて、「女」なるものから何物が殘るかを知るに苦みますから、先づこれだけ申上げておきます。

○

與謝野晶子

私は袷羽織を出して着て居ます。

五月雨の薄寒い今日のやうな日に夏の女のことなどを問はれると反感が起ります。夏は女よりも草の花が美くしいとか何とか餘計なことばかりが頭へ浮んで來ます。私は夏が好き、夏の世界の物は皆好き、夏の花よりも夏の男女はもつと美くしい氣がするとこんなにまあ思ふ筈なのですが、もつとくわつと暑い日にでもならなければそれは思はれません。とにかく夏は醜い女が飽くまで醜く見え、美くしい女が常よりも一際綺麗に見える時には違ひありません。別の人でなく、一人の人の持つた醜い點が深く執ねくあくどく醜く見え、好い方のことはそれに對してます〱綺麗であるとも氣持がいいとも思はれるだらうと思ひます。せめてモデルを一人でも前へ置いて見ねば私は何も云へない。それから女が白い着物を着るとます〱夏を著い物にしてしまふとだけ云つて置きませう。

○

水野盈太郎

今は夏の初めである。あの貧しい、黄い顔をした女の人々に、美しい血の色が華やがうとして、あえいて居る時である。血に熱を帶び、筋肉が――枯れて、こびりついて居たものが、緩やかにふくらみ、線に美しさが見えて來る時である。寒い間、脂肪が枯れて、青くかぢかんで居た手にも、柔かな暖い生命が生き返つて來る時である。

女の身體の肉が（これは勿論女に限らない）内と外との熱の爲めに少し疲れて、微かな幻を見せて居ながら、それで弱いながらも、人間、本來の凄い慾求を露

に感じさせるやうに現はして見せる。

僕は自分達の同胞の女が持つて居る肉に向つて、隨分ひどいが、情ない氣持と、侮蔑の情とを感ずる。(これには一面、自分を忘れて、返り見ないで居る處もある。)

女の肉を見て、何よりも先づ感ずるのは、その無智て、貧しい事である。もつと美しく、豊かに、賢い肉を持つて居る人種に對して、この同胞が如何にも貧しく、愚かな肉を持つて居る。その多くの部分は枯死して居る。これを見ると、僕はその肉が生きて行く可き力が弱く、貧しい儘て――貧しいのは無智なのだ――衰へて、くづれて、滅び去るのを感じる。如何にもそれが哀れてある。これが同時に、自分の身にとつて、寂しく、不幸に感じられる。

この貧しさの中には、一方に豐麗な智恵を含んだもるもないと同時に、一方に自然その儘の野性を帶びた力もない。もつと野蠻て、それて居て恐しい生活力を含んだものてもない。このどちらてもない。たゞ惡く枯れて凋れようとしてゐるものだ。

しかも、それを全く自覺せず、自らも自らを欺き、欺き盡して居るので、人も欺かれて居ると思つてる心を、僕は我に返して見て、耻しく思ふ。すべての粉飾が、枯死して行くものがして居る粉飾てある。この中に少しの生育も思ふ事の出來ない程、あはれな身體を持つて居る。しかも、それを全く忘れて知らずに居るのを、僕はたまらなく耻しく思ふ。

今、僕は憎むよりも耻づる。この人々が僕等の母てあり、姉てあり、妹てあるから耻づる。

この心持は、夏に成ると特に明かに僕に感じられて來る。夏に成つて、この目に見える女の人達の身體に美しさが生き返つて來るのを見ると、それを鋭く感ぜざるを得ない。女は、この時に於て、不知不識の中に、あえぐやうに成つて、その美しく成つたものを誇らうとして居る。實際はそんなに大したものも持つて居ないのだが、それても持つてるだけのものを持てあまし

たやうになつて、あえぎながらその美しさを現はして居る。勿論、これは人爲的にするのではない。無意識なのである。それをする事が露であるだけ、僕には情ない心持が强くなる。

僕等の同胞の女は、その身體の持つてる力の量を全く意識して居ない。その爲めに、自分の現在が、人類の現在として如何いふ處に居るか、それを知らない。その上に一個の生體としても、その生活力が如何な狀態であるかを知らない。實際、枯死しようとして居る肉である事を知らずに居る。知らずに居ながら、聲を立てゝ燃えやうとして居る。丁度、切つて捨てられてある草が、雨の中で新しい花を咲かせて居る姿に似て居る。しかも、それに比較の出來ない程耻しいものである。花は與へられた力の量のありつたけで、燃えて咲くのだ。自然に從つて咲くのだ。女は自然を知らないで自然を欺かうとするのだ。我を忘れて居る。

この同胞の婦人達は、眞に自然に復つてほしい。

僕はしかし、この同胞の女の人達からも、かなりな誘惑を受ける。その誘惑を受ける自分の心を考へて行くと、その中に、非常に多くの問題が含まれて居るのを感じる。自分のこの一つの身體がまだ甚しく愚である處と、人間の抵抗する事の出來ぬ力と、もつと立派なものと、それ等が皆一緒に成つて居る。僕はこれをもつと明かに感じて行つたら、一の長篇の製作をし度いと思つてる。

新刊批評と紹介

△修省論

幸田露伴著
東亞堂發行

著者露伴氏は學德共に一世に秀でたるの人、今や純文壇を退いて靜かに恐懼修省の道を說く。洵に其人を得たるかを欣ぶ。恐懼とは自己剖判の謂也。省みて批判し、解剖し、分析し盡してそこに自己の小なるを認むる是れその漸く大ならんとする所以也。吾等が常に人生に對して誠實たらざるべからざるを敎ふるに古今和漢の學の深きを以てす。何人も讀んで深く味ふべきの書たり。(定價壹圓六十錢)

△謎　森鷗外譯　現代社發行

現代劇作家中の大立物たるホフマンスタールの作を評したるものなり傳說的の材料を神秘的に取扱へるものなるが底に現代人の眼がピカ／＼光つて居る所に其價値ありと云ふべし。劇の研究者は一讀すべし。(定價一圓廿錢)

△十九世紀文學主潮移民文學　矢口達譯　新陽堂發行

ジョンルヂ・ブランデスの「十九世紀文學の主潮」は十九世紀に於ける文藝評論の一大偉觀なり。其觀察の博大にして精透なる、其筆力の雄健にして暢達なる、其叙事評論の多趣多彩にし、殺活自在なる、殆んど讀者をして驚嘆に堪へざらしむ。只此評論の範圍が十九世紀の前半に限られ、我文壇の流行とは關渉する所比較的尠きが爲めに、我讀者の之を歡迎するの熱度高からざるが如きも之れ固より毫も此書の價値を斟減するに足らず。今出版せられたるは六卷中の第一卷のみなるが、斯の如き飜譯書の有り勝ちなる中絶なからんを祈る。又譯題の「移民文學」は妥當を失するの感あり。「移植文學」など如何にやと考ふ。(定價一圓)

△倭寇　長谷川正氣著　東京堂發行

倭寇の史實を探りて我國民の先祖がいかに海外發展の英氣に滿ちたりしか、又其態度のいかに義俠的精神に富みたりしか、之を審かにし之を明かにするは今後の我國民の海外發展に存する所多きと共に最も興味ある問題たるべきを信ず。然りと雖も倭寇の事、素より一種の海賊にして、史に詳かなるものなく其姓名の如きも今日その誰なるやを知るに苦む。是れその研究の興らざりし所以也。然るに此書を得、眞面目なる研究は必ず好參考たるべし。(定價金七拾錢)

△新撰英和辭典　増田藤之助著　早稻田大學出版部發行

著者は早稻田大學の教授にして、英語學の造詣に至つては今日普通に謂ふ語學者又は語學教授と自ら其選を異にするものあり。此辭書の如きも氏が博大なる蘊蓄と、多年教授の經驗を傾注して、而かも氏自ら六年の久しきに亘つて編纂したるものなれば、從來坊間に見るが如き辭書と選を異にするものあるは素より論ずるの要を見ず。かの徒らに不熟なる譯語の羅列を斂めて、適確透徹にして動かすべからざる譯語を摘出したるなど數へ來れば學生をして信憑せしむるに足るもの多々あるは洵に心强しとする所、英和辭書中最も傑出したるものと言ふべし。(定價壹圓八十錢)

△日蓮上人　須藤光暉著　金尾文淵堂發行

一代の人傑宗教界の偉人、日蓮上人の一代はその法華經を信ずると信ぜざるとに拘らず何人にとりても尊敬と喝仰の念を抱かしむるものあり此書は通俗的に一山の開祖日蓮上人の面目を描き出して餘蘊なし。上人の華文舊址遺跡は之を寫眞版として數多挿入しあり。(定價一圓)

△霧の旅　吉江孤雁著　中興館發行

「霧」「北國の海」「波浪」等拾數篇の紀行文を輯む。旅を愛し、旅を伴侶として自然の裡に人生の姿を眺めんとする著者が此等の文は紀行文の上乘として自然を愛する者にとつて寔に得易からざる好伴侶たるべし。(定價九十錢)

△新エルサレム　鈴木大拙譯　丙午出版社發行

スエデンボルグが一千七百五十八年倫敦にて出版したる「新しきエルサレム」云々を英譯より重譯且抄譯せるもの也。(定價六拾錢)

△霧　長田幹彥著　九十九書房發行

東京朝日新聞に連載せられて讀者の歡迎を受けたるもの、今一册に纏められたるものを見るに稍々通俗小說の臭の强きを憾みとすと雖も、流麗なる才筆の到る處として可ならざるなく、能く讀者を魅して宛然書中の者たらしむるの手腕は近來稀に見る所、その面白き讀物たるは今更贅するの要を見ざるべし。(定價金壹圓五拾錢)

△月給とり物語　盜跖犬生著　東亞堂發行

本書は所謂月給取りの日常生活を精寫して其社會的活動を描き以て後進の參考たらんとせる書也。(定價七拾錢)

△權謀術數論　金生喜造譯　巢岡學舍出版部發行

此書はマキアヴェリの君王論を譯したるもの也、原書は最も權威ある古典の一にして、所謂そのマキアヴェリズムと稱せらるゝプリンシプルはあらゆる意味に於いて研究すべき問題たり。今日陰に同義を奉じて陰險譎詐至らざるなき世の政治家の面前に本書を呈する事は一の面白きアイロニーと云ふべし。(定價六十錢)

△おもかげ　岡倉由三郎著　長風社發行

米國第一流の滑稽小說家 Mark Twain の "Cecil Rhodes" 外四篇を譯せるものにして、全編を二册に分ち、一册を譯文、一册を原文に註譯を施せるものを以てす。其大體は嘗て「英語青年」に掲げられたるもの、英語研究者の爲めに興味あり實益ある良參考書たるべし。(定價二册八十五錢)

△人間百話百人百癖　(定價壹圓拾錢)　堀内新泉著　日東堂發行

△人の妻　堀内新泉著　成功雜誌社發行

新泉氏一流の立志教訓小說也。氏の筆は益々圓熟して此種の讀物に適す。(定價金壹圓廿錢)

△赤裸々の大石良雄　井上劍花坊著　敬文堂發行

此書は「拙者は大石内藏助ぢや」の續篇にして、著者が深刻に大石良雄を剖判して其眞面目を躍如たらしむ。(定價壹圓廿錢、特價壹圓)

△支那哲學史講話　宇野哲人著

本書は上古より近世に至る、支那哲學の變遷發達を叙するに平明の文辭を以てせり。恐らくはいかなる低度の哲學的豫備知識を有せざる者にも容易に解せらるゝを得べく、支那哲學の一般を知るに殆ど是れ以上を望むは今の處難かるべしと信ず。(定價壹圓五拾錢)

△最新獨和法律經濟辭典　井上圻治著　東海堂發行

著者は曩に獨和法學辭典を著して世の歡迎を受けたるが尚未だ經濟及商業に關する辭句の乏しき嫌ひあるを惜しみ、海外留學の傍ら親しく此書の稿を急ぎ、今や印刷に附して發行す、之を法律辭典に比するに約二

倍半、其語彙の豐富なる推して知るべく、江湖讀書子の要求を滿足せしむるに足るべしと信ず。(定價參圓)

△鉛筆だより　横山健堂著　春陽堂發行

趣味の人健堂氏の筆は常に氏の興趣を載せ來つて奔放馳驅貫に他人の模すべからざる別種の風致を備ふ。そ江湖に愛讀翫味せらるゝの甚だしきは今更言ふを俟たず。洵に一代の才筆、時や夏季に入る。山に海に此の一本を携へなばその旅行をして一層の清新を加ふるを得べし。(定價金壹圓)

△日本風俗圖繪(第一輯)　日本風俗圖繪刊行會

二千五百名の會員組成にて豫約發行の日本風俗圖繪の第一輯が即本書也。菱川師宣の和國百女、岩木繪盡、美人繪盡を輯む。體裁高尙優美にして、木版精巧にして原本と殆ど異る所無し。今日浮世繪の眞蹟甚だ得難きの時に方つて此刊行の企を見るは單に浮世繪珍重者の爲めのみならず、又一般の爲めに歡ぶべき事となす。全卷十二輯、今後毎月一輯を發行して各會員に頒つといふ。會費は毎月金二圓也と。

△日本建築史要　龍居松之助述

△女の一生　村上靜人著

△オイケンの哲學　中島萬次郎著

△奈良の美術　佐々木恒清著

以上は何れもアカギ叢書の一にして、該叢書は獨乙のレクラム式に則り、專門以外の知識を一通り一般普通の人に知らしめん目的の下に刊行せられたるもの也。定價の拾錢にて所謂現代思想が得らるゝとしたら餘りに安値に過ぎるの嫌ひはあれど知識の一般普及の目的は時宜を得たるものにして何は兎も角重寶たるものには相違なし。(各册金拾錢)

△屁の喝破　溝口白羊著　本郷書院發行

「國事を慨しては即ち放屁し、經濟の調節宜しきを得ざるを憂ひては即ち放屁し、思潮の傾向亂雜に流るゝを憤つては即ち放屁し、過去三年間に放り貯めたる者」即ち本書也とは著者の序言也。以て著者の抱負を見るべく、又本書の内容の大體觀念を得るに足るべし。(定價八拾錢)

△戀の南國　小村青村譯　文影堂發行

ドーデーの作を飜譯せるものにして、優雅にして情味多き物語なり。譯文に多少たどたどしき所あれども一讀に値す。(定價一圓十錢)

文學博士 辻善之助序

□文學士 長沼賢海著

英雄の信仰

菊判大冊美本
價壹圓 郵税八錢

吾國古來の偉人は何に歸依し如何に其實生活に適用せしか

著者は宗教學の泰斗にして殊に佛教に關する造詣深し。久しく文部省圖書調査の任にありて蒐集研鑽せる材料今や積んで山を成す。即ち一代の精力を傾倒して苦心大成せしもの本書也。讀者は之によつて吾等が祖先の英才の實人生に觸れ、かねて佛教の精髓を知得するを得べし。蓋し近來の名著也。

本書は之を歷史的に研究し宗教的に觀 傳記的に活寫せるもの

△常陸山關題辭
△梅ケ谷關題辭
△太刀山關題書
△江見水蔭先生序

東京朝日新聞角力記者 粟島狹衣著

相撲道

△角界珍品の口繪入
△四十八手圖解入り
△新形袖珍五百頁美本
△定價六十五錢 送料六錢

龍攘虎搏の虛實開放！夏季絕好の讀物

今や好角家にして本書を手にせざるはなし

忽ち參版

中外商業の評…當今相撲を說くに狹衣氏程該博の知識と透徹せる批評眼を有する者はなく相撲に關する諸般の事柄を捉へ例の妙文を以て說き去り說き來る所興味津々、好角家ならぬ者も此書を讀めば恐らく相撲好になるであらう。今迄出た相撲書類の大關といふを憚らない。

本書一卷に津々たり吸めども盡きぬ角道の興味は

發兌 東京京橋南紺屋町 實業之日本社出版部 振替東京三二六番

(中付三の二)

人情の哲學處世の要道現代の論語!!

▲文學博士 雪嶺 三宅雄二郎先生新著

世の中

菊版 五百八十八頁
定價 金壹圓八十錢
郵税金拾二錢
洋裝箱入美本

□社會の複雜にして窮りなく、人情の飜覆して常なきは昔の詩人をして行路の難きは蜀道の難きよりも難しと歌はしめた。世に處世訓、人生訓と云ふものが甚だ多いが、大抵は老人の手柄話か身の上話、左も無ければ守舊頑迷の慷慨談、世情に迂なる學者の空論であつて、新しい、活きた社會の物の用に立ち難い。眞の處世訓、人生訓は、哲學、倫理、世故經驗常識を打つて一丸として寒酸を喫し來つて、初めて說く可きてある。而して、吾が三宅雲嶺先生は實に其人てある。先生の學問識見、先生の人格德望は、當代に比儔を見ない。誠に當代の偉人、一世の師表てある。今日訥辯を以つて、快辯の大隈伯をして數々屛息せしむるものは、先生一人てある。或人は先生は當代の孔子てあると云つた、『世の中』は、先生五十年間の經驗の寶庫を開いて、特に新時代の日本人の爲めに、處世の要道を說いたものてある。例を眼前の出來事にとつて、東西古今の歷史、傳記、文學を引用し、人生社會の何たるを說き、世態の表裏、人情の機微を曲盡し、其の間に處して一身を修め、一家を齊へ、一國を治むるの道に及ぶ。文章簡潔奇警、先生の溫容に接して、其高論を聞くの感がある。趣味津々として殆んど文學書を讀むの思がある。『世の中』一卷正に是れ人生行路の指南車、新時代の論語てある。活社會に處して、人生の勝利者たらんと欲するものは本書を讀め!

發行所 東京麴町區有樂町一ノ四 振替貯金口座三四三三 實業之世界社

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

銷夏絶好の讀物として二大名著

東京市助役 衆議院議員 田川大吉郎先生著

(新刊)

歐米都市とびく遊記

田川先生は市政の當局者也氏の歐米漫遊は所謂小便旅行にあらず、觀察眼は實際生活の中心に入らずんば止まず。徒に歐米都市の外觀を說くも實際生活を離れたる漫遊談は空なる文字なり、本書は實に活きたる漫遊記にして如何にも面白く讀ませ、如何にも觀察の奇拔なるは此種の書として全然他書と類を異にす特に挿入せる寫眞版は本文と相俟つて眞に歐米都市生活の一大縮寫圖たり。銷夏絶好の讀物として、旅行の伴侶として敢てこれを江湖に薦む。

寫眞版十六葉挿入
中判上製紙函入
無類美本全一冊
定價金一圓十錢
小包郵送料金八錢

現代思想研究會著

(新刊)

德富蘆花の哲學

蘆花先生は我が思想界の最大權威にして思想と感情とを代表する文豪なり。滿天下の讀書子をして狂亂慟哭せしむる氏の小說及隨筆には必ず一貫せる思想、即ち氏獨特の哲學あり敎訓あり、本書は氏が從來公にせられたる小說隨筆飜譯十有八篇の中に流るゝ氏の哲學。自然、人生、家庭、戀愛、理想、修養、國家社會に對し氏の尊き心の記錄は悉く收めて解說したるものなれば、銷夏休養の快著なり。

中判上製無類美本
紙函入全一冊
定價金一圓也
小包郵送料金八錢

文學士 樋口龍峽先生著

社會學十講

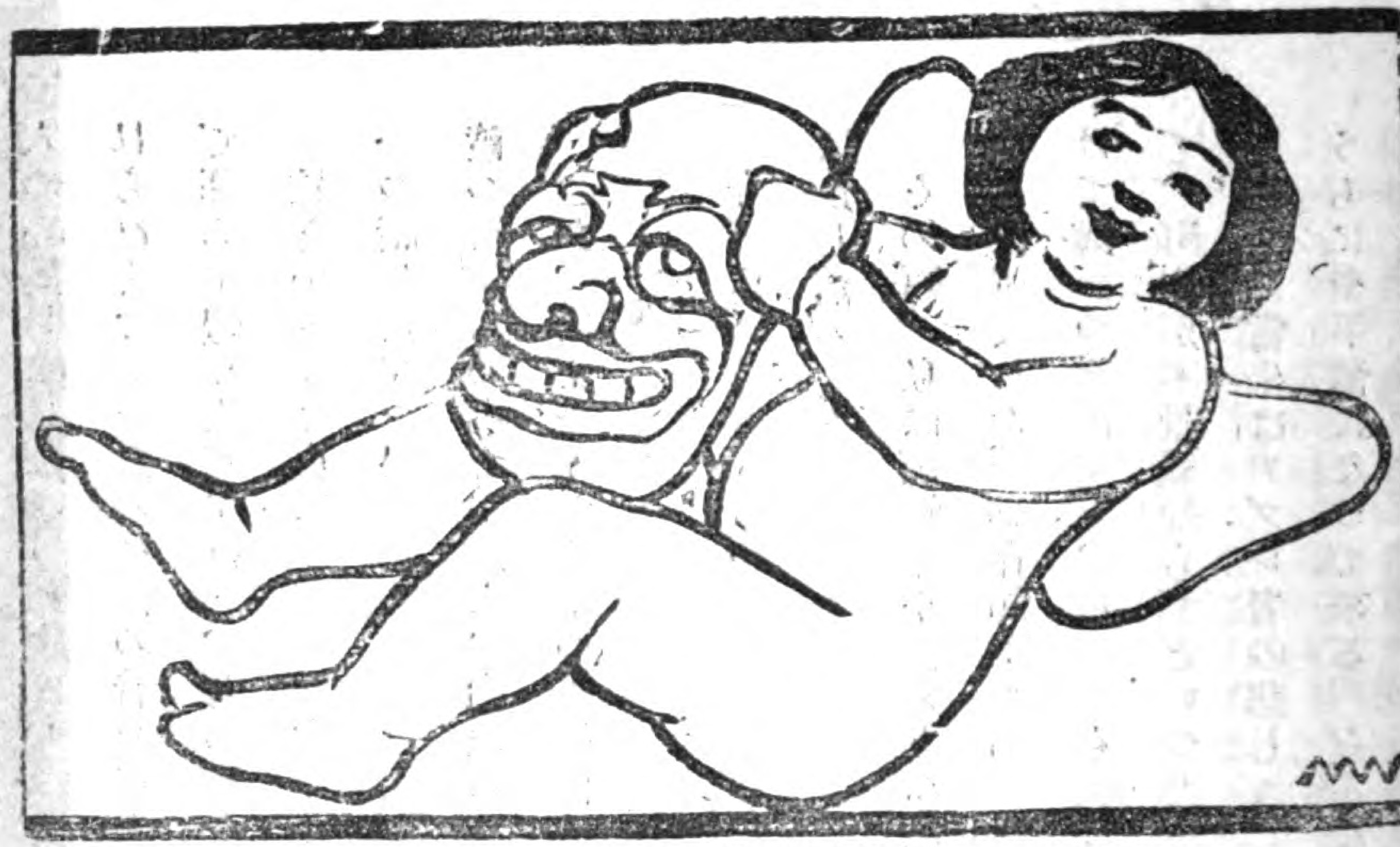
社會學の原理を最も平易に簡明に而かも要を悉して敍述せるもの獨り此書あるのみ而して著者は斯學のオーソリチーたる敢て推言を要せず

增訂三版 一圓五十錢 送料十二錢

(中付三の四)

發行所 東京市神田區錦町一の十六番 振替口座東京第三四〇九番 二松堂書店

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



鰊場の椿事

長田幹彦

今夜はまた恐ろしく吹雪いて來たぢや御座んせんか。どうてす、あの物凄い風の音は。あの勢て眞狩の裾野から雪を運んて來るんだから耐りません。此頃は根雪も深う御座んしたから、戸外はもう四尺の上積もつて居りませう。そしてこの鹽梅ぢやまた二三日は止まないかも知れません。これだから雪國の冬は全く心細う御座んす。旦那なんさあ先をお急ぎになる旅てもないんですから、どうかまあゆつくり御逗留なすつて下さいまし。かうして一人てもお客樣がゐて下さると、私共まて心寂しくなくつてどんなに助かるか知れません。

お、今町の方て汽笛の音がしてゐます。ありや倶知安行きの終列車てすな。こんな晩にあの汽車に乘つて旅をしてゐる

人の心持ちはどんなで御座んせう。人一倍世間を渡り歩いて來てゐるだけに、私は旅の心持ちだけは忘れられません。あの汽笛の音を聞くと、かうなるまでの身の上が頻りに思ひ出されます。どうせ一生旅て暮らす體なんですけど、昔の事を思ふと、妙に氣が滅入つてなりません。

旅といへば今夜はひとつ面白いお話を致しませう。身の上ばなしと云ふ奴はいづれも似たり寄つたりで、一つ話しだすと限りがありませんが、それでも此の話だけはとつて置きの口なんです。それに此方地へ渡つてからの事ですから、内地のお方にや却つて面白いかも知れません。

さあ、冷えますからずつと爐傍へお寄んなすつて下さいまし。

今ではもう昔になつてしまひました。私が丁度二十二の年でしたから今から勘定するとざつと二十年ばかし前のことになります。

その頃、私は函館や小樽を食ひ詰めて、今度こそは性根を入れかへて一稼ぎするつもりで、岩内の鰊場へ參りました。御存知かも知れませんが、岩内といふ町は北海岸きつての漁場で、三月から四月へかけて鰊がつき出すと、それこそ戰場のやうに景氣だつて來るんです。その年も恐ろしく漁がよかつたので、町中が不景氣知らずといつたやうに人氣だつてゐました。

行つた當坐はアブレ者の悲しさで、何をする當てもありません。少しばかり用意してゐた路銀もそのうちにや手薄になつて來る。そんな事にや馴れてゐますから格別心細ひとも思ひませんでしたが、併し末にあてがないとなるとぶらぶらしてゐる譯にもいかなくなつて毎日町中をぶらついちやいゝ働き口を

探して歩きました。汽船の荷役をする人夫、港務所の小使、といつたやうに、町に景氣がついてゐるだけに、何かしらその日その日の飯を食ふだけの口はありました。併しその時分にやもう人間がすつかり圖々しくなりきつてゐましたから、體を苦しめるのがひどく馬鹿らしくて、なるだけ樂なことで金の取れる稼業にばかり眼をつけてゐたんです。今から考へてみるとまことに押しの太い話で、そんなことで結構露命をつなぐことが出來たんですから不思議ぢやござんせんか。たしかにその頃は世間もよかつたんです。

あれでも十日餘りも探して歩きましたらうか、そのうちにどうも岡星に當つた口がないので、いよいよ根をきらして、一番樂さうな港務所の小使に住み込むことに腹をきめて、ある晩のことぶらりと海岸に近い町にある安宿へやつて來ました。その頃は身につくものと云つたつて、僅着がへが一枚あるかなしで、それも質屋へ持つて行つたつて三十錢とは貸さないぐらゐの代物でした。それを後生大事に小行李に入れて肩へ擔ぎながら、五錢六錢の屋根代を拂つちや毎晩毎晩彼方の安宿此方の安宿と流れ歩いてゐました。そして何かといふと先方の落度へ難癖をつけて、僅かなその屋根代を踏む工風ばかりしてゐたんです。

そうした安宿ばかりは内地も此地も少しも變りやしません。どうせアブレ者の寄集つて來る穴になつてゐるんです。殊に漁場が榮えて來ると、諸國から私共のやうな野郎達がぞろぞろ入込んで來ます。漁場へ一漁期ぎめの出面に行く奴もあれば、漁場の盛りを見込んでうはな工錢の儲かるまがひ物を賣りにゆく行商人もあります。そのほか藥賣りや浪花節と云つたやうな手合も集まつて來るので、安宿から安

宿を渡り歩いてゐると、とても眞人間にや見られないやうな面白い浮世が見られます。

その晩、私はその宿で面白い親爺に出逢はしました。いつものお定りで先づ草鞋をぬぐ前に土間へ立つて屋根代を値切つてゐますと、そこへひよつくら一人の親爺が入つて來ました。年の程はもう六十に手の屆く頃合て、白髮ばかりの鬚を長く垂らして、いかにも物々しい面構をしてゐます。それに着物はといふと、白い眞岡木綿の綿入を何枚も何枚も重ねて、色のさめた黑い袴をはいて、肩には白木の笈のやうなものを脊負つてゐます。私は一眼みてはゝあ巡禮だなと思ひました。

その親爺は上框の處へ腰をかけて、宿の女房と、私との問答を聞入つてゐましたが、やがて何と思つたか、

「お前さん。そりや可けない。此方だつて商買なんだから定りだけのお錢は拂つてやらなけりや無理だよ。そんな稼ぎざかりの體をしてゐて、一錢や二錢の端した錢を値切るなんて、今時の若い者にも似合はないぢやないか。」と、かう云ふんです。そして私の顏を眺めながらにやにや笑ふその樣子が顏つきに似氣なく親切らしいんです。

私は餘計な差出口をきく爺だとは思ひましたが、その笑顏をみると喧嘩も出來なくなつて、その儘草鞋をぬいて上へあがりました。人間の運といふものは妙なもので、その時私が別な宿へ行く氣にならなかつたばかりに此れからお話しするやうな出來事が起つて來たんです。今でもその時のことを思ふと、きつかけといふものが實に不思議に思はれてなりません。

一體かうした宿では一つ間に寢起きしてゐながら、相客同志て馴染みになるといふことは滅多にあり

ません。いづれもアブレ者であつて見れば、すぐにも打開けた話でもし合つて、友達になりさうに思へますが、なかなかさういくものではないんです。こりや一度經驗のある人でなけりや分りませんが、互に膝をつき合はせてゐながら口もきかないで別れる場合が多いんです。ですから初頭(しよつぱな)から心易だてに話をし合ふなぞといふことは餘程珍らしい話なんです。人情なんて云ふものはあの境涯ぢやまるで別なものになつてゐるんで御座んすからなあ。

その晩は漁場へゆく出面で二間きやない部屋がすつかり塞がつてゐましたので、私とその巡禮の親爺は裏の方にある家の者の寢起きする小間へ入れられました。ごたごたしてゐる表よりも却つて靜かでいゝと云ふので、二人はそこへ長々と寢そべつてどつちから口をきるでもなくいろいろな話をしました。話し合つてゐるうちに、まことにその親爺が氣の置けない男なので、私はつい今の身の上まですつかり打開けて話してしまひました。

どう云ふ風にして話が運んで行つたかよく覺えてゐませんが、何でも親爺が、

「お前さんも矢張り內地の方から渡つて來なすつたんだね。」といつた言葉から私は身の上を打開ける氣になつたものと見えます。親爺は默つて私の話を聞いてゐましたが、愈明日から港務所の小使に住込むと云ふ事を話すと急ににやにや笑つて、

「お役所の小使たあひどく見切つたもんだね。お前さんなんざ今が稼ぎ盛りぢやないか。もうちつと何とかした口がありさうなもんだ。」

「ところが旨いのがねえんです。私あから見えても體を使ふのが厭でね。」私は太々しい性根をそのまゝ

口へ出して云ひますと、親爺は又笑つて、
「そりや善くない了見だ。今の若さで稼ぐのが嫌ぢや困るぢやないか。人間といふ奴にもこれで潮時があつてな、稼げる時分にみつちり稼いどかないと、末はきつと善くないにきまつたものだ。私なんぞをみなさい。若い時分に樂をした報ゐで、こんな老ひぼれてからまで苦勞をせにやならない。」
私はその時その親爺が何をして暮らしてゐるのだかまるで見當がつきませんでしたので、
「一體お父つあんの商賣は何んだね？」と訊ねますと、親爺は人を揶揄ふやうな眼つきをして、
「私かい。私は湯殿山の行者さ。」
「行者つてとむづかしく聞えるがそんな世間體でねえほんとの商賣は何んだね？」その時分にや遠慮も會釋もありません、人さへ見りや我々同樣に考へてゐたんだから面白う御坐んさあ。
と、親爺は矢張り笑ひながら、
「ほんとにも噓にも行者は行者さ。かうしてこの笈のなかへ湯殿山の御印を封じて貰つて、諸國の靈場を廻つて歩くのが私の商賣さ。かう見えても私やこれで湯殿山へ三年あまりも籠つてゐたんぜ。」
「だが、そんな事をしてゐてよく飯が食へるね。行者となりや山から當がひ扶持でもつくのかね？」
「はゝゝ。お前さんも面白い事を云ふ人だ。それぐらゐに考へてゐりやこの袈裟が樂でよからう。」
段々聞いてみますと、行者といふ商賣にも案外な役得があつて、第一御護符は難病に利くと云ふんで賣りつける、それに八卦を立てゝ人の運勢もみてやると云ふんですから成程その日の飯にや食ひはぐれない筈です。内地ぢやそんな渡世をして歩く人間が多う御坐んすからもうはやりませんけど、そこが新

開地の有難さてす。勝手な法螺を吹いてゐりや行者様て通つて行くんてすからなあ。

　私は親爺が人の運勢をうまく云ひ當てた話を自慢さうにしだすのを聞くと、何だかつい引入れられて、自分も見て貰ふ氣になりました。今までは占者の前へ立たうなぞとは夢にも思つたことのない私が、急にそんな氣を起したのも一つにはその親爺に人徳が具はつてゐたからなのだらうと思ひます。ものものしい白鬚をすごきながら落着きはらつた聲て何か云はれると、大抵なものは煙に卷かれてしまひます。その親爺の世渡りの骨は全くそこにあつたんてす。

　親爺は筮の底についてゐる小抽出しから道具を出して、私の運勢をみて呉れました。何と云ふ見立てだつたか今ぢや忘れてしまひましたが、何んでも北の方へ行きさへすりや運が開けると云ふやうなことを云はれたやうに覺えてゐます。そして四十までは苦勞するがそれから先は思はぬ寶に出逢はして一生涯樂をすると云つたやうてした。

　私はそんな事を云はれたつて當てにもしませんてした。併し人間といふものは妙なもので、北の方へ行けば運が開けるなぞと云はれてみると、何んだかそれが氣にかゝつてなりません。それに先の定まつた體ぢやなし、何時何處へ流れて行つたつて構はないのてすから、心が動くのも無理はありません。

　その晩、私は自前て燒酎をはづんて、親爺と一緒にちびちびやりながら考へました。親爺は口先ばかりてはなく、心から私に北へ行けと云つて勸めて呉れました。北の方と云つても甚だばつとした話て、その時分にやまだ汽車も何もありませんてしから、小樽通ひの荷船に乘つて積丹の方へ行くか、それとも稻穗峠を越えて余市の方へ飛び出すか、この二つしきや道がなかつたんてす。

私はその晩ひと晩考へぬいた揚句、到頭腹をきめて、漁場まわりをすると云ふ親爺の伴をすることに決心しました。路銀といつてももう汽船賃があるかないかといふ途端場なので、私には可成自分の體を投げだした仕事だつたんです。一か八か、兎に角運のきまつた處で生涯の芽が吹かうと云ふのですから實に危つかしい話なんです。

その翌朝早く私は親爺の後について港の棧橋へ出ました。その日は今夜みたやうな恐ろしい吹雪で、風はそんなに強くはありませんでしたが、細かい粉雪が四月にしては珍らしい程はげしく降りしきつてゐました。私は到頭泊までの切符を買つて、親爺と一緒に積丹ゆきの汽船へ乗りました。

漁場の盛んな時節なので、平常なら乗りきれないほど客がある筈なのに、その日は天氣が天氣なので相客はたつた十五六人しきや乗つてゐませんでした。それも大概は漁場へ行く出面で、人間らしい人間と云ふのはやつと數へるほどしきや乗つてゐません。その中で一番皆の眼をひいたのは何處から何處へゆくのか、十六七になる小奇麗な娘でした。まだぽつと出の、白粉氣のない小供々々した顔つきをしてゐましたが、私には何故かその顔が妙に氣にかゝりました。格別色氣があつて氣に留めたのではありませんが、矢張りそれも今から考へてみると何かのきつかけだつたんで御座んせう。

はじめの間は氣がつきませんでしたが、しばらくすると、その娘に伴れがあるのが分りました。四十五六にもならうかと思はれる人相のよくない男で、着物はどんなものを着てゐたかよく覺えてゐませんが、何でも頭から厚毛布を引被つてその娘の後に寐そべつてゐました。親子にしては顔が似てゐないので、いろいろに思ひ惑つてゐますと、やがてその傍に坐つてゐた行者のお父つあんは到頭世間師らしい

世馴れた調子でその男と話をしはじめました。話の様子でみるとその男はこれから私達の行かうと云ふ漁場にある小料理屋の主人らしう御座んした。その娘は壽都の町から買出されて此れからゴケに出る玉なのでした。

さうかうしてゐるうちに汽船は泊へ着きました。漁場へはとまらないのでその料理屋の主人も私達と一緒にそこで船を降りなければなりませんのでした。そして私達は二里の上もあゝ海沿ひの雪道を幾度か吹雪に追ひまくられながら漁場の方へ歩いて行きました。

途々私達はいろいろ話し合つてゐるうちにすつかりその料理屋の主人と懇意になつてしまひました。縁といふものは何處でどう繋がつてゐるか分らないもので、その主人といふのが秋田の男で大の湯殿山信神なのでした。で、行者のお父つあんは一も二もなくその男に頼り込んで、漁場へ着くと何の苦もなく私達はそこの上框で雪鞋をぬぐことになりました。

その料理屋といふのは大崎屋と云つて、三百戸ばかりの寂しい漁村の中程の處にありました。その近邊はまるで釜の底のやうな處で、後の山が急に海へ落ち込んでゐるので、村は何處へ行くにも坂を登らなければならないやうな處でした。そして海岸には井印、吉田、金丸といつたやうな近海きつての鰊の漁場が眼の下に見降されました。

大崎屋へ着いた晩、私達は客がなかつたので上端の爐傍へ呼ばれて、酒を御馳走になりました。主人といふのは見かけによらない腹の大きな男で、何と思つたか流れ者の私まで大層買つて呉れました。そして當分は漁で忙がしくなるから何かの手傳ひでもして家にゐろと親切らしく云つて呉れました。私は

さう云はれると例の闘々しい心根が先へ立つて、どうせ先の親切だ、厄介になれるだけ厄介になつてやれといふ氣になりました。そして行者のお父つあんも湯殿山の有難い御靈驗の話やら、人の運勢の話やらをいかにも勿體らしい調子で話して聞かしたりしてすつかり主人の氣を呑んでしまいました。

話變つて、今度は漁場のことになりますが、一體鰊の漁ほど極どい仕事はないのです。旨く魚が寄つて來て網へ乘り出すと、それこそすばらしい勢で、一石四十貫目の量目で一度に三百石から千石も捕れるんです。さうなると漁場はもうまるで戰のやうな騷ぎで、とても見たことのない方には想像もつかないやうな景色になるんです。併しそれが風や潮の加減で網へ乘らないとなると、ほんとにみじめなもので、たまですくふほどな鰊が大きな枠のなかでぴちぴちやつてゐるさまなんぞはもう見たゞけでもうんざりしてしまひます。

神居内の漁場もその年は漁期に入るとすぐから厚群來の聲が高う御座いました。氣候の工合や、潮の加減がまことに好都合だつたので、今年こそ千石二千石の大漁をして、年來の不景氣を取り返さうと云ふ意氣込みはどこの漁場にもあつたのでした。そして出面なども例年よりぐつと數を殖して、もう鰊の大群が寄つて來るのを待つばかりになつてゐました。

そのうちに敷島内、照岸、泊、その近邊ではぽつぽつ鰊がつきはじめました。何處では枠を二十もあげた、またどこそこでは二千石から汽船に積んだと云ふやうな噂が毎日毎日聞えて來ました。それに神居内の方はどうしたものか最初の鰊の聲がかゝつてから十日も經つてゐながらまるで氣もありません

年老つた船頭達は長年の經驗に照らして網の流し方も念に念を入れたのですが、それでもやはり魚がつきません。もう漁場の人は氣が氣ではなく、すぐ隣の漁場で二百石からの鰊がついた晩などは口惜しがつて夜どほし自棄酒を呷りながら騷ぎまわつてゐた家などもありました。

私達が大崎屋へ落着いた頃はその騷ぎの眞最中で、今夜にも厚群來だと云ふ聲は頻りに聞えてゐましたが、ねつから枠を引く家はありません。そしてそろそろ人氣が落ちかゝつて、何處の家でもそれとなく根負けが見えてゐたのでした。

なかでも村で一番みじめなのは吉田でした。去年親爺が死んでからといふものはいろいろな不幸續きで三里ばかり奥に持つてゐた山林は山火で燒けしまう、それに當主といふのが東京まで修業に出てゐながら大の放蕩者で親讓りの資産は日一日に費ひへらしてしまう、そしてもう今年の漁が惡かつたらこの漁場まで人手に渡つてしまうと云ふやうな瀨戸際になつてゐたのでした。大崎屋の主人は先代に非常に引立てられた緣故で殆ど每日のやうに漁場へ行つちや世話を燒いてゐましたが、漁場から歸つて來ると、いつも額に皺を寄せて嘆息を吐きながら私達に吉田の行末を嘆いて聞かせました。そして沖を見ながら「今夜にも鰊がついて吳れりやなあ、……。」と恨らめしさうに云ひいひしました。

ある日のことでした。行者のお父つあんはいつになく早起きして、井戸端で珍らしく水垢離をとつてゐましたが、そのまゝ朝飯も食はずにふらりと何處かへ出掛けて行つてしまひました。そして午過になつても歸つて來ません。

その頃は私ももう家にも馴染が出來たので、晝間暇のあいだは婢どもの部屋へ行つて馬鹿話をしたり

悪巫山戲をしたりしてい丶氣になつて遊んでゐました。その日も相變らずお君やお國なんかと一緒になつて漁場の若衆の噂やら猥らな色話に現をぬかしてゐましたが、その時私はお君の口から變なことを聞きました。

お君は調子に乘つたやうな聲で、突然

「あの行者さあも變な人だねえか。あの年になつても色氣がぬけねえと見えて、昨夜お富ちやんの處へ夜留ひに來たとよ。」

「まさか。」お國は笑ひながらそれを打消しましたが、お君は眞顏になつて、

「ふんとさ。お前さあよく寢入つてたから知るめえが、確かにあの行者さあに違えねえ。そんでねえばあんな恐らしい白鬚を生やした人は家にはゐねえてねえか。」

「さうけえ。人は見かけに寄らねえもんだねえ。ふんとならお富ちやんに訊いてみべえか。」と、お國はいきなり起ち上つて、隣りの部屋でランプ掃除をしてゐたお富の方へ行きました。そしてその腕を執つて態々私達の集まつてゐる部屋へ引張つて來て、皆て揶揄ひはじめました。

話し遲れましたが、お富といふのはそれ先程お話しゝた汽船のなかで出逢はした小娘のことなんです。また稼業馴れないせいか、妙に内氣て、下がゝつた話でもされると眞紅になつて逃げていつてしまうやうな子でした。ですからお君があけつ放しにつけつけ冷評すと耐らなくなつて逃げ出さうとしましたが、それを皆て押へつけて無理にも云はせやうとしたのでお富は到頭泣き出す騷ぎになつてしまひました。

私はお君の云つたことをてんから信じもしませんでしたが、その日から何んだか行者の、お父つあんの

事が氣にかゝつて、それとなく素振りに眼を配るやうになりました。
行者のお父つあんは夕方になつてやつと歸つて來ました。妙に調子づいて、聲まで浮々させながらいきなり帳場にゐた主人をつかまへて、
「お父つあん。今夜は間違なく鰊の氣がありますぜ。どうか濱へ行つたらさう云つて置いて下さい。枠の用意は充分にやつとかないと魚が逃げてしまふかも知れないから。」と、怒鳴りまわしました。
私もその時帳場にゐましたが行者のお父つあんの權幕が餘り激しいので氣でも觸れたんぢやないかと思はずにはゐられませんでした。
主人はにやにや笑つてゐましたが、
「澤田さん――その時分には主人だけが行者のお父つあんの名を呼んでゐましたので――いくらお前さんが八卦見ても鰊にかけちや素人だよ。こんな日にや中々鰊樣がつくもんぢやねえ。」
「いくら素人でも今夜の鰊だけは私でなくつちや分らない。あんたが何と云ひなすつても湯殿山のお告げにや敵ひません。」と、嬉れしさうに云ひながらじつと主人の顏を見ました。
主人は湯殿山と云ふ聲を聞くと顏色を動かして、
「ぢや何んかお告げでもあつたのかね。漁場ぢや緣喜ごとが大事だから、もしそんな有難え話でもあつたんならさう云つてお吳んなさい。皆にも聞かして喜ばしてやんねえぢやならねえから。」
「まあ、ようがさあ。今夜になつてみりや御利益が分ります。あんたもほんとに湯殿山を信神になさるならこれから直ぐに吉田の漁場へ行つて、差網の浮標頭へ護符を張つて置くやうにしなすつたらいゝて

せう。鰊がつきだしたら眞先に吉田の網が上ります。」

行者のお父つあんは何かひどく信じきつてゐるやうにかう云ひ切つてそのまゝ口を噤んでしまひました。

主人も私達もその言條をそのまゝ信用することは出來ませんでしたが、何と云つても人氣が沈みかゝつてゐる最中なので、行者のお父つあんの言葉が當らうが當るまいが、兎に角景氣づけにはなると思ひました。お父つあんの顏つきてみても、どうやら根も葉もないことぢやないらしく思へますので、私のやうな漁に關係のないものでもそれとなく鰊のつく夜が待たれるやうな氣持ちになつたのでした。

主人はすぐ棧漁場へ下りて行きましたが、間もなくぷりぷり怒つて歸つて來ました。吉川の若大將がそんな馬鹿な辻褄の合はない話はないと云つて笑つたのが、ひどく氣に障つたらしかつたのでした。そして船頭達は長年の經驗て風さへ變つたら鰊になるだらうと云ふので、網の支度だけはしはじめたといふことでした。

そのうちに漸次と日は雷電岬の沖合に沈んて、その日も凪のまゝでとつぷり暮れてしまひました。行者のお父つあんは海の見える二階座敷へ例の笈を持ち出して、御印の扉をあけながら眞暗なかてもぞもぞしてゐましたが、六時になつても、七時になつて沖の方ては何の氣勢も見えません。

主人はいつものやうに爐端へ膳を持ち出してお君を相手に晩酌をやつてゐましたが、それとなく待ち焦れてゐた鰊の氣がどうやら當て違ひになりさうなので、終には少しじれ氣味になつて、婢どもに當り散らしながらひとりで四本も五本も德利を倒しました。婢どもは夜伽ばなしから妙に行者のお父つあん

を馬鹿にし出してゐましたので、あの爺いめ碌なことを云はないものだから私達までお尻を喰つたなどゝ臺所へ來ちや憎まれ口ばかり叩いてゐました。

あれてももう九時に近い頃てしたらう。今迄眠つたやうに靜まり返つてゐた神居内の漁場は突然地震ても揺りだしたやうにわつと騒ぎたちました。それは他てもない、到頭待ちに待つてゐた鰊の厚群來がついたのてす。

大崎屋の二階窓から見ると、二里も三里も先　珊内、ホッケマの漁場にはいつの間にかあかあかと篝火が燃え上つて、鰊の群が海岸の方へどしどし押し込んて來る樣が手にとるやうに見えます。その厚群來は側眼もふらず岸を傳つて、次第々々に神居内の方へ乘り込んて來るのてす。

「鰊だ。鰊だ！」といふ聲が濱から濱へ走つたかと思ふと、もう村ぢうの人は皆暗い阪路をぞろぞろ濱の方へ驅け降りてゆきます。そして彼方此方て篝火がぱつと燃え上ると、艪拍子を揃へて船は二艘三艘づゝ沖の方へ乘り出してゆきます。

と、間もなく暗い沖の方て一聲二聲鷗の鳴き聲が聞えはじめました。初めは十羽か二十羽の鷗がやつて來たばかりてしたが、そのうちに海の上はまるて鷗の聲ばかりになつて、白い羽が篝火の光を受けてあやかしのやうにちらちら光ります。初めて鰊漁といふものを見た私はその勇ましさに呆氣にとられてしまひました。

沖の方の枠船ては大漁唄をうたひはじめました。その大漁唄はすぐに木遣りに變りました。かうなると大漁の上にも大漁なのてす。そしてその晩は不思議にも行者のお父つあんの云つた通り神居内は到頭

近年に珍らしい大漁になつたのでした。なかでも吉田と金丸が一番餘計に取りました。吉田の網には千五百石からついたといふ景氣でした。

まるで夢中になつて家を飛び出して行つた主人は眞夜中になつててろてろに醉つぱらつて歸つて來ました。そして家へ上ると突如、行者のお父つあんを捕へて、ぺたりと頭を疊へ押しつけながら、

「澤田さん。あんたは神樣だ。あんたは湯殿山の御使者だ。私はこんな嬉しいことはねえ。どうか、あんた厭だらうけど助けると思つて當分此の漁場にゐて下せえ。もう皆濱の奴等お前さんを神樣だと云つてゐるんだあ。……」埒もない管を卷きながら到頭行者のお父つあんを神樣に祭り上げてしまひました。

その晩私は餘り不思議な氣がするので、臥床へ入るとこつそりお父つあんに訊きました。

「ねえ、お父つあん。一體今夜の大漁がどうしてお前さんにや前から分つてたんだい。何處かの濱の衆にでも訊いたのかね？」

と、お父つあんは今迄にない險はしい眼つきをして私の顏をじろじろ眺めながら、

「そりや、私にもよく分らない。何しろ神樣のお告げと云ふものは顯かなもんさ。私は今迄にもいろんなお告げを聞いたが、今度ほど顯かだつたことは一遍もありやしない。私も今夜の上首尾にや自分ながら驚いてゐるのさ。」

「だけど上首尾といふからにや何か思ふ壺があつたんだらう。お告げお告げつてえけど私にやどうしても呑み込めないね。一體お告げつてえと何んな風にやつて來るもんなんだい。」

「そりやお前さん方にやとても云つて聞かせられないよ。山へ籠らなければ分らないことなんだから

な。」

「そんな事を云つて、お前さんの云ふのは皆口から出任せなんぢやないのかね？」私は到頭我慢しされなくなつてから突込みますと、お父つあんはいつものやうに白鬚をしごいて、

「まあ、どうでもいゝさ。お前さんの考へるやうに定めとくさ。」と云つたぎり、すうすう寢息をたてはじめました。

私は夜留のことからお告げのことなぞを思ひ合はせると、急にお父つあんの白鬚が恐くなつて來ました。ほんとに修行を積んだ行者なのか、それとも喰はせものゝ世間師なのかさつぱり分らなくなつて、しまひには何だか傍にゐるのさへ氣味が惡くなつて來ました。

その晩、もしお君の云つたやうに女中部屋へでも忍んでいくやうだつたら、その時こそ正體を確めてやらうと思つて心待ちに待構へてゐましたか、私の方がいつの間にか寢込んでしまつたので、到頭その晩は駄目になつてしまひました。

それから四五日の間は僅かながらも毎晩毎晩鰊がついて、漁場はみるみる張り切れるやうに景氣だつて來ました。生鰊はまるで外へ賣出す手段がありませんので、捕れた奴は片つ端からどんどん身缺きにこしらへてしまふ。沖づかれのした奴はつぶして肥料につくられる。三日もたゝないうちに濱から山へかけて鰊棚が一面に續きました。

方々の漁場では口開けの景氣は行者のお父つあんがつけて呉れたと云ふので、米だの野菜だの魚だの

々仕末に困るほど擔がせて寄越しました。お父つあんはこんなに貰ひものをしても仕様がないと云つて、主人に頼んで賣れるものは皆賣つて金にしてしまひました。そしてその金は湯殿山の祠堂金にするのだと云つて大切さうに筺のなかへ納めてしまひました。

さうかうするうちに開けない漁場のことですから、いつかしらお父つあんの名は村の隅から隅まで響き渡つてしまひました。神様のやうに當る八卦見だとか、湯殿山の使者だとかいろんな名がつきました。そしてある船頭の女房が年頃惱んでゐた眼病を見せに來たのを、何うして治したものか十日ほどで見よくしてやつたと云ふので、お父つあんはいつのまにか醫者のかわりまで務めるやうになりました。

その頃漁場の近邊には醫者らしい醫者もゐなかつたものと見えまして、體の弱つた奴や、持病で苦しんでゐる奴は大概一度はお父つあんの手にかゝるやうになりました。そして得體の知れない紅殻のやうな粉藥を湯殿山の靈藥だと云つて、一帖十錢で誰れにでも賣りつけてゐました。ほんとにその藥がきいたものやら、それも今ぢや頓斗分りや致しません。兎に角暫らくの間にお父つあんの手に掛つて幾人かの人間が生きたり死んだりしたのでした。そしてそんなこんなで私の覺えてゐるだけでもお父つあんは三拾兩からの金を殘しました。

そのうちに可成りな景氣を續けて漁期は過ぎてしまう。さすがに寒い北海岸にも生温い春風が吹きそふ頃になりました。

話は少し飛びますが、その間には別に變つた事もなかつたやうに思ひますから、先を急ぐことに致します。

あれはかうつと、もう六月に入つてからでしたかな。ある晩のこと大崎屋では突然不思議な出來事が持ち上りました。先程もお話した例のお富ちやんですな、あの女が急に神隱しにでも逢つたやうに姿を消してしまつたのです。その以前から稼業が辛いと云つてよく泣いてゐたことなどもあつたものですから、こりや適切遁げたのに違ひないといふので、追手はすぐさま方々へ走りました。併し何しろ道が暗いのと、その晩は生憎雨夜だつたので、到頭追手の人達は手を束ねて歸つて來ました。

大崎屋では今お富に遁げられると、身代金はづぶ踏まれることになるので、主人はもう火のやうになつて怒つてゐました。まだ來てから幾月にもならないうへに、年端の行かない小娘の事なので無理な稼ぎをさせる譯にも行かず、どつちらかと云ふに幾分づゝ損をしてまで面倒をみてやつてゐたのですから、主人が怒るのも全く無理はありませんでした。

その翌日もまたその翌日も搜索の手を盡しましたが、どうしたものかお富の行衞はかいくれ知れません。一體その時分には酌婦にしろ、出面にしろ、かうして給料なり身代金なりをふんで遁げることが恐ろしく流行つたもので、まだ警察などと云つても今のやうにしつかりしちや居りませんから、男とでも腐れ合つて遁げた場合にや、もう傭主の損と大抵相場が定まつて居りましたんです。その代り傭主の方でも體を買ふ場合にや隨分酷いことをやつたものですから、云はゞ五分五分なのですが、私なんぞも此の稼業を初めた當座にや隨分それで苦勞させられたもので御坐います。女もどうせこんな北海道三界まで賣られて來やうと云ふ代物ですから並大抵な玉ぢや御坐んせんでした。

て、お富も到頭行方が知れないので、主人も一時はすつかり諦めてしまひましたが、そのうちに

妙な噂がまたぽつぽつ聞えて來たんです。泊の漁場でお富の姿をみたと云ふものが出たかと思ふと、今度は岩内通ひの小蒸汽の甲板でたしかにお富に出逢はしたと云ふものが出る。何んでもお富が神居内から餘り遠くない處にゐるらしいと云ふ噂は漸次と人の口の端に上つて來ました。さうなると主人だつて放置ちや置けません。又それぞれ人を入れて探つてみると云ふ段取になつて來たんです。

ある晩のことでした。探しあぐねた主人はもうすつかり意地になつちやつて、例へ草の根木の根を分けても探し出さうと云ふ氣から、行者のお父つあんに頼んで先づ八卦を立てゝ貰ふことにしました。餘り身近かにゐることとゝて今までは此のいゝ八卦見のことをすつかり忘れてゐましたが、かうと氣がついてみるとまことに適宜な思ひつきなので、主人はひとりで喜んでゐました。

その晩は幸ひ客もなかつたので、家ぢうの男や女はすつかり帳場へ集りました。それに隣近邊の神さん達も物好から寄集まつて來たので、爐傍はいつになく浮々した笑ひ聲で賑ひました。そして行者のお父つあんは漁場へ來てから工面して作つた白裝束に着かへて、ふだんよりも一倍物々しい顏つきをしながら緣喜棚の前へ坐りました。

八卦の立てかたはいつもと少しも變りませんでしたが、いざお富の逃げた方角を定めると云ふ場合になると、お父つあんは今迄に一度も見せなかつた新手を出しました。板場から大きな丼を持つて來て、それをすつかり浪の花で淨めたあとで、水を一杯張つて、それへ護符をつけた附木を浮べました。そして口のなかで呪文を唱へながら丼を兩手に捧げてそつと右左に揺ぶりました。今から考へてみりやまことに人を馬鹿にした話ですが、それでもその時には見物はいづれも手に汗を握つてみてゐました。さう

云ふ私もお父つあんの毒が廻つてゐたので、感心してみてゐたひとりだつたんです。

やがて丼を机の上へ置いてなかを見ますと今まで附木にぴたりくつついてゐた護符が自然にはがれて御印の方を西向きにして丼の底へ沈んでゐました。お父つあんはそれを見ると例の重々しい勿體ぶつた口調になつて、

「はゝあ、これでやつとあの女の行衞が分つた。あの女はもう海の底へ沈んだものと見える。」

それを聞くと主人は膝を乘り出して、

「何んですつて？ 海へ沈んだと云ふと投身でもしたと云ふのかね？」

「さあ、そこまでは分らんが、兎に角護符が西向きに沈むところをみれば、あの女の姿はもう此の世にないもんだ。」

「ふむ、おやきつと隱れ場所がなくなつたんで、女の一了見から身を投げて死んだんだな。いゝ氣味ぢやねえか、惡いことをすりやきつと神樣の罰が當るんだ。どうだ、手前達もようく腹を据ゑて、この御護符樣を拜んで置けよ。主人に不義理をかけりや皆こんな眼に逢ふんぢや。」

主人は一本氣な男でしたから、もう一も二もなくお父つあんの云ひ條を信じて、恐がる女達にこんな威嚇（おどかし）を食はせました。他の者も無論疑ふだけの性根のある奴ありやしません。そんな手取早いことでお富はもう死んだものと定められてしまひましたんです。そしてその噂はまた漁場ぢうへぱつと擴がりました。

それからあれても半月も經つてからの事です。お父つあんがあゝして湯殿山の靈現をまざまざと皆の

前て見せたにも拘らず、お富の生きてゐることが今度は主人の眼て確められたのてす。

その日主人は照岸の漁場て馴染の船頭が死んだのて、その葬式に立つために朝から峠を越えてそつちへ出向いてゆきました。そして葬式の行列と一緒に泊の寺へ歩いてゆくと、その途て主人はぱつたりお富に出逢はしたんてす。お富はその時、海岸の岩陰てこじやこの莖を摘んてゐました。晝日なかのことてはあるし、それに此方は不吉な死人を送つてゆく途なのて、其の場合主人は却つて妙な氣持ちになつて一眼お富の姿をみるとぞつとしたと云ひます。さうてせう、海の底へ沈んだ筈の女が、しよんぼり濱へ立つてこじやこを摘んてゐると云ふんてすから、私共にしたつて恐くなるに違ひはありやしません。て、その場ぢや一言も口がきけなかつたのて、その儘默つて通り過ぎてしまひましたが、泊へ行つてそれとなく聞いてみると、お富はどうやらその村のある大きな船頭の家へ隠匿(かくま)はれてゐるらしいんてす。その船頭といふのは大の湯殿山信神て、月に一度は必ず行者のお父つあんを訪ねて來ました。そしてお父つあんもちよくちよくその家へは呼ばれて行きました。

かう知れてみるとさすがの主人も行者のお父つあんの八卦に何かしら疑をかけない譯にはいきませんてした。もとを云へばほんの通りすがりの他人て、氏素性の知れてゐる間柄てはないのて、一度から疑ひ出してみると、その疑は自然枝に葉をさしてゆきました。併しその時分は今と違つて、漁場と漁場との間のつきあひがひどく面倒だつたのて、譬へそれがほんとうのお富てあつてもうつかり此方から手出しをする譯にはいきませんてした。殊に先方が泊ても羽振りのいゝ船頭てあつてみれば、猶更その間の紛糾がむづかしう御座んした。て、その日は何もかも腹へ納めて、葬式も無事に濟ましてそのまゝ村へ

歸つて來ました。

家へ歸ると主人は行者のお父さんを呼んですつかりその日の事を話してしまひました。私も丁度その場に居合はせましたが、お富が生きてゐるといふ話を聞くと、私はひどく吃驚してしまひました。

お父つあんはいつものやうに落着拂つて主人の云ふことを聞いてゐましたが、すつかり聞いてしまふと、憎らしい程平氣な顔をして、

「そりやお前さんの眼の迷ひでせう。他人の空似と云つて、お前さんが餘りお富のことばかり心配しなさるから、違ふ女の顔がさう見えたんでせう。まさか御護符樣に僞りがあらうとは私にや思はれない。」

「だつて、お前さんが何と云つても、泊の村の者がさう云ふんだから仕樣がねえさ。あの船頭の家にゐるといふ證據は私も今日ちやんと握つて來たんだからね。」

「證據は證據でも神樣に僞りはない。若しお前さんの云ふことがほんとうとすりやそれこそ湯殿山の御利益はないことになる。お前さんが强つてさう云ひ張るなら私の眼の前で御護符樣を割いて見なさい。」

「そんな勿體ねえことが出來るもんか。お前さんは何かと云ふと湯殿山を笠に着るが、今度のお富のことは自體神樣とは何のかゝり合へもねえんだ。」

こんなことから二人は大論判を初めました。そしてお互に聲を荒立てゝ一時間餘りも云爭ひをやつてゐましたが、到頭主人の權幕に云ひ伏せられて行者のお父つあんは口を噤んでしまひました。

その日はそれて何事もなく濟んてしまひました。

その翌日の晝過ぎでした。主人がお富の所置を漁場へ相談にいつてゐる留守に行者のお父つあんはこ

つそり私を二階へ呼びあげました。何事かと思つて行つてみると、その時お父つあんはどうしたものか、すつかり手廻りの道具をかたづけて、自分も旅裝束に着換へてゐましたが、私の顏をみるといかにも覺悟をきめたらしいしんみりとした調子て、

「私はお前さんとも妙な御緣てかうして長い間一つ釜の飯も食ふやうな事になつたが、今日といふ今日は到頭お名殘りになつちまつた。私も此の土地にや大分馴染みも出來たし出來ることならもう少し足を留めてゐたいと思ふんだが、お前さんも知つてゐなさる通り、昨夜のやうな事が持ち上つちやもう一刻もかうしてゐることは出來ない。お前さんもあの時聞いてゐたんだから知つてるだらうが、そりや旦那の云ふことにも一應理屈はある。だが私にや私て又別な考へがあるんだ。實はこりやお前さんだけの話だが、お富は旦那の云ふ通りちやんと生きてゐるんだ。それも云はゞ神隱しになつてゐるやうなもので、生きてはゐるものゝもう一生この神居内へは歸つて來られない體になつてゐるんだ。何故さうなつたかと云つたつて、そりや神樣の思召しだから我々にや分りやしない。そして今强つて居所を突止めやうとしたり、又この神居内へ連れ歸らうとしたりすりや、きつとこの家に大難が來るにきまつてゐる。私はそれが恐さに此の土地を立つんだ。どうかまあお前さんも壯健て行々は立派に出世をしてお吳んなさい。又いつ何處て逢ふか分らないが、その時にや改めて名告り逢はう。そしてお前さんもどうせ一度は内地へ歸る人なんだから、その時にやきつと湯殿山へ御參詣をしてお吳んなさい。」

私はそれを聞くと餘り飯かの事なんて呆氣にとられてしまひました。兎に角主人が歸るまでどうにかして引留めて置かうとは思ひましたが、主人に逢つたら又どんな事て神樣の思召しに背くかも知れない

と云ひはつて、お父つあんは到頭そのまゝ例の笈ヶ脊負つて裏口からこつそり出て行つてしまいました。私には村端れの阪路をしよんぼり上つてゆくその後姿が今でも眼の先に見るやうな氣が致します。

晩になつてからやつと主人が歸つて來ましたので、そのいちまきをすつかり話しますと、主人はひどく腹を立てゝ

「彼奴め、すつかり俺を誑かしやがつた。」と云つてすぐさま村の若衆に賴んでお父つあんの後を追はせましたが、唯一筋の街道なのにどうしたものかもう影も形も見えませんでした。

それからはもう毎日お父つあんの噂て持ちきりました。その話が出る度に主人は

「見附け次第に打殺ろして吳れる。」などゝ齒がみをして口惜しがつてゐましたが、さうは云ひながら內心ではひどくお父つあんを恐がつてゐる樣子でした。そして序の折に泊の方の樣子を探らせてみると、お富ももういつの間にかそこには居ませんでした。

今でもあの近邊へ行くと話が殘つてゐますが、神居內の漁場に珍らしい大火があつたのはそれからほんの間もない事だつたのです。その日は夏の初めに吹く西風がいつもより激しく當つてゐたので、漁場はもとより、野良働きをする百姓達まですつかり仕事を休んて村へ引上げてゐましたが夜になると突然吉田の漁場の直ぐ上にある落葉松の林から怪し火が起りました。水の手は惡し、風は吹き募つて來ると云ふんですから耐りません。あれあれと云ふうちに村へ火が移つて、風下に當つた家は一耐りもなく燒け落ちてしまひました。そして火先はどんどん山へ上つて、丁度二日二晩に三山ほど燒き拂つてしまひま

した。海上十里餘りも離れた壽都の町からもこの火事だけは手に取るやうに見えたと云ひますから、大方その凄まじさはお分りになることだらうと存じます。

その大火の後てはいろいろな恐ろしい噂が立ちました。火事の少し前に雷電峠の方から火の玉が飛んて來たとか、白い着物を着た白髪の老爺が空中にぼんやり現れたとか、何處て誰が云ひ觸らすものやら取り留めもない噂は口から口を傳つて方々へ廣がつてゆきました。そんな噂のあるなかて、すつかり身上を燒いてしまつた大崎屋の主人だけはあの行者のお父つあんが湯殿山へ呪ひを立てたのだと人にも云ひ、自分てもさう信じきつてゐました。

大火のおかげて折角持ち直してゐた吉田の漁場も到頭人手に渡つてしまひました。一體にあの近邊が寂れたのも全くこの大火がもとになつてゐるのです。

私はそれから泊へ行つて二箇月ばかり働きましたが、その土地も面白くなくなつたのて、又岩内の町へ舞ひ戻りました。そして泊の船頭の周旋て今度は町きつての酒問屋へ六尺に住み込みました。

行者のお父つあんのお話はそれてざつと濟みましが、此處で是非もう少し聞いて頂き度いのはあの姿を隱したお富のことなんて御坐います。因縁と云ふものは何處までついて廻るか分らないもんて、私はその年の冬になつて、岩内の町てふいにお富に出逢はしたんて御坐います。

もうそろそろ根雪が深くならうと云ふ頃てした。その頃にや町ても惡い朋輩の二人三人は出來て、其奴等が集まりや必ずお定まりの手慰みが初まる、そして運のいゝ奴を取卷いちやゴケ屋へしけ込んだも

のでした。

ある晩のこと、私が端した錢をはつたと云ふので金方にされて、餘り行つたことのない町端れのゴケ屋へ押し上りました。と、帳場に並んだ女のなかにお富にそつくりな女がゐるんです。ふいと見た拍子にお富ぢないかと思ひましたが、あんまり場所が思ひ懸けないので聲もかけずにそのまゝ通過ぎてしまはうとすると、先方ぢや私の顔を覺えてゐたものと見えまして、

「あれ、お前さん。」と云ひながらいきなり私の方へ驅け寄つて來ました。

「よう暫らくぢやねえか。一體いつから此樣な處へ出てゐるんだい？」

「何時つて、もう半歳にもならあね。」

「ふむ、それにしちやよく懸違つてお眼にかゝらなかつたもんだなあ。」

その時分にやまだ若かつたせいか、今のやうにしんみり物事に感じるなぞと云ふことは御坐んせんでしたので、こんな呑氣な調子ではぐらかしてしまひました。そして是非お花にして呉れと云ふので、その儘座敷へ呼びあげましたが、先がそんな稼業をしてゐる女であつてみれば座敷だけで歸るのも何だか馬鹿らしくなつて、今から考へりや隨分無茶な話ですけど、到頭その晩お富と關係をつけてしまひました。

初會のつきがよかつたのがすつかり病みつきになつて、私はそれから後もちよくちよくひとりでお富の處へ出懸けました。昔にくらべるとずんと稼業馴れはしてゐましたが、それでも深くつきあつてみると案外氣の好い女で、私はこのお富のうちへばかりは心持ちよく通ふことが出來ました。そして二人し

て酒を飲みながらよく神居内の話をしましたが、その時になつてお富の口から初めて行者のお父つあんの話を聞きました。それ迄私達のまるで知なかつた秘密があの老爺のほんとの素性を殘らず明るみへさらけ出してしまひました。

お父つあんは神居内へ落着くと直ぐからまだ年端もいかないお富を自由にしてゐたのでした。それも初めはもし云ふ事を聞かなければ湯殿山の罰を當てゝやるといふやうな手で口說き落したのだと云ふことです。そして神隱しなどゝ世間體のいゝことを云つてゐながら、實はお富が兼々から親里を慕つてゐたのをうまく誑らかして、大膽にも大崎屋から泊の船頭の家まで誘き出したのでした。そして愈々その魂膽がばれさうになつて神居内にもゐられなくなると、その儘お富を連れてこの岩内へやつて來て、此町で到頭お富をゴケに賣り飛ばして、自分はその身代金を握つたまゝ何處とも知れず行方を晦ましてしまつたのでした。お富はその時のことを話しちや泣いて口惜しがつてゐました。

そんなこんなでお富とも大分長い間つきあつてゐましたが、そのうちにいつともなく足が遠のいて、思ひ出して行かうと思ふ時分にはもうお富の方が岩内には居りませんでした。それから後は顏の似寄つた女にも到頭出逢はしませんでした。

あの行者のお父つあんにも神居內で別れたつきり此の年になるまでついぞ出逢ひませんが、今頃は何處にどうしてゐることで御坐いませう。今から考へてみれば恐ろしく性のよくない世間師であつたらしう御坐んすが、今頃はいぢめて步いた人達の怨念で地獄の釜のなかへでも引取られてゐるかも知れませ

ん。生きてゐた時にもう七十の上を越してゐるのですから、どうせ碌な世渡りはしちや居りますまい。

これだけお話しゝたんぢやまことに辻褄の合はない話で、旦那方は何と思召すか知れませんが、併しまだ北海道が開けない以前には全くこんな嘘みたやうな惡徒が隨分澤山入込んでゐたのでした。あの時分のことを思ふと此頃の世の中は開け過ぎたくらゐ開けてしまひました。私どもには却つてそれが夢のやうな氣が致すんです。

いや、どうも下らないお話しを長々と致しまして、さぞ御退屈で御坐んしたらう。夜が更けたせいか急に冷えて參りましたな。もうお清もお花も體があきませうから、そしたら彼奴等を相手にこの爐傍で一杯召食つて、今夜はゆつくりお寢みなさいまし。この勢で夜つぴて吹雪いたら明日はまた軒まで埋まつてしまひませう。はいゝゝ。

（をわり）



五つになる兒

野上彌生子

秀一はそれまでは何んにも知りませんでした。又その事に就いて誰も話して呉れる人はありませんでした。何んでも變つた事、珍らしい事、例へばいつの幾日には千駄木の叔母様がゐらして、お坊つちやまにおいしいお菓子を拵へて下さる筈だとか、この次ぎの子供デーには有樂座のかち／＼山にお連れいたしますよとか、お國の祖母様が小包でいゝ物をお送り下さいますつて、何て御座いませうね、お坊ちやまの大好きな唐人せんべいでせうかとか、其日／＼の靜平な家庭生活の上にちッとでも秀一に係りのある曲折が預知される度に、いゝ話材にして噂したり、樂しんだり、問へば委しい説明を

さへ怠らなかつた下婢——寧ろ秀一に取つては娛姆であつた忠實なそのさへ、今度の異常な出來事だけには愼ましげに口を緘んでゐました。それ故秀一はお母樣の御病氣と云つても矢張り不斷の風邪を引いたのか、頭痛がするの位ゐにしか思つてゐませんでした。風邪で病院に這入る——それを不自然に感ずるには秀一はまだ余りに幼い兒でありました。

けれどもお母樣が病院に行くようになつた二三日前の夕方、いつものように夕食後の一小時間を緣側籐椅子の上で過した時、初めてこんな話をして聞かされました。

「坊やねえ。」

「なァに。」

「今度ね、坊やのお家に赤ちやんが來るのですよ。ほら山瀨さんや、小杉さんとこにゐらつしやるでせう。あんな小さい可愛い〳〵赤ん坊よ。そしたら坊や可愛がつてあげる？」

秀一はその問ひには默つてゐました。可愛がるも可愛がらないもそんな事は思ふ隙のないほど、たゞぼんやり驚いたのでありました。彼は眼を輝やかして今度は自分が熱心な質問者となりました。

「その赤ちやんいつ來るの。」

「いつッて、そりやまだはつきり分りませんわ。何しろ遠いところから來るのですもの。」

「遠い所つてどの位ゐ遠いところ？　お國のお祖母樣のとこ位ゐ遠いの？」

「まだずつと〳〵遠いのよ。」

「ぢや天まで位ゐ遠いのね。」

「えゝ、さうよ。さうなのよ。赤ちやんはねその天から來るのですわ。」

秀一は目を見張りました。凡てが新らしい智識でありました。それなら天から何に乘つて來るのだらうと思ひめぐらした時、そのふつくらしい面白い顔は、軒の雨樋の黑い線からかつきり區劃を作つて擴がつてゐる夕暮れの空に向けられました。

それは梅雨(つゆ)前の時節に限つてのみ見られるやうな、特殊の夢幻的な宵の一つで、風と雲と光りと空氣と、その裡に散在する綠樹と花との物狂ほしい舞踏の黃昏でありました。晝の光りと夜の色が、忍び足にそつと入り代はりかけたところを、氣まぐれな涼風の Shower にかき亂されて、天と地に光と陰のさん〴〵な混亂が起つたのでありました。空も小暗く黃昏るゝ代りに、もう一度さら〳〵した明るみを取り戾して、あらゆる色彩、あらゆる形の雲が、造化そのものゝ神秘な象徵のやうに空一面に浮び出ました。それを見た庭の綠葉樹は、どうにかして雲の光と色を自分の葉裏に摺りつけようとするかのやうに、風の中に身をゆすつて爭ひ騷ぎました。暗綠色の葉の巨大な塊りにいち早くその金粉を一杯に揉み込んで、足下の多くの木立のあがきを誇らかに見下ろしてゐるのは、隣の庭境にある椎の古木でありました。風はまた椎からも光るものを振り落さうとして枝と枝、葉と葉の間に狂ひ入りました。幹に絡んだ凌宵(のうぜん)の花の蔓はその度に波の底の藻のやうに搖れに搖れました。

秀一の幼い胸にも美しいものはよく感じられました。彼は半ばあつ氣(け)に取られたやうな、又半ばうつとり魅せられたやうな心持ちで目の前のゆれる花から、金に染まつた椎の枝から、美しい雲のいろ〳〵

に目も放さす見入つた時、ふと一つの雲の長々と幾筋かの尾を引いて金と朱と紺などの點々に輝いてゐるのを見つけました。

『あれ綺麗な雲ね、お母樣。斯うして見ると孔雀見たいよ。』

彼はその雲に小さい人差指を向けて母の顏を見返つた瞬間、偶然な聯想は先刻天から來るのだと聞いた赤ん坊の上に落ちました。

『ねえお母樣。赤ちやん天から來るとき孔雀に乘つて來るといゝわねえ。』

お母樣は笑ひました。私の小さい詩人が相かはらず面白い事を云ふと云ふ風に二つの平手の間に秀一の顏を挾んで自分の顏に觸れるまで引きよせながら、優しく、でも命ずるような調子で申しした。

『坊やさへ可愛がつてあげればね、孔雀にだつて鶴にだつて乘つて來ますわ。そうするとね、坊やはお兄さんになるのよ。いゝてせう。偉いんだわねえ。だから本統に可愛がつておあげなさいよ。いゝこと。お約束してよ。』

お母樣の言葉はそう話してゐるうちに急にしんみりして來ました。秀一は自分をぢつと見守つてゐるその眼の中から、小さい光る玉がぽつつり浮き出たのに氣がつきました。それが二三ッ連なつて震えを帶びた白い頰の上を、鬼子つこしながら轉がつて行きました。秀一はそれが面白くつて、お母樣が何を云つてるのか聞くより先にたゞその顏の奇妙な現象ばかりを見つめてゐました。その時、

『お坊ちやまは何に乘つてゐらしたので御座いませうねえ。』

後から突然こう云つて聲をかけたのはそのでありました。そのは床を延べにかゝつて、もう薄暗くな

つた部屋の隅に蚊帳の環をちりんちりん鳴らしてゐました。

「僕だつて天から來たの？」

「そうて御座いますともね。赤ちやまは皆んな天から入らつしやるのですから。」

「ぢやね——僕何だろう。」

秀一は重大な考へ事が湧いたように、仔細らしくそのなよやかな細い頭をかしげました。

「秀一は鵄に乘つて來たのでせう。だからお色がまつ黒なのねえ。」

お母様の顔はもう不断の快活を取り返して、こんな冗談まで云ふ餘裕がありました。

「いやだ。鵄なんかいやなこつた。僕は飛行機だよ。飛行機に乘つて來たんだよ。」

「なるほど飛行機はよう御座いましたね。矢張し偉いお坊ちやまは違ひますわねえ。」

そのはひとり大げさに感心して嬉しがりました。飛行機だとすると何式で入らしたのでせう。ブレリオてせうか、モオリス・フアルマン式でせうか、それともニユーポールド式でせうかと、この頃そのと二人して大分覺え込んだ飛行機の名前を一つ〳〵數へ立てゝゐるうちに、いつも飛行機から聯想する兵隊さんの事、その勇ましげな軍裝の事、勳章の事、鐵砲の事、劒の事、騎馬の事、こんなものが頭腦一杯に密集して、今までお母様との會話の問題となつた赤ん坊に就いての意識などは、どこかの片隅の小さい皺の中に押し込められたまゝになつてゐました。彼はだん〳〵無性に愉快な氣持になつて、左右の脊に置かれた母親の柔らかな諸手の輪を、もどかしげに振りきつて飛び出しました。生きよ、延びよ、育てよ、斯う命じて、三尺の身體の有らゆる筋肉、あらゆる脈管、有らゆる細胞の間に横溢してゐる不

思議な力の勢立つ時、それとリズムを一つにするには、躍るか、逃ねるか、駈け出すか、あらん限りの聲をあげて笑ふか泣くかするより外はないのでありました。秀一は無意識に悧巧な選擇をしてその最後の方法を選びました。而して泣いたり笑つたりする代りにたゞ歌ひました。

見よや――飛行機、はやぶさ三羽、
ましぐらにぞ、大地に墜ちる、
木村――德田の、ふたりの中尉……

夕映えのまだ褪せきらぬ長廊下を濶歩しながらこんな歌をうたふ彼のいたいけな、でも潑溂とした男性らしい聲がいつまでも〳〵響いてゐました。

凡ての事が明白になつたのはそれから間もなくてありました。

ある朝秀一は目を覺ますとお父様が見えませんてした。お母様が病院に行つて了つてからは、毎朝一夜の眠りから目覺めた第一の瞬間に、隣りに並んだお父様の寢すがたを見るのがせめての安心であつた秀一に取つてはそれはがつくりするほどの心淋しさてありました。床の跡さへ綺麗に片づいて、八疊吊りの廣々した靑い蚊帳の中には、自分ひとりだけが寢てゐた事が分りました。秀一はやッと眠りを振り落したばかりの頭をあげて蚊帳のまわりをぐるりとうす目に見廻した時、初めの心淋しさは、不平と腹立しさに變じました。

「そ――のッ。そのや――ッ」

彼は甘へた鼻聲を出して呼びました。

家の內は森として何の返事もありません。二三枚雨戶の操つてある緣側からは、爽やかな朝の日光と凉しげな庭木の綠がさし込みました。チ丶、チ丶と雀が鳴いてゐます。

『そ――の――や――。』

秀一は今度はほんとうの泣き聲になつて、隔ての唐紙の方を向いて眞劍に呼びました。すると溝口の戶ががらりと開いて、そゝくさとこちらに急いて來る足音が聞えました。

『お寢坊ちやんのお坊つちやま。』

斯う云ひ〱そのは座敷に這入つて來ると、行きなり蚊帳越しに秀一の耳許に口を寄せて、

『お坊つちやま、さあ早く起ッきしてゐらしやりましな。今日は嬉しい〱事が御座いますのよ。』

何か異常な悅びを暗示するかのやうに、にこ〱して囁きました。でも秀一には先刻からの不平があるので、氣六ヶ敷い顏をしてゐました。

『お父樣どうしたの。』

『どうしたつてお坊つちやま、昨夜赤ちやまが……。』

生れましたと云はうとして、彼女はこの事に就いての女主人の不斷の注意を思ひ出しました。眞子は人間の性とか繁殖とかの問題に關しては可なり Idealistic に傾いてゐるので、この方面の事でその一人子の耳目に入るべき言動には細心な注意を怠りませんでした。子供が書物とか觀察とか又は年長者の善き Suggestion とかに依つて、自分で自然に會得し啓發するまでは、出來得るかぎり神秘なまゝに保たせて

置き度いと願つてゐるてありました。(どうしてとれが神秘てないと云へませう、少くとも人間の生命が科學て解釋し盡されるまては。それ故これは子供を僞はる事てはないと信じてゐるのてありました)。他くまてその旨を體してゐるそのは、その時あはてて言葉を變へました。

『ほら先達お母様が抑じやいましたてせう。あの赤様がね、いよ〳〵昨晩遲くなつて天から入らしやいましたの。えゝえ病院に。お父様が今行つてゐらしやいますからね、お歸りになつたら今度はお坊ちやをそのやがお連れ申しますのよ。お嬉しいてせう。だから、さ、早くおとなにおつきなさいましよ。』

この言葉に秀一は何か知ら急に樂しみな事が湧いた氣がして蚊帳から飛び出ました。でもすつ裸體の上に白い浴衣を着せて貰つてゐるうちに、天から來ると云ふ小さい新人が、何故直接家に來ないて病院なんかに來るのだろうと思はれました。その不審をそのに正そうとしたら、彼女はきつと目を圓くしました。がそのあとから直ぐにつこりして旨い說明をして呉れました。

『それはそうて御座いますわ、お坊ちやま、何故つて病院のお屋根はおうちのよりかもずつと高くつて大きいんてすもの。だから赤様が下りてゐらつしやる時に都合がよろしいのてすわ。ねえ。』

午後秀一はそのに連れられて病院の鐵門を潜りました。青々とした若葉の並樹や、森めいたこんもりした木立や、勾配のなだらかな綠の岡などの間に散在してゐる種々な專門科の醫院の同じような建物の中にも、秀一は母のゐる木造の白い二階建の家を見誤りませんてした。眞子が入院してからはお父様やそのと一緒に二三度來てゐましたから、正面の二階の左から四番目の窓がお母様のお部屋だと云ふ事まて知つてゐたのてありました。いつも病院の前まて來ると一番にその窓を探し出すのが樂しみてありま

した。古木の櫻の延ばした長い枝で遮ぎられたその窓からは、今日は友禪めりんすの小蒲團が出てゐました。

『ほう赤ちやまのお蒲團が干してありますわ。』

そのは斯う云つてその窓を仰ぎ見ました。秀一はこの小蒲團には見覺があるような氣がしました。白地にまつ赤な亂菊を染め出した派手な色模樣は、前に當つた葉櫻の緑の反射と共に、初夏の强い光線の中にぱつと浸み入るように彼の目に映りました。

『赤ちやんのお布團、坊やのよりかも綺麗だなア。』

秀一は何氣なくこんな歎賞を洩らしました。これは恐らく彼が自分の新らたな競爭者に對して無意識のうちに感じた最初の『羨望』でありました。

部屋に這入つて見ると、お母樣の寢臺の横に、これまでなかつた今一つの小形な寢臺が並んでゐました。

『坊や、赤ちやんを見ておあげなさい。』

お母樣は臥せつたまゝ青白い顏に微笑を見せて斯う申しました。顏馴染の潑活さうな若い附添婦は、

『お兄さんがもう入らつしやりそうなものだつて赤ちやんが待つておいてでしたよ。』

と云つて秀一をその小さい寢臺の側に連れて行きました。

『まあよくお寢つて。お可愛いてせう、お坊つちやま。起ッきなさるといけませんから此方からそつと御覽なさいましよ。』

いそのの云ふがまゝに寢臺の右側からおづ／＼と覗いて秀一の目には異樣な生物の姿が映りました。もぢや／＼とまつ黒い髮毛に蔽はれた圓い肉の塊り、染めたやうなまつ赤な皮膚、その上に排列された小さい眼と小さい鼻と小さい口、石竹色のメリンスの袖から覗いた小さい／＼手。凡てが玩弄物のように珍しく可愛げてありました。秀一はぢつと見てゐるうちにその口が開けて見度かつた。鼻に觸つて見たかつた。頬や耳や手も何もかもいぢり廻して見度いようなもどかしさを感じて來ると同時に、一種の不氣味な躊躇も伴ひました。取りわけ小貝のような丸いカーヴをもつてうす紅くぴたと閉されてゐるその兩眼は、そのまゝいつても開かぬものゝような氣がされました。

「赤ちやん何故目を開けないの。」

秀一は催捉するやうに何度も斯う云ひました。でも赤ん坊はそんな事には凡て無頓着に眠り續けました。一年近くの間閉ぢ籠められてゐた、狹い暗い闇の洞から、日となく、夜となく求め憧憬れ、もがいてゐた、自由な無邊際の大千世界に、輪廻し得た安心と悦びの中に、過去を忘れ、現在を忘れ、未來を忘れてたゞすや／＼と眠つてゐるのでありました。

「坊や赤ちやんからのお土産がありますよ。」

お母樣から斯う呼ばれてその寢臺の方へ行つて見ると、お母樣はいそのに命じて横の硝子張りの卓の抽出から、粧化箱に這入つた西洋菓子と色鉛筆と、ブリキ細工の一組の騎兵人形とを取り出させました。

「これはね、坊やがいゝお兄さんだから赤ちやんがお土産に持つて來てあげたのよ。親切な赤ちやんて

せう。だからね、坊やも赤ちやんを大事に可愛がつておあげなさいよ。』

その瞬間お母様の顔には又いつぞやの夕映えの縁側で見た時のやうな、異様な愁はしげな曇りがかゝりました。その表情は何故とも知らず秀一の心に淡い壓迫と、素直な服從の念を感じさせるのでありました。彼は『うゝん。』と半分甘へた、半分母に同情するやうな調子の返事をして、白いベットの上に出たその腕にもつれようとしました。

『お坊ッちやま、お母様はお惡いのですからね。』

そのは急いでそれを制するやうにしておもちやの留め絲を切りました。

『まあ立派な兵隊さんですこと。幾つ御座いませう。そう〳〵。此窓のところへお並べになるとよう御座いますわ。』

秀一はそれに紛らされて、窓の方へ行きました。而して今度新らたに自分の部下となつたその一隊の騎兵をずらりと窓緣に並べて調練をさせながら、不圖天にも玩弄屋(おもちやや)があるのか知らと思ひました。

赤ん坊はもう秀一が歸らうとする時になつてやつと目を覺ましました。

『おぎやーつ、おぎやーつ、おぎやーつ。』

と突然泣き出した時には、一寸喫驚しました。あんなぽつちりした口からそれほどの高い聲が出て來ようとは思ひもよらなかつたのでありました。その上猫見たいな、變な泣聲だと思ひました。でも心配してゐた眼はその拍子にぱつちり開きました。黒い〳〵鐵砲玉のやうな目でありました。幾らぢつと見つめても瞬きもせず平氣で見返してゐるところは人形の目と同じでありました。茶褐色の細い輪で取り圍ま

れた瞳のまん中に誰か小さい人の顔があるのに氣がついて、よく／＼覗いて見たらそれは自分の顔でありました。思はず笑つたら瞳の中の顔も一緒に笑ひました。

『そんなによつかゝつて御覧になつちや赤ちやんがお可哀想て御座いますよ。』

そのが斯う云つて後へ引き下らせようとした時、秀一の胸には妙な一種の反抗心が湧きました。

『いやだい、、いやだい。』

『おやゝ、おや、偉いお兄さんがどうなすつたので御座いませうね。』

と云ひ／＼ドアの方から笑ひながら二人の側に近づいて來たのは海野さんと云ふ若い看護婦でありました。

『一つお乳をお上げして見ませう。』

海野さんは卓の上の硝子器から取り出した脱脂綿のきれを指先に巻きつけて、それて赤ん坊の口を消毒しました。それがすむと今度はお母様のベットに進んで白い寢巻の襟を割つて左右の乳房を交る／＼調べて見ました。而して硼酸水て又同じやうに消毒してから、一寸と乳首を絞つて見ると熟れきつた果物かなんかゞ潰えるやうに、紫色の圓い球から白い乳汁がさつと迸りました。

『さあさおつぱい召上れ。お初の御馳走てすね。』

海野さんは抱き上げる時赤ん坊にこんな挨拶をしました。而してお母様の懷へ寢かせてその口を乳房をあてがつてやると、忽ち鋭敏な舌の觸覺が目覺めて、玆に美妙な本能的生活作用が初まりました。あたりの人々――看護婦と附添婦とそのとの三人は、その不可思議な造化の妙理に知らず／＼魅し盡され

て仕舞つたかのやうに、ぼんやりして赤ん坊の最初の吸乳を見守つてゐました。その間に交つてたゞひとり未だ曾て知らなかつた複雜な情緒を味はつたの秀一でありました。

お母様の乳房——三つの春お乳を止めてからも戀しさは依然として變らなかつたあの白い柔らかい肉の袋に赤ん坊が縋つてゐる。お母様に抱かれて、あの暖い懐に抱かれて、さもおいしそうに吸つてゐる。あの甘い乳の袋は私のものだつたのだ。あの懐も私のものだつたのだ。何もかも私のものだつたのを思ひも依らぬものに奪はれたと云ふ悲しみ、その者の幸運に對する淡い妬みは、一方にその小さい珍らしい人間を慈しみ、悦ぶ情が可なり深いのにも拘はらず、この瞬間から秀一の胸にどす黒い芽を吹いたのでありました。

けれども一週間ほどしてお母様と赤ん坊がいよ／＼家に歸つて來てからは、乳房を奪はれた位ゐは何んでもなかつた、今まで自分に隷屬し、自分を中心としてお奉仕してゐた有らゆるものが、だん／＼この小さな新來者の方へ移つて行く事に氣がついた時には、秀一は全くうろたへました。取り分けそのゝ裏切りは彼に取つて堪へがたい程の不平と憤りでありました。

何かと云ふと『お兄さんだから。』と云ふ言葉を振りかざゝれるもの不平なことの一つでありました。お兄さんなら何故今まで通りに自由に、思ふさま飛んだり跳ねたり騒いだりしてはならないのだらう。一擧手、一投足赤さんの寝息に氣を配つたり、その氣嫌、不氣嫌に干渉されたりしなければならないのか分りませんでした。

これまでは朝のお雜仕がすむとお伽話を讀んで貰つたり、繪書を書く相手にしたりしてゐたそのも、赤

ん坊をおんぶしたり、抱いたりする時間の方が多くなつたので、秀一は矢張「お兒さんだから」と云ふ口實の下に、ひとりてしよんぼり遊んでゐなければなりませんでした。

……………

ねん〳〵子守りは何處へ行た
お山を越へて里へ行つた。
お里の土産はなあになに・
でん〳〵太鼓に簫の笛。
起きたら叩かしよ、笛吹かしよ……

青葉曇りの陰鬱な日などに美しい透る聲を持つた彼女からこんな子守り唄をしんみり歌はれると、秀一は何んだか涙のにじむような愁はしさを誘はれました。廣い〳〵原つ場のまん中にたつた一人突き離されたような氣もちてありました。お母様が産後の稍々ヒステリカルな亢奮から、今までになく自分にきつい聲を洩らすのも悲しい思ひの一つてありました。秀一はよく泣いたりぢれたりする兒になりました。或日同じような不平と憤りの混り合つた反撥的な氣分から、

「赤ちやんなんか死んぢまへ。」

ふとそんな烈しい叫びをあげてお母様をびつくりさせた事がありました。お母様は默つたまゝ二三秒の間ぢつと我兒の瞳の中を見詰めてゐました。而して靜かに聞き返しました。

「坊や、死ぬつてどんな事か知つてゝ。」

『知つてるとも。赤ちやんがゐなくなる事だわ。』

秀一は聲に應じて無造作に斯う答えました。でも本統に『死』と云ふ事を考えて見たつて何んにも具體的な想像はつかないのは分つてゐました。たゞ直ぐ近くの染井の通りを毎日に幾つか過ぎて行く造花や放鳥の籠や、白木の棺や、法衣のきらびやかな僧侶や、禮裝の人々の續く華やかな行列が、何か知らその死に密接な關係のある事だけはぼんやり感じられてゐました。でもそれから一年もたゝぬうちにそんな行列が自分の家から出ようとは――やつと生の扉を出て來たその小さい者が直ちに死の途へ流轉して行かうとは夢にも知らなかつたのでありました。

その頃の赤ん坊はもう無能な單なる肉の人形ではありませんでした。小さい身體ぢゆうに排置された種々な機能や感覺が日増しに鋭敏な發達を遂げて完全な小人間の一人になりつゝありました。光るものか紅いものしか見えなかつた眼も、家の人々の親しい顏、縁側に馴れ依る家畜、庭の樹に來る小鳥を識別して悦ぶだけになりました。二つづゝ上下に白い米粒ほどの齒も現はれて來ました。乳以外の味よき物を慕うて、うま〳〵を呼びながら、團欒の食卓に這ひ依つて來る智識と、手足の自由も持つてゐました。

この弟に對する秀一の感情にもその頃はだん〳〵變つたものがありました。思ひもよらぬ競爭者の突然な出現に就いて、駭き、怒り、稍々神經過敏の恐怖をさへ感じさせられてゐた初めの心が、『馴れ』と云ふ事のためにだん〳〵平靜を取り返したのでありました。而して兄らしい餘裕と寛大を生ずると同時

にそのものを、何か珍奇な自動玩弄物かなんぞのやうに、自分から進んで樂しみ玩ぶ傾向をも生じたのでありました。玩弄物と云へば、全くこんな複雜な珍らしい、且つ興味の多い玩弄物は外にありませんでせう。

　二本の足で大地を蹈へて歩りく代りに、小犬か兎見たいに手まで足に代用して這ひ廻るのが第一に面白く奇妙でありました。おもちやかお菓子の一片を遠くに置いて、

『赤ちやん、こちよ、うま〱此處よ。』

と手を叩いて囃せば、高い叫び聲をあげながら、笑ひくづれて這ひ寄るのも、ジョン公をからかふ時のやうで愉快でありました。乳母車に乘せてそのと近所の森の蔭に遊びに行くのも樂しみなものゝ一つでありました。秀一は彼を電車の乘客にしました。

『上野、上野。お下りの方はありませんか。チン、チン、動きまーす。』

　四月半ばの花の樹のかげなどを、自分が車掌となつてその車を押して行きました。

　けれども以前の競爭心や淡い妬みの情が全然消滅した譯ではありませんでした。時によるとそれが烈しい滑稽な形になつて現はれることもありました。

　小さい弟の這ひ〱が家の人々の賞讚と悅びの的になつた頃でありました、秀一は自分も一つ技倆を示めそうと思ひ立つてまつ直ぐに立つて歩りく代りに、すんなりした長い手足を疊の上に平らに延ばして、二三日家ぢゆうを這ひ廻つて見ました。併し赤ん坊のやうに讚められも悅ばれもせず、却つてたしなめられたりあざ笑はれたりするが分ると、秀一は云ひやうもなく不平でありました。おしつこにも同

じ例が起りました。時を計つてさし出した赤ん坊の、小さい、うす桃色した薔薇の蕾のやうなおちん〳〵から、まつ白い小水が拋物線狀の弧を書いて珊々と迸り出ると、人々は聲を揃へて賞め祝しました。

『まあ〳〵、綺麗なおしつこがどつさりで。丁度よございましたねえ。』

秀一は自分もその賞贊に預るつもりで、赤ん坊のする度に大急ぎで裾をめくつて緣側に駐け出しました。二三分間前にすましたばかりの後であつても矢張り頑としておまるの前に立ちはだかりました。而してやつとの事で一二の滴の雫を絞り出し得た時誇りかに呼びました。

『坊も丁度だつた。いゝおしつこだよつ。』

併しあらゆる競爭心も、妬みも、愛も、執着も一切消滅して仕舞ふ日が遠からず現はれました。

それは長閑な四月盡の午後でありました。秀一はその日の出來事をよう〳〵覺えてゐました。

茶の間のまん中に子供用の低い卓食が出てゐました。その上にまつ白いきれがかゝつて、とぢ卵の黃色い皿と、うづら豆の小丼と、小さい圓い御飯茶椀が二つと、朱塗りの短かい箸とが並んでゐました。秀一は壁際の簞笥を後ろにしてその食卓の一方に坐つてゐました。反對の側には赤ん坊を横に置いてそのが坐りました。二人の幼い兄弟たちは近所の森の散步から歸つて來て、取り殘された二人だけの晝飯を食べてゐたのでありました。

近頃この晝飯の時だけに限つて貰へるやうになつたおじやの味は非常に赤ん坊を悅ばせました。甘いばかりの乳の中には到底得られない複雜な味覺がもう十分に感じられるのでありました。彼は親鳥の餌に食ひ下がる雛のやうに、そのいゝの差し出すスプーンを口で追ひました。その運び方が少しでも遲いと頻

りに、

『うま、うま、うま、うま。』

を連呼しながら、手を延ばして秀一の玉子の皿や、豆の丼までかき廻そうとしました。

『いけない、いけない、赤さんが玉子を摑んだ。』

『あら、あら、大變おてゝがばつちになりましたね。お坊ちやま一寸と赤さまを見てゐらして下さいまし、拭くものを取つて參りますから。』

そのは斯う云つて臺所へ出て行きました。後追ひの癖のついた赤ん坊は、それを見ると甘えた鼻聲を立てゝそちらの方へ這つて行こうとしました瞬間、がつくりして身を伏せました。秀一はその轉がり方がいかに唐突で不自然だつたのがおかしくつてつひ笑ひ出しました。玉子と豆を代る〲口に運びながらけら〲笑つてゐました。でも幾ら笑つてもおかしがつても赤ん坊は默つて伏したまゝの姿勢を變へませんでした。友禪メリンスの裾から現はれたふくよかな白い足頸は、這はうとして五本の指先で疊を押した勢ひを見せたまゝ、ぴつたり運動を止めてゐました。秀一は濡れた手拭を持つて急いで引き返したそのを見るなり、

『赤ちやん、およつたよ。』

と云ひました。そのも最初の瞬間は矢張り眠つたのだと思ひました。でも手をかけてその小さい身體をそつと抱きあげようとした刹那のぐつたりした異樣な感觸は、不用意なそのゝ胸にも一種の恐怖を通じました。

『赤ちやま、赤ちやま。』

彼女は二聲ほど無意識に呼びたてながらしつかと抱き上げてその顏を覗き込みました。半眼の目がどす白く反つて、圓い頰のあたりに靑暗い影が纒はつてゐるような氣がしました。と同時に、そのはきつとした顏つきになつて秀一に問ひました。

『お坊ちやま、赤ちやまをどうかなさりはしませんか。』

『坊や知るもんか、赤さんひとりて轉んでお眠つたんだい。』

彼女は身體ぢゆうわく／＼震えました。出る息か入る息を見ようとして平手を顏に當てると、ひいやりとした特殊な冷たさに觸れました。そのはもう夢中であります。赤ん坊を横抱きにしたまゝ泣き聲をあげて女主人の居間へ驅け込みました。秀一も何かは知らず異常な事のあるのを感じて食べかけた箸を投げ捨てゝその後から走つて行きました。

二三分の後には家の中の人々は坐敷の床の前に敷いた赤ん坊の小さい床を取り卷て病的な抗奮狀態に陷つてゐました。秀一は父母のまつ先に震えた顏と神經的な光りを帶びた眼を一種の壓迫なくには見守る事が出來ませんてした。二人は左右からそのと同じよう問ひを秀一にかけました。

『秀一、お前は赤さんをどうかしやしなかつたのかい。』

『坊や本統を仰しやいよ、突くかなんかしたのぢやなくつて。』

秀一は非道い事を云ふと思つて腹立たしくて堪まりませんてした。

『坊やどうもしやしない。赤ちやんが坊やの卵を攫んだんだのよ。そして轉んでお眠つたのよ。』

急を聞いて駈けつけた近所の懇意な醫師と、遠い他區から招いた小兒科專門の大家の診斷に依つて幼兒の突然な死が外部から受けた何かの衝動の爲めでは決してない、稀れではあるが併し醫學上では平凡な一二才の嬰兒に特殊な急病に依るのだと云ふ事が分るまでは、秀一はその急劇な運命の轉化の目擊者として、可なり迷惑な嫌疑を受けたのでありました。それと同時に赤ん坊が轉んでその儘眠つて仕舞つた、たゞそれだけの事が何故これ程までの騷動を引き起したのかが分りませんでした。お母樣やそのが目も開かず泣きくづをれてゐるのも、異樣におかしい位ゐでありました。

「お坊ちやま、赤ちやまはお可哀想でせう、とうとお亡くなりになつたので御座いますよ。」

そのがしやくりあげながら斯う云つて聞かせても秀一は本統にされませんでした。

「嘘だい、嘘だい。お坐敷にお眠つてるんだもの。」

花だの鳩の這入つた籠だのお坊さんだので行列を作つて、鐘を鳴らしながら墓地へ行くんでなくては本統に死んだのではないと信じてゐたのでありました。

ところが日の暮れ方になつて玄關の前に着いた三輛の車から秀一の具體的の『死』の重なる一員たるべき僧が三人まで現はれて坐敷の方へ通つたのを見つけた時、秀一は初めて妙な氣持ちがしました。それと共にあの人達がこれから坐敷で何をしようとするのかゞ一番に好奇心の的になりました。彼は直ぐ行つて見度くてはたく〳〵とそちらへ駈け出してゐると、うす闇の次ぎの間で向から出て來たお母樣に出合ひました。

「秀さん。」

彼はいつになくお母様から名を呼ばれました。

『秀さん、赤ちやんは今宵つきりおうちにゐなくなるのですよ。たつた一人で遠い〱ところへ行つて仕舞ふのですよ。どこへ行けるでせうねえ、あんな小さいお足よて‥‥あんな小さいお足よて‥‥。』

『赤ちやん何處へ行つちまうの。』

『何處だかお母様にも分りませんわ。誰にだつて分らないところなのです。そんな所へ、そんな遠い所へあんな小つちやな、赤ちやんがよち〱行つちまうのですもの。可哀想にね‥可哀想にね‥‥。』

秀一はお母様のせき上げ〱泣いてゐるのを見てると、今が今まで何等の感動もなかつた空な胸の中にぽつちりと重い滴りが落ちたやうな氣がしました。これが悲しいと云ふ事なのか可哀想と云ふ事なのか自分でも分らぬなりに、その重いものがだん〱胸一杯にふくれて來ました。

『行つちあいけない、赤ちやん何處へも行つちやいけない。』

秀一は斯うせがむやうに云つてお母様の肩に取りつきながら、涙が出て〱仕方がなくなりました。

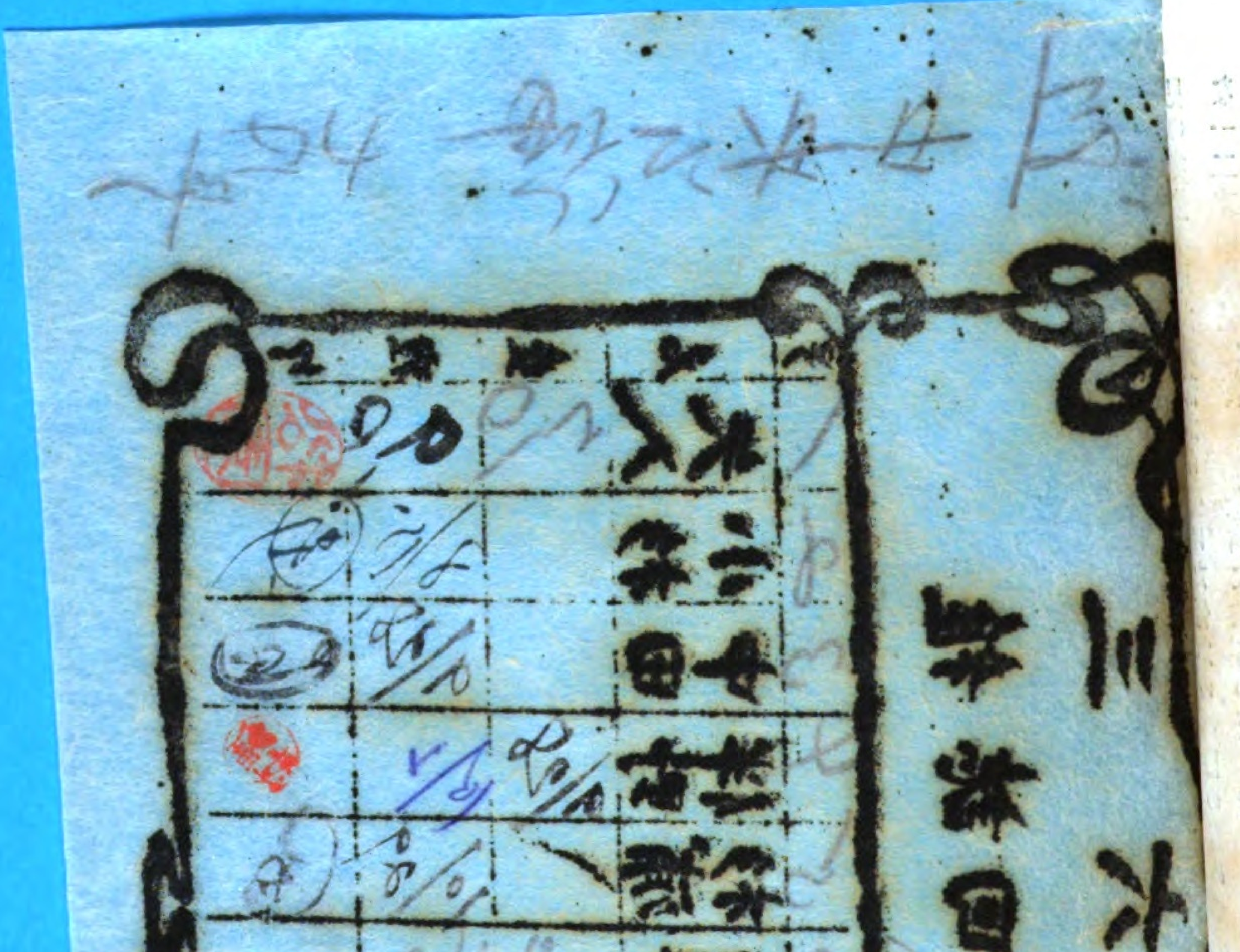
（六月十七日）

か自分でも分らぬなりに、その重いものがだん／＼胸一杯にふくれて來ました

『行つちあいけない、赤ちゃん何處へも行つちゃいけない。』

秀一は斯うせがむように云つてお母様の肩に取りつきながら、涙が出て／＼仕方がなくなりました。

（六月十七日）



寅 五 中央公論 七月号

三六會

雜誌回覧表

番	名	受	發	印
1	矢入	7/10	9/12	
2	小杉		8/15	
3	中田		9/28	
4	伴野	9/28	10/2	
5	杉浦	\	10/29	
6	瀧	29/10	[illegible]	
7	佐藤	[illegible]	[illegible]	
8	柴			
9				
10	井上			
11	梅村			

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
仝 神田區裏神保町	上田屋
仝 京橋區尾張町	東海堂
仝 京橋區元數寄屋町	北隆館
仝 京橋區西紺屋町	良明堂
仝 日本橋區本石町	至誠堂
大阪市北區梅田町	盛文館
仝 東區京町堀	太華堂
京都市七條停車場前	三共社

○定價 金貳拾五錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但支那を除く）

冊數＼國別	內國	外國
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號（本年度に限り三倍）春秋二期附錄號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十冊（本年度十六冊）分の割合なれば一ヶ年分御註文の方は內國は金參圓七拾五錢（本年度は金四圓）外國は金五圓貳拾五錢（本年度は金五圓六十錢）拂込まるべし

送金注意

一誌代郵稅は一切前金とす、金切の場合は發送を止むべし

一郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地中央公論社と指定し拂渡局を東片町局と指定あれば途中盜取の虞なし

一振替貯金口座は東京三十四番なり

一郵券代用必ず一割增の事

一集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱をなすべし

一金一圓迄 金五錢
一金三圓迄 金六錢
一金五圓迄 金七錢
（集金委託料及送達料共）

一受領證請求は必ず返信料を要す

大正三年六月廿七日印刷納本
大正三年七月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人 麻田駒之助
印刷人 高木西三

發行所 東京市本郷區駒込西片町十番地 中央公論社
電話下谷九一九 振替東京三十四番 電信略號コウロン

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍第一工場

CHUO KORON *(The Central Review.)*
By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す